一橋大学
ア式蹴球部60年史



西　松　会

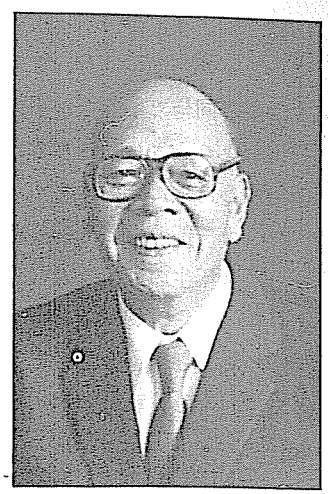
発刊のことば

60年にわたるこの記録は、ここで生活し、喜びと悲しみ、汗と涙を共にした数多くの仲間達のこの上ない貴重な財産である。

母校ア式蹴球部の永遠の発展のため、大きな糧となることを祈ってやまない。

巻　頭　の　辞

酉松会会長　松　本　正　雄



60年！　長い歳月である。ここに光輝ある一橋サッカーの歴史を回顧し、更に将来永遠に、このサッカー部を後世に残すべく本書が綴られ、出版せられるに当って一言、巻頭の辞を述べさしていただくことは、私にとって無上の感激であり、幸福でもある。というのは私も一橋サッカーの創建に参加した一人であり、60年後の今日、ここに、こうして筆をとることができるのは長生きをした幸をしみじみ味えるからである。

私が東京商科大学予科に入学したのは大正９年４月であった。東京高等商業学校から大学に昇格した最初の年であった。当時は現在とは学制がちがって、中学が５年制で、それを卒業してから高等学校、大学予科、専門学校に入学したものである。大学の数も極めて少く、軍人系の学校は別として、東京では東京帝大の予備門ともいうべき旧制一高と蔵前（現・東京工業大学）と一橋の三校が最も花形で受験の難関であった時代である。早稲田や慶応も古くからの立派な大学ではあったが入試は現在のように難しくなく、容易であった。

当時の日本は帝国主義、資本主義の瀾熟期で、ことに欧州大戦の影響で日本の富は飛躍的に増大し、正に富強の神国として、堂々と世界の列強に伍していたのである。世界の「七つの海」に「日の丸」が無いところは無いといわれた時代で、日本郵船・大阪商船・三井船舶等の船会社は「七つの海」で華々しく縦横の活躍をしていた。もちろん飛行機などなく、都大路を走る自動車も珍しいほどであった。

私の予科３年、大学３年の学生々活は上のような日本の環境のうちで大日本帝国の国民としてプライドを高く持し、楽しく、全くのびのびと過したものである。

しかし大正15年に卒業してからの50有余年は日本国としては建国以来の未曽有の激動の時代であり、遂に亡国寸前までに立ち至った。

サッカー60年の歴史は日本国の歴史と深いつながりがあり、国の歴史を顧みずしてはサッカーの歴史を語れない。

いま、ここに静に過去半世紀の日本が歩んだ道を簡単にふりかえってみると、昭和６年に満鉄の爆破事件があり、昭和８年に日本は国際連盟から脱退した。昭和11年に国内ではあの有名な二・二六事件があり、昭和12年には北京市近郊でのいわゆる蘆構橋事件が勃発して、日中両軍が衝突して、とうとう日本と中国が全面戦争に突入するようになった。同年日本軍は上海にまで出兵、翌13年広東、武漢三鎮を占領、14年ノモンハン事件、15年には北部仏印にまで進駐、国内では国家総動員法が制定され、経済統制が実施せられた。日本はドイツ・イタリーと三国軍事同盟を締結、遂に昭和16年12月８日の日本海軍のハワイ大空襲から太平洋戦争に突入して昭和20年の敗戦を迎えたのであった。

このように過去半世紀有余の間の日本国の大激動、大激変の影響をわれわれ一橋サッカー部も受

け、波瀾の連続であった。しかし、蹴球部の伝統を守りつづけ、学生らしい真面目な部として地道に歩んできたことは正に特筆に値するといえよう。

想を回らせば、想出は走馬灯のようにぐるぐる廻って尽きるものではないが、私として何といっても一番の痛恨事は有為な酉松会員多数の戦死者を出したことである。これは他の運動部、ほかの大学でも同様であろうが運動部の選手は体力に恵まれていたから、応召率も多く、多数のぎせい者を出したことは止むをえなかったことであろうが、戦死した方々は、いずれも私が慈しみ、育てお互に信頼し合った兄弟のような間柄であっただけに未だに憶い出すと身を切られるような思いがする。

サッカー部解散の危機に直面したことも未だ記憶に生々しい。昭和19年の冬であった。最上級生だった3年生の部員4人（名前は記憶にない）が、西荻窪の私の自宅を訪れてきて、「蹴球部を解散したいから、御了承して下さい」というのである。理由を聞くと無理もない話であった。戦争の末期のこととて、「蹴るボールは手に入れ難く、食糧も乏しくて練習する力も出ない」というのである。しかし、私は即座に来訪学生を大喝一声、叱りつけたのである。私はこう云った。「君達の先輩酉松会員の戦地からの便りには、必ず松本さん、サッカー部のことはくれぐれも頼みますといってきている。露営の夢にサッカー部のことをみたという便りもあった。戦地で明日の命が分らない先輩諸君が母校サッカーのことを愛しつづけ、憂えているのに、腹がひもじい位で部の解散などできるか」と一喝したのである。現役部員には酷であったかも知れないが「解散は相成らぬ」と申し渡したところ、学生連中も「頑張ります」と快く承知した。戦前の学生は素直でよかった。

亡国寸前の敗戦から、30数年を経て日本は、「アメリカの核の下」という、うっとうしい気持ではあるが、再び世界の経済大国として目覚しい復興をなし遂げた。学生も昔の苦しみを分らぬ連中ばかりで、国立や小平で楽しそうに元気でプレーしている現状をみると全く今昔の感に堪えない。

思うにサッカー部員はサッカーが好きで集ってきたグループである。しかし、蹴球部は単なるクラブや同好会ではない。いやしくも一橋会の公認された部として対外試合をするときには、一橋大学という母校の名誉を双肩に担って戦をするのであるから、責任は重いはずである。剣道の無刀流とはちがって、勝敗にこだわらざるを得ず先づ勝つことが大切である。フェヤプレーによる勝利が貴い。したがって単に遊び気分でサッカーをプレーする者は部員ではない。グラウンドは学生々活における心身鍛練の道場と心得るべきである。強くならなければ駄目である。どこかの校歌に「弱者亡んで強者勝つ」という一節があったがその通りである。勝つためには闘魂を燃やし、技を磨き、体力を養わねばならない。心技体の練成に精進することである。そしてこのことが真の人間形成にも役立つのである。教室で得られないものが部生活で得られる。学窓から社会に出て活動するようになってからも蹴球部生活を通じて感得した人間形成がどれだけ社会人としてプラスになるか計り知れないものがある。私はこのように確信して数十年間部員を励まし続けてきたが、結果は誤りではなかった。優秀な部員だった者は社会人としても優秀な存在になっている。

どうか優秀な部員を豊富に養成して、優秀な人材を多数社会に送り出していただきたい。そしてそこに自然に一大サッカー・ファミリーができあがれば愉快なことではないか。

私は当年80歳で余命いくばくもない。酉松会員の寿命にも限度がある。だが、一橋サッカー部は日本と共に永遠に存続するであろう。永遠に存続するが故に、幾歳月かかってもよいから立派な部に発展さしてほしい。これを祈念して巻頭の辞とする。

（元最高裁判所判事・大正15年卒業）

目　　次

発刊のことば

巻頭の辞 …… 酉松会会長 松本 正雄

第1部 特別寄稿 …… 9

忘れ得ぬ試合、忘れ得ぬ人びと …… 慶応義塾大学OB 二宮 洋一 11
商大サッカー部諸兄の想い出 …… 東京帝国大学OB 有馬 洪 12
一橋大学サッカー部栄光の想い出 …… 早稲田大学OB 加納 孝 14
瀬社家先輩をお訪ねして …… 村井 恒典記 15
田部文一郎先輩との会見記 …… 瀬藤・青木・古川記 17
兄を憶う …… 柴山 香苗 19
東作兄を偲びて …… 二階堂 幸 21

第2部 古い部誌より抜すい …… 25

部長として／佐藤 弘 28　蹴球團時代／川村 通 29　所感／高橋朝次郎 32
現役諸君に／豊田達治 34　渡辺弘氏を偲ぶ／安野元章 35　卒業に際して／長瀬凱昭 36
蹴球部生活を考へて／二階堂謹司 37　先輩よりの書翰／後藤博基 45
部史を顧みて／神野清一郎 47　昭和6年を顧みて／荒井文雄 50　今昔／荒井文雄 51
春の合宿／鈴木 彰 53　故長瀬大兄の言葉に偲ぶ／田島輝重 55
渡辺弘兄を悼む／田島輝重 56　苦（九）の日記／枝村藤三郎 57
蹴球部に入ってから／松浦 巌 60　酉松会縁起／川村 通 62

第3部 回 想 …… 65

昔の思い出／森 緑 67　昭和初期の蹴球部／豊田達治 68
石神井の思い出／星野弘一 69　浦高定期戦の始まり／西田嘉兵衛 70
一橋蹴球部かくして生成／二階堂謹二 71　我が6年間、蔭にエピソードあり／二階堂謹二 73
身近な亡き戦友への追憶／二階堂謹二 75　サッカー部の還暦を祝して／水島 茂 75
商大サッカー部の思い出／森田昭之 77
昭和6年頃の予科石神井グランドと亡き蹴友を偲ぶ／鈴木 彰 78　回想／村井恒典 80
荒井さん／村井恒典 82　小西正夫君の思い出／後藤虎雄 83
サッカーは苦労と知った／二階堂晴三 84　昭和15年卒業戦死者を偲ぶ／菅瀬十朗 86
サッカーに感謝／金井雄吾 87　高橋道太郎君の思い出／早野広太郎 89
つながりのなかで／吉沢貞雄 89　荒川守之助君の追憶／吉田富彦 90
サッカー人生／片山光夫 91　松岡君を憶う／折下 章 92

茂木利孝君を偲ぶ／鈴木英二　94　サブとして、またバックとして／村木杉太郎　95
水島　行君を憶う／村木杉太郎　96　あの頃／居川達一　97　サブの心／藤塚亮策　98
山田久寧君のこと／藤塚亮策　99　悔多きサッカー人生／山本孝次　100
感謝のことども／宮沢　力　101　母校サッカー部の戦没先輩に思う／瀬藤俊雄　102
壁パスの味／土屋五郎　103　回想記／青木育郎　104　戦争中の蹴球部／鷲埜和夫　106
戦争とサッカー部／安田興三郎　107　思い出すこと／太田賢三　109
優勝への悲願／西内碩男　110　荒正、金ちゃんのこと／高橋三善　112
2年半の青春／奥村一郎　113　ボール、軍隊、ボール／永倉真平　114
サッカーと私／佐藤裕之　115　負けた試合／川端良三　憶い出すまゝに／加藤春樹　117
サッカー部生活回顧／高柳　晋　118　戦後のサッカー部再建について／加藤　省　119
苦難のサッカー生活／外岡諒三郎　121　私のサッカーと人生／鈴木哲夫　122
焼跡からのサッカー／森重利直　123　回想録／渡辺俊夫　124
若き日の回顧／篠宮　清　125　七人の侍／針谷　操　127　亡き堤君／針谷　操　128
合宿の想い出／森　康全　129　回想／高田勝己　129　新しい試み／昭和31年卒業生　130
サッカー部生活と寮生活／中路　信　131　回想／昭和33年卒業生　132
部生活4年間を顧りみて／昭和34年卒業生　133　戦後は終った／石原良三　134
経済成長と安保の時代／日巻久匂男　136　サッカー部活動の回想／梅田　清　137
昭和37年のシーズンを回顧して／昭和38年卒業生　138　回想／昭和39年卒業生　139
回想／山田充夫　141　回想／田中好輔　142　回想／昭和42年卒業生　143
三部優勝ならず／高峯文世　144　回想／有田　稔　146　昭和44年・回想／土井徳秋　148
我が同期考／竿代興志　149　昭和46年回想／湯浦俊一　150　回想録／押本俊明　151
サッカー部生活の頃／昭和49年卒業生　152　回想録／内田　守　154
回想／河内純一郎　155　12人の中から／古荘健一　156　52年の思い出／浅井幸一　157
回想／山原義彦　158　昭和54年度回想録／清水靖雄　160
昭和55年度を振り返って／桜井真二　160

第4部　座　談　会 …… 163

第5部　年　　史 …… 181

付　酉松会会則 …… 268
昭和56年度酉松会役員 …… 269
酉松会会員名簿 …… 269

あとがき

第1部　特別寄稿



忘れ得ぬ試合、忘れ得ぬ人びと

慶応義塾大学ＯＢ　二　宮　洋　一

神戸一中の同窓である金井雄吾君から、東商大サッカー部の60年史を作るので、何でもよいから書けとの依頼を受けた。金井君との出会いは、昭和４年の春の、兵庫県の小学校大会の決勝での対戦である。それから50年余、長い交友が続いている。吉田富彦君も同様である。依頼を受けた以上、60年のお祝を兼ねて古い記憶を想い起しつつ、喜んで参加させていただくことにした次第。

私の長いサッカー生活のなかで、忘れ得ない多くの想い出がある。そのなかで東商大との対戦によるもの、忘れ得ない人々がある。60年史には、ＯＢの方々が多く書かれることとは思うが、東商大と戦った相手チームの一人の想い出もまた、何かの記念になるのではないかと考えて筆をとるわけである。

全盛期と云われ、単独チームとして強力なチーム力を持っていた戦前の慶応大サッカーが、最も苦しい戦をした相手が昭和15年の東商大サッカーチームであった。この対戦について、私は慶応のサッカー50年史に詳細を記したが、リーグの緒戦に早大を撃破した東商大に、どうしても敗けられぬ一戦として臨んだ強烈な想い出が、既に40年余経過した今もその苦しかった90分を思い出すのである。

その３年前に遡る。当時関東大学予科リーグが春に開催されていた。昭和11年は慶応予科が優勝している。昭和12年春、勿論優勝をと自信を持って臨んだ。東商大予科との対戦に、激しいあたり、鋭い動きに圧倒され、東商大に優勝をさらわれたのである。この敗戦は、私の選手生活に一つの転機となった。教訓は気迫である。闘志という方が適切かも知れない。技術の少々の差だけでは勝てないということだ。その秋のリーグ戦では、記憶は定かでないが、神宮競技場で大差で東商大を圧倒しリーグ優勝を飾り、それから４年間連覇を達成することができた。その４連覇のメンバーの主力は、予科リーグでの東商大からの苦渋を味わった選手達である。

昭和15年10月19日、神宮競技場での対戦は、私にとっても学生生活最後のリーグの第一戦でもあり、しかも３連覇を達成し、４連覇を目指す我々の前に立ちはばかる強敵。既に第一戦に早大に勝ち、３年前に敗戦を味わされたメンバーが主力の東商大である。

その８月、突然高熱を出して神戸の自宅で鋭意療養につとめていた私に入ったニュースは、強敵は早大と東商大ということだった。この両校がリーグ開幕日に対戦する。次の週が我々の第一戦、対商大である。10月になって私は病床を抜け出し上京をたくらんだ。母親の止めるのを振り切って上京し、合宿所へ転り込んだ。走ってみた、蹴ってみた。しかし一ケ月の病床生活では出場は無理のように思えた。開幕日、東商大は早大を破った。一週間後の東商大との対戦は、どうしてもやらねばならぬと決心すると何かからだに力が出て来た。監督に出場させてくれと頼んだ。たとえ試合中にたおれても本望だと考えた。

試合は当初アウトサイドで出場した。ふらつくからだが時間の経過と共に段々と慣れてくる。１―１のまま最後の15分、あと15分ならやれるとＣＦへ入った。幸運もあった。２点を入れて３―１で勝つことができた。激闘90分、数多く私がやったゲームで、途中でたおれるかも知れぬ、たおれてもかまわぬと心から思ったゲームは恐らくこの試合だけだったろう。それだけにその時の苦しさ

が忘れ得ぬ想い出として鮮明に残っているのである。

昭和15年のリーグでは東商大は早大、帝大には勝ったものの、文理大に敗れている。早大と同率２位のように記憶している。

戦前の関東大学リーグでは、記憶に間違いなければ、５度対戦している。昭和13年秋のみ記憶にないが、昭和10年から15年迄のことである。昭和10年は、はっきり憶えていないが小平か国立かのグランドでやったように思うが記憶は定かでない。その頃ではえらく遠いグランド迄出かけたように思った。たしか村井さんがＲＷでその長い足で引っかけられて転んだような記憶もある。

金井君、吉田君は中学の同窓であるし、戦後もずっと交友はつづいている。桜井君は中学の一年後輩、先般亡くなった松浦ガンさんも中学後輩で、昨年、一昨年も東京神戸一中クラブのチームで、湘南中ＯＢや、府立五中ＯＢチームと一緒にボールを蹴った仲である。惜しい人を失った。

ポジションの関係で早野君は印象に残るプレイヤーだった。マークがきつく、たしかに強かった。戦前の三地域対抗戦には、関東選抜軍で同じチームで試合もやったがその後お会いしていない。ＧＫの吉沢君も強かった。ファイト満々の守りだった。片山君、清水君などのプレーもよく覚えている。

60年の歴史は、その時の学生時代を過したＯＢにとって代え難いなつかしい想い出となる。同時に母校の現役が気になる。学生諸君が50年の伝統を受けついでくれると信じている。サッカーが上手か下手か、強いか弱いかは別問題としても、長い間の50年の伝統、サッカーをする気持は受けついでほしいと願ってやまない。慶応ＯＢとして慶応サッカーに願う気持と、東商大ＯＢの方々の気持は恐らく変らぬ筈である。

60年を祝って思い出すまま書かせていただいた。記憶ちがいもあるかも知れぬがご許容いただきたい。

商大サッカー部諸兄の想い出

東京帝国大学ＯＢ　有　馬　　洪

日本航空電子工業ＫＫ土屋五郎常務のご来訪を受け、商大サッカー部60年史発刊に際し寄稿せよとのご依頼を受け、なつかしさがこみ上げお受けした次第です。この上ない光栄と存じると共に浦高代表としてサッカーの好敵手としてのみでなく、優秀な学徒であり、若き紳士であった諸兄に対する尊敬と共感を拙文の中に表現したいと考えて筆を執りました。

私はその後もサッカーに打ち込み、終戦後も日本チームで対外試合にも出場した。諸兄の応援をいただき、まことにおそまきながら、御礼を申し上げると共にご期待にそえなかったこと、またテレビ解説、国際審判員等で諸兄のお目に止ったことと思いますが、これまたいずれにおいても独特の個性を発揮して極めてお目障りであったことと心苦しく思っている。

過日、瀬藤俊雄氏より対抗戦の戦記資料をご送付いただき、おかげで記憶を呼びおこすことができ感謝している。

商大戦初出場は昭和11年で、私の正規のポジションのＬＨであり、相手インナーは金井さんだったと思う。彼は長年にわたり好敵手だった。前年昭和10年には私の兄が浦高のＲＷとして春秋２回

出場したが、兄の病気のため兄弟揃って出場することができなかった。

兄はその後元気で、現在東大農芸化学名誉教授で学士院賞を受け、折にふれて商大戦の話、特にＦＢの早野さんの思い出に花を咲かせている。早野さんは我々兄弟にとってまことに忘れ得ぬ方であり、体格がよく強力なＦＢで極めて紳士的なプレイヤーであった。闘病生活がお長かったと聞きご健康をお祈りする次第である。

私にとっての商大戦は浦和、帝大時代を通じて苦手の相手の印象が強く、勝利の記憶がほとんどない。昭和11～12年の浦高には強力な新人が入部した。加川（現ＥＥＣ大使）、種田、奥島、奥瀬等であり、商大も片山、松岡、吉沢等強力新人が入部され、我々の対抗戦のレベルはかなり高く、高専リーグ一部の上位の実力であったと思う。商大予科のメンバーで大学リーグに出場した方もおられ、浦高に比べて経験豊かな選手が多かったために浦高は負けがこんだのだろう。昭和13年の商大側戦記に「浦和３：１商大、久しく敗れたことのない浦和に敗る」とあるところからも、商大予科の勝率の方が高かったようだ。

高校時代既に軍靴のひびきが学徒である私共の耳に聞こえて来る時代であったが、浦和も国立も草深い田園であり、そこで学問に運動に熱中できた我々は幸福であった。

商大の風呂場でシャワーを浴び、遥かに横浜の灯を思い浮べながら、淡谷のり子の「窓をあければ、港が見える」を歌ったことを思い出す。

浦高卒業後私と種田、奥瀬は帝大サッカー部で引き続き一部リーグ戦で商大の諸兄に苦しめられた。予科の方は大学でもほとんど全部がサッカーを続けられておられた。

私が入部した時の名門帝大サッカー部は、昭和14年にはビッグスリーから転落寸前の状態で昭和14年引分、昭和15、16年共に敗けたと記憶している。商大は予科を通じて在校６年なので、長年同じメンバーでチームが組め、チーム力に秀いで、また技もあって帝大のようなゴールゲッターもいない、技もそれほどでないチームにとって勝ちにくい相手であった。

昭和16年学生最後のリーグ戦で緒戦１―０で負けた時には大変がっかりしたが、その後立直って早稲田と決勝戦二度、二度とも引分け、両校優勝となった。

私の本職はバックスだったので商大の強力なＦＷ松岡、金井、片山、土屋、清水の名は忘れられない。特に片山の名ＣＦぶり、強力な両インナーのプレイを忘れ得ない。また諸兄と三地域対抗の選抜練習も一緒にやったと思う。

商大側の記録16年秋に「村木、有馬に足を蹴られ殆んど動けなくなり、後半松岡ＨＢに下る」とあり、私は帝大で一番乱暴なプレイヤーであったことを認めると共にお詫びする次第である。

戦争も遠い昔のこととなり、ガダルカナル、北ビルマ、雲南省に仙台第二師団と共に転戦、幸いにも生き残って、戦後もサッカーに専心、現在も幸せな人生を送っておりますが、これもサッカーのおかげ、友人のおかげと思っている。

浦和も戦争でＧＫ岡本はじめ数人を失った。おそらく商大も同じかと思い、つつしんでご冥福を祈ると共に、昔の大学リーグ一部を復活（野球の６大学の如く）して、グランドで応援団としてお目にかかりたいものだ。

熟年となられた諸兄のご健康とご多幸を祈ります。

なおご縁というものでしょうか。小生義弟２人一橋でボートをやっていました。瀬田慎吾（東京海上）、瀬田五郎（三菱銀行）のことを追記させていただきます。

一橋大学サッカー部栄光の想い出

早稲田大学ＯＢ　加　納　　孝

わが親愛なる球友外岡諒三郎さんから突然手紙と原稿用紙を受取った。一橋大学サッカー部60年史を編纂中で、その歴史の中で最も意気盛んだった昭和14～18年頃のチーム、個人等の印象を書いて欲しいとの事である。60年史発行は誠にご同慶の至りで心からお祝い申し上げる。

しかしもう40年も以前のこと、心許ない記憶ではかえって失礼と思い辞退する積りでいたが、中学後輩の永倉真平君、会社々友の佐藤裕之君から督促をうけ己むなく筆をとった次第である。記憶の誤りなどご容赦願いたい。幸い手許に『早稲田大学ア式蹴球部50年史』があるのでその記録など参考にした。

ベルリンオリンピックの行なわれた昭和11年秋、当時私は旧東京府立八中の４年生だった。大学一部リーグの第一戦商大対早大戦を見物に神宮競技場（現国立競技場）のスタンドに座っていた。八中の先輩村形、関野氏が早大チームに出場していた。オリンピックに出場した早大の主力はこの試合に間に合わなかったとはいえ、留守軍も錚々たるメンバーであったが、結果は６―４で商大に凱歌があがった。たしか村井さん、大掛さんがこの頃活躍されておられたと思う。この試合が商大の深紅のユニフォームを私の瞼に強烈に焼きつけた最初であった。

記録によると翌12年度のリーグ戦で最下位になった商大は、13年度一年の辛酸を経て再び一部に返り咲き、14年度は慶東早明に次いで５位（当時の一部リーグは６校）、そして翌15年より商大の史上最も華かな時代が始まるのである。

この年にはガンさんこと松浦巌君、前述の永倉、佐藤両君も新人として入学したのではないかと思う。

先ず春行われた第６回全日本選手権関東予選の準決勝で商大は早大ＷＭＷと死闘を繰りひろげ、延長戦のすえ２―３で惜敗した。この年の全日本は結局１位慶応ＢＲＢ、２位早大ＷＭＷとなったが、当時の日本サッカー界は関東の大学が主導権を握って居り、前記２校に商大、東大、更に関西の関学を加えたあたりがトップクラスであった。秋のリーグ戦で商大は再び早大を２―１で破ったが、この年は二宮、津田氏など擁した慶応が四年連続優勝を飾り、商大と早大は夫々３勝２敗で同率２位となった。

昭和16年に入って世界の政局は悪化しはじめたが、秋のリーグ戦は予定通り行われ、商大は早東慶に続いて４位を確保した。この年の12月８日、遂に第二次世界大戦に突入したのだが、翌17年にはリーグ戦を春に繰上げて開幕、商大は緒戦に早大を４―２で破ったが、その後振わず１勝１分３敗で最下位に終った。秋にはリーグ戦に代わり第一回関東学生選手権大会が開かれ、16校が参加、商大はベストフォーに残ったが、準決勝で早大に１―７で敗れた。この大会に続き、翌年正月行われた東西１位対抗戦が戦前最後の公式試合となり、やがて学徒出陣、終戦への途を辿るわけである。

学生時代数年間、私が対戦した商大チームの印象は、華やかさはないが堅実な地味な強さを持っていた。冒頭述べた村井さん、大掛さん時代の伝統が引継がれたものと思う。八中一年先輩の松岡義彦さん（故人）も真平さんも小柄だったが柔軟な身のこなしで頑張っていた。名ゴールキーパー吉沢さんも懐かしいお名前である。

さてガンさんが入って商大は一本スジが通った感じがした。彼とは大学、予科リーグで度々ぶつかり、選抜チームでは味方ともなったが、所謂味方にすると頼もしく、敵に廻すと恐い男だった。例のイガグリ頭で重戦車の様に突進してくる姿は今も脳裡に残っている。彼の中学（旧神戸一中）のＯＢには当時の日本代表チームの中心選手が多く、グランド外でのつきあいも楽しいものだった。

昭和53年８月兼松江商の都賀グランドで、高年者混成チーム対神南女子チームの試合をした。腰の低い独特のプレーは何十年経っても変らなかったが、これが彼との最後のゲームになった。

最近のおつきあいでは外岡さんがある。旧制高校サッカーＯＢの集りであるＳＯＩでお近かづきになり、昨年夏のＳＯＩヨーロッパ遠征にご一緒した。その堅実な守備、タフな突進力にはまだ青年の片鱗が残っている。これからも長くボールのおつきあいを願う次第である。

思い出すままに取りとめのない拙文となって申し訳ない。よろしく御判読下さい。

最後に一言申し上げたいことは、かつての東京商科大学サッカー部の栄光を知る先輩方は勿論でしょうが、それを知る我々にとっても一橋大学サッカー部が再び大学サッカー界に旋風をまき起こすべく、尚一層の奮起を願ってやみません。

瀬社家先輩をお訪ねして

村　井　恒　典　記

先輩は目がご不自由なので録音テープを持って奥村君と浦和のお宅をお訪ねした。先輩は大正12年予科入学、昭和４年卒業。その間大正14年よりずっと主将を勤められた。60年になんなんとする記憶の糸を解きほごしていただこうと。

瀬社家さんは紀州のご出身である。当時の海草中学には風変りな先生がいてサッカーが校技であった。野球は同好の士が隅の方でやってはいた。サッカーと駈歩。畠があってイモを作らされた。肥桶も担がされたよ。撃剣もあった。無刀流。山岡鉄舟の流れを汲む３尺２寸の短かい奴をやらされた。

サッカー靴はない。編上靴に巻ゲートルそのままでやらされた。選手なんかやっていると靴がガバッと口をあけちゃう。大正10年卒。一時大阪の銀行に入ったが２年して勧銀と合併になり、東京から立派なのが来て香水の匂いがする。こんなとこにいても駄目だと。それで冷やかし半分に商大の試験を受けに行った。スプリングコートを着て行ったよ。受験生の中に先生と間違えたのがいたよ。入れるとは思いもしなかったが、発表を見たら入っていた。割に成績がよく41番だった。学校（神田）へ入って、昼、食堂の前に球がほうり出してある。これがマーチャン達の作戦だったんだね。ポンポン蹴っているとスカウトされた。勉強するつもりだったんだがね。

松本、川村、明石、高橋トモさん、それに専門部の三宅弘方と僕だけが日本人で、あとは呉さん王さん、そんなのばっかりで。練習なんてのは運動場でポンポンやってるだけだよ。グラウンドは無いんだ。大学の人は我々と一緒に行動しなかった。

どこかと試合したよ。いつの間にか11人集めてくるんだね。青山学院とはやったな。ワセダともやった。向うにも海草出身のシバモトがいた。中央大学ともやった。ここには大林がいた。一高ともやったな。その時一番残念だったのは、僕はＦＷにいて球が来たが、僕の足が遅くて球に追付か

なかった。ゴールキックになってしまった。入れてれば勝ってたんだが……残念だった。ウン。だんだん思い出してきた。田部の文ちゃんがＬＷにいた？　うん！　彼は広島の出身で高橋トモさんも広島だった。神戸が反対のウィングだったかな？（註――高戦は大正13年のカレッジリーグでの対戦である。）

９月に大震災で神田の学校は焼けてしまい、11月、12月頃は休講状態。初台の東京高校へ通ったな。

大正13年、石神井ができて両渡辺など多勢入ってきて日本人だけでチームが組めるようになった。ＧＫは渡辺村吉、ＬＢが僕、ＲＢが城島、ＨＢは誰だったかなあ。なに？　森緑？　おったな。トモさんは足が長いからよく覚えているが、ボートが忙しくてあまり来てくれなかったな。そんなことで渡辺君に引継いで。渡辺村吉が暁星出身だったので、アストラにコーチしてもらって練習試合なんかもした。サッカーらしい練習指南を受けた。それまでは勝手蹴りばかりだった。若いのがガッチリしてたから余計なことを言うナニもないし、こっちは田舎の勝手蹴りだし、渡辺が本格的な練習してきた人だし、口出しせずに、お山の大将になってただけだ。

僕らの頃は丁度なんだなー、同好の士がチョロチョロやり出して震災でペチャンコになっちゃって、それで、13年組が入ってサッカーらしくなったんだね。西田君が入ったのは昭和２年だったね。西ビンの時も成績良かったんだね。

僕は本当のツナギだったからね。渡辺達がガッチリやったんだよ。僕までは前代のサッカーの幻ができて、その後が本当のサッカーになったんだよ。神代だよ。サッカー部60年と言われて、せめて写真でもと思って探したんだよ。モーロクしちゃってね。豊田ならどれが誰だか知ってるよ。

（古い記念写真一葉をいただいた。）

昔は、５・３・２・１だったが、今は並び方が３・３・４とか違うらしいね。孫が小学校の時サッカーをやっていたが、中学になったらテニスに転向してしまったよ。

60年の中ではほんのチョットの間埋めただけでね。よく負けたからなあ。青学にセンターで強いのがいたよ。浦高に試合に行ったことあるよ。浦和でおりて中仙道を歩いて行ったんだね。長い距離をねえ。インターハイ？　正月の元旦からでね。雪の中での試合もあったし。渡辺弘がマネジャーで皆やって呉れた。僕は形式キャプテンでね。実質は村吉でね。

考えて見ると松本さんとワシ達は古いんだね。生残りか。今、78歳だからね。川村通さんは田園調布女学校の実践教頭でね。訪ねて行くとバケツを持って出て来たよ。廊下を拭いているんだね。サッカー部も変り種ばっかりだったね。随分死んじゃったよ。渡辺、神戸、恵藤も死んだね。村吉は金持だったね。家が三光町で、遊びに行ったんだ。コッチはイモ学生で……女中さんもちゃんといたしね。松本さんはしっかりしておられるが。

予算もたいしてくれなかった。年80円位だったかな。ボールは銀座に何と言ったか、外交官の未亡人で息子と商館というのをやっていたのが、輸入したのをわりに安くわけてくれたよ。名前は忘れたがね。モーロクしてね、思い出さんね。（註―多分シルコックであったと思います。）靴は思い思いでね。イボもあったよ。村吉なんかかなり良いのをはいていたよ。輸入品のね。靴なんてのは適当にやっていたんだね。

サッカーを論ずるのは13年組からだよ。ユニフォームは着てるね。着なければ試合にならんねえ。だが今みたいにひっくり返ったりしなかったね。楽しむ競技でね。今はもうファイト満々だね。

傍から奥様のご発言――

「目が悪いだけで風邪一つひきませんよ。達者なんですよ。何でもおいしそうに食べて、お酒は余計呑むようになりましたよ。煙草はやりませんが、若い時はバットてんですか、あれを７ツも吸いました。」

卒業時は不景気で行くとこ無いんだよ。こっちはサッカーなんかやっていて、ビリッケツだよ。一時高野山中学の先生になったんだよ。105円くれたよ。悪くなかった。英語の先生だよ。奥様いわく「アマシャケって言うんですよ。甘かったんですね。」２年でやめた。800円くれたよ。それで２年位遊んでいたよ。碁会所へ通っていたよ。随分松本さんのお世話になったもんだ。

奥様いわく「この人は頭を下げてお願いするのがヘタなんですよ。さんざん苦労しましたね。」高田や鈴木も潰れた時代だったからねえ。

そのあと、日本ピストンリングの知人から是非来てくれというので、随分考えた末入社して今日に至っている訳だ。（註―社長を長くやられ、今は相談役。）

田部文一郎先輩との会見記

瀬藤、青木、古川 記

財界の大御所、現三菱商事㈱会長・田部文一郎先輩は昭和５年本学ご卒業で、先輩は予科生時代に、試合でメンバーが揃わないときは狩り出されてＦＷをつとめられた。部誌「蹴球」創刊号の本学試合メンバーにも先輩の名前がはっきりと掲記されている。

ご多忙な先輩のことなので、瀬藤、青木、古川が録音機を持ち込んでインタビューし、昔の部の創成期のこと、いまだに壮年期を思わせる先輩の体力、気力のよって来る秘密などを伺い、回想文にまとめた。

僕の中学は広島一中だが、鯉城と云って、その鯉城蹴球部は明治神宮大会にも出て優勝したもんだ。当時強かったのは、広島一中、御影師範、神戸一中、豊島師範などで、それらが当時のサッカーの名門校だった。広島一中では体操の時間には皆サッカーをやったので、誰でも皆ある程度はこなせるものを持っていた。

僕が商大予科に入ったのは大正13年で、関東大震災の翌年で、神田一ツ橋の校舎は焼けて、予科が石神井のバラック校舎に移ったばかりだった。石神井のグランドはひどかった。イモ畑をグランドにしただけで、凸凹だらけで、春先きになると砂ボコリが上り、グランドなんていうものではなかったよ。

僕の予科入学当時サッカー部の名前はあったが、まだ部の態をなしていなかった。試合をするといってもメンバーが揃わず、僕なんか臨時に狩り集められたものだ。広島一中の先輩に高橋朝次郎さん（故人・元キリンビール社長）がいた。彼の本職はボートだが、ボートのシーズン以外はサッカーをやっていて、高橋さんに引張り出された。松本正雄さん（酉松会会長）がゴールキーパーだったな。僕の１年上に瀬社家さん（元日本ピストンリング会長）がいたが、あの人もサッカーに熱心な人だった。レギュラーといってもロクなシュートはできなかった。高橋さんも同じだよ。よく

サッカーやラグビーに臨時に狩り出されたものだ。僕は学校の休みにはいつも広島に帰省することにしていたが、高橋さんに頼まれて、ひと冬試合のために東京に残ったこともあった。合宿なんかもやった。高師のグランドだったと思う。雨の日のボールは水を吸って重くなって、これを不用意にヘディングすると、頭がクラクラとした記憶がある。

僕の本職は陸上だったが、これも弱かった。僕は短距離と走り巾跳びと槍投げをやっていた。当時対抗戦の相手は一高、学習院、浦高あたりで、大きな年中行事としては、神戸高商戦で、いったり来たりしてやっていた。三井物産の水上達三さん（元会長）は本物だった。800米と1500 米をやっていたが、当時のインターカレッジで800米と1500 米は1着は早稲田の縄田、2着は慶応の岡田、3着は水上ときまっていた。

僕の頃はサッカーでは広島一中が強かったが、その後高師附属が出てきて、勝ったり負けたりということになった。今でも東京で一中と高師附属の先輩同志サッカーとかゴルフの対抗戦をしている。附属の方は、桜田武さん、永野重雄さん、一中の方は僕のほか、山陽国策の鈴木太郎さん、藤田工業の藤田さんなどがゴルフ対抗定期戦のメンバーで、会の名前を“やねこい会”という。“やねこい”とは広島弁できついとかつらいとかいう意味だ。

ところで僕が20年にわたって毎朝続けている健康法の話をしよう。朝起きて顔を洗い、ヒゲをそり、それが済むと亀ノ子ダワシでヒフが真赤になる程ゴシゴシやるんだ。健康ダワシという紐のついたのを売っているが、やわらかくて、1週間も使うとボロボロになって毛も落ちてしまうので駄目だ。身体中が真赤になって風邪をひかなくなるんだ。それが済むと身体中の手足、関節、指なんか全部を動かす体操をやり、それから200回のナワ跳びをやるんだ。それをやっていると身体中のガスが外に出て、あれがいいんだなあ。

それが済むと部屋の中に置いてある鉄棒にとびついてぶら下るんだ。40秒ぶら下るんだが、長くやっていると平気なもんだよ。ぶら下って身体の力を抜くと重みで身体がズッと下に引張られるんだ。とび付いた時は足が地面につかないが、40秒すると足がとどくくらいに身体はのびてくるもんだ。これが済むと室内自転車をやるんだ。力を入れてやっと踏めるようにブレーキを掛けて300回踏むんだが、これが一番きつい。メーターが付いていて何キロ走ったか判るんだが、300回踏んで丁度1.5キロだな。積算になっているので今ではもう千何百キロ走ったことになるよ。これで冬でも汗ビッショリになるんだ。これで済んでシャワーを浴びるんだが、とても良い気持になるんだ。

それからお経だよ。坊主がやるのと同じ一節を大声で。息をつかないで一気にやるんだ。これを数回続けるんだ。健康状態のいい時は気持いい声が出るが、不節制が続くと途中で息をつかないと続かないし、声も割れるんだ。これが一つの健康のバロメーターだ。これはニューヨーク時代から20年間続けている僕の健康法だ。体操からお経を終わるまで大体40分位だよ。それから僕はウイークデーは高輪のマンション住いだが、自分の部屋のある9階まで歩くんだ。6階位が一番キツイがあとは惰性だ。

年をとってからの健康維持の秘訣は足を鍛えること。足を鍛えた人は足だけでなく身体全体が老い込まない。足が弱くなると、身体が弱まり、頭も弱くなる。これが僕が多くの先輩方に接して体得した僕の信条だ。ああ、そうだ、この前送ってくれた三菱商事内のサッカー部ＯＢの名簿を見たが、案外多いんだね、死んだ大掛もそうだったね。

何事でもやるならその道に徹することが大切だ。同じやるならその道のトップになってやろう、

名選手になってやろうという心の持ち方で、技量の進歩にも大変な違いが生れるものだ。鍛えれば鍛える程強くなるということは当り前のことで、これは運動だけでなく、会社の仕事でも同じことだ。若いうちは自分がやろうときめたことは、いい加減で済ませないで、徹底的にやり抜くことが大切なんだ。

兄 を 憶 う

柴 山 香 苗

われらが一橋大学ア式蹴球部の創始者、故兵藤世平治氏の実妹、香苗様は、同氏と共に母校に学ばれた柴山昇氏と結婚され、ご夫妻共長年にわたり教職についておられた。

夫君昇先輩は56年７月14日89歳で他界されたが、その悲しみの消え去らないなかを、四国巡礼に参加され、書き溜められた写経を土佐方面20ケ寺へ納めて来られた。

それでようやく心の落ちつきを取り戻されてか、亡き兄上世平治先輩の思い出について、以下の通りの心情の籠った文章を頂いた。

この60年史をご墓前に供し、激動の60年間の社会と蹴球部の、悲しみと喜び、苦難と発展の経過のありのままをご報告し、心からなる御礼を申し述べると共に、ご冥福を祈る。

私は末っ子で、兄、姉、兄、兄があり、世平治兄は９つ違いの中兄ちゃんでした。皆やさしい兄姉で、大兄は17違い、姉は13違い、小兄は７つ違い。兄姉喧嘩の味も知らず、かわいがられただけの幸せな私でした。今から思えば中兄は大変な文学青年で、中学時代すでに色々な古書を読破していたようです。また語学も大得意であったようで、岐中４年のとき、閑院宮殿下？ご台臨の節には５年をさしおいて兄が英語でご挨拶というか演説を立派にやったというのが母の大自慢でした。ご台臨記念の金文字の入った革か布か立派な厚手のノートようのものが５冊位、箪笥の上に誇らしげに並んでいたのを覚えています。

３月生れ、７つ上りの兄は身体も小さく、幼時より胃腸も弱かったようで、東京時代造血剤などをよく服用、ワッと大口あいて真赤な口の中を見せたりして私を驚かせたことも忘れられません。浪人もせず入学しましたのに、母恋しとばかり言っていたと柴山からたびたび聞かされました。母は本当に子煩脳でしたから。昭和３年５月30日亡くなり最早や50回忌も過ぎましたのに、兄の面影は瞼から消えないでいます。私共の結婚は、亡き後の秋10月30日でした。文学趣味の兄は何か自分の想いと学校の勉強とが一致しないのか、柴山に後年聞かされましたが、試験の日下宿でゴロゴロ寝ていたりして、今でいう留年をしては父母を悲しませたようです。地味な県庁役人であった父も、取りわけ子煩脳だった母も、我が子を信頼して怒ることもせず、親戚の者達も何時か何かやる男だと期待していてくれたようでした。中でも子のない母の従弟は、惜し気もなく兄に学資を援助してくれたことを知っています。

兄が蹴球部を創めた時「兄さんは外国の本を読んでルールを勉強したんだよ」と言われていたように覚えています。

大正８年の夏、中兄は実業界の大先輩の援助で同志達と中国へ見学旅行、彼地にもまた大先輩多

く、あちこちで大歓迎、大ご馳走になったりして、あこがれの支那旅行は大変楽しい旅であったようです。万里の長城での写真もありましたのに、実家の方においてあたのか我が家で探しても見つかりません。

中兄が頼りにしていた姉が、産後の肥立ち悪く、1歳半の男の子をおいて亡くなり（大正8年1月）、私を東京見物等連れて歩いてくれた小兄が翌9年2月腎不全で亡くなってからすっかり悲観してしまい、坊主になるとばかり申して親を困らせ、母が心配の余り東京へついて参りました。たしか巣鴨の渡辺という小父さんの家で一緒に暮し、柴山もよく訪ねてくれたようです。味噌すり坊主になりたい等と申しましたのは、私の夫柴山が如意団に入っていまして、休み毎に鎌倉円覚寺で座禅をしていましたのに、兄も仲間入りして参ったからだと思います。外交官志願の兄は姉弟の死に遇い、何千里遠つ国の想いが外交官を断念させたようで、坊主になる代りに蹴球に夢中になったのではないでしょうか。朝日新聞社に入社したのも、柴山が受験して見てはと言ったのだと申していましたが。300人で5人合格だと申していた気がします。「兄ちゃんは新聞記者たるべく生れて来たんだよ」等と妹に遠慮のない法螺を吹いたりして嬉しそうでした。入社早々あの関東大震災にあい不眠不休の忙しさに驚いて、部長に「新聞社とはこんなにも忙しいものですか」というと「新聞社始まって以来だよ」と言われたと申していました。父なども役人勤めの終り頃でしたが、毎日岐阜駅に出向いて救援活動をしていました。

兄の卒業についてのエピソードと申しましょうか。下宿の娘さんの腸チブスが伝染して学年末試験が受けられず卒業は駄目。社からは修業証書で良いから安心して出社せよとのお達しだったそうですが。さすがの兄も将来を考えたのでしょうか、1年待って貰って無事卒業。今なら入社試験はやり直しでしょう。今の学生さんは卒業前から営々と出社したりする傾向のようですが、昔は何と穏やかで人情味があったことでしょう。兄はそれに甘えたというか、4月の岐阜祭り（4、5日）がどうしても懐かしく、隣町と仲間での神輿担ぎに出て、皆とワイワイ大喜び。社からは到頭「早く出社せよ」との電報、確か6日。新調の背広に英国生地のスプリングコートを着込んだ兄を岐阜駅に嫂と私が見送りました。兄は汽車が動き出しての別れは嫌だから、ホームに入らんでくれと強く言うので、改札口でサヨーナラ。万事そんな風でやさしいというか実に涙もろい兄でした。遅れて出社した兄を社会部の部長は、叱責もせず暖かく迎えて下さったうえ、社内をズッと案内して廻られ、いろいろ説明もして下さった由。前年入社の方々の時はそんなことはなく、1年つとめても兄より月給も10円下なので、皆少々お冠りだったとか。部長は口頭試問で兄の一面突飛な答が気に入ったようで、変ったところに惚れこんで下さったようです。部長を懐しんでよく私に話して聞かせてくれました。

武庫川に1戸を借りて住み、日曜日には私が奈良からでかけて、掃除洗濯をしてから2人で大阪市内に戻ったりしました。戌年なので犬を欲しがり、中学時代の友人で日本郵船の方にお願して支那犬を買って来て貰い、水滸伝からとったとか申して力（リキ）と名付けてとてもかわいがりました。後にまた雌犬を買い、リキのカカだからと「リカ」と名付けました。リカは少し意地悪みたいでリキを嫌い、赤ちゃんは生れませんでした。

妻を迎えて鳴尾に住み、楽しい新婚も1年経たぬに病（胃潰瘍）を得、昭和2年暮岐阜に帰り、明けて正月早々吐血、直ちに岐阜県病院に入院、手術。嫂の兄上が医者でしたので立会ってくれましたが、胃の中に健全な皮膚面は皆無だったと聞きました。兄はとても心やさしい人でありますが

反面とても気難しく、嫂や家政婦さんの足音が気に入らず、体重が軽いせいか、私や母の歩くのは響かないので良いと申し、思い切って私は教諭の職を退き看護に専念。兄の大好きな岐阜祭り宵宮の太鼓や笛の音を病院の廊下迄出て耳をすませて聞いていましたのに、桜が散り若葉が青葉になろうという５月30日数え年31歳で姉や弟の後を追うことになりました。我が子のようにかわいがった犬のリキは兄の49日に、リカは100ケ日に、居合わせた和尚に読経して貰い、親戚中の皆が見守る中で息をひき取りました。不思議な因縁に皆々驚いておりました。

朝日新聞と言えば、夏の甲子園は全国の老いも若きも幼な子迄を沸かせています。テレビを見る度に50余年前の兄を、また甥（長兄）を連れて見物している私自身を見る想いが致します。結婚前の夏、兄は一夏甲子園通いでした。兄の寸言に岡本一平さんの漫画を添えて四角の囲いが野球記事の中央に入り、兄は得意で大切に切り抜き、帳面に丁寧に張りつけていましたし、週刊朝日に短い小説風なものも書いたりしておりました。

日本の民間飛行の先鞭をつけた朝日の２機が日本国内を東廻り西廻りで競争した時、兄は第一にそれに便乗したのです。四国上空でエンジンが止り、グングン自然落下しだした時、思わずお母さんご免と涙が出てしまった由、幸いにも、エンジンが動き出して無事基地に戻れたのは本当に幸いでした。この時の記事に、確かまだ私の知らなかった万葉の古歌？「にぎた津に船乗りせむと月待てば、潮もかなひぬいざこぎいでな」とあったのを見て、兄を改めて尊敬した次第です。

東作兄を偲びて

二階堂　　幸

母校ア式蹴球部の今日をあらしめた、部の基盤作りに最も貢献された故長瀬東作氏の実妹、二階堂謹二先輩夫人、幸様から、故人にまつわる心暖まる文章を頂いた。

故人については、昭和13年発行の部誌「蹴球」第５号が、「長瀬兄追悼号」として、グランドにあっては火の如き闘志と気魄で、また部生活にあっては温情溢れるばかりの愛情で、類いまれなる指導力を発揮され、部員からの信望を一身に集めておられたことが記されており、その一部は第２部「古い部誌より抜萃」にも掲せられている。

この60年史をご墓前に供し、故人がその若い数年間、心血を注いで、育成された部の、その後の経過のありのままをご報告して、心からご冥福を祈る。

兄は中学に、私は小学校にと、同じ学校に通っていました。大塚の自宅から、中学生の兄の紺サージにジャバラの制服の端をギッチリと摑んで、走るようにして文京区の男子高等師範学校に徒歩で毎朝通った思い出は、今も懐しいことの一つです。興信牛乳社の前にある裏門を入り、石畳のダラダラ坂を登ると小学校。そこの入口で私を置いて、兄は中学への階段を登って行きました。

小学校の放課後、上段にある中学の校庭で蹴球をしている兄を観に、友達数人と中学への崖をよじ登り、運動場の高い荒目の網にしがみついて、泥だらけで活躍している兄を見るのが、私には友達に対して、何とも誇らしく、また頼もしく思えたことでしょう。兄はその頃から蹴球をしていました。ふだんは無口で何も言わないのに、とても温くて優しい雰囲気をあたりに漂わしているよう

な人で、チャキチャキの長兄や、すぐ下のカミソリのようにこわい兄とは、まるで違うおだやかな人格でした。この兄について母はよくこんな話をしました。師範附属小入学試験の時、試験場から出てきた兄に「できた？」と母が聞くと「解らない」「解らないでは困るでしょ、大丈夫なの？」「でも解らない」と兄。「ハッキリしない子ネ」と今でいう教育ママの母が「お兄さん達のように入れなかったら……」「でも解らないよ、入ったらどうする」と閑かに答えたそうです。母の願い通り兄同様一部入学（中学へ無試験で進める）が決った時、この会話を忘れていた母に「ホラネ、解らないでしょ！」と言ったとかで「全く解らない子だ」というのが母の話の落ちでした。このエピソードは案外成人した兄の風貌を物語る思いがします。

そんな兄も一橋予科に入学し、私も跡見女学校の生徒になり、家も大塚から巣鴨の大和村に移りました。この家には時々、今は亡き後藤様、大掛様など多数の部の方が遊びに来られ、母手作りの炊き込みご飯にお惣菜で、陽気に夕食をして下さいました。その頃が兄にとっては、最も楽しく幸福な時代でした。そのうちに、兄は胸を患い始めました。

父の事業の跡目をと、ほぼ決めていた父のかくされた心配をよそに、父母にかくれて相変らず、グランドに出ていたようです。そんな兄が或る夕帰宅し、母の日本料理魚料理に初めて文句をつけました。「も少し栄養のあるものを……」と、父は即座に「食事は有難く食するものだ。文句をいうものではない」と言われ、「ハイ」と兄は不味そうに、好きでない魚に箸を進めていました。兄が二階に上ると、父は母にからだのことも考えて、料理してやりなさいと言っていたのを、今にして思えば、既に兄は病の為に食欲が落ちていたのがわかります。なぜなら中学時代から五杯六杯と食す大食家だったのです。

そんな病弱の兄がなぜか「他人の飯を食べることは大切なこと」という考えで、三菱鉱業に入社し、昭和９年４月から九州に転勤してゆきました。

自分の体をいとうこと、怠けることが苦手だった兄は雨の日も風の日もいとうことなく勤勉に働いていたそうです。やがて時々発熱するようになり、遂に休社して、東京に帰るという報が入った夜の父母の顔と、私の決心を今だに忘れることができません。以後の兄は腰越の家で年寄りの女中さん相手に養生生活に入りました。その兄の為に私は夜中に「水ゴリ」をとり、早朝に神社に参り、兄の健康の快復を我が身に賭けて祈りつづけたものです。感染を憂う父母の言葉も上の空に、腰越の兄の側にいる日が多くなりました。その腰越に神野さんが、温い思いで泊りがけで何度も訪ねて下さり、後藤さんもよく見舞って下さいました。誰にも相変らず明るく、病気のかげを感じさせない兄でしたが、若い身空で、病気に対する恐れと、将来に賭ける夢とのギャップのなかで、どんな思いの日々を、腰越の生活で送ったのか、今にしてやっと解る思いがして、何とてできなかったことが口惜しく思えます。

然しそのうち、兄は小康を得て東京の家に帰って参りまして、私もホットして結婚することになりました。そんな昭和十二年の秋の日、夫二階堂に、召集令状が届きました。結婚半年足らずの出征の朝、私が実家の庭の角のお稲荷さんに一心に祈る姿を、兄がぬれ縁に立ってジット見守っていましたのが、今も私の胸の中で痛く悲しく生きています。東京駅出征の夫とそれに同行する私達３人を、多数の方々のお見送りを頂いたその最後列で、和服姿で静かに見送ってくれた兄が、広島に向う父と私の見得た生前の最後の姿と顔になりましょうとは……。後一月もすれば社会復帰という程に回復していたはずの兄がちょうど夫の外地へ出征前日に、突然大喀血。脳震とう。死。一時の

速さでこの世を去って行きました。

何時も友の和を得て楽し気な学生生活を過していた附属時代のご友人多数、そして戦地に行っておられない蹴球部の方々が七忌々々の命日に昔のままのなごやかさで連だって染井の墓地に、大和村の仏前にと、にぎやかに御参り下さり、数々の想い出話に数時間を楽しく話の花を咲かして下さいましたことは、今もって瞼に残っております。

七七忌に東京会館で、ご友交厚かった附属と一橋の皆様及び親族縁者をお招きして法事をしました席で、父は血をはく思いで申しました。「皆さんの御友情のおかげで東作の生前は幸福でした。……どうかこの後この死が他の兄弟姉妹の一層の団結となります事を……」と。然し私は、とにかく兄がほしい、還ってほしい、と泣き、その涙は今もって私の胸の中に生きています。このように一人の妹、否、両親弟妹に想われ通した兄、兄以上の存在だった兄を失う程なら、なぜ私は嫁がずに兄の看病をしなかったかと長いその後の私の人生の唯一の後悔となりました。

第2部　古い部誌より抜すい



古い部誌より抜すい

母校サッカー部は昭和初期に、関東大学リーグで4部まで陥落したが、その翌年に当る昭和7年から毎年続けて、4部優勝、3部優勝、2部優勝1部へ昇格と、先人未踏の快進撃をなしとげた。

このサッカー部建て直しの中心的存在が、故長瀬先輩であり、同先輩は昭和9年3月に卒業された。当時の母校サッカー部は破竹の進撃を続けただけあって、全部員は心、技ともに一段と充実して、真剣にサッカーをし、真剣に部生活に打ち込んだ当然の結果ともいえる偉業であったと心を打たれる。

このような背景があって、部誌「蹴球」創刊号は昭和9年秋に「長瀬兄送別を記念して」の副題を付して、A5版縦書き、活字印刷約130頁をもって発刊され、現部員全員の執筆文が盛られている。

それ以降の「部誌」の発刊状況は次の通り。

「蹴球」	第2号	昭和10年	第6号(荒井兄追悼号)	昭和14年
	第3号	昭和11年	第7号	昭和15年
	第4号	昭和12年	第8号	昭和16年
	第5号(長瀬兄追悼号)	昭和13年		

以上の通り、毎年、全部員のありのままの生活記録、苦悩と成長の生きた記録が切れ目なく続けて発行され、全試合の戦績と共に、不幸な戦禍も受けることなく残っている。「蹴球」第9号は、昭和17年戦争は急を告げ、諸物資不足のため、原稿が集められたままで、とうとう陽の目を見なかったが、誠に幸いなことに戦禍を免れて保存されていたのが見付かり、最近になって篤志の先輩のご尽力で昔のままの部誌の姿で発刊することができた。

以下に収録するのは、当時のサッカー部員の生きざま、考え方などがよく判る文章を選んだものである。

仮名使いは特に往時を偲んで昔の文章のまま、漢字は現在使われていないために、活字のないものは現在活字に修正した。読みづらい点はご寛如を乞う。

部長として

東京商科大学教授　佐藤　弘

各種運動の盛な今日、何が最も好きスポーツなりや、の問に対して、蹴球こそ真のスポーツなりと答へる人は気品ある真のスポーツマンなりと言つても過言ではない。

わけても商大蹴球部の波瀾万畳の歴史を顧るに、学生スポーツの真髄を把握した幾多先人の築きし伝統は絶えず今や運動精神把握の意気に燃える若き選手の熱汗を注いでの精進の賜を見る。即ち四部、三部を無停車で昨秋は二部に優勝し、憧れの一部に昇つた我が商大蹴球部連年の活躍こそは、不振と悲運に存在も忘れられ勝ちの一橋運動部への好刺戟であつた。

二部より三部、四部への転落も、今は嘘の様な昔話となつてしまつた。

私はかゝる逆境の時代に部長として、際会して居る。所謂石神井時代には、部員僅かに12、3名、然も予科1、2年が大半を占め、本科生など殆んど居なかつた様に記憶してゐる。

本年は新入部員丈でも12名の多数に登り、全部員30余名と聞いては、今昔の感餘りに大なのに一驚する。

逆境時代の部程みじめなものはなかつた。優秀な選手も一人去り、二人去り、しひたげられたどん底生活の苦しみに耐へた人々こそ、部更生の原動力となつたのである。

さあ之から出直しだといふ新しい心と希望を抱いて、強い決心の下にスタートした小さな石神井のグループ。その美事な団結は今や、国立小平に渡る大きな組織を立派に統制し　日本の商大チームに迄進展しつゝある。

代々の統卒者の苦心と熱意、部員の献身的な協力は遂に立派に花咲く春を迎へたのだ。

部長たる私の喜びは全く言ひ知れぬものがある。

かくも統制され、しかも美しい情誼に満ちた部生活は他に之を見る事を得ない。

是迄に導いた先輩の努力には唯感謝の外はない。

願はくは、小成に安んずる事なく、来らん秋にこそ、一部のダークホース、商大の真価を示して制覇を遂げて頂きたい。遠くベルリンを望む意気を持つて日本の蹴球界をリードして頂きたい。

過去四年間、高商蹴球大会も順調に発達して昨冬の関西遠征、三商大戦と共に、斯界に一分野を築き技術の向上と相俟つて、日本蹴球界に呼号する時の到るも遠くはないであらう。

最後に新入部員諸君、君等は縁あつてか、部興隆時代に際会した幸運児である。

蹴球部過去の歴史に先人の苦闘を想ひ、燃え上る血と熱を愛する蹴球部躍進の大業に注ぎ、青春の涙と喜びを味覚し団体生活の妙諦を悟り、理想の実現を誓つて頂きたい。

蹴球團時代

川村　通
（大正15年卒業）

先日部の田島君が見えて今度我が部誌の創刊を企てたに就いて、是非古顔と云ふ所で何か書いてほしいとの御依頼があつた。其の時正直の処僕は一種云ふべからざる感慨を催したのである。蓋し僕が一学生で而も此の蹴球部の一員として、あちこち飛び廻つて居つたのは左程遠い過去に属するものと判然意識して居なかつたのである、併し云はれて見れば確に一昔前の事であつた。そしていつの間にか、当時の懐しい仲間とも離れ離れと成つて、あの頃には思ひも寄らぬ生活圏内に斯うして住み着いて居るのである。ハテ愚痴めいて聞えては今日様に相済まぬ。兎に角商大と、更に広く申さば商業学だの経済学だのとは大分御縁の遠い昨今の僕の生活の中へも不思議に響いて来ては、心のカンどころに触れるのが、我が蹴球部の事なのである。蹴球の事と云ふと、妙に是非も善悪も度外に置いて『かた』を持ちたくなる。そして只懐しいのである。新しい部員諸君には未だ一度もお目にかゝる機を得ない。だからせめて此の拙文を通じてなりと、お近づきにならう。そんな考へで、部の生れ出た頃の事共少し許り書き綴る事にした。田島君の御注文は部の史的記述のそれであるかも知れないが、どうも横着なたちで沿革の、歴史のと開き直る段に成ると矢張肩が凝る。それで随感随想でボツボツと記憶の糸を辿り始める。

あの頃、さう、僕等が一ツ橋の学校に入つたのは大正九年だつた。欧洲戦後の好景気が峠を越しては居たものの、まだほとぼりのさめやらぬ時分とて、昇格したての商大は大変な人気であつた。入学して一年間は何も分らず、無我無中でキャプテンオヴインダストリーの夢を見て暮したが、其の翌春二年に成つて気も落ちつくと、何か自分の営みらしいものが欲しくなる。此の時分であつた。猫額大の校庭に体操教官から借用の古びた籠球用ボールを、一人で蹴つて遊ぶ一壮漢を見出したのは、而も打ち見れば、彼氏聊か年輩の高商生である。註に曰く、当時未だ旧高商が残存してゐた。陽春四月の陽を浴びて万年シヤツにパンツ一つ。ドタ靴踏み鳴らして鞠を蹴る。而して誰に見しよとて、蹴るでもない。孤りに甘んじて独を楽しみ、天地間我と鞠在るのみと云はん許りの自適の状心憎き限りと見た。食堂の壁に蹴あてし鞠は、転じて以て学生集会所の窓を襲ひ、鞠を受け鞠を追ひ、縦横無尽の大活躍だ。破れた帽子をぬげば短く刈つたヅク入頭、ロイド眼鏡の奥に人なつこい眼が笑ふ。是が我が兵藤先輩であつた。何とはなしに惹きつけられて話したのが縁の端、忽ち僕も此の清貧孤独にして而も鞍馬山は義経の一人剣術的蹴鞠（敢て後年の蹴球と分つ）の仲間入をした。同クラスの明石毅君（現在大阪瓦斯に居る）も一緒であつた。さあ、之が妙に面白い。いや蹴るの何の、朝は始業前から蹴る。昼休勿論蹴る。放課後は最も蹴る。日没に至つて纔に止む。日曜日にも登校して終日蹴つた。従つて仲間も日増しにふゑた。そして何時となく氏を呼ぶに『親方』なる名称を以つてする様になつた。其の頃一味に加はつた乾分連の顔ぶれを二三紹介しよう。トモさん事、広島一中出の高橋朝次郎君は、いつも頬に淡く血ののぼつた如何にも純真なる少年と云ふ顔だちだつた。只むやみに背が高くて竹馬にでも乗つてゐるやうな感じがしたものである。但し其の蹴つとばす馬力に至つては、真に凄じいものがあつた。我がマーチャン事松本正雄君の如きは、勿論今日の如く禿げては居らん。恰も神宮外苑絵画館前の芝生の如く美しき三分刈の頭を振り立てゝ、

ゆで蛸の如く常に赤面しつゝ蹴つたものである。一級上の進藤静太郎君はエスペランチストであつた。だから、足のさばきも国際的で、傍に見てゐた一生曰く『あの男日本人か、いやに蹴りやがるな。支那人だらう』と云ふ位。一体此の頃は支那人の留学生が多かつた。支那人は由来足わざが巧である。従つて彼等は、僕等の不器用にして乱暴なる蹴飛ばしを見るに見兼ねたのであらう。続々と現れ来つて、其の『玉なぶり』の妙を示し始めたものである。



故 兵藤世平治氏

其の年の六月頃であつたらうか。大分仲間も出来たから此際一チーム作つて、何処かと一試合しようぢやないかと、親方が云ひ出した。僕等も亦無鉄砲さに於て敢て人後に落ちぬ時分だから、よし来たと言下に賛成した。そこで当時之亦出来たてのホヤホヤと云ふ早稲田の高等学院に掛け合つて、高等師範のグランドでやるときまつた。景気をつけようと云ふので親方一流の名文で檄を草したのを僕等が悪筆を揮つて、模造紙何枚かに大書し、生徒控室に高々と掲げたものだ。『公孫樹梢緑葉濃かに』とか何とか書き出して、『茲に商大蹴球団を結成し、強敵早大に当らんとするによつて、全学を挙げて来り援けよ。』と云つた様な大変なものであつた。メムバーはと云ふと、ＦＷに王さん干さん呉さん張さんなどと支那人をズラリと並べて親方が采配を振らうと云ふわけ、ＨＢにトモさん明石君吉野君、ＦＢに進藤君は良いとして相棒がこの瘠せこけた貧弱な僕、ＧＫが紅顔の美少年マーチヤンと云ふ。チームワークもヘツタクレも無い。皆便衣隊みたいな連中で、第一線が奇声をあげて例の玉なぶりの足どりよろしく敵陣めがけて揉み込むと、あとから竹馬に乗ったトモさんがヒヨイヒヨイと大股に出て、馬力脚で敵の向ずねごとボールを蹴つとばしてのけようと云ふ仕掛けである。さていよいよ試合に臨んでみると、敵もさるもの、葬式の鯨幕の様な黒白『はぎ』合せのユニホームを着てゐる所はなかなか勇ましいが、よく見ると、よくしたもので、あちらにも張三季四とか何とか云ふ面がまへがゐるぢやないか。だから此の試合期せずして、両軍の戦法が一致した譯で、互に得点なしの引分であった。レフエリーは誰だか忘れたがさぞをかしかつたであらう。試合後の記念撮影写真は多分本誌の巻頭に掲載されるであらうから、就いて篤と御覧を願ひたい。試合の場所が僕の出身学校校庭と来てゐるのだから大いに我チームの武者振りを見て貰はうと思つて居たのに、何にも知らない見物の中学生が『ヤアこつちは支那人の学校だよ』と許り僕までアツサリ支那人の中へぶち込まれ、トント同情がないのにはがつかりした。其の後頻りにあちこちと試合をやつたが、先づ武運拙い方で勝つたためしは嘗てなかつた。其の中あまり校庭であばれすぎた為、ボールを体操教官が貸してくれなくなり、互のポケツトマネーを醵出して買つた事もあるが、いよいよそれも詰つた時、親方が一案を立てた。誰か先輩から寄附を仰がうと云ふのである。白羽の矢を立てられたのが、大先輩田中虎之輔氏であつた。氏は天下の糸平の御子孫だそうな。親方が云ふ様は『田中さんの兄様は慶応大学でラグビーを始めた人だから、弟さんの方はサツカーの後援をして下さる筈だ。』珍妙なロヂツクだが当時の僕等は成程さうだと大いに肯いたのである。所で田中さんと我々とは素より一面の識もないし、何しろあちらは桁外れに年長のえらい実業家で、こちらは黄口白面ではない赤面乃至黒面の蹴つとばし団員だ。明石君、マーチヤン、僕の三羽烏を率ゐた親方はどうして知つて居たか、兎に角田中さんの銀行に僕等を引つぱり込んだ。

そして首尾よく氏に面会して確かに大枚五十円也を頂戴したのである。しやべつたのは親方一人で僕等乾児は唯畏つてむやみに拳骨を膝の上で握りしめてゐたのみであつた。今にして思へば、氏はよく怪しみもせずに斯かる大金を下すつたものと不思議に堪へぬ。氏の太つ腹もさる事乍ら、氏をしてかくせしめたる我が親方の外交術も亦相当以上であつたと見ゆる。其の後此の拝領金は実に大事に用ひたもので、後年の我が部の基本金となつた次第である。而して其の時から、五年後、本科を出る迄僕は部の台所方会計方をやらされたのは妙な因縁であつた。

親方に就いては実に思出多く、到底一時に述べ尽し難い。只諸君も折に触れて、マーチヤンからでもきかされたらうが高商部最後の卒業生として世に出るや、大阪朝日の社会部記者と成つての大活躍は恰も往年のグランドに於ける『もみ』込み的ドリブリング其のまゝに恐るべき威力を示したものである。然るに不幸胃潰瘍に罹り百方治療に力められし効もなく、昭和三年初夏、其の御郷里岐阜市の縣病院で逝去せられたのである。兵藤世平治と云ふと、何やら昔の草双紙中の人物めいて聞えるが、御本人は非常に進歩的にして、而も洒脱な性格、一見野人禮にならはざるかの如にして実は近代人の特に江戸つ子によく見るデリカシーの持主、噛みしめるに従つて味の出る、真に良き人であつた。学生時代、巣鴨の下宿でチブスにかゝつて死にそうになつた時、『あゝ！エライ、ああエライ。』と途方もない大声でどなつたのが、つい此間の事の様に記憶してゐる。

僕等乾児連が寄つてたかつて看護したのも今は、悲しき思出である。九段の中坂に下宿して居られた頃、押しかけて行つた僕等に、人は何んでもいゝからユニークな存在を確保しなけれりやいかんと論を聞かしてくれた事もあつた。夫子自身慥かにその理想通りに其の生活を導いた事を今にして想ふ。何かの打明け話の節に、僕は二度自殺しそこねてね。一度は確かに首を吊つたんだが、縄が切れよつてね。そんな事も云つた。面白い人である。亡くなる少し前の三月末、僕が東京府の木つ葉役人生活の終頃、大阪へ出張した帰り道、親方を岐阜の病院に見舞つたのが、生前最後の対面であつた。傷しく衰へた手を伸して、到来ものぢやがと云ひながらパゝイアの一切を進めてくれた事も忘れられぬ。

親方についてはマーチヤンも明石君もトモサンも、古い馴染は皆尽きぬ思出をもつ。そして誰もが此の不思議な徳をもつた人の事を、それぞれの視野の角度から見直して噛みしめそれを新しい部の諸君にも語り度いと願ふだらう。

兎に角蹴球団時代の僕等の学生生活は、此の親方を中にして、一種の輝かしい世界を形造つた。方法も理論も只蹴つ飛ばして、鞠の如くまろやかに弾力のある結びつき、其処に清く楽しき生きがひを見出したのだつた。土煙を揚げてボールを追つた代々木の原、火鉢を圍んで清談に時を忘れた下宿の二階、予科も本科も専門部も何もない。朝鮮人も、台湾人も蕭さんも陳さんも、団員である限りは親しかつた。無條件で友愛の真情が通うた。洵に不思議な団結であつた。

嗚呼当時の友よ！スキフト先生に教はつた。テニスンの詩ぢやないが

『人は来りて又行けど
　とはに行くべき我身とて』

己がむきむきの暮の川に流れ流れて再び戻る源のありやう筈はないのである
されど懐しき心の故郷——
其処には昔乍らの若やぎの誰彼の面わが浮び出る
回想の糸は果しなく——

伸びて止まる処を知らぬ
併し——
此度は玆に惜しい筆を擱かう
我が親方の
　　冥福を祈りつゝ——

——9・7・13——

所　感

高　橋　朝次郎
（昭和２年卒業）

商大の運動部には調子がある。調子がよいと相当な強敵も忽ち斃す。調子が悪いと容易に弱い敵にも敗ける。調子なんかふつ飛ばして最後迄喰ひ下つてでも行かんとする意気が欠けている。商大のあらゆる運動部を通じて此の事が言へると、同時に他校より著しく商大に之を認むる事が出来る。即ち商大の運動部には所謂、fighting spirit 或は反撥心、意気、熱が欠けてゐる。戦の前半調子がいゝと其の調子に乗つていゝ成績を納めるかと思へば、一寸した前半の失敗に最後迄最早駄目だと利害の打算の早い点から試合を振つて仕舞ふ事がある。『何糞』で最後迄真剣に意気で頑張る。カツトなつて、無我夢中で頑張る事が絶対に必要である。社会に出でても此の反撥心のある人、又、fighting spirit のある人こそ大事業を為す事が出来る。故に我々は、学生時代に運動部に於て、此の闘志を養ふべきである。『そら火事だ』の瞬間に未だ担いだ事もない重い荷物を一人で背負ふ。火事は一の非常時である。此の非常時に出す事が出来た力を自分が出したいと考へる時何時でも出せる様にする為に我々は練習なる形式を取る。日本刀を以て唯無暗矢鱈に力任せで庭木何本を斬つても決して斬り得ない時、何をつ！と、腹から出る反撥心で之位のものが斬れなくて何だとむきになつて斬り下ろした瞬間に思ひも寄らない大木が足下に斬り倒されてゐるのを見出して此のカツとなつた時の不思議な偉力に驚く。此の力が人間の社会生活の中で常に事に当つて出す事が出来る様に為すべく運動に於て全身是闘志、闘志満々たる事を養はねばならぬ。

然らば此の反撥心は如何にして体得出来るか。其は唯、『猛練習』にあり。へばりにへばらして、更に練習さすと、何を此の野郎と反撥心を起す。へばつて動けなくなつた時怒鳴る。頭から怒鳴りつける。大低の人がカツとなる。むきになつて自分の体の事も忘れて、あなたまかせで無我夢中で練習する。之が大切だ。練習がつらいとて止めたり、叱られたから、又怒鳴られたから腐つて仕舞ふ様な人は何をやらしても駄目な様に、当然こんな人はオミツトする。此んな練習を続けて行けば試合に出れば直に体の中に燃ゆる闘志外に溢れ、食ひ下つても最後までガムシヤラに戦ひ抜く、強引なるスピリツトが出て来る。此の反撥心は理屈ではない。唯猛練習に於てのみ得られる。へたばつても走る。へたばつても走る時其の意義ある練習があるのだ。練習は此の意味では苦しい。自分は外国に於ける楽しむ為のスポーツを喜ばない。少くとも外国に於ては楽しむ為に起つたかも知れず、又続いて行はれてゐるかも知れない此のスポーツも我国に入つた瞬間、苦しむ為の運動競技に変つて来た。我が国では心身の鍛練の為に之を行ふのである。少くとも学生が之を行ふ場合には然

り。之が我国の特長である。かくして始めて運動を学生時代に為す意義が生れて来る。此の点より練習が苦しい事は始めから十二分に認むべきであり、又苦しくて始めて此の練習が為すに重大なる意義を斎らすのである。

練習に於て為されるべき事は二である。一は上記の精神訓練である。他は理論技術の研究である。後者の必要なる事は勿論である。然し後者も前者即ち精神があって始めて生きるのである。火事に於ては荷物の持ち方を又日本刀で木を斬る場合には其の斬り方を研究する事が即ち、理論技術の研究である。蹴球に於てキツク、ヘツドストツプ等の方法を研究するのも之である。此の他に猛練習を重ねて得たる反撥心、闘志こそ前者即精神的訓練であつて之あつて始めて其の理論技術の研究も役立つのである。概して理論が出来ると安心して精神的のものの研究を忽にする。之よりも或程度迄の理論の欠陥は　又不足は、スピリツトで補ふ事が出来る確信の下に此の精神的訓練こそより重大なる練習の本質である。勿論一方を取つて他方を捨てる事は不可なれども、精神的のものの重大性は充分に認むべきである。殊に我が商大に於ては然りである。

ボートメンが力漕に力漕を続けて今少しも漕げない時に、死んで仕舞へと怒鳴り散らして更に力漕をさした時に始めて真の力が出て又文句なしでよく調和して素晴らしい舟足が出る。自分と云ふものを忘れて、コーチヤーか或は舵手に身を任して仕舞つて唯夢中で漕ぐ時に、調和ありチームワークあるチームが出来る。之こそボートメンの最終の境地である。之を早く何時でも出せる様に猛練習が必要である。

猛練習に猛練習を重ね、力強き闘志満々たる食ひ下つても負けぬ意気あるプレイヤーにならねばならぬ。

×　　×　　×

『坊主になれ』予科生徒位で髪を伸ばす気持が分らぬ。頭の事等は気にもかけないでガムシヤラな力強い人間でなくてはならぬ。小さい事の様だがこんな事から先ず入つて行かねばならぬ。学校で一年生を強制的に坊主にさしてゐるのは全く当を得た処置で二年三年と、実行して予科の間は少くとも坊主のまゝでゐる事がいゝ事だ。少くともボート部では、昔は全部坊主だつたが今頃は、実行されない。然し対校チヤン丈は必らず坊主にさせるのだ。坊主の方が実に気軽で晴々さへする。頭の事を気にかける人は弱くていかん。

×　　×　　×

麻雀、撞球は成程面白い遊びだ。然し此を為す人々の空気為される場所の空気がいかん。此の点で運動を為す事と相背馳すると考へる。即ち麻雀、撞球其のものは遊びとしては悪くないが、之を為す場合に之に附き纏つて別に悪い影響が走る。今日殆んど其等は賭けて為されてゐる。賭ける事は絶対的にいけない事で、運動を為す主義と相反する事甚だしい弱々しい気分投機的な頽廃的な気分を益々強くする。其等の遊びを自分は排撃する。麻雀を称して支那の亡国的遊戯なりと云ふも蓋し故ありと思ふ。

昭和9年6月26日

現役諸君に

豊田達治
（昭和6年卒業）

長瀬君が亡くなられてから早五ケ年の星霜がたつた。私は丁度大阪在住時代で、告別式の日取が通知された日が丁度出張から帰へつた夜十時頃で夜汽車に間に合はず、翌日たしか日曜日だつたが、木津川飛行場から生れて始めての空の旅で羽田へ着き、午后三時の大和村の御宅での式にやつと間にあつた経験をした。丁度日本晴れの好天気で富士が機の窓からよく見えた事と、伊吹の山中で紅葉が美しかつた事を思出す。今の現役の方々には御存知ないけれど、私は蹴球部が未だ部の体裁を示すよりか寧ろクラブチームに近かつた時代の末期に飛込んだので、先輩並びに同輩の諸氏は予科でやめるのが通例で六年間通してボールを蹴つたのは、其前后三年宛には私以外唯一人なかつたと云ふ様な始末で、私が本科に入つた時、予科に入学した長瀬君がすつかり部を築きあげる迄は、誠に寥々たる感がして居つたのです。

私が予科一年の時、松本、川村両先輩は本三で既にグラウンドでプレイを指導するよりは叱言を云ふ年輩に達して居られ、予三に瀬社家氏（現日本ピストンリング總務部長）が独特の風格で我々の主将であり、予二には渡辺甚吉氏（現有隣生命社長）が暁星でビルマ人チヨウディンから習ひ受けた名ゴールキーパー振りを示して事実上の指導をやり、故渡辺弘氏が全く兄の様に親身になつて面倒を見て呉れ、城島氏が歌人とも思へぬ凄い眼付で練習をする等印象が深い。

下って新入の面々はとなると津田（現物産ヂヤバ駐在）、清水（清水製作所主）、故惠藤のフオアワード、故山本のハーフ、其に加へて小生のゴールと云つたメムバーで、当時リーグ戦は一部二部の二つで、早、帝、慶、文理、明に一高が一部で、農、商、外語、青学あとは忘れた位の程度のが二つで二部と云つた之又寥々たる有様。それでも一同張切つてやつたが、今の諸君に比べれば誠に恥づかしい技であり気力であつた様に思ふ。二年下に西田君（現西田商店主）を迎へてから、どうやらチームとしての動きが有機的になり、其頃は小生より上の人はおろか同級生もなく、毎日神田の本科から石神井の予科へ練習に通ふのに独りでトボトボ行つた。そんな時代に長瀬君が西田君の中学から入り、続いて神野君、広島から二階堂兄君と、多士済々精神的にも技術的にも充実して行くのが目に見えて、練習や合宿にも張りが出て練習のためにサボつた自分の過去も少しも惜しくなかつた。あの頃は思想的にも学生界は混沌として、帰趨を知らず、世間は又パニック続きで不安此上なく、今から考へるとよく通り抜けられたと思ふ様な暗黒時代であつた。カフエやバアだけ賑やかで、学生の中でも頭の鋭いのは左に走り、運動部の連中は馬鹿の集りと見られ、英語劇や音楽会も浮ついたもの許りやつていた。そんな時世に優秀な頭をもつた長瀬君や、二階堂君、神野君達が敢然とチームを守り通し、精神的に部を生かして、且又、技の上に一大飛躍をした事は、自分の後輩乍ら全く頭の下る精進振りで啓発される点が多かつた。

同時にリーグ戦も範囲が広くなり、浦高定期戦、三商大戦等の参加と共に、部の対外関係も多事多端となつたのを、よく円滑に処理して政治的手腕を示した、之には忘れてならない後藤博基（現三菱商事大連駐在）君の努力が多かつた。

次ぎ次ぎにバトンを受ける人達も、よく長瀬君以后先輩を恥づかしめぬ人材揃ひで、私の如きも

何一つ口出しを要せぬ儘すつかり御無沙汰して仕舞つた。待望の一部昇格の栄冠は、長瀬君が卒業して一年で獲得された。

角田、森田、浅枝、荒井、田島の諸君が友情の完成をグラウンドに示し、大掛君以下次の時代を背負ふ諸君が之を又次代へ、更に活気を与へて伝へた事は蛇足になるから省くけれど、現役の諸君には朧気乍ら長瀬君を中心に其前の部と其後の部との差違を解つて呉れると思ふ。

長瀬君が宿痾癒えず、あたら若冠にして周囲の人々の希望を裏切り逝かれた事は惜んでも尚余りある事であるけれど、同君の風格が伝へられて部の人々に再生されるのを見る時、私は大東亜戦初の攻撃に真珠湾頭に散つた若桜にも比すべき精神の高さを称える。現に荒井君がグラウンドに示した熱情を大別山上に再現して護国の重責に斃れた事を思ふがいい。

愈々日本の進む方向は多難となり、若い世代の覚悟益々厳しさを求められる今日、お互ひに自重自愛五尺の身を如何に捧げるか、平常から心掛けなければならない。幸ひに松本先輩始めよき指導者を有し前線よりの帰還先輩多きを加えて、蹴球を通じて若き日の練成に精進する現役諸君の秀でたる眉を心に描きつゝ筆を擱く。

渡辺弘氏を偲ぶ

安野元章
（昭和７年卒業）

永らく病床生活にあつた氏が、気色生々として将来への明るい期待を私に感ぜしめたのは、昨年十一月末であつた。これは殆んど未知の後継者諸君によつて、蹴球部二部優勝が実現せられたからであり、神宮球場の興奮感激が丁度マネージャー当時に在るが如く、氏に強い気力を湧起せしめたからであつた。



故渡辺　弘氏

思へば商大蹴球部は氏にとつて、過去長年身を忘れて育成せしめた愛児であり、永遠に思ひ離す事の出来ぬ存在である。社会に出て後も、その成不成は氏の神経に最も敏感に触れてゐたが、遂に昨年その理想の姿（二部優勝）を見る事が出来たのである。

その当時氏の関係せられていたツエペリン航空事業計画は、その経過が思はしくなく幾多の問題が前途に横たはつてゐたが、氏はこの新しい気力を以て、今一度縦横の活躍を約束されたものであつた。

然しこの喜びも束の間であつた。私が最も恐れた三月三十日より三日早く、将来に諸の希望を残されたまゝ逝かれて了つた。

雑司ケ谷墓地埋葬に参列させて頂いて以来、一月二月が忙しい中に過ぎ去つたが、私の脳裏から氏は到底消し得ないものである。私は遠く蹴球部時代より、頭脳、才腕、人情等に就いては尊敬おく能はぬ処であつたが、共に社会生活の諸事象にもまるゝや、愈々氏の人格の輝きあるを知つた。

健康と今少しの寿ありせば氏は必らず世に為すところ多かつたであらう。三月二十五日の最後の打合せ（この時声は殆んど立てられなくなつてゐたが、苦しい努力の下に語られた）で激励されたまま、私は為す所を知らない有様である。氏の在らぬ事が無上に淋しく、関係事業に独り乗出す気力も失せてしまつた。

今後、航空事業も実現されやう。蹴球部も華やかに活躍しやう。凡ては氏の去りし後に実を結んで行く。

艱難と苦心とを以て、その発展の基礎を作りし氏の功績といつたやうなものを時折考へさせられる。

（10・5・25）

卒業に際して

長瀬凱昭
（東作）

とうとう卒業をしてしまつた。一生懸命に先生の語を洩らすまじと何も彼も忘れて聞入つてる所を時鈴に呼びさまされてほつと我に帰り、ノートを畳んで教場を出るあの時の気持にも例へられやうか。実際六年間はまたゝく間に過ぎてしまつた。そして教場を出る時と同様に朗らかな気分で煙草を一服する気持になつて来る。平凡な講義坦々たる道を行く様な筆記より、熱を帯びた講義、内容の複雑なる講義、そして苦心して要約したノートを手にして出て来る時が一層嬉しい様に、又味ひ深い様に、波乱に満ちた蹴球生活を終へた感じも又一しほ深い。

又我を忘れてグランドをかけ廻り、思ふ存分にボールを蹴り全く意気と熱に身を委ねて猛練習をして帰る時のあのさはやかな明朗な気分と何の変りもない。又今日一日の激しき活動にほゝえみつつ、明日を楽しみに寝に就くあの安らかな悦びに満ちた気持と何の差があらう。卒業しての気持は言辞に云ひ表せない。色々の例によつて伝へ得るのみだ。

然るが故に六年間只ボールを中心に過して来た事を少しも悔ひない。まして蹴球生活によつて大きな教訓を得た悦びは其を実際に自ら体験し感得したものであるが故に、耳から聞いた教場の講義より勝る事幾層倍である。斯く何の悔いる所もなき反面に別離の悲しさ、故郷を憶ふなつかしさの湧くのを制止出来ない。グランドよりの帰途には明日の練習を思ふであらう。時鈴に呼びさまされた後は明日の講義を期待して待つであらう。時の移るを忘れて胸中を開いて語り合つた友は明日の再会を楽しみに別れるであらう。然し卒業しては明日の練習もなく、明日の再会もない。オアシスを時にして旅立つて行く隊商の気持と何の相異があらうか。砂中に野宿して昨日のオアシスを憶ふのは人情の然らしむる所ではないか。

憶へば蹴球部は意気と熱のるつぼであつた。敵を倒すか我倒れるかの体当り、双方何れかの足を傷ける果敢なタツクル、ネツトも破れよと許り飛込むダツシユ、そして常に敵を倒して、敵の足を傷つけ、ネツトに打勝つのは意気と熱の優秀者であつた。ボート並にオリンピツクの応援歌に、校歌に、国歌に涙したあの感激、其は熱と意気の高調せる時であつた。自己を全く没却して過度の練習に堪へ得せしめたものは意気と熱である。実に蹴球部は若人の血を十分に燃やさするつぼに外ならない。

而して蹴球部は又愛に充ちたる境地であつた。四部迄落ちた時の他部の傍若無人の振舞、他校の冷笑の中に思はず目に涙しつゝも、猛練習に精進せしめたものは相互の固く握り合つた手を通じて流れる愛の力であつた。選手をして益々振ひ立たずんば非ざらしめるのはサブの自己を超越した大きな愛の然らしむる所である。相互に真身になつて健康を心配し休養をすゝめる言葉こそ、反つて最も強く鞭達と激励する天の声ではなかつたらうか。慰めに行く部員の顔を見、声を聞く事は何よりの良薬ではなかつたらうか。共に悲しみ、共に悦ぶの境地に入つて誰か此の大きな愛に感謝せずに居られやう。感謝の念は自責の念を伴ひ、真面目なる研究を促し、真摯なる努力に至らしめる。覇気に富み、意気と熱に充ちた若人、そして研究に——努力に——たゆまざる若人、又大なる愛に全く一致団結したる若人の前に其の目的を防止し得る者何処にかある。四部へ連続落部したにも不拘、其の直後の連年の優勝は又当然の事でなければならなかつた。

曽て支那へ旅行し、日本を離れた時俺の祖国は日本だ。と強く強く感じたが、卒業して又同様に『蹴球部は俺の故郷だ』と痛感し云ふに云はれぬ嬉しさを禁じ得ない。そして、故郷の名を恥づかしめざらん事を念じ益々緊張せざるを得ない。

擱筆するに当り、蹴球部の発展を祈り、商大の名の弥高く栄えん事を祈る。

（9・6・16）

蹴球部生活を考へて

二階堂　謹　司
（昭和10年卒業）

何んの為に蹴球をやるか——。今更こんな事を事新らしく考へて見る必要もない事かも知れない。何故かならば多くの部員は蹴球部に於て、現在少くとも表面的にはこんな疑問を忘れた様な安心した生活をしてゐるからである。

其は僕達が入部した当時のほんとの所謂蹴球部の揺籃時代に於ては、本科生で蹴球をやる人は極めて少数で、殆んど予科生からなり、背丈比べにドングリを集めた様なものだつた。それでも始終勝つて伸びて行く蹴球部であつたなら別に部員が何んの為に蹴球するか考へさせられる事も少かつたであらうが、大体中学校時代に蹴球をやつてゐた人の少い我部が、少し位の練習で次第に其のレベルを上げて来た他の学校に勝つ好運も見出せず殆んど出ると敗けの状態だつた。それが為に試合が済んでも集つて考へる事は別に蹴球の技術に就いて云々するのではなくて、寧ろかゝる弱い蹴球部生活を、何が故に続けて行かねばならないかに就いて話す事が多かつた。又時代としても此の頃は未だ資本主義社会を怨む社会主義思想の流行してゐた時代なので、半ば英雄的の気持で殊更に、はつきり蹴球をする意義が言葉で言ひ表はせないのを理窟で攻撃した人も時折あつた。何かはつきりした蹴球をやる意義、又は理論が要求されていた。先輩が来て馬車馬的にやれと云われても、そんなまるで雲を摑む様な言葉を信んずる事が出来なかつたのが当時一般の蹴球部員の考へだつた。こんな時に予科生より考へる事の多い本科生がゐて馬鹿の様になつて安心して一生懸命に蹴球をやつてゐれば、部員も幾分あの人もやつてゐるのだからと別に心配しないで続けてやるだらうし、又少くとも本科生が馬鹿になつて安心してやる以上は幾分蹴球をやる信念らしいものもあるだらうから

殊更に心配する苦労性の部員には此の気持を伝ふれば又安心して満足してやる事にもなつたのであらう。

所が此の時はこんな本科生がゐなかつた。故に予科生で勝手に試合をやつて勝手に負けて各自で勝手に心配してゐる貌だつた。こんな工合に部員がふらふらしている時には練習も力が入らず充分に為されず、試合は大抵負けで東京学生リーグに於ても二部から三部、四部と釣瓶落ちに落ちて行つた。弱り目に祟りめと云ふ言葉の正しい事をまざまざと味はつたのは此の時の事であつて、部員は一人抜け二人抜けと弱い不愉快な蹴球部に愛想をつかし、他の自由な晴れやかな生活に逃げて行つた人が多かつた。四部に落ちた時に後に残つた人々はと見ればそんな技術はうまくなくても、少くとも弱くしておいて捨てるのを男の義理でない。何んとか回復させなくては、顔が立たぬと考へた人、又二年か三年か蹴球生活を続けてやる中に其の意義に思ひ当り幾分安んじた気持になつた人、又負けてもほんとに蹴球の好きな人々であつて所謂比較的気の合つたあまり理屈にとらはれない人が多かつた。此等の人々で最もはつきりした信念を蹴球生活に見出し皆を導く人となつたのが長瀬であつた。四部に落ちる迄と云つても皆が徒手傍観したのでは勿論なく、もがきながら落ちて行つた貌で此の逆流に棹を取つて船の方向を変へやうとしたが皆の調子が合はないので涙ながら落ちて行つた。然し更生の意気物凄く真剣なる努力に依つて四部陥落の翌年は辛うじて三部に返り咲き部員一同は此の好調を、又上向きを心から喜び合ひ益々気を合はして精進したので、再び昨年度は二部の古巣に漸く帰へる事が出来た。此の間に於て貴い体験は部員一同の中に得られてゐる事であらうし、又此処で改めて述べない事にするが、かくの如く曽つては大いに議論され、又云々された、何故に蹴球をやるのかの問題は、此の頃乃至此の二・三年には問題にはされないのは前にも述べた様に、蹴球部が伸びてゐた事と蹴球部の主宰者が、長い間真剣に蹴球をやり此の間に意義を見出す事が出来得た事、即ち蹴球を落着いてやり得る信念を得る事が出来て、部員全体も落着いて之に従つてやる事が出来る様になつた事に原因する。

故に部員も最近はこんな気持でこんな事の為に蹴球をやるのだ。蹴球をやればこんな為になるのだ。位の仮令はつきりしなくても各自で主宰者等の考を多分に含んだ或る考へを持つてゐる事であらうと思ふ。

其処で今茲に事新らしく蹴球部生活の意義について考へ直して見る必要が何故にあるのか。少くとも現在部員がそんな事を求めやうとしてゐない時に殊更に述べる事は痛みを忘れかけてゐた古傷を突つついて却つて迷惑な事をする非難を受けるかも知れないが自分はそんなに考へない。寧ろ今こそ之を今一度思ひ直して、今後の部生活に力を與へる、又安心立命を与へる素にする必要があると思ふ。

人の一生に於て何んの為に生きてゐるかと云つた事に就いて、誰しも一度は疑問を抱き、凡そ自分で勝手に考へある信念を得て其を根本にして日々の生活を通じて其の信念を思ひ返へして附け加へたり、考へ直したりして段々とより確かな信念にして行く事と思ふ。勿論考へない人、忙しい人は進む事が急で考へる事もなく敢へて考へる事を非難するかも知れない。然し進む事の出来る中は問題はないが、いざ衝突したり行きづまつたりした時にやり直して見る為にはもう時間がない。仕方がないと諦めねばならなくなり、諦めきれないで苦しむ人も出て来る。仮令はつきりして誰にも通用する様な信念はそんなに容易に得られないかも知れないが、少くとも可成り自分で考へ又考へる癖をつけて置けば自分丈の考がぼんやりでも得られて、之が次第に伸ばされて行く事になる。之

と同じ事が蹴球部に就いても云はれる、四部から三部へ三部から二部へと旭日昇天の勢にある時には、別に問題はない。然し一度何か事が起って行づまりを生じた場合に信念も何もない時には忽ちくずれて仕舞ふ事明らかだ。泡を食って考へて見た所で急にいい考へも出まい。涙を呑んで再び下向きの動きに身を任せるのも亦大なる犠牲を必要とし、我々として忍び得ない。落ちる事もなくては上る事もないと云ってなるがままに任せんとする忙しい人には却って其の主義に逆ふ事になる。少くとも茲に理性あり考へる人は再び我々が曽つて体験した如き大きな犠牲を払ふ事なくして、過去の犠牲に於て得た貴い体験を根本にした或る信念を思ひ返へして、出来る限りはっきり今一度摑んで、更に此の伝統的な信念或は精神を受継いで之を伸ばして行く所に、大いなる意義を見出す事が出来ると思ふ。

こんな信念を考へ直して此処に述べれば、蹴球が好きで青春時代に若々しい元気を大いに此の蹴球に依り自由にして一切を抱擁する自然に親しく接しながら発散して人生の春を謳歌する人々には、蹴球を元気でやって居ればこんな事も考へ得られる様になるのだなと半ば副産物的の意義に考へられて、若さを楽しむ蹴球をより以上、元気一杯で楽しむ事が出来るであらう。又人生の春を楽しむよりも少しでも老後の為になる生活を自由に何んでも体験出来る。又修養出来る此の学生時代にやって置きたいと考へる人、否少しでも意義ある生活を又考へのある生活を為したいと考へる人には此処に述べんとする信念を読んで、同じ蹴球をやるにしても、こんなに考へてやる人もあるのかなと今後の其の人の考への中に、此の信念が少部分か或は大部分か又直接に間接に入って来る。そして益々今迄続けて来た蹴球生活が止められなくなり、益々此の生活より信念の糧を得やうとする。即ち茲にこんな信念を改めて述べれば、蹴球を永い間やって行く中にはこんな考も得られるとなる。そして全然こんな事を考へない人にはかかる考へ方もあるのかと云ふ事になり、これに近い考へを得てゐる人にはさうだこんなにも云へると云ふ事になり、何にしても部員全体が今後も尚一層安心して力強く蹴球をやる事が出来、又蹶かうとする蹴球部を正しい歩みに援け、誤り進まんとする道行きを正しくする。そして更に此の信念を伸ばして行く事も出来ると考へられるので意義を認めて、茲に蹴球をやる信念に就いて述べて見たいと思ふ。

紀平先生は確か昔の武士は武士道的訓練に於て『何くそ！』と常に『自己を顧る』の精神を体得し、人間として歩むべき道を正しく進んで行くべき修養を為したと云ってゐられる。固より両者は決して二つと分たるべきものではないが、何れにしても此の武士道的訓練こそ、人間を正しく歩ますに大いなる効果を与へた事を、云ってゐられる。蓋し之は我々として大いに味ふべき言葉であると考へる。古の武士道的訓練は現今に於ては、所謂スポーツに見出す事が出来る。古の武士道精神こそ我々の唱ふる所のスポーツマンシップである。又小さく蹴球精神である何が故に蹴球をやる精神が古の武士道に通じ引いては、人間の道に通ずるものかを考へて見たい。

蹴球に於て一つの小さな技を獲得するにも決して容易な事ではない。即ち単にキックに上達しやうとしても容易に出来ぬ。何度も練習して之でもいけない。彼れでもいけない。今のは少しよかった。今一度やって見ようと云った具合に、何度となく繰返して練習する中に次第にうまくなって来る。即ち一度失敗しても之にへこたれる事なく『何くそ』の元気で頑張り続け、何度となく考へ直しては、敵となるべき人の、或は味方の人のより秀でたるキック振りを見て自分の其を思ひ直して磨いて行く。之は決して容易な事ではない。況してこんな一にして容易に得るを得ざる技の其の他数々、例へばstop head等を併せた蹴球。又かかる個人的伎倆を再び調和よく、意気投合さし纏っ

た一体として同じ様に絶えず続けて精進して居る他校チームと試合して勝たんとする。此の蹴球は決して容易な事ではない。如何なる競技に放ても他の相手と競争して始めて其の競技を為すにより大なる意義が認められる。此の競争の激しい蹴球に於て蹴球の技を練り一致して、試合に優勝する事は容易でないと同時に、之を為さんと努力する所に又大いなる意義が存在する事になる。試合に勝つと云ふ事は、一朝一夕に簡単に出来る事ではない。簡単な個人 play から出発して此等を調合綜和せしめて、組織ある纏った強い一体となす事は、一つの技を練習するより以上の困難さを伴ひ、それ丈又修養にもなる。常に自分自身を顧みて、不足な所はないか伸ばしたい所はないか、他人に劣る点はないかと考へて見る。即ち正しく蹴球をやり、真剣に蹴球をやる以上は、常に我と我が身に反って我を強めて他の人の短を補ひ自分等のチームを強くして敵を破らんとする。そして決して他の人に自己の短を補ふべく、不味さを求めたり、或は敵を味方以下の実力に下さんとして、あらゆる奸策を用ふる事はしない。敢へてかかる事を為す人は真に、蹴球をする人と云ふ事も出来ず、大いに進んで蹴球を為さなくてはならない人々である。勝ちさへすればよい、『勝てば官軍』の古言に大いなる味方乃至後援者を得たとして勝たんが為に一切をと意気込む人も自ら出て来る事ではあるが、又勿論勝って始めて総ての真理なる事正しい事も認められ、負ける間は百万言の名言を用ひても実際勝てないではないかと云はれた時にぐうの音も出ない事にもなる。即ち云ふ事は真なる事であっても他の事情の為に勝てない場合もあるだらう。又真なる言葉を知らなくても好運の波に乗って勝つ事があるかも知れない。だからと云って常に好運を求めたり、或は不正なる奸策を用ひて不本意ながら勝つと云ふ事は、永遠の勝利では勿論なく、又快き勝利ではなくなり、勝っても負ける事になる。即ち永遠の快き勝利。又真なる永劫の勝利は常に自己自らに反って思ひ直し見直して磨いて行き、相手には常に寛容なる襟度を以て対し正しき道への一歩一歩をお互で歩む事に於てである。自己の不足を補ふべく、他に求めたり、自己の弱さを償ふべく相手を陥入れる事なく、お互が各々全体の一員として、自己の分を又務を屢々考へ直しながら尽して行く。自らを磨く事なくして諦め唯之を他人の長ずるに頼り、以て全体としての勝利に与り自分こそ勝利の唯一の殊勲者としてゴマカシ威張らんとする人は、寧ろ蹴球の如き団体競技は為すに価せずして、個人的錬磨を要求せられる。個人競技に帰へるべきであらう。自らの努力を擲って他の力に頼らんとする人の加はる団体は、此の人を啓蒙して導かねば遂に此の団体は破れる事必定だ。又相手に奸策を弄して、勝得た人は、又団体は近き将来に敗北の憂目に遭ふ事又必定だ。勝利の秘訣は正正堂々の陣を張り、公明正大フェアプレイに生くる所にある。茲にスポーツの又蹴球の実に大なる意義があり、且つ古武士道精神に通ずる所である。真にスポーツをやる人は正しき道を歩み、自己の本分に忠実なる人である。此のスポーツに於て自分自らに反り、思ひ見直す考へ方、即ち其れが単なる一つの技術であっても、常に自己の技術を他人の其と比較して何は置いても自分の其を思ひ反へしては磨いて行き、人の技術を悪く為さんとする所はない。否寧ろ相手も充分に技術錬磨が出来る様にあらゆる寛大さが払ひたくなる。更に一つの単なる技術にあらず、チームを形成する一員としても他人に頼る事なく、常に自分が悪いからこそ、此の敗北を斎らしたものと自分に反って考へ直して大いに自分から改めて行かんとする。此の実に謙遜な態度こそ、最も正しく又常に他人の失敗に対して寛大になって自分をとがめる事こそ、スポーツに於て、『我に反る』最も有難い体験である。是こそ人間の道で、スポーツマンの味ひ得又味ふべき意義である。常に自分自らを考へ直して自己の行を導いて行き、始めて落着いた正しい歩を為し得るのである。

又蹴球をやると『何くそ』の精神が培はれる。此の何くその精神の帰へるべき所は結局自分自らを考へる事であるが、然し此の何くその中にこそ力強い意気とか或は不撓不屈の精神とかを見出す事が出来る。下手なプレイをして又敵に敗れて黙して意気地なく引込んで仕舞ふ事も出来ず、『此の野郎』と意気込む。そして自らを磨き精進を続けて勝利を獲得する。弱いから負けたのだ。弱いものが負けるのは世の常だ。仕方のない事だと半ば諦めて自ら励む事もしない人は決して自己自らに忠実な人でもなく、安んじた生活の出来ぬ人々であらう。負けてなるものかとふんばる、此の野郎とばかりに深く考へ直して頑張る。而して次第に勝利に近づき、又正しき勝利に赴く。一寸した事に破れ、尻込みする事もなく、常に張りきって Error and trial 錯誤試行を続けて行く為には、スポーツの与へて呉れる此の何くその精神が重要である。

意気がなくて熱血がなくて何んの青年ぞ。早くより世を達観した脱俗者流の言を用ひて、真剣に世の中の事を考へんとする人を笑ふ。又感激し易い人を卑下する人は、憐むべき不具者、青年にして青年にあらざるものである。

涙あり。感激のある時代。それこそ青年の唯一の特権にして、青年ならでは持つ事の出来ぬ、然も人生に稗益する所極めて大なる所のものである。稍々もすると感情に盲目的なるものがあるが為に、一切の感情的なるものを非難するには当らない。青年の芸術的敏感なる良心は俗悪なる社会にあっては、神聖にして清き社会を憧れ慕ひ、不正なる行の後には正しき行に生きん事を痛感し、醜悪偽の世界に於て真善美の世界を求むる事敏感にして切なるは青年を置いて之を求むべからずだ。青年に正気を満す所のものは、而して青年を強く駆って正しきに導き人生社会を正しきものと致さんとする所のものは、スポーツより得られる。『何くそ』の精神であらう。

鳩山前文相がスポーツに就いて語られた中にも、スポーツ精神は寛容と自信を持つ事の二つにありと言ってゐられるが、之とても上記の事を別の言葉で述べられたに過ぎない。勝たんがために総てを辞せず。唯ガムシャラに勝をのみ求めんとする輩の如きは、敢へて寛容なるべき事を忘れる事が多いが、之では真の勝利に、到達する事は出来ぬ。常に寛大なる気持で敵に或程度迄譲り、小部分の負ける所はあっても大局に於て勝を制する事が正しき勝利である。正しきものが戦に勝つ正しきものを求めんとして戦が存在する。故に不正を以って戦に勝たんとする相手なれば破り易きはさて置いて、寛大なる精神に依って正しさの為に彼を導いて行く。あらゆる世の中の事に於て此のスポーツに於て得られる。寛容の精神の如何に大切であるか。寛容或は謙譲に於てのみ人間は正しき道を歩む事が出来る。プレイに自信を持つ事之は必勝の鍵である。此が為には絶えざる懸命の努力をしなくてはならぬ。努力をしないで自信を持つと云っても無理であらう。誰にも負けてなるものか。此の野郎馬力で頑張る。何事を為すに当っても此の意気や愛すべしだ。

凡そ此等は所謂蹴球部生活と云ふ団体生活をする事に依って、他日社会に出でてからの社会生活の訓練をして置く。即ち社会生活に於て必要なるべき諸要素を全く其の縮図である部生活の中から得る、或は又此の部生活を通じて、社会生活の理想状態に考へ及ぶ事等が、部生活の唯一の意義なりと、従来屢々考へられて来たものであるが、此等の事々は上述の事を纏めて云ったに過ぎないのである。纏めて言へば社会生活を為すに必要なる諸種の要素を得る。即ち人間としての道、進むべき人間の道を考へ到る事の出来るものが即ち蹴球部生活と云ひ得るのである。

更にスポーツを為して得られる貴いものとして、健康性に伴ふ明朗快活性である。一点の曇りのない鏡は顔の如何なる細い点迄残す所なくありのままに示して呉れる。明朗快活なる性質の人はあ

りのままの世の中の事をそのまま映す事が出来る。心に陰惨な曇りのある人には、その人の色眼鏡を通じて世の中が陰惨に見易い。然し我々は単に明朗快活になりたいと思っても容易になれるものではない。それには信念が確かであったり、或は健康である事が必要である。健康なる事こそ人間から暗い所を除いて明朗にする重大なる要素である。先づ健康にする。即ち形を整へる事が心迄整へしめると等しく、体が健康であれば別に僻む事もなく、心迄健康であり得る。病ある人の如く世の健かなる人を羨む事もなく、又世の何ものかを怨む事もなく、寧ろ感謝の気持が湧いて来る。蹴球をやれば健康を保つ事が出来ると言ひたいが、然し蹴球をやって体を毀した人には此の言葉は肯はれないらしい。健康を損しても此の害した健康を害しない前にも増した健全さに、蹴球に依って得たる精神的のもの、即ち信念や信仰力に依って斎らす事の出来る人は別として、否之こそ求むべき真の境地かも知れないが、自分は体迄毀して蹴球を続ける事は危険性を伴ひ易いと考へる。即ち別な言葉で云へば、蹴球は一面に於ては健全なる体を得る為のものと考へたい。だからと云って少し苦しいから練習を休むと云った、所謂鍛錬を志さないで直に降服して仕舞ひ、体をより強めて行く事に心を注がない人は排撃すべきだ。即ち程度の問題で必ず或程度迄は精神力に依って此の野郎とばかり頑張り、張りきった時は少しの過度なる運動も何等体に支障を来さず、寧ろ其が為に次第に体も強く鍛錬されて来る如く経験に依り考へる。此の点より精神的に弛みの来た時に体を毀す事が多いと云ふ事も出来る。医学の方で如何なる程度迄は体が精神的なものでもちこたへ得るか。即ち体の健康性が激しい運動に対して、持応へ得る弾力性は如何なる程度であるか。説明出来るかも知れないが然し極端に精神的なるものを主張する人々は精神療法のある如く、一切の病は精神力に依りて癒す事が出来ると説き、殊に禅宗門の人々は精神的のものを極端に強調してゐる様である。各自で体の弾力性も経験を通じて考へられ得る事であらうが、常に張りきって、又同時に自分は運動してゐるとの強い自覚の下に注意して節制に務むれば概して体を毀す事も少く、否、益々蹴球をやる事に依り健康性を増進さす事が出来得ると考へる。節制と云へば若い時代は体の健康なるをよい事として、老人等が見ると冷汗を流す様な危険な事を平気でやる人があるが、然し之が英雄気質から生ずる所の意気及び元気ある点を強める為に為すものであるとするならばかかる点は充分に蹴球生活自体の中に得られる故に、蹴球生活が自由に又大いに出来得る様にかかる半ば危険で乱暴で、無節制な行為は寧ろ慎しむべきであらう。蹴球をやって得られる有難い修養訓練の為に、又自分の大目的実現の為には好きな事も止して此の修養が充分に出来る様に務める事が蹴球人の真の気持であり、正しい行ひであらう。此の常の精神的モリモリと絶えざる節制とに依って必ずや蹴球をやる事に於てより健康さを得る事が出来ると考へる。更に明朗快活である為の他の原因は前に述べた所の蹴球を真にやることに於て人間としての道を悟り得、然も強く此の道を進んで行く様になるとの強い確信、或は信念を持てば益々安心して深く真剣に、蹴球生活をする事が出来る。即ち自分として間違った歩をしてゐるのではない。否寧ろ理想に近づくに最も確実にして、近い方法を取ってゐるのだと確信する時に、蹴球生活をする事が愉快になり、安心して来て自然と明朗になり、快活性が浮かんで来る。少くとも自分の日常の生活にしっかりした意義付けが為し得られた時、即ちかかる信念の下にかかる態度で生活するのだと凡そ確然とした考へが出て来た時に、其の人は可成り安心した生活をする事が出来る。又力強い一歩々々を踏む事が出来ると考へる。仮令其が独断的であるにしろ自分であらゆる場合から考へて、間違ひはないと為し得た、信念に沿った生活を毎日送る事が出来る。人はその生活を楽しむ事が出来る。即ち朗らかに其の生活を送り、殊更に不必要にも

人を怨んだり羨やんだり別に不安を感じたりする事なく、落着いて総ての事物を正しくありのままに眺め、よろしくない事物に当っては新らしく改めたい事を思ひ、結構なる事は心の底から楽しみ賞讃する事が出来る。

朗らかな生活をすればする程、人を怨む事も羨やむ事もなく暗い点も偏屈な点もないので、自分の欠点も直に解り早く直さん事を思ひ次第に正しい道に直って来る。そして益々朗らかさを感じ暗い所もなく奥の奥、裏の裏を考へて人を憎んだり疑ったりする事もなくなり、次第に人からも仲良くされて来る。或は人から悪く云はれる事があっても信念強ければ動かず、世の中が明るく見え出した頃に、即ち総の物事が快く嬉しく見えたり、考へられたりして幸幅なる自分に気が付き何かなし神の存在を思ひ、感謝したい気持が湧いて来る。かくして常に不幸をかこつ人、淋しく暗い人々が気の毒になり、決して憎めなくなり出来るなら何とか救ってあげたい気持になって来る。容易に人なんて救ふ事が出来る物ではないかも知れないが、然し次第に仏様の御慈悲に会った様な神の恩寵に巡り合はせた様な気持で人の為に何とかしてあげたい様になるのである。人の為に少くともなり出来得べくんば人を救けんとする事は唯その人の修養に待つ外はない。その時に自分は懸命に修養して、立派な人間になってあらゆる人々を出来る限り広く救ひたくなって来る。之が亦唯一の重要なる蹴球人の得る意義であらう。此の辺に社会生活の理想的なるものも潜んでゐる如く自分は考へてゐるが、尚今後此の点は十二分に考へなくてはならぬ事であらう。潜越な言分ではあるが、クリスト教の愛とか、真宗の感謝の生活、御慈悲等総て上記の如き生活に信仰的に、高僧名僧の言を通じて、或は多くの仏の御慈悲の有難い実例を挙げて以て直接に入れしめんとしてゐる如く考へられる。

以上で大体自分の考へてゐる蹴球生活より得られる意義に就いて、極めて抽象的に根本的な事のみに亘って述べて見たがその外人々の口にする色々な意義も総て此等の事より演繹される事とは考へるが、多くの部員に蹴球生活を為し終った時に述べたい様な、かかる数々の上の言葉を今から始めんとする人に申述べる事は、案外自分の所期を裏ぎって之丈が蹴球生活の意義かと諦められたり、或は安心して仕舞はれると聊か慌てたくもなるが、然し幾分人間として根本的に歩む道として蹴球生活の意義を考へんとした、此の文より蹴球生活をしてゐても決して人間として誤りはなく、寧ろより正しく又より近い『不踰矩』への道行きであると考へて、今から此の蹴球部生活を始めんとする人は安心して此の生活に入る事と為し、又今尚此の生活をやりながら、不安なる人は之で安心し、又落着いて生活してゐる人は、こんな考へ方もあるなら、今後も益々安心してやって行く事にすると云った事になれば、大いに此の稿の意義ありしと考へられる。

かくして皆が根本的に確かなる信念の下に、安んじて蹴球生活をする時には如何なる危機も容易に此の部を毀す事なしと考へられる。意図する所宏遠にして内容粗末に失するの甚だしき非難大いに当るかも知れないが、更に此の後稿を新にするに次いで内容を豊富に致したいと考へる。

更に文末に大学生活の本質と、蹴球部生活に就いて考へ、即ち最近しきりに唱へられる、大学教育の知育偏重人格主義又徳育を重要視すべし、等の言葉を蹴球部生活との関係に就いて考へて、聊かなりとも大学生活に対して此の蹴球部生活の意義ある所を明に為し、更に更に我々の生活を力強いものと為したい。

普通教育は知育・徳育・体育の三つに分たれてゐる如くである。大学に於ては既に其迄の段階、殊に高等学校時代に所謂徳育体育の凡そ事了へた人を教育する所と考へられ、為に大学は此等健全なる徳育なり体育なりの土台の上に専ら知育を植ゑ付け、所謂学理を深く究め知徳体の三者を揃へ

持つ完全なる人間を作る学府なりと考へられてゐた。然るに文化の発達に伴ひ、科学研究の領域が広く深くなり、短日月で科学一部門でさへも容易に究める事が出来得なくなり、一見するに極めて明らかで容易で便利な科学の研究が益々強調され、同時に早くより之に携る人多くなり、遂には徳育、体育迄も忽にする傾向が生じて来た。此の反面、高等学校の乱設に対する高校卒業生対、大学入学者の比率が大となり、劇しい競争が行はれる為に、所謂人格修養の最も大切な時期の高校時代は、大学に入学せんが為の已むを得ざる受験準備に忙殺されて、落着いて充分に人格修養、即ち心身の鍛錬に勉むる事が出来なくなって来た。かかる過程を通って来た大学学生に如何程宏遠な学理を説いた所で、頭ばかり大きくなる人の様にフラフラして早晩倒れて仕舞ふ様になるのである。丁度砂上に立派なる楼閣を築くに似た所のものであらう。極言すれば馬鹿か気狂ひに利刀を与へた事になる。此の点は我々商大予科に於ては其等高校時代に比較して、十二分の余暇を持ち、大いに人格の涵養に尽す事が出来るのである。一面に於ては科学、即ち学問の研究に一面に於て、人格体育方面の練磨を為す事が出来得て、始めて完全なる人間と為る事が出来るのである。

成程殊更に運動しなくても、本を読み、博く学んで、而して慎しんで之を考ふれば、人格方面の修養も出来得るかも知れないが、稍もすると科学研究を深めると同時に、此の用ひる抽象的言葉の便宜なる事と、明瞭なる事とに先を急がれた貌で、其の具体的なるものを忘れて『之はなかなかいい、よく解る』なんて事になって一も二もなく何から彼迄科学丈で事足り、又本を読んだ知識丈で事足りるとすれば、とんだ大間違ひの基となると考へる。勿論科学に意義のある事、無くては済まない事も、今日の向上された文化生活の中の人間の便利なる生活様式を見ても理解出来る。然し科学丈ではない別に人格的なもの思惟するものがあるべきと考へる。此の人格的のものはあらゆるものを読んで深く考へれば得られるかも知れないが、完全に得る為には古に於ては武士道的訓練であり、今日に於てはスポーツに依ってであると考へる。真剣にスポーツをやれば常に人間的修養、所謂徳育、体育は出来得ると思ふ。スポーツが何故にかかる教育の為になるかは前段に於て述べた所であるが、此の点よりスポーツこそ今将に過閑視されんとしてゐる教育の中の徳育、体育に資する所極めて大にして、実に意義ありと考へる。稍もすると悪い事を考へる余暇を無くする為に、又ゴマカス為に学生にスポーツを奨励すると学校当局が考へてゐるのであるならば、暗き事甚だしく、且つスポーツを冒瀆するものと云ふべきである。

『かかる態度で常にかかる考へで人生は進むべきだ』が蹴球で得られる人格的のもので『それは然らば具体的に如何なる方法手段に依るか』が即ち所謂学問に於て得られる所と考へる。『よく学び、よく遊べ』もこんな所を意味するのであらうし、何しろ運動と勉強共に人間生活には必要なるものと考へる。運動丈で之が全部と考へたら、足らぬ所甚だしきものであらう。唯先づ運動して根本的なるもの、人格的なるものを得て置くべきであらう。

子曰。学而不思則罔。思而不学則殆。（罔昏也、殆危也）此の論語の言葉も此の辺の所を云ってゐるのであらう。科学研究を為しても、猫に小判にならぬ様注意しなくてはならぬ。

『運動しない奴に何が出来るか』の言葉も此の辺から云ふ事が出来る。第一に意気あり、元気あり、我武者らに文句なしで頑張通す。真に行はなくては気の済まぬ所、一も実行、二も実行、一も張りきり、二も元気で行き、更に第二に常に謙譲な態度で又寛容なる襟度を以て自己自らに反って考へ直し、己自らをきはめて本心まごころに従った生活をする事等が学校スポーツに依り得られるとき学校スポーツの人間生活に於ける重要性が大いに認められる。此の点に於て学校生活上スポー

ツの必須性が強調され得る。殊に高校予科時代に於て。

以上で凡そ蹴球部生活に就いての常々の考へを思ひつくままに書き綴った。人間として、最も意義ある生活の為に蹴球部生活を考へ、落着いた安心した、力強い歩みを以て此の部生活を今後大いに続けて行き、益々以て自分の生活に人間としての考へを加へて、神の道に近づくべきと考へる。

然し此等の言葉は抽象的表現にして、之丈と云って諦める事も、安心して仕舞ふ事もいけない。此等の信念こそ又此以上のものこそ！　蹴球を誠心から一生懸命にやり、蹴球部生活に感謝の湧いて来た時に於て、十二分に我がものとなった。又実のある信念を得る事が出来るであらう。

部員全体が之等の、抽象的なる叙述に信念の力を得て、之に励まされながら、熱心に蹴球する人々となり大いに蹴球部生活に感謝する境地に到り、人としての至道に達せん事を衷心より期待して擱筆する。

昭和九年五月一日　　——脱　稿——

先輩よりの書翰

後　藤　博　基
（昭和10年卒業）

蹴球部の諸君、よくやって呉れた。これで先づ一安心した。四対三の電報を見た時本当に嬉しかった。スコアは諸君の最後までの奮闘を物語ってゐる。残る二試合に楽な気持でベストを投出して立派な意気と力を示して呉れ給へ。堂々一部のプレイヤーとして活躍して貰いたい。

四月お別れして以来御無沙汰しつづけてゐる。が東京からの来信や来連の人々により、諸君の健闘が物語られて遥かに喜んでゐた。若さと意気をもつ事は此まで屢々報いられて来た。意気と力は充分既製一部を圧到してしまった。春の合宿に、講習に、夏の合宿に常に共同一致多数の出席を見て、大いに苦しい練習を続けられた事を思ふとき、今日の勝利には涙が出て来る。電報にもある様にこれからだ。確実に一部のものになる日が待ち遠しい。頑張りを続けて呉れ給へ。去年も一部は大分もめて農大が落ちてゐる。

何は兎もあれ嬉しい。当地にあっては、何処に電話をかけても新聞社は東京のリーグ戦は報じてくれない。電報が入らないのだ。早大慶大に健闘した事も東京から切抜を送って貰ってやっと知った。実際よく頑張ってくれた。一点でもとってくれた事は嬉しい。メンバーも僕の考へてゐたのと異ってゐたのに驚いた。フォワーヅに角田の名の見えないのはどうした事だ、体でもこわしてゐるのではないかと心配してみたり、新聞だけ屢々林田と去年やった様に借りてゐるのかなと考へたりした。ハーフに水島主将自らの出陣、攻防に活躍をつづけてゐる事であらう。小西のセンターの初陣、元気でやれ、先は長いぞ。バックは長身ぞろひ、枝村がやってくれてゐるので心強い。鈴木と二人で頑張ってくれ。田島のキーパーは一部きってのチビだらう。色々忙がしい事が多いと思ふ。

皆から時々便り受取り、又先般は雑誌を送って貰ったりして本当に御無沙汰してすみません。

僕の生活もすっかり変ってしまひました。太陽と土地がなつかしくてなりません。今でもすぐ裸になって地べたに寝転んでみたい様な気がします。大連に来た当座は球が蹴りたくって仕方がなかったが、会社が終るのが六時七時となるのでどうにもならなかった。けれども六月になってからは

満鉄蹴球部に席を置いて毎日練習をやった。しかし学生時代と異って、明日会社へ行かなくてはと思ふとけが一つ出来ず思ふ存分やれなかった。約二月ばかり蹴球部の生活が続いたが、秋のシーズンに入ってからはとうとう一度も練習に出られなかった。満鉄はリーグ戦に優勝したけれども、僕はグランドに行く事さへ出来ず、試合も見ずにシーズンオフしてしまった。

この一週間急に寒くなって、部屋にはスティームが通ずる様になってゐます。会社は面白いことも苦しい事もあります。ひどい時は十二時の夜業が一週間も続きます。早い日が七時。八時九時はざらです。やってゐる仕事が大バクチなので家へ帰ってもなかなか安心出来ません。大豆油と植物油の原料の売買をやってゐるのですが、自分一人で取引所へ行って支那人に混って売ったり買ったりするのは、丁度試合をやってゐる様なものです。殊にこの十月の末から最近にかけては、取引所始って以来ともいふ位の大事件で、取引停止が一週間も続き大混乱を呈してしまったので、今後かたづけで大いそがしです。丁度一点勝越されてタイムが残り五分と言った時の様な気持で始終居ります。

蹴球部で永らく錬へられた意気と力とをもって仕事に当ってゐますが、随分役に立ちます。今では会社の中で相当（ハデ）に仕事をやらせて貰へる丈でも嬉しいです。四月に来てから既に机が二つ上りました。僕が上ったのではなく上が皆他所へ転勤してしまったのです。けれど後へ誰も来てくれないのでトコロテン式に上ってしまって、朝から晩まで苦労の種です。が会社中で一番面白い支店であり又その中で一番面白い係でせう。儲かったかと思ふとすぐ損をしたり、大きなことで見当がつかないのです。

甲種合格したので、内地に十一月に帰れると思って喜んでゐました。皆と一緒にリーグの閉会には飲める予定にしてゐた所帰れなくなってしまったのです。来年の三月からは満洲の兵隊さんになります。公主嶺独立歩兵第一聯隊附になりました。さっぱり面白くありません。しかしお国の為です。第一戦に立って働くのも又男子の本懐と思って居ります。

何れにしても諸君とはしばらくお会ひする機会を失ひました。四五年内地には帰れさうもありません。幸ひ元気に働いて居りますから御安心下さい。それから相変らずキーキー声で会社中どなり廻して居ります。何の因果か此ばかりはなほりません。

諸君も元気で頑張って下さい。先づは御喜び旁々日頃の御無沙汰お詫びまで。

昭和十年十一月九日　　大連にて　　後藤　博基

○之は昨秋一部としての最初のリーグ戦に於て、連戦連敗の憂き目を見んとした時部員一同の団結と、神野水島両兄の必死のリードに依って前年三位の立教を敗った、その打電に感激した後藤兄がその夜直ちに筆をとられて我が部に寄せられたものであります。

部史を顧みて

神　野　清一郎
（昭和11年卒業）

蹴球部再建の大先輩長瀬兄没後満五年の今日、この懐しき部誌の原稿を書く機会を与へられたのは非常な喜びであり又感慨一入深いものがある。

長瀬大先輩への深い思慕と兄から与へられた強き感銘から想ひ出の一片を書いて自分の知る昔の部を考へ、現部員諸君の御参考の一助ともならば幸ひと思ふ。

昭和五年春石神井原にあった予科のバラック校舎に商大蹴球部員として入れて貰ってから既に十三年になった。この間の部の歩みは相当変化の多いものであった。

昭和五年吾が部が二部にあり同年全敗して三部へ昭和六年三部に全敗して四部に転落し昭和七年四部最高位にて三部へ昭和八年三部にて全勝二部へ、昭和九年二部に全勝して一部へと破竹の勢を以て躍進し、爾後三年程後に一回二部へ落ちたが翌年直ちに一部へ戻り、其後善戦健闘して母校の面目を遺憾無く発揮したのであったが、本年不幸にして二部へ落ちて今日に到ってゐる。

勝敗及び部位の変化に依って直ちに真の姿に於ける部の盛衰を論ずるは早計にして、その原因、萌芽は常に数年前に遡って考へてみなければならぬ。自分は現在の部を語る資格は無いが、昭和五年後の六年間に二部から四部へ、四部から一部へとの転落と再建の波乱多き部史と長瀬兄とを結びつけて略述し度いと思ふ。

自分が予科一年の時、予科三年の長瀬兄が予科の主将であって、予科の部員は十数名であった。

当時の吾が部は実質に於ては殆んど予科生が主体であった。当時の部の大半の空気は戦っては敗れ、敗れても反省する者も少く、部員はバラバラで練習には何時も五、六人がボールを蹴ってゐた。試合にキーパーが欠員すると籠球部から臨時に出て貰ふと云ふ始末であった。グランドも極めて粗末なものであり、ラグビー部と共同に使用して居り、雑草が生えて練習の前にはシャベル等を使用して草株を除去し清掃作業をしてから、ゴールポストを建ててボールを蹴ったものだ。この感激の無い衰微しゆく部の主将として長瀬兄は、小さなバラックの部室に黙々として何事か考へてゐた。

少しの虚飾も無い態度、真黒な顔をした瘠形の元気な長瀬兄が何時も唯一人ポツンと部室の壊れかけた椅子に腰掛けて部員の一人でも来るのを楽しみに待ってゐたあの姿が今もはっきり想起される。

長瀬兄の胸中に張ち切れんばかりの誠の力が、あらゆる機会に於て爆発の一歩手前迄来た程の熱意を以て指導してくれたが、その甲斐も無く昭和五年の秋のリーグ戦は凡戦に終始して三部に転落して了った。

予科の部員は次第に退部した。翌年は更に減員した。

昭和六年長瀬兄は国立の本科へ行って了った。予科の主将は二階堂兄となった。

この頃長瀬兄は部への徹底的精進から体が不調になり、御父君からは蹴球を堅く禁ぜられる様になった。にも抱らず責任感の強い兄は、国立の本科に移ってからといふもの、晴雨を論ぜず長途を問はず春の練習から毎日毎日石神井に来て黙々として予科を指導してくれた。

今にして思へばこの長瀬の真剣なる精進と熱意の前に自分は何故もっと早く一身を投じ得なかっ

たのかと、自分の及ばざるも甚だしきに、長瀬兄に対し実に済まないと思ってゐる。

病を押しての不屈の精進にも抱らず、当時の部の空気は未だ建直って居らず、真の協力者二階堂兄一人を得たのみでこの年も終り、三部に全敗して四部に転落して了ったのである。

長瀬兄の気持を知らぬ者は、一人減り二人減り部員は数人になって了った。

然し乍らドン底に落ちゆく当時の苦戦苦闘の中に、長瀬兄の黙々たる実行力は遂に人二階堂兄を得たのであった。

苦境が加重するに従ひ部が離散せんばかりの危機に直面するに従ひ、長瀬兄と二階堂兄との親交は愈々深く益々厚くなって、此処に商大蹴球部再建の萌芽が力強く伸びつつあったのを見逃してはならぬ。

四部に落ちた当時の気持は全くドン底に転落する気持であった。他の部からは蹴球部存在の価値無しと迄極言され、予算も大きく削減されて了ったのである。

人の力を以てしても如何ともし難き状態になって了ったのである。

この苦境の中に於ても長瀬兄の態度は変らず、唯黙々として勉学に於ても蹴球に於ても物凄く精進され、身を律すること極めて厳にして先づ身を以て範を示し、病弱の体は斃れはしまいかと周囲の者が心配したこと屢々であったが、旺盛なる責任感は常に部員に深い感銘を与へ、二階堂兄は長瀬兄と一体となって、兄の肉体上の弱点も補強し、兄の誠の力を発揮する強大なる原動力となって手の附け様の無かった四部転落の苦況を克服、遂にこの年四部に優勝することが出来たのである。

この優勝は実に貴重なものであって、二年連続落勢のついた部を上向けるのは実に容易なものでなかったのである。

爾後連年連勝、部は優勝の一路を邁進し、四部にては予想し得なかった一部の強豪に列して堂々戦を進めるに到ったのである。

予科三年間の長期に、不況苦難の中に苦しみ抜いた長瀬兄が部再建の力は予科に在りと看破され予科の育成に病躯を押して尽された努力が如何に地味にして深いものであったかは、自分の如き凡人に測り知ることが出来ないのである。

ドン底にあった四部の当時ですら、長瀬兄は常に高遠なる理念を以て指導精神たらしめんとよく我々に語られた事を覚えてゐる。今から七、八年前の話である。

長瀬兄曰く「日本海軍の演習は実に物凄い。演習は常に実戦以上の苦闘である。為に人員艦艇の犠牲は頻々として出る。然かも演習は更に猛烈に行はれてゐる。蹴球部の練習も此処に大いに学ぶ所があるではないか。練習は常に試合よりも苦しいもので無ければならぬ。然らざれば実戦に役立たない。一回のボールを蹴り一度のストップをするにも慢然としていては役に立たぬ。実戦に役立たぬ練習は止めろ。常に頭は試合を想定しなければ練習の価値は無い」と。

又或時は「ランニングパスは走らなければ価値が無い。走力の遅いものは出足で補足せよ。敵よりも以上に走らねば敵に優る力を発揮する事は出来ぬ。戦に勝てないのだ」と。

病弱の兄であったが、その指導理念は烈々たる熱が充溢し、言行一致して当時の自由経済時代の大学生活に対する深き反省の課題を与へてゐたのであった。

この高遠にして核心から出発した指導精神が二階堂兄に依り着々と実行され、志を同じくする貴重な数人の部員が黙々として従って行った処に、不可能事と考へられてゐた部の再建が可能となったのである。

二階堂兄は予科の主将から実質上卒業迄商大の主将であって、これを力強く補佐した後藤兄あり次年度は甚だ微力の自分一人で次に先づ浅枝君を始め、荒井、角田、森田、田島の諸君続き、各々その特徴を遺憾なく発揮して、此処に長瀬兄の精神は次第に数人に及びその力は積となって現れて来たのであるから、四部から出発した時の部の団結は愈々堅く不敗の基礎が築かれて行ったのである。

長瀬兄の斯くの如き強硬なる指導精神の許に部員は黙々として従って行き、服従から敬慕へ信仰へと迄進んで行った兄の反面は、実に底知れぬ慈愛に充ちた先輩であった。

真面目に部を考へてゐる部員の心境には、誰よりも深い同情者であって、思ひ遣り厚く、兄と話して居れば、有難度い済まないと云ふ気持で一杯になったのは自分一人でないと思ふ。

純情を部に捧げ尽して護国の英霊となられた荒井君が何時も「長瀬サン長瀬サン」と慈父の如く慕って部を生活の全部として商大を卒業したあの偽らざる荒井君の姿が今もはっきりと目に浮ぶ。

長瀬兄の急逝を荒井君はどんなに悲しんだ事か、又勇戦奮闘名誉の負傷をされた荒井君が淋しき野戦病院の病床に長瀬兄を如何に慕って瞑目されたかを思ふ時、堪へられない気持がする。

角帽の長瀬兄は未だ事変勃発前「日本は将来の為支那の事情を大いに研究して置く必要がある」と云はれ、又卒業に際しては「俺は自分の会社には入らない。将来の日本の為重工業に身を投ずるのだ」と三菱鉱業に入社され、社会への地味な第一歩を踏みだされた。

自分は本三の夏、九州戸畑の合宿に長瀬兄を尋ねた時、兄は益々元気旺盛で「俺は出社時限より一時間早く出て、其の日の仕事の準備をして置くのだ」と前夜の痛飲の翌日と雖も、自分が目覚めた頃は既に出社後であった。

卒業後も常に部を思ひ部員を思ふ熱ある指導に涙を流して感激し、帰京してその秋初めて臨む一部の桧舞台に商大蹴球部は如何に戦ひ、長瀬兄の恩に酬ひんかと苦しみ、及ばざる自分は最後は部の健闘を神に祈るのみであった。

「将来蹴球部員を以て会社を作り、日本の産業界に大いに働き度いものだ」と人の力とその力の和を常に強調して居られた長瀬兄の報国の言葉の意味する所は誠に深い。兄の人格はボールを蹴って築かれて行ったのであるが、既にそれを超越して蹴球は一つの真の学問であり、人生の尊き段階となってゐたのである。

本然の姿に立ち直らんとする今日の皇国の歩みが、十年前の蹴球部にもその萌芽があったのを痛感する。

麻雀、かるたその他の遊戯にも熱中された兄ではあったが、これは皆一つの小さき方法であって、猛烈な練習の反面に、部を温かい愛の境地たらしめんとする深い思ひ遣りであったのだ。

長瀬兄は蹴球に生き蹴球に斃れたと云へる程の短き一生であったが、兄の尊き生命は商大蹴球部に捧げ尽され、その生命は永久に部の中に生きてゐるのである。

如何にドン底に落ちた部に在っても常に余裕綽々隠忍自重一歩一歩と再建へ進まれて行ったあの不撓不屈の兄は最後にその尊き生命を部の為に使ひ果して斃れたのである。

四部当時の兄の心境、即ち部の再建は一人では到底出来ない、又一朝一夕に成るものではない。自分の時代に出来なければ自分の責任は次の時代の人々に果して貰ふのだ。その人を作りその基礎を作って自らは功を求めず、楽を追はず、着々と再建への準備工作に専心すると云ふ長瀬先輩の尊

き心境は、今日皇国が直面しつつある難艱突破に際して大きな示唆を与へてゐるのではないだらうか。

蹴球部将来の途も実に多事多難であるが、茲に部員各位の積年の御努力を衷心より感謝すると共に、尊き長瀬兄の生命を温かく生かし、飽く迄核心から出発されて御奮闘あらんことを祈って止まない。

昭和6年を顧みて

荒　井　文　雄（本科１年当時）
（昭和12年卒業）

顧みれば昭和六年こそ、我部がその悲しみを最も深くした年だった。前年二部より三部へ落ち、没落の涙乾かざる此の年我が部は、更に三部に於ても全敗を喫し、三部を追はれ栄ある籠城事件により輝かしい歴史に一段と光彩を添へた母校と相反する方向を辿って悲しくも四部へと落ちて終った。

当時を追想する時私は唯暗然たらざるを得ない。敗戦の生々しい記憶、憐れむが如く輝く夕陽、涙に染んだユニフォーム、さう言ったものが胸を強く打ち、新しい涙を誘ふのである。

静かに敗因を考へて見る時、種々の事が今尚焼きつく様に脳裡に残って居る。

纏まりの無い事闘志の無い事、無力のＦＷ其の他弱いチームが持つ様な多くの欠点を持って居た当時のチームを思ふ時、私の頭に残る一筋の事は『我がチームは勝つ可くして負けたのではなく負ける可くして負けたのである』と言ふ事である。少数のものを除いて、其の頃多数の人達は蹴球を第二義的に解釈してゐたのではあるまいか。僕も実はさうだったが。部員が少い上に、此の様な傾向があるために練習に出る人は極少数で、十一人揃ふ事は殆ど零に近い確率の上に置かれた。そして自分勝手に練習を休み、練習に出ても冗談まじりに練習する傾きが無いとは断言出来ない状態だった。

練習が此の様に疎なるものであって見れば、メムバーを決定する事も困難であって、試合毎にその位置を交替したり選手とサブとを交替したりして、その試合に臨まねばならなかった。確かにメムバーを交替する事はよい事である。もしその時と所とを得るならば。然し絶えざる交替はその位置に対する責任感を除かしめ、更にコンビネーションを破壊せしめるものではなからうか。ひどい例を上げれば鈴木君がＬＷをやったり、西田さんが長瀬さんが病床に斃れた時、止むなくＣＦになったりした例である。之は其の当時の事態から万止むを得ざる事であって、我部の当時の没落前の状態の然らしむる所である。

その上試合では練習中余り顔を合はせない様な人と鉾を揃へて攻戦中の自分を見出す様な事がしばしばあった。その人の走力もパスの性質も分らずまして癖も分らない。

之は練習の疎なる事を現はすと共に、纏りのない事を明かに語って居るものである。

ＦＷの無力はリーグ戦の得点５よりして推察出来る。当時ＦＷの個人プレイは決して今の商大チームのそれに劣るとは断言しないが、チームワークは確かに落ちて居たと断言する。此のＦＷの総得点中５の中にはノータッチインのコーナー・キックが一つあった。之は面白い事ではなからうか？

何を語るものであらうか。私は次の様に之を解釈してゐる。即ち「当時ＦＷの各員はノータッチインのコーナキックを得る程の個人プレイを持ち合せて居る反面にノータッチインのコーナキックに頼らねばならぬ程の纏りしか持ってゐなかったのである」と。更にＦＷの無力さは此の如き事実で裏書きされる。即ち昨今ですら児戯に等しいプレイを以て終始してゐる私が其れよりも尚みすぼらしいプレイを以てＦＷのＬＩを守る当時に於ては之又無理からぬ事である。

闘志については又悲しむべき闘志の記述を悲しむべき此の稿に示さねばならぬ事を悲しむ。或人達は確かに闘志を持って居た。然し一般の傾向として、敵に対して闘志を持つ前に味方に対して闘志を向ける様な事があったのである。即ちベストを尽す前に闘志を燃え立たす前に、友軍の非を責め罵る様な傾向を持ったものがあった。私なんか随分とエラーをなし敵に貢献する事多かったのか、味方から闘志を向けられた。其れ故責任逃れのプレイをして、以て味方の叱責を受けない様にしてゐた。球を持つと直ぐに味方の誰彼となくパスしてドリヴルする事は毫も考へず、なる可く球から離れ様とする傾向の中に生きて居た。球を持って居る事はエラーの前提である。それ故一刻も早くボールを離してエラーをするチャンスをなくする様に務め、敵のゴールへの努力をなす心のゆとりさへ持ってゐなかった。

斯くの如くＦＷのＬＩの私が全然攻撃能力を持って居ないのであるから、他の四人がどんなに頑張ったとて得点を許される事の稀なるも又首肯出来る事であらう。

要するに当時のチームは纏まりなく、闘志もなく、ＦＷには寄せのヨの字もない典型的と言ってもよい位の悪いチームだったと思ふ。

私達が四部三部と二年連勝出来たのは之等をよく考へて補なった良き長瀬さんの指導と共に、それによって得たる纏り闘志と言ふものによると言ふ事も出来るだらう。

私達は此の纏りと闘志とを助成する事を心せねばならない。昨今闘志換言すれば元気がなくなりつつあると言ふ事が少しでも感ぜられる事は遺憾の極みである。

我が部が今後の発展を期するためには是非之等の事を考へねばならぬ。更に言ふべきは私達は三部四部に於て闘志と纏りにのみ頼って以て如何やら斯うやら個人プレイを補って居たけれど、そしてそれのみで成功してゐたけれど、之からの試合は一部二部の舞台だ。それ故、私達は纏りや闘志の必然性と共に更に個人プレイの練磨に心せねばならないと思ふ。

今　　昔

荒　井　文　雄（本科２年当時）
（昭和12年卒業）

「今昔の感」と言ふものは歴史家や詩人のみ味ひ又彼等のみに味はせて置けばよいのだと思ってゐた。然し近頃余りにも斯んな感傷に走って居る自分を見出して驚く場合が多い。

寄る年波のせいか（それ程でもないが）涙もろい為か知らないがとにかく昔を思ひ今を思って、時折涙ぐましくなって終ふ。然し之はあながち私のみではなからう。石神井生活の多くを経験し、「涙の歴史」の頁を一枚一枚噛みしめた人達が同様に味ふ気持だらう。

その昔、石神井で練習して居た頃はグランドはまだ茫々たる武蔵野の一部をなして居た。多くの草

の根がグランドを我物顔にはびこって居たために、アンクルを痛めたり足先を捻ったりするのも再三再四ではなかった。それだけならまだよい。勃興時代の荒い鼻息のラグビー部にグランドを思ふが儘に荒され一方からは野球のノックに脅かされ、蹴球のみに意を注いでプレイ出来ない状態だった。即ち如何なる練習中と雖も、横暴なラグビー部はグランドのペナルティエリアはおろかゴールエリア迄侵して得々としてゐたのだ。此の時程弱者の悲哀を味った事はない。向ふは多くの人達を擁してビッグセヴンに浮び上った頃であり、こちらは悲運相次いで四部に落ちた頃で、部員も十人そこそこの練習だった。何をされても強い者を正当化する世の流れには抗し得なかったのだ。

そして今グランドは神野兄の東奔西走の努力と先輩の支持とによって東洋一と言ってよい位のものが出来たし、又先輩の後を継いで決然立った長瀬兄、続く二階堂、後藤兄の只ならぬ奮闘によって部は蹴球界の水面に浮び出た。

然しここで徒らに自己満足をしてはいけないのだ。私達の前にはまだ色々と懸案が残されて居る。多くの、ハンデイキャップを如何にして埋め、如何にして一部諸校を斃して行くか。「成り上りもの」は稍々もすれば身の程を忘れ勝ちになる。我々はよく内に反省して如何にして上って来たかを考へ、又外に求めて如何にして多くの懸案を切り抜けるか、を考へねばなるまい。「グランドは立派になっても部は強くならない」と言ふ様な事は断じて言って貰ひ度くない。否、断じて言はせない様にするのだ。

如何にしてここ迄上って来たか答は余り多くない。それは去ったトリオ長瀬、二階堂、後藤の諸兄を中心として打って一丸となった纏りであり、又寧日なき練習の賜であらう。

昔は人数も少なかっただけに纏まる事も容易だった。グランドにも幾度かその片影を残した事があった。スクラムトライなんかそれである。スクラムトライとは、敵ゴール前の混戦中に味方のハーフはおろかフルバック迄も突込んで、協力一致ゴールを陥れるのである。武蔵高校の試合に発明しリーグ戦の対日歯戦にも成功した戦法だった。

然しグランドに躍る人影は十人そこそこの昔を脱し、今や四十有余の人を持つ大世帯になった。同じ釜の飯でも或人はうまいとし或人はまづいとするだらう。吾々は小我に走らず、一旦部に席を置く以上大きな「我」をみつめて進まなければならない。

× × ×

昔はよく走った。今の様に体操から始まる合理的練習がない丈に、稍もすれば無茶と思はれる位激しい練習をした。太陽が何ものも残さじと照りつける夏のグランド迄泡を吹いて坦々たる千五百米の道を走った。それも歩調を同一にして走るのでなく、猛烈な競合をスタートからラスト迄続けるのだ。時々頭が涼しくなったと思ふと脳貧血を起して斃れた。体が強いと自他共に許す私でさへ斯様であった。肋膜上りの長瀬兄や村井などがどんなに辛かったか察するに余りある。

又夏の合宿でランニングパス十回やった時の事を覚えてゐる。皆よく頑張った。ランニングパスが終ると皆ヨロヨロと草の上に斃れる様に伸び誰一人口を聞くものがない。口を聞く所か皆死んだ様になって終ふのだ。苦しみが大きかっただけに優勝した時の気持は又別だった。成蹊を5対0で屠ったときみんな嬉し涙に咽んだものだった。

そして今練習は合理化されて本格的なものとなった。練習と言ふ形式が立派になっただけではいけない。練習方法の向上と共にチームの力も向上せねばならない。

× × ×

昔は人数が少なくすべての人が試合に出場しなければならないので、グランド・マネーヂャーはゐなかった。

それ故幹部の人達は自らもプレイに身を投げ込み、一方みんなの練習をコーチしリードしなければならなかった。

今は神野兄がよく練習をリードしてくれるしグランドは宏壮であるし何ものも恐れるものはない。野球のノックの球が飛んで来て頭に当って角田の如く伸びる憂もないし、ラグビーの近視眼の人の人違ひのタックルに斃れる心配もない。私達は全精神全肉体を練習と言ふ　燃える熔鉱炉」に投げ込むだけで他を顧みる心配はないのだ。所謂「馬鹿」になって自分の体を道具だと思って練習中マネージャーに任せればいいのだ。

× × ×

未明に麓を出発した私達は三つの峠を越えて来た。四部の峠、三部の峠、二部の峠。然し之から上る嶺は今迄の峠とは異って最も嶮岨であり最も危険な行程である。

見よ一部の峯には今にも雨をもたらさんとする戦雲が荒れ果てて居る。早稲田の谷も慶応の崖も私達が一歩足をそらせたら立ち所に私達を呑み込んで終ふのだ。ここから見える早稲田の谷は雲に包まれ霧に遮られて居るため余り深くは無い様に見える。然し晴れた日、本当の早稲田の谷を覗くならば余りにも深い谷を発見して驚くであらう。慶応の崖は稍々もすれば私達の頭上に崩れ落ちて来さうだ。昔、峠を越す頃には心配のなかった色々な心配が今目の前に現はれて来た。最高峯を見つめて一歩一歩進まう。早稲田の谷にもすべらず慶応の崖くずれにもあふまい。

峯は近い。道は益々嶮岨だ。みんな先の人を見失はないで一処に峯に登らう。その中には山霧も晴れて明るい太陽が微笑むであらう。

春　の　合　宿

鈴　木　　彰
（昭和13年卒業）

国立での合宿もだんだん古い歴史を持つ様になった。今では僕達部員にとって、休暇の訪れる毎に一度は国立の朝晩の空気を吸はねば、なんとなく物足らぬ様にまでなって来た。

夏休みの終りと十月中旬後の試験休み、それに今年からは四月の春休みも早春の冷い外気に浸りながら練習にいそしむ事になった。

初めて行ふ春の合宿、国立駅を出てすぐ右の富士見通りの彼方、霊峰富士の未だ白衣のままの姿を仰ぎながら元気一杯の若人達は、一ケ月余の休暇を過してガヤガヤと二週間近くの合宿生活を初めるのだ。

「さあ起きろ！　体操だ体操だ」と云ふ張り切ったキャプテンの蛮声に、疲れた眠りから呼び起されるのはとてもつらい。顔も洗はず下駄をつっかけ、宿の前の喫茶店のラジオに合せて体操だ。時刻は七時廿分だ。皆ねむさうな目をして欠伸をしながら手を上げたり、飛んだり跳ねたりする。軽いリズムに合せて運動するのは誠に気持よいものだ。天気はよいが春の東風はひやりとする。朝の静けさを破るものは時々、森に反響して轟き過ぐる省線の騒音のみだ。しっとりと朝露にぬれた

大学都市の補装道路、緑こまやかに樹木の梢に光る水のしづく、白鳩が前の赤い屋根にとまって僕達の体操を不思議さうに見下してゐる。総てが未だ活動を始める前の静けさの中に、僕達のみが躍動し生気に溢れてゐる。

体操が終ればやがて朝飯だ。うまいまづいといふ問題はここでは通用しない。ただ味噌汁と飯を口を通して腹に押込むだけだ。御菜がなければ御茶だけで飯が食へる様でなければ合宿の飯が食へるとは云へぬ。

十時からいよいよ朝の練習である。ユニフォームに着替へて宿を出る時は、グラウンドまでのあの長い固い道、ボコボコして塵の凄く立つグラウンドの事を思って元気な僕達も、些か淋しくなる。二千米余の道路を揃ってワッシワッシと走って行く気持は実になんとも云へぬ。

グラウンドに着けば春は既に訪れてゐる。周囲の土堤に生ひ茂る若草は、青年の若さを惜みなく漂はせてゐる。空は些かの微粒も止めないと云ふ様に凄く晴れて山も滅切り近く成って来た。立川の飛行機が爆音をたてて練習してゐる。恰もエーアシップの箱の絵の如き感がある。

やがて鋭いホイッスルの音と共に血のにじみ出る様な練習が始まる。初めの二、三日はとてもつらい。フットボーラーがボール無しでトレイニングだ。機関車の如く唯グラウンドを走るのだ。何事も考へるひまがない。ホイッスルに従ひ、力一杯走り廻って身体をねるのだ。暫くすると頭がボーッとして涼しくなってくる。目先には水玉の様なものがちらちらと現れる。こうなると自分の身体が人様の様なものだ。腰がふらつく。目が廻る。中には淋しく土堤に上って風にあたりながら、遥かの秩父連山を仰ぎホトボリを冷して居るのもある。

二時間の練習が終れば汗とほこりにまみれた黒人の一隊が宿屋のあのミルク色の甘い葛湯を思ひ浮べて疲れ切った身体に馬力をかける。練習を休んだものまでテクテク走り出す（終ひになると葛湯のおかわりが出来ないんだよ）。

午後も亦苦闘の連続である。更に暑さが加はり、益々練習には拍車がかけられる。唯、精神力で無我夢中、課せられたトレイニングに肉体を打ちこむのだ。

やがて夕暮が訪れる。綿の如く疲れた身体には夜の来るのがたまらなく嬉しい。外気も冷えて来る。冷たい空気は疲れた身体に気持に何よりの御馳走である。昼間の激労に皆投げ出された様に床にもぐりこむ。八時が過ぎれば早くも健康さうな寝息が予科生の間から洩れてくる。

窓を開ける。月の光は木立を通して流れる様にさし込んでくる。予科生のひくのかアコーディオンの音が疲れ切った心に浸みる様に響いてくる。シィーンとした国立の夜。外にはところどころに灯が明るくついて木立にうつってゐる。木の陰影が濃く窓に迫ってくる。ふと騒音に耳をむける。麻雀だ。長瀬大先輩の残した商大合宿の花麻雀だ。昼間の疲れも何処へやら、もろ肌をぬいでポンポン牌をたたきつける御目出たいのもゐる。長瀬先輩の居た頃は、就寝時間は自由だったが、今では十時限、厳守である。それだけに夜の自由時間がたまらなくたのしい。

鋭い、尖った刺の様な汽笛の音が林の陰から聞えてきた。重り合った雑木林の間から地を動す様な轟音と共に長い列車が通り過ぎる。しかしその後はすぐ沈んだ様な静けさにつつまれてしまふ。

かくて春の合宿の一日が暮れて行く。又明日の練習へと身体を一日一日とたたき上げ、秋のリーグ戦への基礎工事にいそしむのだ。

（昭和十年六月十日記）

故長瀬大兄の言葉に偲ぶ

田　島　輝　重
（昭和12年卒業）

一　理論と政策

生前長瀬兄は常に「俺は経済原論は読まない。政策を読む」と言はれた。空理空論を喜び弄ぶ当時の学生の一人として私も又「何故に」と反問したものである。兄曰く「経験なき理論は死物だ。又一つには俺は人間が好きだ。だから人を扱ふ政策に興味がある。冷い理論はつめこむ必要がない」と。

最近しみじみと想ふ所あり、体験なき理論の力弱き事を感ずると共に人を扱ふ暖かさの必要を教へられ、今更に兄を偲ぶや切なるものがある。

政治といひ政策といふ必ずしも目的主義の無定見無節操を意味するものではない。否寧ろ高き思想と清き理念の下にこそ政策は指導性を持ち政治は生命を持つのであって、皇道政治の理念は一つあって二あるものではない。我が長瀬兄は当時にあって既に西欧学理の大なる欠陥を日本人の叡智と血と心よりして夙に直感されて居ったと考へられる。

吾々が欧米思想に少く共無批判的であったにも不拘、兄は早くも自己の有する理念を以て之等を批判咀嚼されて居ったのだ。

然しここに重大なのは、大兄をここまで育みしものは実に我が蹴球部苦難苦闘の歴史に敢然光栄ある指導者たる重任を負はれた忍苦不屈の尊き経験と円満なる御家庭に育った愛の人生観の賜である。運動競技殊に蹴球に於ては一にも二にも訓練である。経済の最少犠牲最大効果を考へ得るものではない。即ち行の精神に徹底して初めて或物を感得するのである。しかも得られたものは自己の否定であり自己を団体の中に没入してしまふ凡そ最少犠牲と正反対の概念である。其れは客観的冷視的批判でなく自己を先づ渦中に投ずる事であった。兄より蹴球を通じて体得された日本精神を折にふれ事につけて範示され指導せられた吾々は今想ふも幸この上なき後輩であった。

想へば兄は政策の勉学には実に熱心且真剣であった。当時商大に数多く畏兄、畏友ありとはいへ自らの体験を実例に講義に味ひ聞かれ学びて直ちに之を部指導の上に生かされたる兄の如きは蓋し他に之を求むべくもない。大長瀬は一社会の縮図を蹴球部に見出し、しかも之を高く清き理念を以て純化し、汚れを知らぬ若人の熱と力、誠と愛の練成所たらしめんとした。共甘同苦の幾年か、遂に衆心帰一し一人格は上下に貫通するといふ指導精神を確立し蹴球部そのものが一つの人格であり、大長瀬の精神となった。兄卒業の後、吾々の主将浅枝が主将たるの心構へを質せる所、主将の人格に感化帰一せしめよと答へられた。この一言、言ふは易く行ふは難し、されど大兄は之を行ひ之を言った。この指導理念は今も生きてゐる。それは昔も今も変りなき調べをたて、一橋蹴球人の血脈を流れてゐるのだ。

不二いたゞく松風寂びて汗涼し

二　男の涙

今は亡き長瀬大兄が未だ在学当時の事だった。父を失ひ母を失ひ打ちつづく不幸に身心共に疲れ

た私は退部を決し、大兄や二階堂兄はては松本大先輩迄御心労を煩はした事があった。冷い社会の風に面した私は最早呑気な学生ではなかった。悩む心に練習は苦しく辛かった。当時の或夜大兄の部屋に対座して大兄の日記を見せられた。「……俺は今日田島の泣くのを見た。男が泣く。涙が流れる。涙は善人の心からのみ流れるものだ。俺は信じてよかった。田島は泣いてるではないか。今日しみじみと男の涙の美しさを知る……」右の様な文句が認められてある。読む私の眼はかすんでしまった。かくも信じて下さったのか、大愛は大信を生ず。私たるもの又この大愛に何をもって報ひ得よう。今や大兄既に亡く早くも五星霜を送る。私は唯大兄の遺志をつぎ大愛の政策を大信の信念を己が職場に守りつづけるであらう。我が蹴球部に入り来り、育まれる者よ、蹴球部生活に大長瀬の声を聞け、姿を見よ、それは常に、主将の心に声にのり移ってゐる。その大愛に大信に、男子たるもの感奮以て大一橋蹴球部の伝統を守り輝かさずには止むべきではない。蹴球に生き蹴球に死したる大兄の限りなき大愛に温む眼ざしをボールに見出し、小平の碧空にその激励叱咤の声を聞く一橋蹴球部員は誠に幸福である。大兄以て冥せよ、私共はそれぞれに兄の道を守り継ぎ、死せる兄をば生かすであらう。

一しづく露匂ひあり菊の花

三　ボールを恋せよ

「蹴球部員は皆ボールと恋愛せよ。熱愛せよ。そして女性と恋を語るな……」

一橋蹴球部が沈滞の空気より立直ったのは大長瀬のこの精神だった。先日昔なつかしいままに国立の箱根土地のグランドを訪れたが、今は荒れはてた草原に、崩れかかったポストが一つ寂しさうに立ってゐた。かつて長瀬兄との猛練習の地だ。死んだ荒井が往復マラソンの王座を占めザバラといはれた頃の事だ。病後の長瀬兄と私がラストを承った頃だ。だがフォーメーションともなれば一心に走り込む兄の熱は、キーパーたる私の心臓を寒からしめるものがあった。病後の兄のどこにこの力があるのだらうか。書く程に綴る程に兄の言葉はつきざる想ひ出と共に次々と浮び上って来る。そして筆は乱れて何もかけなくなってしまふ。

私は唯大兄が懐しい……

私は大兄を知る人、知らざる人に大兄を語り想ひ出の言葉を送り、相共に追悼の長き黙祷を捧げたい。

良夜一人酒を汲みたり凱昭忌

渡辺弘兄を悼む

田　島　輝　重
（昭和12年卒業）

一部昇進の春を意義あらしむべく、三月下旬より私は埼玉県松山に至り、荒井、熊沢の二君と部誌原稿募集の準備をしたり、松山中学校でボールを蹴ったりして居ました。

「此の葉書着き次第至急帰れ」との急報を松中グランドで受け取った時は未だ何事が起ったのか見当もつかず、至極ノンビリ考へて居ました。

帰宅して知る渡辺弘兄の訃。一日違ひにて告別式にも参列出来ず、一日延ばしに帰宅をしぶった事を今更に後悔しました。

渡辺弘兄が蹴球部へ捧げた熱情と労力は、聞いた丈でも大したものです。

対国大に対拓大に商大が此の一戦こそといふ時には必らず見て下さった。しかし私との関係は部誌が取持つ縁であったと考へられます。

長瀬兄送別を記念して部誌創刊を決するや、未経験の私は幾度か渡辺弘兄を訪れたものです。

長らく病床にあってやせ衰へた兄の姿は完く健康な私と対比していたいたしい程でした。

然もその驚嘆すべき熱情は奔り出ては止まる所も知らず、部の過去将来等につき深夜迄、語り合った事も幾度か、今尚目新しき記憶を残して居ます。

蹴球部の過去を最も正確に語り得る者として渡辺兄の存在は貴重なものでした。将来、部史を編む場合の一助にもと一通りの筋を通すべく御願ひした部史の記述も今となっては得難い記録となりました。

部創立二十年なり三十年なりを記念して、一橋蹴球部々史を一冊の書とすべく意気込鋭く部誌編輯に当った私も、弘氏逝くと聞くや失望の余りしばしば部誌第二号発刊の勇気さへ失ってしまひました。

敬愛する兄の逝去は部の為にも惜しまれます。昨夏否その以前より三科聯合の為に、色々と御活動下され、商大チーム躍進の為に、あらゆる努力を惜しまぬ先輩として、又前途多難の蹴球道を駆歩で進んで来た我部の相談相手として、益々重要な役割を演ずる人であったのに。

渡辺弘兄亡き後は誰が正確な歴史を記述できませう。が、不幸中の幸か、正確な日誌は枕頭に過ぎし日を語ってゐます。

私に残された唯一つの仕事は、部誌編輯であり、部史の刊行であります。独力では不可能の事ではあり、代々の部誌編者に伝へて、当初の意図を遂げ、弘兄の遺志たる部史の完成を見たいものと存じます。私の故弘兄に捧げるものは、一巻の部史に過ぎたるものとてはないでせう。

更に部史内容を飾るべく全員の努力の結実を霊前へ捧げて頂きたいのです。

来らん秋こそ！　実りの秋であってほしいのです。

苦（九）の日記

枝　村　藤三郎
（昭和12年商業教員養成所卒）

意義深い合宿練習も今日で終りだ。意義深いって？　俺が生れて始めての大学といふ恐ろしいやうな名の附いてゐる学校の合宿なんだもの。

夏休み中相当錬へておいた積りだったが、相当へばった。五日目に降った雨などは実に俺達にとっても慈雨と言ふべきだ。然しそれから毎日はっきりしない天気には腐った。頭の上からは押し付けられるし、ボールは湿って重くなるし、スラムプには落ちるし実際淋しかった。何度か自分の心に鞭打ちながら立直っては練習して来たつもりだ。あんな時に二つの方法で激励し又慰安する事が出来るだらう。「この馬鹿野郎、そんなことでどうする」といふのと「疲れたらうが頑張ってくれ、

も少しだ」といった様にしんみりと行く手と。然しまだあると言ふ人があるかも知れないがそれは例外だ。

練習もさる事ながら宿での生活も又至極愉快だった。終りの体操をする頃誰が口をきくだらうか。黙々と最後の努力を続けてゐる悲惨に近い姿をした人達が、二千米近いランニングの後で食ひ付く葛湯の一杯！　その味たるや又格別、先輩が持参してくれる菓子の味を凌ぐこと数等、常にはいやいやと思ってゐた人でも一度合宿に来て鍛へられてからは、我先に飲む様になったのだから不思議だ。お代りを飲み度い等と思ふものなら、舌を焼いたり目を白黒させたりして飲み下さなければならない。でも強引な人達はよくお代りをしてゐた様だ。僕等もその一人だったかも知れない。来年は合宿前に熱いものでも早く飲む秘訣を伝授してもらひ度い。

一杯の葛湯に稍々元気を恢復さして次に風呂だ。但しボール当番はまだまだ先が長い。此の当番こそ実に尊い役目だ。世の人達に忘れられ勝な縁の下の力持だけれど誰だって蹴球をする者なら一目見て「ああ御苦労」と言ひ度くなるだらう。朝の空気詰めは安眠を貪った後だけに少しは元気を恢復してゐるから案外平気だが問題は夜だ。たった一杯ではあるが実に驚嘆に値する力を持った葛湯――クタクタに伸びた人達でも湯気を立てて待ってゐるであらう葛湯をしびれた頭の中に描き出す時、二千米近い距離のランニングは平気であるのは勿論、往々にしてマネーヂャーから「早いぞ」と注意される程に張切るんだからこう言っても敢て暴言ではないだらう――を平げた後は泥だらけのボールの手入だ。先づ顔を洗ってやる。と言っても張子の虎同様になるべく濡れないやうに泥を落し滑らかな肌？を露出させてから油のクリームを塗り込んでやり、満腹のまま寝たのでは腸の自家中毒でも起されてニキビでも出られては大変だから、口を開けて吐かしてやり始めて休ませるのだ。これは練習が終るのが六時半頃だからかれこれ七時近く始める。どんなに日が永くても七時には大概暗くなる。するとやがて嫌な蚊が出て来る。所が此の蚊の奴猛烈に大きくまるで爆撃機の様だ。食ひ付かれたが最後ムッチリと腫れ上ってくる。選手の中には顔を気にするやうな男は一人としてゐないからいいが、馬鹿にならなければ出来ない仕事だ。然し此の馬鹿でなくて何が出来やう、小悧口な目先の事ばかり考へてゐる奴に何が出来るか。

かくして当番が終れば愈々風呂だ。此の時分当番でないものはいい気持でお風呂に浸り元気良くと言ひ度いが何処か足りないもののある様な声を張り挙げて唄ひながら垢を落し充分に詰め込んだ頃だ。詰め込むといへば先づ第一は御大二階堂氏だらう。謹坊なんて云ふと優しい坊やのやうに響くが一目見た人がその敬称を聞いたらどうしてもシックリしないのに気付くだらう。殺しても死なないといった具合の身体の持主、近頃の女ならでもその体格には充分魅力を感ずること請合、にも抱らずそんな浮名を流すといふやうな事は更にないのだから益々謹坊だ。彼が紀平哲学の権威であるときいたら成程とがてんが行く筈だ。でその最高記録は飯七杯豚汁四杯。牛飲馬食といふからフルバックのS氏フォワードのM氏など「馬」といふ異名を頂戴してゐる連中の方が沢山食べさうだが、さうでもないのは意外だ。――この稿を書いてゐる時思ひ出したのだが、謹坊以上の鎌足がゐた。その人の名誉の為に名を秘すことにするが、同時に謹坊に深く謝罪する。……筆者と彼との会話……

筆者「近頃飯はどうだい相変らずか」

彼　「いや減らしてゐる」

筆者「どの位に」

彼「朝三杯、昼は食堂の一人前で我慢してゐる」

筆者「ぢゃ夜は」

彼「夜か、夜は六、七杯だね」

もって彼の如何に大食家であることが了解されるでせう——話は横道へ入って長くなったが、こんな連中の使った風呂は実に何とも言へない美麗さだ。之も無理はない話だがまあせめてもの取得はゆっくり入れる事位だらう。それでも明日の練習を思ふと風呂にでも入って疲労を休めない事には続きさうにもないし、頭の先から足の先まで全身の赤土なのだから仕方なく入り、冷えかけた汁や飯で腹を作る。夏だからいいやうなものの冬だったら目も当てられないに相違ない。こんな風にしてやっと一人前の顔で遊べる。然しもう麻雀などは遅い。早いのになると前晩位に既に相手が定って一刻千秋の思ひで待ちあぐんでゐるんだ。ボール当番はオミットされる第一候補だから淋しいこと此の上もない。それでも覚えたばかりの俺などは陰の方で眺めて居て満足出来たからいいやうなものの、相当の腕を持った人は嘸かし口惜しい事だらう。この麻雀がすむと大概九時か九時半頃、浮いた者沈んだ者夫々連れ立ってパマルへブルーベルへと繰り出す。そこでは汁粉を或は麻雀のお蔭でものにしたミルクセーキを飲み乍ら就寝前の尊い一時を過す事になるんだが、こんな時練習の話が出て来るのは、商大イレヱヴンが如何に此のシーズンを重大視してゐるかを示すものと言へるだらう。

良く晴れた夜は星を仰ぎながら明日の練習の辛さを又反面には晴天の下に蹴る痛快味を想像する。一緒に寝るM氏の多弁にも閉口したが隣室のK、A、Sの三氏がゴソゴソ話にもほとほと参ってしまった。かくして何時の間にか辿る夢路、翌朝隣近所へタックルを試みた事等はよく苦情として申込まれるが、そんな事は夢の中の事故こっちの知った事ではない。

夜が明ける、ゴッさんが起しに来る、一分でも二分でも長く寝て居たい。然し規律は規律だ。眼をこすり乍ら起き出して体操、この体操たるやラヂオ体操だけで充分な所へもって来て、文部省体育課云々本間氏の体操だ。眠さなんか何処かへ飛んで行ってしまふ。でも後になるとゴッさん自身が寝坊する様になったので大いに羽を伸して眠れた。これは彼ゴッさんの気分のしからしむるものでなく天気の為であった事は勿論だ。

やがて朝食も終り午前の練習だが凡そ午前の練習程身体の調子の悪いものはない。これはまだ身体が夢路を辿りつつある為なのだと思ふ。

然し調子が悪くても身体が眠ってゐてもボヤボヤとしては居られない。一方には謹坊の謹厳そのものの如きそして又俺達の良心をしてああそうだ頑張らうと叫ばしめるやうな激励叱咤の声があり、他方柄不相応に眼ばかり大きく光らして少しでも気にくはないと特徴のある声を張り上げていやと云ふ程どなりつける男がゐる。どうして安閑として居られやう、いやでも勇気百倍人の脛でも蹴折らんばかりにならざるを得ない。こんなに張り切ってゐても、最後には折角腹の中へ蔵ひ込んだ代物を全部お返しする様な事になることから考へて見ても、而もそんな連中が相当ある事を思ふ時、練習の猛烈さは想像に余りあると思ふ。もっともこんな人は最初の一二日で影をかくしてしまふのだから安心していい。さすが夏の真昼間には散歩に出る人もないらしく従って俺達の話題に上る様な人もゐない。唯待ってゐるものは乱雑に取散らされてはゐるが、俺達の一番所望してやまない畳のしかれてゐる室だ。口を開いてゐるからと言って、大の字になって寝てゐるからといって決して笑ってくれるな、彼等は唯秋のシーズンに備へんが為に我もなく人もなく安眠を貪ってゐるだけな

のだ。

この安らかな夢路も起き抜けの小男（俺達にはさう見えるのだ）の様な、その心根には優しい優しい或物を持ってゐるが、一寸したことに対しては小さい室へ蔵ひ込んでしまって、敢て顧みやうともしない人に無惨にも破られる。この時の辛さ、泣き出し度い、いやそれ以上だ。が暫くして頭の中に栄ある優勝を描き出す時辛い等といふ気持は何処かへ飛んで行ってしまって、残るは只若人の明朗なる意気、午後の練習！　蹴る！　蹴る！　蹴る！　実に痛快だ。秩父連山に陽が落ちかける頃、路傍にすだく虫の音を慈愛に満ちた母の奏づる楽の音とききつつ走る。中にはこんな風流めいた事に考へを走らせてゐる余裕等何処かへ忘れて来た人があるかも知れない。いやない、走って帰るのさへ精一杯なのだ。彼等の光即ち唯一杯の葛湯を目標にして走ってゐるのかも知れない。これは失敬、秋の優勝一部への昇格、これが彼等を走らしめてゐるのだ。

過ぎ去った旬日を振り返って見る時実に学生でなくては、いや運動をする者でなくては、更にチームゲームをする者でなくては味ひ得ない一種異様な気分に包まれて総ての苦痛も楽しい思ひ出となって来る。

然しまだ花でいふなら蕾だ。花を開き実を結ぶのはこれからだ。やがて秋だ、この克己、この忍耐、この努力、その総和は協同だ、そして生れ出づるものが優勝だ。先輩の血と涙と汗で飾られたこの歴史をどうして汚すことが出来やう。勝たう！　勝つんだ！　いやきっと勝つ！　そしてあの大きなカップで共に祝盃を挙げやう、これを除いて先輩諸氏並びに卒業される二階堂、後藤両兄に対する餞があらうか。

これは昭和九年九月九日丁度合宿の終った日に書いた日記なんです。だから随分妙な所があります。そうでなくても筆を取っても人後に落ちざるを得ない僕のことだから。

然し今は既に過去の勝利の美酒に酔ってゐる時ではない、今年こそ僕達の実力を示す時だ。早稲田、慶応がなんだ。彼等も亦人間であるに過ぎない、去年以上に頑張って頑張って、最後まで頑張り抜かう。そして未だともすれば迷ひ易い途上にあるこの一橋蹴球部を益々隆盛に導かうではないか。是が俺達に残された唯一の課題だと思ふ。（最後に後藤、二階堂両兄に無礼を謝し益々発展せられんことをお祈り致します。）

蹴球部に入ってから

松浦　巖
（昭和22年卒業）

振り返ってみると、自分が学校に入ってから送って来た予科の日々は、自分の成長の跡として非常に感慨が深い。今の自分は自分なりに落着いたようだ。しかし、それまで人から見れば馬鹿に見えるようなことに苦しんできた者もいることをさらけ出した。皆、それぞれ種々な苦しいことに出会う時があるだろうけれども、それを押切ってやって行くものは何か。それは蹴球と蹴球部に対する愛であり、それがどこから出て来るかは、その人があくまで部に練習に食いついて自分を投げ込んでやるのほかはない。蹴球部の生活は実践の生活である。肉体をもって実感を得るよりほかはない。真剣にやった者にして初めて得られることである。

自分にとって苦しかった予科時代を省みると、一年に入った時は中学以来ずっと猛烈な練習をやり、練習の激しいのは当然のことと、なんの疑問もなく、ただ、身体が大学の動きに及ばないため毎日くたくたにへばって寮で寝て、騒いで安易になんの悩みもなく過した。また、部自体も華やかな時で、充実した技とメンバーを揃え部員も五十人近く、リーグ戦の戦績も見事なものであった。

二年になって部屋長として寮に残ったが、一年時代の不勉強が悔やまれるとともに、このころからなにか自分はもっと本当に勉強しなくてはならない、一体自分がやっているのは、本当に身を入れているのはなんだ、蹴球だけでこの学校時代を過して良いのか、という反省が起きた。馬鹿になって蹴球をやること、それは確かに非常に奥深いものがある。が、一方学生としてもっと学問的なもの、それによってなんらか自分の行動を価値づけ、実際社会を解明し、働きかけ得るものを求めねばならないと漠然ながらひしひしと身内に迫る意欲を感じた。それが生半可に練習に追われたといった形が二年のころの姿であった。

二年の終に自分は予科の主将の責任を新しく負った。なんとかして自分の生活に安心の行く落着いた道を見出したいという気持ちと、主将としての重大な責任と、リーグ戦の猛練習とであえぎあえぎの気持ちであった。いっそのこと部をやめて、自分のやりたい勉強にじっくり浸りきるべきかと考えたこともあった。しかし、それには自分の気持ちに絶対許さぬものがあった。そんなことで夜眠られない時もたびたびあった。では何がそうさせないのか。それは苦しい練習でありつらいことも多いけれども、そこにともに練習をし、本当に部生活に飛び込んできた者のみ知ることの出来る感情が、絶対に部から自分を引き離そうとする気持ちを否定した。俺という人間の内に蹴球部が食い込んでいる。生活の中に完全にとけている。それを捨てることは、自分が半分に裂かれるのも同然だという気持ちである。ここに至って、一種の破れかぶれの気持ちで、俺の内でそれをどこまで統一できるかやれるだけやってみろという気持ちの現れが三年の生活だった。

ある人は部を去った。人はその人なりにそれぞれ苦しみを持っているが、あっさり簡単にやめていけるのが自分にはうらやましい気持ちもした。このころから、たとえ皆やめてしまっても、ひとりででも球を蹴るといった気持ちが実感を持ってきた。こんな気持ちでいたため、皆を引張っていくことも出来ず、また病気になったり、足をくじいたりして本三の方々はじめ部全体に、まったく詫びのしようのない済まないことをしてしまった。二部に落ちたのはすべて自分の責任であると、本三の方々の顔を見るたびに心の底で刺されるような気持ちがする。

われわれが学問をするということは、本を沢山読み知識を積み重ねることでないことはいうまでもなく自明のことであろう。そうして本当に学問するということは、われわれが毎日激しく心身打ち込んで練習をやらねばならないと同様厳しいことである。なにか勉強をやっているという安心に陥っていることは、情ないことであると同時に、なにか練習をやっているという漫然たる気持ちは恐ろしい。

われわれは。蹴球部という真に自分の一身を投げ込んでやる行動の場を持っている。本当に自己を捧げ切って行動する場を持たない人間はロボットのような存在だ。この激しい時勢の中にあって、かつまた日本の将来を決すべき時にあたって本当に働くものは、真に行動する場を通じて体験され、生み出されてきたものでなければならない。われわれの練習も勉強も部生活も、これでなくてはならないと思う。今の自分の気持ちである。

昭和十七年十一月十三日

酉松会縁起

川　村　　通
（大正15年卒業）

拝啓　御手紙ありがたう御蔭で此の夏は去年よりらくに過せさうだ、余程具合がいいから安心してくれ給へ。大兄のところは如何、又めっきり寒さが戻った塩梅だが皆さん御元気だらうか。君、例によっていそがしからう。それにかういふ世の中になっては何がどうなる事やら、兎にかく大いに頑張ってくれ給へ。落合がお邪魔したってね、おかげで少しづつ目鼻がついて行くだらう、どうか今後も導いてやってくれたまへ。

さて酉松会々名の解説をせよとのこと、恐縮した。あれは今考へると妙に凝って考へ落ちといふやうなもので、洵に汗顔の至だ。誰が見ても何の意味やらわからぬのが尤もさ。見る人々の勝手にどうなりと理窟をつけてくれていいのだけれど、それでは余り無責任な話だからあんな字を選んだ心もちだけ一寸誌さう。酉松なんといふ熟語は勿論ない。つまり新発明だ。一字づつの意味ならば酉といふのは成熟する、稔る、又は、老ゆといふことで、それに方角を示す字としては「西」といふ意味をもつ松はいふ迄もなく松の木のこと。そこで酉松と続けて、城西の国立（丁度、宮城の殆ど真西に当る）なる母黌の庭の老松といふことから学窓をはなれて世に出てもいつまでも渝らぬ同志の心に譬へてみた。松は古来めでたい木の随一とされてゐるが、それを一々挙げてはきりがないからやめる。只一橋の旧校の門内に亭々たる老松が数多あって赤煉瓦の建物と相俟ってナカナカ印象的な趣をなしてゐたことは誰しも同感だらう。国立は、まだ見ないが松の多いことをかねてきいてゐる。勿体ないことだが明治天皇の御製（明治三十九年）に「故郷木」の御題で、

すみし世にかはらぬものは昔より老いたりと見し松ばかりにて

とあるのを拝し、これに因みまつりて同学同志のオールドボーイたる我々らの会名に酉松の二字をつけたく思った。それからもう一つ。初め会名を選ぶ手がかりにもと思って、ふと、昔の蹴鞠のことを調べてみたところ、鞠を遊ぶには、競技場（鞠壺又は鞠の懸といふ）の四隅に切立といって、松などを植ゑる、今の蹴球ならばコーナーフラッグを立てる所である。よく着物や器物の模様に糸柳に更蹴鞠を配したところがかいてあるものだ。それは、普通艮に桜、巽に柳、坤に楓、乾に松を植ゑるのが習ひだったから、その中で絵として面白い柳とまりの取合せが人気に叶った為、しかくポピュラールになったんだらうかと思ふが、よくは分らぬ。又、略式には竹ばかり立てたさうだが最も正式の場合つまり宮中にてやんごとなき御方の遊ばさるる時などには松ばかりの定めだったといふ。それが松と蹴鞠とは切りはなせぬつながりをもつと云へやう。此の辺大分もって廻った故事つけめいて苦しい様だが「切立」に松を植ゑたことはいい加減なことではない。いつ頃からこんな事が行はれるやうになったのか如何にも日本人らしい風雅な趣向と思はれる。尚、「今昔物語」などには蹴鞠の名人、鞠の神の伝説など面白い話があるが、直接関係ないから略す。まづざっと以上のやうな次第であんな字を拾ひ出したのだけれど、如水会報に書くのならば、之は「前記の御製と蹴鞠の故事にちなみ兼ねて城西の母黌と盟友を思ふ心もちをあらはした」とでもアッサリしておく方がよからうと思ふ。あんまり勿体つけた説明は却って滑稽でいかぬから、其のへん然るべくと書いてく

れる誰君かに伝へてくれたまへ。いつぞや書いたものを村井君？に上げたが、あれは、その「けまり」のことを手近にあり合せの辞典や、雑書類からぬき書きしたつまらぬものだから、なくなってもかまはないのだよ。兎に角名は実の賓とやらで、会名は少々へんてこでも会そのものに末永く弥弥栄えて、益々立派なものになってくるやうにと祈る。それにつけても会員諸君、わけても出征中の人々の無事を祈ってやまない。

次に、如水会報を見てゐたらふと、松平宣夫（山本）君が今春来病臥といふ記事が目に入った。どうしたのだらう。若しや自分のやうな病ぢゃあるまいかと案ぜられる。誰か様子を知ってゐるだらうね。永く病む者の苦労はなかなか言葉に尽せぬものだが、別して時局柄、若い盛りの身を病牀に横へてゐるのはさぞつらからう。

早くなほってくれるといいがなあ。

前後したがいつぞやは寄せ書ありがたう。皆に序の時よろしく。それから、旧友諸兄の御厚情によって、かねて誂へておいた木の寝台が一昨日やっと出来た。値段は二十八円五十銭也。至極簡便な組立式のものだが大きくてしっかりしてゐるから寝た具合はことに好い。お蔭で涼しくはなるし、手鏡にうつる外の景気は一段と遠くまで見えるし、うれしくてたまらぬ。殊に屋根の棟越しに中原街道（雪ケ谷駅の側を通る往還）がほんの少しうつってみえるのでそこを双眼鏡で、往来の人や車を眺めるといふたのしみがふえた。本当にありがたい。どうか、諸兄にお会ひの節はくれぐれも宜敷お願ひする。

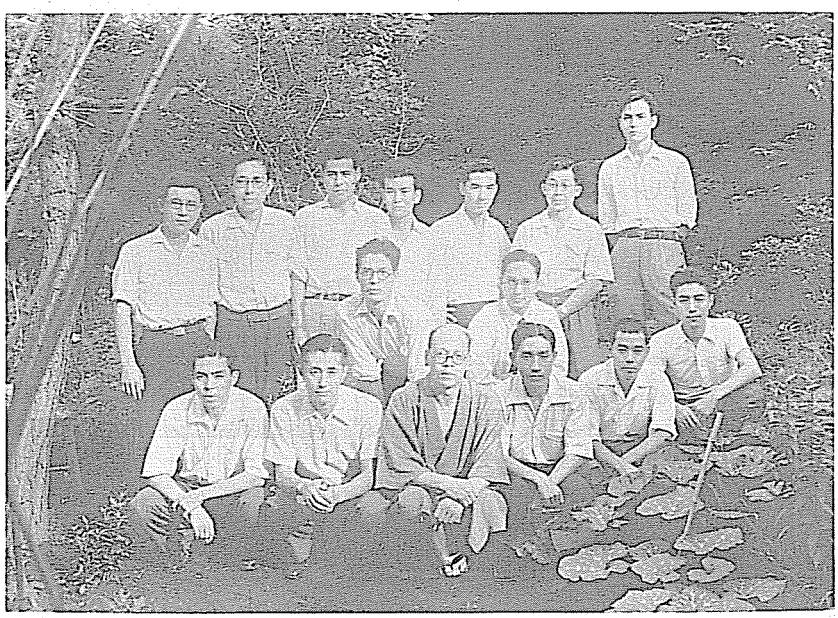
では御機嫌よう。　　頓　首

八　月　廿　五　日

松　本　兄　　研　北　　通　生

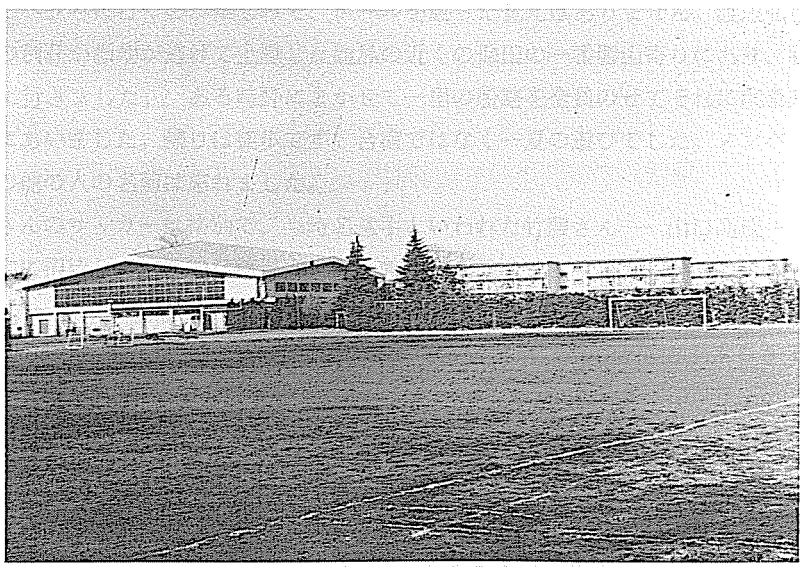
（私信でしたが松本様のお許しを得てそのまま掲せました。　係）

昭和15年夏頃の酉松会



左より
（前列）
角田、二階堂(謹)、松本、豊田、岩崎、二階堂(晴)
（中列）
森田、大掛
（後列）
鈴木（英）、吉田、早野、清水、青木、桜井（山本）、土屋

第3部　回　想



昔の思い出

森　　緑
（昭和５年卒業）

度々のお手紙、お電話ありがとうございます。

当時の選手でお名前の載っていない方々も思い出しましたので書いてみました。神戸力（ツトム）さん――この方は早く亡くなりましたが私達の同年会（毎月一度金躍楼で続けています）に２、３年前妹さんが出席されたそうです。城島さん――おとなしい聖人のような人でした。坂口君、黄さん（朝鮮の人）、半沢君、奥村一郎さん、中山信吾さん、平松君。貴兄も一中卒とのこと、一中の方から申しますと、４年から入った方はまず豊田さん（病気のため昭６卒となっているかも知れません）。神戸力さんと私の３人です。翌年４年から江藤君が来られました。はじめ瀬社家さんがマネージャーで、次が渡辺弘さんです。しかし何といっても渡辺甚吉さんが中心でした。

当時の通学は池袋から貨車客車の連結のガタガタ電車で混みました。練習の帰りには池袋のおしる粉屋に寄るのが楽しみで、時には新宿下車で駅前の焼鳥屋で１本１銭の焼鳥食いの競争をして、私が56本で優勝し、歩いて神宮の裏参道を散歩して帰りました。

その頃は一学年200人でしたから、体のよい人は皆ボート部にとられ坂口さんの心臓は本当に右にありましたがセンターでよく走りました。私も柔道部かけもちで柔道では他校に勝って乾杯しましたが、サッカーでは一度もありません。渡辺弘さんの父上は退役の陸軍少将でした。合宿は房総の保田――今の鋸南市――で一度したことがありますが、浅草の聚楽苑の出店が保田川のほとりにあって、そこへ飲みに行くのが楽しみで、ボールを蹴った覚えはありません。渡辺弘さんの別荘が保田に、私の別荘が頼朝が逃げて上陸した龍島の近くの保田の一番勝山寄りにあり、私はよく船をこいで保田に行きました。ある時酔にまかせて一里の船路を全員のせてそれに聚楽苑の女達も加わり危い目にあいました。帰りは徒歩です。合宿ではなく一夏の遊びでした。メンバーは甚吉さん、江藤君、その他の人の名前は忘れました。

渡辺甚吉さんのサッカーは格別で、当時名選手といわれた竹腰さん―― 山口高校―― のグループを岐阜の自宅に招待して本格的な精進でした。竹腰さんは今でもサッカー協会のボスではないでしょうか。

甚吉氏は当時の名ゴールキーパーで、運動誌のカバーボーイになったこともあります。出身中学は運動の盛んな暁星で、例の100メートル11秒の世界新記録を出した高木征正氏のいた頃です。カトリックの学校ですから上智大に入る人も多く、上智のアストラクラブが当時横浜の外人クラブと戦える唯一のクラブで、そこでも渡辺氏はゴールキーパーをつとめました。平松君も暁星出でした。彼は玉突きの名手で抜群でした。その筈です。私達の中では健康ですぐれた選手になりました。定期入れに３才位の浴衣を着ながして遊んでいる妹の写真を入れて可愛いいだろうと時々見せて自慢していました。卒業後間もなく肺病で亡くなられたようです。健康で愉快な青年でしたが。その妹が養子でもとって今も英国堂が続いているのではないでしょうか。

伊藤健吉さんは私と同じ千駄ケ谷小学校の出で、戦時中は庭の草という草は皆な喰べたといっていましたが早く亡くなりました。父上は深川の材木問屋でした。

一番まじめなサッカー部員は豊田さんで、焼け残って現存している佃島の人ではないでしょうか。池田弥三郎の銀座弁は私には嫌みを感じますが、豊田さんのは江戸弁というか下町弁というか、生粋だと思います。長瀬商店の花王石鹸に入り、終戦後は専務として灰燼の中から立ち上り今日もそのお陰で続いているのでしょうが銀行からの天下りで社長にはなりませんでした。神田からよく石神井に来て指導して下さった方で名前は出ませんが、豊田さんの義兄で弁護士会の会長を勤められた方です。

近藤豊太郎さん（築土八幡のそば）は四中から、近所に住んでいた中山信吾さんは長岡工業の秀才で今の東工大のフリーパスを貰った人ですが、商大に来てサッカー部に入りました。この辺で人間の曲り角があるように思います。最後に渡辺甚さんと自分のことになります。

昭和14年の卒業式の卒業生父兄代表は私の父が選ばれ、丁度弟隆の年度ですが父はボロをまとって少しも飾らない人なので弟は式の間中喫茶店にいたといいます。高橋朝次郎の奥さんは、キリンビールの明治屋（キリンビールの一手販売店）の磯野長蔵さんの娘で、後にキリンビールの社長になりましたがもう亡くなりました。この人はボート部でしたが神田から石神井に応援に来て下さった一人です。その磯野さんは父と一橋で同期で、父の死（86才）の直前に安房千倉の別荘に見舞に来て下さいました。

さて、私と甚吉さんの関係に移ります。甚吉さんは学部２年の時に、父と祖父を殆んど同時に失いました。それで３年は殆んど出席せず、従兄弟の国分商店の勘兵衛氏と欧米をめぐり、北は当時最北端のスピッツベルゲンまで行きました。氏の祖父は18才で日本銀行に見習いに入り22才で岐阜に国立第16銀行を設立しました。私の卒業は不景気の最中でした。私は父の世話で一応横浜正金銀行に入ることになっていましたが当時横浜正金銀行の月給は50円程度（内地勤務）でした。甚吉さんの依頼でそのお手伝いをすることにきめました。

（その後小作大争議を右翼相手に見事解決したり、北海道樺太、朝鮮満州へ新事業を求めて出張など縦横の活躍の実話は当時の政財界を物語る貴重な資料ですが残念ながら割愛させて頂きました）

昭和初期の蹴球部

豊　田　達　治
（昭和６年卒業）

通称は一橋でも正式の名称は東京商科大学で、予科３年本科３年の計６年が、当時の東京商大の学制だった。

予科は西武池袋線の沿線石神井にあり、本科は神田一ツ橋にあって、私の卒業した昭和６年の前年９月から現在の国立に移転した。私は国立の第１回卒業生である。

石神井はだだっ広いだけが特徴で、校舎は木造の平屋建バラックが数棟並んでいるだけで、校庭はトラック、野球場、ホッケー場に、ラグビーとサッカーの共同使用のグランド、テニスコート２面、弓道場が一角にあった。周辺は武蔵野の雑木林と畑ばかり、作物としてはいわゆる練馬大根が名物で、現在の石神井の繁華さは当時としては想像もつかない風景であった。

学生数も１学年約250名が５組編成であって、本科へ進むと他の高商や高校からの入学者が50名

程加わって、300名になるという程度の数だった。

蹴球部は当時（大正14年私の入学時）本科３年の松本先輩以下10数名で、大部分が予科生であり、しかも１、２年生であった。予科３年の瀬社家さんが主将、２年の渡辺弘さんがマネジャー、同じ２年の渡辺村吉さんが、当時暁星中学出身者のクラブチーム「アストラ」のゴールキーパーとして活躍中の、唯一の技術指導者で、大半は中学で本格的に蹴球を体験した者はなかった。激烈な入試競争を乗り越え、窮屈な中学時代の枠から脱出した解放感に溢れて、また身心鍛練と人格形成の場として、スポーツに精進したいと思った連中が、たまたま縁あって蹴球部に加わったという格好だった。

当時東京の大学高専仲間では蹴球は２部制で、各々６校ずつが参加しており、東大（当時帝大）、一高、慶応、早大、明大、東高師（現在筑波大）等が１部で、法政、外語、農大、明治薬専、青学、商大が２部であった。秋になるとそれぞれでリーグ戦が行われ、１部の最下位校と２部の優勝校が、次年度には入替ることになっていた。また正月には全国高校大会が行われ、商大予科として出場するのが慣例になっていた。残念ながらこれには勝ったことがなかった。以上の二つが正規の対外試合で、その他は適当な相手をみつけては、随時練習試合を行っていた。２、３年するうちにリーグ戦への参加希望校が増えて、３部４部と増加し24校に達する普及ぶりを示した。

本科の神田一ツ橋にはグランドもなく、石神井とは離れているせいもあり、本科へ進んでなお蹴球を続ける部員が逐次脱落し、また部員に病人も増えて、殆んど予科生のみで頑張る以外になく、私以外は本科で現役はいなくなった。２年下の西田君、３年下の長瀬君が努力してくれたが、私の卒業する昭和６年には４部に落ちざるを得なかった。しかしその後は、長瀬君が奮起して部員強化に苦労した甲斐があって、数年ならずしてごぼう抜きに４部から３部、２部を乗り越えて、遂に１部へと昇格できたことは偉業であり、大学の蹴球史に一橋の記録として特筆すべきものであった。また西田君の骨折りで、東京、大阪、神戸の三商大定期戦を文部省をバックに作り上げたことも、蹴球部への大きな刺戟になった。

戦後の混乱期を脱してから、スポーツの華やかな活躍のなかで、蹴球部も大所帯になり益々発展していることは慶賀すべきことではあるが、先般逝去された高橋朝次郎さんがかつていわれたことだが、「スポーツは試合に勝つことが大切であることは勿論だが、部員相互の練磨と信頼の上に立って、悔いのない学生生活を送って、一生の良い思い出を作ることも、大切なポイントであることを忘れないで貰いたい」と注意されたのが耳に残っている。

石神井の思い出

星　野　弘　一
（昭和７年卒業）

商大蹴球部の思い出といわれても、私が東京商科大学の予科に入学したのは、関東大震災の翌年の春のことで、もう60年近くにもなる昔のことで、記憶はさだかではない。

中学校（東京府立第一商業学校）当時テニスをやっていた私は、庭球部に入るつもりでいたが、２万５千坪（？）の広い校内の片隅に高い金網の塀で囲まれた２面そこそこのテニスコートを見て

とても窮屈な感じがしてテニス部へ入る意欲が薄れ、広いグランドで思う存分運動のできる蹴球部に入ることにしたのだ。

大震災で一ツ橋の校舎は焼け落ちて、予科は石神井に移転したが、移転そうそうの予科の校内にはまだ畑のウネの姿がそのまま残っているところがアチコチにあった。一ツ橋とはちがって広々とした校内には野球場あり、蹴球場あり、陸上競技のトラックあり、バスケットボールやテニスコートありで、広々とした校庭の遥か西の彼方には秩父連山の山列がのぞまれた。こうした広々とした環境の中で思う存分ボールを蹴上げることの気持のよさを味わったものだ。

当時蹴球界にはインターハイがあり、正月に在東京の大学の予科や専門学校などの間で優勝をかけてゲームをしたものだ。その競技にそなえて、2学期になると午後の授業は体操をのぞいては殆んど出席できず、ひたすら練習にかり出された。当時、東京商科大学の予科はこのインターハイで勝点をあげたことなどはなかったかのように記憶している。

私と同期に入学して蹴球部に入った連中のなかに三菱商事の田部文一郎もいた。彼はたしか蹴球で有名な広島一中出身で、たしかフォーワードのライトインナーをやっていたように記憶している。その当時の蹴球部のマネジャーをしていたのが弁護士会の大物である松本正雄であったと思う。私と同期で蹴球部員であった人たちは田部のほかにゴールキーパーの渡辺（彼はア式の名門校暁星中学の名ゴールキーパーとして知られていた）や伊藤、津田、城島、神戸、上級生には瀬社家、台湾出身の林（リン）さんなどがいた。私はハーフバックをつとめさせて貰っていた。

千葉県下の保田海岸での合宿訓練も楽しい思い出だ。朝4時起床、町のはずれの合宿所（農家の部屋を借りての）から保田の町の通りをボールを蹴りながら片方の町はずれにある小学校の校庭に行って朝の練習。夕方の練習を終えてそのユニホームのまま浅草の聚楽が開いていたビヤホールにとび込んで生ビールをひと息で飲みほす、そのビールのうまさはいいようがなかった。今でも忘れられない生ビールのうまさです。

私は予科3年の夏、肺結核を発病し、2年間休学の余ぎなきに至り、蹴球部から去ることになったが、蹴球部でボールを蹴り合いっこした人たちは皆んないい人だった。それだけに商大蹴球部の思い出は、私にとって忘れられない思い出です。ボールを思う存分石神井の大空めがけて蹴り上げるあの気持のよさ。もうそれから60年近くも過ぎていたのかと感慨無量です。

浦高定期戦の始まり

西　田　嘉兵衛
（昭和8年卒業）

私が東京商大予科（石神井）に入学したのは、昭和2年春のことで、自分の好きなサッカーなので直ちにア式蹴球部に入れていただいた。当時3年に豊田、恵藤の両先輩、2年に高橋、西川の両先輩がおられ、神田から本科の渡辺さん瀬社家さんがおいでになって、私ども新入生と共に練習に励んだ。しかし11名を揃えることさえ困難な状態だったから、その年も2部の中軸でようやく踏み留ることができた程度の実力だった。翌昭和3年長瀬君、翌々年二階堂、後藤の2君が入部されると俄然予科が量質共に向上し、1部昇格をねらい得る基礎ができたように思われた。

私はかねてから、どこかの高校或いは大学予科と定期戦を行い、これを目標として技を磨くことの必要性を痛感していた。先輩としては５中出身の竹内さん、後輩としては付属中学出身の山下勇さんが在学している浦和高等学校に的をしぼり、下話を持ちかけた。山下主将は直ちに賛意を表され、さらにこの定期戦を後援する新聞社を探す提案を出された。そこで私は山下君と図り、東京日日新聞社に中島道雄氏（付属中学先輩、東京帝大ＯＢ）を訪ね、日日新聞杯を寄贈していただくことになった。ここに浦和高等学校との春秋２回の定期戦が学校当局の承認を得て成立した。それは昭和４年春のこと、私が予科３年になったときと記憶している。第１回定期戦の勝敗も記憶していない程昔のことだが、この定期戦の伝統を引き継いで守り続けて来られた諸君のご努力に対し、心から御礼を申し上げたい。

私は昭和５年肺門淋巴腺炎にかかり、練習ができなくなったが、予科の長瀬、吉村、二階堂、後藤の諸君が豊田先輩を中心に猛練習を積み、後年１部昇格を果たす大殊勲をなしとげられたのである。私は何のお役にもたたなかったが、大学１年から３年まで常に心の重圧を感じない日はなかった。この頃親しい友達大阪商大の田辺治太郎氏と話し合い、三商大の定期戦の企画をしたが、これも順調に話が進み、実現した。しかも今日まで続いていることは嬉しい限りだ。

こうした思い出の裏に私の痛恨にたえないことは、あまりに劇しい練習と、精神的苦労の集積のためか、長瀬東作君が卒業後間もなく他界せられたいたましい悲劇です。長瀬君こそ後年東京商大を１部にまで押し上げたア式蹴球部の実力を結集させ開花させた中心人物であり、功労者であると思う。長瀬君の熱情、献身的努力は在学中はもとより卒業後も指導を続け、チームの団結力、相互信頼のチーム力を育ててくれた。私は自分の病のため長瀬君に非常に大きな負担をかけ、重病に追いやったように思われ今日なおお詫びの申上げようがない責任を感じている。

黄金時代を築き上げた諸君の努力も勿論部史に輝く功績であるが、長瀬君の永年にわたる愛情と努力、後輩にしたわれ後輩を導き教えた人柄に対し深甚な敬意と感謝を捧げなければならないと思う。

一橋蹴球部かくして生成

――流転、苦難の我が６年――

二階堂　謹　二
（昭和10年卒業）

昭和４年４月に商大予科に入学し、同10年３月本科卒業に至る６年間、蹴球部生活に始まり之に終る。此の間正に波乱万丈、流転を窮め、漸くにして学校を代表する蹴球部の、創業の礎が固まりかけた期間といえよう。

石神井予科のバラックの建物の一隅、狭い汚い雑然とした落書だらけの部室が、拠点だった。メンバーは20名余近く居ただろうが、集る者は14、5 名。それも都度顔触れ定まらず、自由に集り、自由に練習し、時折練習試合を他校ともする、所謂楽しむ蹴球であり、同好の士の集るクラブであった。特に高師付中が主を占めて居た。大学チームといっても予科生がメンバーの主力で、小生等中学校（広島一中）時代、蹴球のさして深い経験なきまま、１年入部と同時にセンターハーフを当てられ、秋のカレッヂリーグ戦には正メンバーとして早速出場した。

その秋のリーグ戦は二部で6校間で戦われ、かろうじてビリから2位で、何とか二部に留まることができた。貧しい戦績に口惜しい気持は変りないものの、別に特に奮起を促す中心の人もなく、相変らず暢やかな自由なムードで翌年に対した。

昭和5年秋のリーグ二部戦では、当然の天の配剤として、二部陥落ちょう断罪下る。此の頃から学校蹴球部としての、体質的な脆弱さが漸次表面化し、自由に楽しく他にあまり拘束されないで、蹴球をエンジョイする類のメンバーは、段々と脱落して行く。同期入部の7名中残る者は、僅か2名（小生と後藤）というていたらく。

予科3年（昭和6年）で予科キャプテンをやっていた小生と、1年先輩の長瀬と一脈相通じ、肝胆照らす仲となり、何としても強固なる学校代表チームを創るべきだと、夜を日に継いで熟議を重ね、戦略を廻らす等、相擁して心を砕く。2人で長瀬の2階でストーブを挟み、深更迄語り合ったる事幾度か。我が蹴球部には残念ながら、歴史浅くして伝統的なものがない。例うればボート部の如く、「吾人屁理屈を知らず幸いにして元気なれ」的な指導的モットーなし。強権、強制、即ち自己の恣意を抑制、犠牲にする事も已むを得ないのではないかと強く識れども、実行し得る環境なし。否、何の為に蹴球部生活をやるのか、即ち蹴球以前に立戻っての、哲学的思考が要請せらる事態ともなる。斯くて、学生生活の本分にも通ずる我が蹴球部生活なる、強固信念を固め、漸次強力な推進力を加えて行く。此の頃である。「蹴球」なる部誌を年刊発行して、自由なる部員の発言を求め思索を勧めた。自由束縛を厭う人、楽しめぬ人は次々と離脱する。此の激動の真只中、昭和6年秋のリーグ三部戦を迎えた。斯かる混乱期最中とて好結果が得られる筈がなく、一部有力な昭6新入部員を得たものの、力及ばず、四部への陥落という、最も悲惨な運命に否応なしに、叩き落されて了う。更に更にスマートな心なき部員は我先きにと部を去って行く。此の時程、正に弱り目に祟り目という諺を、嫌という程思い知らされた事はなかった。

翌昭和7年小生本科1年。国立箱根土地グランドに於ける夏季合宿時、集合したメンバーは僅か13名を数うるのみ。併し救いは、残存部員、何れも一騎当千の筋金入りのサッカーメンバーであった。之が火の玉となり再興の念に燃え猛練習を重ね、背水の陣を以って、私の四部戦を迎えた。裏にあっては、マネジャー後藤が協会との折衝巧みに、手慣れた石神井清水組グランドを主たる試合場に選び、且つ審判員には、我等チームの癖を熟知の早大の幸田氏を主として当てる等。之は一見何の変哲もない工作の如きも、五十歩百歩の四部級のチームには見逃し得ない有利な条件となる。併し斯く条件を整えたりとは申せ、正に涙なくしては語れぬ、苦戦に苦戦を強いられたるも、終に待望已まざりし、四部優勝という大偉業を辛くも捷ち取る事ができた。頽勢一途を勝勢に転ぜしめる業の如何に、至難なるか身を以って体験した。

斯くて昭和8年に入るや、部員の離脱に代り、新人も漸増し、更に特筆大書を要するは、養成所新入生枝村（青山師範名選手として誉れ高き人）を専門部マネジャーとの曲折ある苦辛の折衝を経て、オール一橋の名の下に獲得叶いたる事。及び名古屋高商より本科入学の水島（名古屋高商のキャプテン）の入部と共に、有力スタッフを得て、嫌が上にも意気軒昂。加うるに猛練習を積み、昭和8年秋のリーグ三部戦に入る。固より苦戦もあったものの、上昇気運物凄く、再び三部優勝という栄誉を確保した。学内に於いても漸次蹴球部の存在が認められ、肩身の広い思いをする。無理なく優秀部員も集って来る。昭和9年度には部内にて紅白試合が出来る状態にさえなる。何の為に蹴球をするか等の問題は今は昔の夢と化し、堂々学校代表選手の自負を持ち、敢えて強制なくとも積

極猛練習に自発的に参加する。

斯くて昭和９年秋のリーグ二部戦では破竹の勢抑え難く、向う処敵なく悠々全勝優勝を果す。最後の法政戦は憧れの明治神宮外苑で戦い、勝って、スリーチャーズ、フォ、ホーセイス、エレブン、を高らかに唱えた時は、我が事成れりと、感無量を覚えた。

昭和７年本科１年より、先輩長瀬は病を得てプレイ出来ず、小生がキャプテンを相勤め、名マネジャー後藤の大いなる補佐を得、流動する蹴球部に、学生生活の総てを賭ける。冷静、思慮深き長瀬は、プレイの外に在りて、部の在り方を見窮わめユニークな貴重なアドヴァイスを四六時中供し、蔭の指導者でもあった。弱きが故に沈下し行く悲惨なる姿。この続く頽勢を一朝にして優勢に転ずる、乾坤一擲の難業は、言語に絶したりとは言え、これを敢えて克服し一度昂勢に転ずるや、漸次怒濤の勢とも化して、意気天を衝き、連勝連勝の波に乗る。蓋し幸運は、昭６新入生に続く強力メンバーの獲得、更に続いた枝村、水島の新入という、戦力の増強と言えよう。

戦い終り、二部優勝一部昇格祝賀会が中野で盛大に開かれ、先輩、現役一堂に会し大いに戦勝を祝ったが、小生、生憎リーグ戦後喜びのあまり、新マネジャー神野と日本橋「魚がし」で一杯飲み過ぎ、暴飲暴食の廉にて急性黄疸となり、上記祝賀会には出席叶わず、記念写真にも片隅に一片の顔写真が貼り付けられた。憶えば已むなき人災にて、笑いを呼ぶエピソードである。

我が6年間、蔭にエピソードあり

二階堂　謹　二
（昭和10年卒業）

○コーチの事

我が６年間、２度コーチの指導を受ける機を得た。

１度は、昭和４年予１の時、東大から岸山（選手）氏が招聘せられた。非常にスマートに、三角パスを主にした、技術的な頭脳的な指導だったが、受ける我が方未熟にて、之を消化するに力及ばず、成果は期待に程遠く、否サッカー技術以前の部の在り方に多分の問題を含んでいたと言えよう。

次は、昭和６年予３の時だった。早大の井出キャプテンのコーチを受けた。この時は既に頽勢の真只中、昭６新入優秀部員を得たとはいえ、未だ戦力増張迄に至らず、井出氏の我が大勢を看て取っての、走れ走れの強引、我武者羅練習指導で、体当り戦法を叩き込まれる。之は新機軸で、我蹴球部に優に活を入れられた事となる。

○麻雀の事

部が弱くなり、部員は日毎にやめて行き、寒々とした寂しい気分に沈んでいた頃、即ち昭和６年予３の時、長瀬の発案で、麻雀でもやろうという事となり、練習が終り翌日が練習休みの日等を選び、長瀬の家に繰込んで、２階の勉強室で、２卓、３卓を囲んで、徹夜麻雀を屢々楽しんだ。長瀬家には少からず迷惑だっただろうが、何が何でも長瀬が敢えてやる。

更に昭和７年本１夏合宿時、通常は麻雀は翌日の練習に支障ありとて、厳禁であるべき処、特に時間を限って許し、夕食後合宿所内で盛んに卓を囲んだ。

何れも、相互が理解し和気藹々、融和を得るには非常に効果的だった。

○夏合宿地の事

昭和５年予２の時、房州館山で宿屋に泊り、中学校の運動場を借りて、１週間が行う。次の年は、名古屋で高商のグランドを借り民宿を利して行う。何れも参加者少く、成果に見るべきものなし。補助も皆無、金も掛るし誰もが喜んで易々参加する環境になく、即ち、当時傾向としては若干物見遊山的雰囲気も併せ、特に適当地を選んで遠出を計ったが、結果は不成功に終る。

昭和７年本１の時より、方針を一変し、他出を止め、地元国立で玄人下宿屋を借り、箱根土地グランドを利用する、練習一辺倒の強化合宿に踏切る。片道1500米余往復共に走る。特にくたくたに疲れた練習後といえども絶対に走った。その他の本練習も固より激烈を窮めた。

従ってこの種合宿は心身の鍛練に絶大なる効果を挙げ、部の勝勢に大きく貢献した。

○グラウンドの事

石神井予科のグラウンドが、我が６ケ年を通じ終始主たる練習場だった。しかしこのグラウンドたるや、正に田圃に類するものであり、一度雨降るや全くの泥濘化し泥田で練習する貌となる。また乾き切るや風に煽られ濛々の土煙を巻き起し、砂漠と化す。更にラグビー部と半面宛の共用にて、当時ラグビー部の方が威勢良きため、ややもすれば押され気味にて、ランニングパスがよく我が陣に乱入する機多く、練習をために乱さる。また本科生が国立より石神井に通うには時余を要し、不便窮まりなかりしが、よくぞ毎日通いたるものぞ。

予科が昭和８年秋小平移転後専用グラウンドが翌年春出来る迄は、国立の箱根土地を借用して行う。これにより、石神井通いが救われただけでも大いに便利となる。

斯く、凡そグラウンドに関する限り、通じて恵まれざる事夥しく、不便、悪条件を克服しての練習の明暮れであり、小平専用グラウンドに立った時は夢かとばかり喜ぶ。またその成果も２部優勝という戦果に繋がる。

○枝村の事

昭和８年本２の４月。後藤マネジャーがいちはやく情報をキャッチ。青山師範の名選手、枝村藤三郎が教員養成所に入学したこと。何としても、このスーパーマンを我がチームに迎えたいものと、後藤と鳩首熟議。なるほど我がチームは当時のユニフォームにも一橋の２字を銘打っている如く、オール一橋代表を自認していた。しかし残念ながらそれまでは、特に強力なる選手もいなかったためもあり、１度たりとも専門部に選手の面で協力を求めたる事なく、枝村が養成所に入ったからとて急に、態度を変えて同部に接近することのわざとらしさが気に懸り、直撃交渉は多少共躊躇され、鋭意之が対策を練る。しかし結局は、全一橋チームを強化するという、明々白々な旗印で強談の外なく、小生と後藤二人で、専門部サッカー部マネジャー、Ｆ氏に熱意一杯の折衝を開始した。固より枝村以外にも優秀選手がいる場合には喜んでこれを迎えると付言した。しかし当のＦ氏、なかなかしたたかなるマネジャーで、当方の既往態度一変、枝村狙いのみの肚の中を疾うに見抜き、専門部チーム強化にも枝村は必須とて、強く難色を示す。

前年度四部で辛じて優勝し、何んとしてもこの優勢を持続するためにも、全一橋的協力を是非頼むと、真摯なる口説きを繰返す。さすが、最終的にはＦ氏も当方のこの錦の御旗論に理解を示し、枉げて枝村割愛を了としてくれたが、正に難渋を窮めた交渉だった。

御蔭で有力なるスタッフを得て戦力の増強に大いなる効果を挙げた。

身近な亡き戦友への追憶

二階堂　謹　二
（昭和10年卒業）

長瀬　東作（昭９卒）　深慮遠謀。早くより体を毀し、プレイの外に在りて、機略を縦横に廻らせ、適時適切なるアドヴァイスを放ち、部を誘導す。部創業の影武者。

後藤　博基（昭10卒）　口八丁手八丁。陽気そのもの。部の名マネジャーとして部員の掌握妙を得。対外折衝巧緻。協会を動かし清水組グラウンド、並びにレフェリー幸田氏のリーグ戦での連続起用は、連勝への軽視出来ぬ足掛りとなる。

神野清一郎（昭11卒）　着実、真面目、誠実なる人。また冷徹なり。名マネジャーとして部員斉しく之に従ふ。

浅枝彦太郎（昭12卒）　無口にして闘魂溢るる。フォワードセンターとして攻撃陣を率いて獅子奮迅。運動神経抜群。連勝への攻撃主戦力。

荒井　文雄（昭12卒）　天真爛漫、純朴なる好青年。健康、柔軟なる体軀を駆り、火の玉となって突撃する。フォワードインサイド。屈せず。

田島　輝重（昭12卒）　重厚智略の人。さして運動神経ありとは見えざりしも、適格者なきゴールキーパーを志し、猛練習を経て、終に我がものとし終始粘り強く健闘。「蹴球」部誌名編集者。

大掛　隆久（昭13卒）　運動神経擢んで、器用なるフォワードウィング。他人との触り頗る良く誠意あり。人に愛される。闘志満々。貴重なる戦力。

サッカー部の還暦を祝して

水　島　　茂
（昭和11年卒業）

昭和56年は伝統あるわが一橋サッカー部創立60周年の記念すべき年であり、更に今年の天長節には天皇陛下が目出たく80才の聖寿をお迎えになったが、我々の敬愛するサッカー部創業の大先輩松本正雄氏も80才になられるのを祝して、部史発行の企画がもたれたのは誠に意義深いことであります。

この60年の歴史の一駒の僅か３年間ではあるが、栄誉ある一橋サッカー部に籍を置かせて頂けた幸運を噛みしめながら回想録を書かせて頂けるのは有難いことです。

昭和８年４月、夢に描いた東商大に名古屋高商から入学して、まだ慣れぬ国立の学生食堂でまごまごしていた処へ「水島君ですか。名古屋でサッカーをやっていたそうですね。サッカー部に入りませんか」と呼びかけて下さった長瀬先輩のにこやかな顔が忘れられない。その人柄にひかれて入部した。

その時のサーカー部は第四部から第三部に上ったところであって意気はあがっていたが、三部ではまだ自慢すべきランクになかった。

なにしろ50年昔のことだから当時の記憶はさだかでないので、入部後の１年間どのように練習しどのような試合をしたのか記憶にない。ただ講義の終るのを待って神野君と国立から武蔵境でバスに乗り換え石神井のグランドに通ったこと、時には練習後に巣鴨に出て長瀬先輩のお宅で遊んだことが懐しい想い出となっている。

幸い三部での対戦相手校は草蹴球程度のものであったようで、二部昇格ができた。

２年目はキャプテン二階堂キンチャンの「サアいこうぜ」とマネジャー後藤ゴッサンの「がんばれよ」のキイキイ声に、20名の元気潑剌の部員は一丸となって汗と泥にまみれる猛練習をした。その結果あたるところ敵なしで待望の一部進出を果した。

そして昭和10年を迎えた。この年の３年生はカミケンこと神野君と２人だけであったので、何となく神野君がマネジャー、私がキャプテンとなった。神野君はＷＩＮＧとしても立派なプレィヤーであったが、円満な人柄、そして予科出身であったことから誰が見ても最適任であった。それにひきかえ私のキャプテンは他に人がなかったからに過ぎず、統卒力不足、技術未熟を補ってくれたのは神野君のバックアップと部員のファイトであった。この頃は国立から国分寺経由で小平のグランドに通った。松本先輩はじめ諸先輩の物心にわたる熱心な応援に報いるため石に噛りついても一部を死守し、バトンタッチする責任を感じていた。

この年は世相不安定で、市内では大衆は東京音頭に踊りまくり、学園では赤旗が翻えり軍事教練の是非が論ぜられていた。そんな世相にも拘らず30人の赤ユニホームは只管勝利を目ざしてボールを追っていた。

国立での合宿、富士見通りのつきあたりの箱根土地グランドでの練習、合宿所の唯一の麻雀卓にありつくため疲れも忘れて我先きと走った若さ、その青春溢れる部員一人一人の顔は忘れられない。その仲間達のうち、片腕だった神野君は沖縄で青年将校として名誉の戦死をとげられ、浅枝・田島・荒井（三商大戦の帰り京都で芸妓さんに道を尋ね「清水はんどすか」といわれて、ぼうっとしたとかの純情青年）・大掛（ガケサン）・小西（広島帰省車中満席だったので貧血で倒れた格好をして席にありついたという快男子）・池尾・狩森・米山の諸君が戦争或いは病気でこの世を早く去られたことは痛恨の至りである。

とにかく最後の試練の年を迎えることになった。相手校は技術に勝る名門の早・慶・帝・文理・明の五大学であり、この何れかを破らねばならなかった。だが、ファイトだけでは早慶帝文には歯が立たなかった。残す明大戦にすべてを託した。そして勝った。スコアは覚えていない。勝って皆泣いた。重責を果して神野君とだきあって泣いた。あの感激は学生生活で忘れられないものである。

在学中のサッカーを通じての貴重な体験が三菱商事38年間の会社生活にも、また一兵卒として野戦と本土防衛の二度にわたる軍隊生活にも生かされたことを感謝している。

商大サッカー部の思い出

森　田　昭　之
（昭和12年卒業）

サッカー部史を作るので回想文とのこと、朧ろ気な記憶のみ、僅かに残る写真と新聞の切りぬきをしみじみとながめ思い出を書く。

予科に入学サッカーに入った昭和６年、日本は不景気のどん底で軍部の満州進出が始まり、また商大は籠城事件のあった年である。きわめて呑気単純であった私はまず学問より身体をつくらねばと、サッカーを勧誘される前に自分から志望して部室を訪れた、その時後藤上級生が喜んでくれたお顔を思い出す。当時の石神井校舎は田園にかこまれ、駅の近くに２、３軒の店があるだけ、石神井の池は美しい自然を残していた。校舎は粗末であったが敷地は広く、寮、グランド完備、しかしサッカーグランドはラクビーと共用凸凹であった。小さな図書室、部室、食堂はカツライス20銭ライスカレー10銭であった。放課後すぐ部室でユニホームに着替えて練習、予算も少く古いボールを広島出身の浅枝が微笑しながら丁寧に空気を入れてくれた、今さら思うが出来た人であった。練習はパス、ドリブル、ヘッディング、シュート、ラウンドキック、フォーメイションと約２時間、今と違ってあまり科学的でなく、戦術の研究も少く、本も無かった。リーグ戦は５部各部６校、びりは翌年下へ優勝は上へのきまり、三部の我がチームは武運拙くびり、翌年四部に転落となった。翌昭和７年部員は本科長瀬・二階堂・後藤、予科３神野・水野・荒瀬、予科２浅枝・鈴木・田島・角田・荒井・森田、新入村井・大掛・林田など、転落で笑われるし意気消沈したが、ここに部の再生の星が現われた。病気がよくなった長瀬リーダーである。彼は技術も勝れ統率力・ユーモアなどで部を牽引した。皆も仲良く真剣に練習し、リーグに優勝出来た。夏の国立合宿でグランドまで1500米を走って通った辛さを憶えている。翌昭和８年三部昇格、名古屋高商出身ベテラン水島入部、浅枝がＧＫからＣＦに、田島がＧＫになった。浅枝が中央からサイドへ巧みに流すパス、田島が身を挺してボールを摑みはねるモーション、我がチームに光明が来た感じであった。この年４月我国は国際連盟を脱退する。そして８月予科新築成り、小平新校舎へ、懐しい石神井を去る。新校舎はサッカー専用のグランドあり凸凹も少い。部は二部に返り咲かんと緊褌一番練習にはげみ全勝した。翌昭和９年二部に昇格、新戦力ベテランＦＢ枝村入部、そして長瀬リーダー卒業、九州勤務の為去る、彼は病再発12年亡くなった。もし長生きしたらキャプテンオブインダストリイになられたと思う。浅枝など我々５人本科生となり国立から通う。こんどの二部はスター選手はいないが、堅実で学生サッカーの中堅で手強い。何とか一部へと、二階堂・後藤を中心に練習にはげみ、手始めに宿敵東京高校を２対０で敗り勢いにのりあと４校にも全勝した。遂に一部昇格の祝勝会をあげることが出来たのである。翌昭和10年二階堂・後藤卒業、浅枝など我々は松本先輩の紹介で山内教授のゼミナールに入りサッカー練習を大目に見て戴く事になった。この年美濃辺教授天皇機関説の為退陣される。シーズン入り、一部は強敵ばかり、緒戦早稲田に浅枝負傷し惨敗、あと農大に1-1勝やっと転落を免れる。この年からシーズンオフになると予算不足補充の為寄付集めに各会社に先輩訪問をはじめた。翌昭和11年水島・神野卒業。２月、２・26事件、軍国主義化への道を開く、８月ベルリンオリンピック。シーズンに入り早稲田オリンピック派遣の為一軍選手少く、我々之を敗る。この

為また転落を免れた。ついで関西リーグ優勝の神戸商大と戦うが一点の差にて惜敗した。翌昭和12浅枝・田島・角田・荒井・森田・枝村卒業した。思えば6年間のサッカー生活波乱の多い一場の夢のようである。昭和12年7月日中戦争始まり、自由主義の弾圧いよいよ厳しく軍国主義と戦争への苦難に突入した。荒井は14年中支で戦死、浅枝は20年原爆により戦死、田島はその後病死して今はいない。思えばまことに淋しいかぎりである。

昭和6年頃の予科石神井グランドと亡き蹴友を偲ぶ

鈴木　彰
（昭和13年卒業）

空には雲雀ののどかな囀り、地にはタンポポの花が咲き、春風の吹く度に紋白蝶が流され空に舞う。辺りは一面の畑、畑の連続麦と大根のみ、時折り風に乗って自然肥料が強く鼻をつくが今になっては懐しい香いだった。

50年前の石神井の予科グラウンドにア式蹴球部員として初めて練習に参加した日を思い出す。先輩部員は7～8人、思い思いのユニフォームで中にはYシャツの袖をまくり制服のズボンのままボールを蹴っていた者も交っていたと記憶する。グラウンドは雑草の強い根が株となって所々に残り、地面はでこぼこで風が吹くと砂塵が捲き上る。ゴールポストのバーは朽ち果てボールがあたる度に揺れて危い。ラグビーのグランドと共通の為ポストは1つだけで練習が終ると必ず抜いてグラウンドの片隅の雑草の中へ片付けるのだが、これが腐りかけていたためグラグラしてよほど注意深く呼吸を合わせて抜かないと危くて仕様がない。練習が終るとバラック建の小使室の前の井戸端で交互にポンプで水を揚げ、汗とほこりにまみれた顔と足を洗い汚いタオルで拭いてそれでおしまい。そんなふうな毎日が昭和6～7年頃の練習だったが皆別に気にすることも無かったような時代だった。

その頃の関東ア式蹴球は6部制で全部で36校のリーグ。我が東京商科大学は二部から三部、三部から四部と転落の詩集。昭和6年の秋のリーグ戦が始まる頃はあわてて試合当日部員が11～12名集り、時には練習で顔を見たこともない本科部員が試合に出たこともあった。そうしないと11人揃わないで試合ができない事情もあったようだ。

しかし昭和6年を契機に以後新しい予科生が続々と入部してきて昭和7・8・9・10年と只の1年も停滞せず大学リーグ一部に四部から急昇格した事実。これは日本サッカーリーグとして歴史的大記録であり、こんな事は今後共恐らく絶対に出来得ない。我が東京商大もしくは一橋大学だからこそやり遂げ得たのだと、私は一橋蹴球人としての強い誇りを持って今日迄暮らし続けて来た。

この中興の祖というか中心となった人物は誰か。今は亡き大先輩の長瀬東作氏に尽きるがこの人については他の諸先輩が詳しく記される事と思われるからここに省略するが、たった1人、国立の本科から雨の日も風の日も休むことなく石神井グラウンドに通って指導してくれた長瀬大先輩の事は決して忘れることのできぬ神にも近い尊い姿であった事を付記させていただく。

さて昭和6年の入部で私と同輩で昭和12年の主将であり、一部リーグで華々しく活躍した広島県人の今は亡き浅枝彦太郎氏の追憶を記す事にしたい。無口な真面目な性格で黙々と毎日の練習に精魂を打込んでいた。汚い部室の掃除やら練習前後のボールの空気の入替えやら陰で率先実行した目

立たぬ努力家だった。しかしひとたび試合となれば俊敏そのもの、左サイドから持込みその左足の素早いきれのよいシュートは幾十度敵のゴールを破った事か。彼は一部リーグでも各大学に警戒された名フォワードセンターだった。先に述べた我が商大が四部から一部に急上昇し、鯉の滝昇りを（彼は広島の人だった）見事成就したのも全く彼の抜群の左足の冴えであったといえる。小生は常にバックで敵のゴールを割るなんていうことは殆んど無かったが、毎年の優勝の美酒に酔わせてくれたあの地味な性格のよき男、浅枝彦太郎を生涯忘れる事はできない。

彼は卒業後ノモハン事件に参戦、一旦除隊し帰国したが苛烈な戦争の影響のためか頭脳障害を起こし若くして逝くなってしまったのはかえすがえすも痛恨の極みである。静かに彼の冥福を祈るのみである。

もう一人、昭和６年入部のゴールキーパーで今は亡き田島輝重君は東京の人。東京府立四中から４年卒で入ってきた秀才だった。

早くから御両親を亡くしたった一人の姉さんがすべて面倒を見ていられたようだ。そんな事情で他の部員にない色々の障壁もあったにも拘わらず、よく日々の練習に耐えてくれた。頭脳明晰のためだろうか決断も早く、之はゴールをやられたと思って振りかえると、黒豹の如く果敢に飛びつき何度か奇跡的に防いでくれた事を思い出す。小生が殆んどフルバックのポジションについていたので田島君が死守してくれたその活躍振りには幾度感謝した事だったか。

入部当時から人一倍色が黒く、頭髪はいつもポマードをぬりすぎてテカテカ黒光りしていたがタオルで鉢巻きして土ほこりのたつグラウンドで毎日汗を流していた姿は忘れられない。卒業後は東京瓦斯電へ入社、戦後は新日鉄のコンサルタントをして九州に在住していたが、晩年は東京に戻ってガンの研究機関の事務の中心的存在で活躍していたようだった。その彼が昭和46、７年頃２～３日後にわがＯＢ会の酉松会があるという日に突然私の会社（虎ノ門の日本鉱業ビル内）へ元気で来られ、「鈴木、すまないが酉松会どうしても出られなくなったから会費を届けて置いてくれ」といわれて「出られないのなら、会費は納めなくてもいいんだ、無理するなよ」といったが、虫の知らせかどうしても受け取ってくれと懇願され、それではと受け取った事をよく覚えている。

それから数日後田島君は急逝した。何か不思議な因縁が彼と私の間に在ったような気がしてならない。２人の息子さんも今は立派な社会人となって数年前原宿の中国飯店に招待を受け、生前は亡き父が商大サッカー部の皆様に大変御世話様になりましたということで小生が代表で非常に感謝された。惜しい蹴友を失って淋しい限りだが、息子さんお二人が立派に成長された事は何よりも嬉しい事である。

末筆に我が東京商大ア式蹴球部が昭和の初めから幾多の先輩、後輩が相集い相語り、試合が終って互いに喜び或いは泣いた尊い歴史は我が人生にとって、之程有難く永久に忘れ得ない貴重な賜であったと深く感謝している次第である。

終りに亡き蹴友に対しその冥福を心から祈って筆を擱く。

回　　想

村　井　恒　典
（昭和13年卒業）

昭和７年春、幸いに試験をパスしたので、早速靴を買求めた。蹴球をやるのだとも単純な動機であった。もう入学試験はない。これから６年間みっちり蹴れる。ただそれだけであった。

早速蹴球部に飛込んで見たら角帽がたった３人国立から通って来る。予科生は３年生が３人２年生が６人。新入生は高師付属中から来た大掛と神戸一中からの重見と小生で合計15人しかいなかった。

何故そんなに一筋縄に蹴球部に飛びこんだのかというと、私の通った小学校は蹴球が盛で当時春秋二季に関東小学校蹴球大会というのがあってこれに出場したことがあったから。関東と称しても東京と埼玉の一部の小学校チームしか参加していなかったが。中学の時は学校の方針で対外試合は禁じられていて思う様に蹴れなかった。さあのびのびと蹴れる様になったわいというのがただそれだけが動機であった。

ここではからずも長瀬さんという偉い上級生にはじめてお会いしたわけである。キャプテンは二階堂さんであったが最上級生の長瀬さんが大御所であった。二階堂主将は温厚で重厚なそして先に立って人を引張って行く全く頼りになる存在であった。長瀬さんは昨秋肋膜炎を患ったばかりでむしろ監督的存在であった。この辺の事を書き出すと次々と思い出すこと雲の如く原稿紙が何枚あっても足りない。折に触れ後続紙上にも出て来る筈だからこのくらいにしておく。

とに角入部して早速グラウンドで練習を始める。石神井のグラウンドはラグビー部と共用で半面ずつ使用していたが、ラグビー部は人数も多く、その当時東京ではビッグセブンの一角を占めていて意気大いに上っていた。彼らのパスの練習は屢々我方の練習領域に遠慮なく入って来る。おまけにグラウンドの一角は野球場の左翼守備位置と重なり、その方面から固い小さなボールが飛込んで来る。

まず練習開始にあたってゴールポストをドッコイショと組立てネットを張る。それからショートキックを始める。春の定期戦浦高に備えて予科チームの練習が始まる。予科の上級生は９人しかいないのであるから勢い新人から２名はレギュラーにならざるを得ない。大掛はＦＷに私はＦＢにそれぞれポジションを得た。当時は今のようにバックが球を廻し適時之をＦＷへパスして行くという戦法はとらなかった。バックが球を持つと一刻も早くハーフラインの彼方により遠く蹴返す。へたにバックが球をキープしていると対手ＦＷが突進してきてまごまごすると重大な危機を醸成する危険性があるという理由であった。とに角敵陣に大きく蹴返すのがよいとされていた。誠に程度の低い戦法であったと思い出すのだが、はて私だけそう思っていたのかも知れない。

浦高戦に勝って夏休みも終りに近づくとリーグ戦に備えて全一橋チームとしての合宿が始まる。富士見通を突走り音楽学校を過ぎ突あたりの箱根土地のボコボコしたグランドで、午前午後２回暗くなりかかる迄練習する。練習が終れば或る者はトボトボと、或る者は競い合って合宿へ戻る。脱兎の如く走れる奴には「練習の時余力を残していたのではないか。本当にクタクタになる迄真剣にやっていないのではないか」とひがみたくもなる。そのうちに練習で疲れ果てた時の方が快適に走

れるということがわかって来た。

その頃長瀬さんは体調にかなり自信を取戻されはじめたのではないかという気がする。ＦＷを専ら訓練して「蹴ったら走れ！」を合言葉としてセンタースリーがショートパスをしながらゴールに向って一直線に死物狂いで突込んで来る。バックとして之を防ぐ立場の私は全く素飛ばされるばかりの勢いだった。リーグ戦を控えて是非長瀬さんに現役としてプレーして頂きたいと願ったのは部員全体の要望であった。「蹴ったら走れ！」の意味はパスしたらその球をボンヤリ眺めていないで一瞬でも早く次のアクションに移れ。その一瞬で、マークしている対手より一歩でも二歩でも先んじられるという事でまず我々のレベルの者達には高踏な戦法よりも単純な第一歩から実行させる事を考えられたと思う。今でもチームプレーの基礎はワンサイドカットとトライアングルパスであると思う。これを組み合わせて色々な戦術に発展させて行く。トライアングルでパスした後は一歩でも早く対手の背後に出てリターンを受ける。ボヤボヤしていてはリターンは受けられない。

さてリーグ戦も進み最強敵と思われた拓大との試合となった。６年間の部生活のうちこの試合は最も印象の鮮烈な試合の一つであった。３点リードしているのに猛烈に攻め立てられ、ついに同点となり必死の思いで蹴返すのだが次から次とゴール前にやって来る。まったく辛かったの一言に尽きる。その後昭和51年の入替戦で専修に前半のリードを逆転され敗けた試合を見たが、この時はからずも拓大との試合をまざまざと思出した。戦っている選手も辛かったろうが、見ている方も相手が動き廻るのばかり目につき我方は立っているとしか見えない。やっている本人はゲームの動きに応じ左右前後に動いているつもりであるが事実は立止っている。だから相手の球をカットしてもこの球を友軍の間にキープできずすぐ奪い返される。即ち球を持たぬ者の動きが止っているからである。気持の上では張切ってせい一杯やっているつもりだが足が之に伴っていない。観戦者には縦横に動き廻る相手の色のみが目に入る。まあこんな具合でよくも引分けで逃げ切ったものであった。幸いその拓大が日大に敗れ、とに角四部優勝をかち取った。三部二部優勝の時はこんなに苦労はしなかった。

翌年リーグ戦の最中に肋膜炎を発し２ケ月の間床についた。原因は練習後の不節制。汗も拭わず麻雀、夜更かし、ラーメンをすするだけ。全く恥入るしだい。後輩よ、この徹は踏まんで呉れ給え。

翌年予科３年となったが荒井・浅枝・角田とセンタースリーの抜けた穴は如何にも大きく予科のＦＷは全く非力と見えた。この際とばかり念願のＦＷ進出を願い出で二階堂主将に同伴され、文部省の地下室で健康診断を受けに行った。その結果は「まあやって見ろ。ただし毎月健康診断に来るように」とのスポーツ医学の先生の御託宣でＦＷをやる事になった。このあと２年間位は一寸身体の変調を感じると文部省を訪ね診断を受け、大丈夫といわれると変調もなおるという状態であった。軍隊に入った時既往症を問われたので此処ぞとばかり、肋膜炎と答えたが丁寧に調べていたが「嘘を吐け、痕跡なし」と一蹴され即日免除にならなかった。

予科３年生のときのＦＷの弱化は３年後、最後の年に又現れた。浅枝・荒井の卒業はＦＷの突込み不足という結果をもたらした。技術的には前年のＦＷと大差ないと思われたが凄味に欠けている。両翼が本科３年生でセンタースリーが予科生であった事、それ自体彼等若い３人に精神的な何かの重圧をかけたのではなかったか。予科チームとしてプレーしている時の力一杯のびのびしたプレー振りが見られず、気ばかり焦るがどんなふうにリードしたらよいのかわからぬうちにシーズンを終り、全敗二部転落と情ない結果となってしまった。

剣の道に気剣体の一致という言葉がある由で、剣は気に勝てず、体は剣に敗れ、気は体に敵せず、と。気剣体のバランスを保ち何れにも片寄らずを良しとする。体力は走ることで鍛え、技は練習の積重ね、気力は修養でという事か。対手のラフプレーに挫けず、当方からラフプレーを仕掛けるな。之がサッカーマンシップか。

大掛君は名門高師付属中から紅顔と器用な足技をもって同時に入部した。中学時代はボート部の選手をしていたという。予科のクラスも同じ、本科でのゼミナールも同じだった。真面目に勉強し真面目に練習し何回かスキーにも一緒に行った。

彼は予科の終り頃から本科にかけて、責任感とファイティングスピリットに猛烈に傾いて行くように認められた。技術の話には必要以上に口をつぐみ、実行あるのみと強調していた。之が彼の自身に課した修養であったと想像している。それを口に出して強調する事により自己の精神の向上をはかっていたのではないか。社会に出てからもそれは続けていたと思われる。責任感が高じた結果神経衰弱を来したのではなかろうか。彼は口でのくだらぬ議論を軽蔑しむしろ憎悪していたように思われる。ますます純粋に近づいて行った。病気も快癒しメキシコにロスアンゼルスに活躍し、大いにこれからという時の交通事故が恨まれてならない。彼は嘘もお世辞も言わない男であった。純粋な心はえてして狭くなる惧れなきにしもあらず。もっと横着であったらと悔まれるのは私1人ではあるまい。

重見君は神戸一中からこれまた予科で同じクラスだった。入部したのも殆んど同時であった。入学当初からオトナの如き雰囲気をもっていた。体力特に筋力においては少々強さに欠けるところがあったが温厚にして黙々として練習に励んでいた。当時は本科へ進むと退部しないまでも練習を止める者が多かった。その中で1年上と我々の年次計11人は本科へ進んで止める者はいなかった。何故かはわからぬが余程蹴球部が好きだったからと思う。重見君は黙々でもないがマネジャーに専心し、サディズムではないか？と思わせる事も間々あった。夏季合宿の炎天下に犬の如く舌を出し、カラカラになった咽喉に休憩時僅かにカップに3分の1位の水しか飲ませてくれない。も少し飲ませろ！といっても駄目！の一言。ひどい野郎だった。晩年会社にやって来て「俺はガンで入院していたが切って治ってしまったよ」とニコニコ笑いながら言っていた。「お前さんにはトッついて見たもののガンの方で閉口して逃げだしたのだろ」とこっちも軽口で答えたものだがいくばくもなく急逝したとの報せを受けて全く驚いてしまった。彼の粘りと才気をもってしたらもっともっと仕事を仕上げたであろうに。

どうも書きにくい。同僚として長所も短所もわかり過ぎている。追悼文というと長所のみを書いて称えるのだが、それでは拙文で月並以下のものになってしまう。生きた人間像を描いて紹介したいので追悼文形式をやめてしまった。

荒井さん

村井恒典
（昭和13年卒業）

荒井さんという人は武州松山の土をつけたまま球を蹴り卒業し出征し、戦死した。

純真で陽気にはしゃぎ、ハッと気がついて照れる。本来気の弱い方なのに、強い大きな対手に泣きながら突撃して行く。あたかもそれがサッカーマンの義務であると自分に言いきかせて。(多少ファウル気味のところなきにしもあらずだったが) 決して器用な足技ではなかったね。でも心臓が強かったのか長距離を走るのは強かった。国立の箱根土地のグラウンドから練習が終ってから競り合って合宿へ戻る時いつもトップを走っていた。そして一番先に身体を洗って麻雀卓を占領していた。麻雀は石神井の寮でもまれたので強かった。麻雀同様碁も強かった。僕は4目置いて教えて貰った。将棋はポチポチで勝ったり負けたりした。

その荒井さんが見違えるような流麗な文章を書く。驚くべき文才を持っていた。練習日誌に、戦地便りに実にうるおいのある名文をスラスラしたためる。彼が戦病死した湖南省咸寧の地は、その後何回も策戦行動で通過した。勿論汽車に乗ってだが、通るたびにああ此処で彼は倒れたのだなあと追憶を繰り返したものだった。恐らく強健な、そして気の好い彼のことだから他人の分まで重い荷を担ぎ戦って、疲労を重ね病を得たのだろう。もっと適当にやっておれば病気などにならなかったろうにと。

戦後夏になると信州へ行くのに関越自動車道を東松山でおりて暑い野道を走らせながら、この時も彼を思い出していた。彼が生きていてくれたら一寸立寄って昔話をしたかったなあと。もっとも彼が生きていてもおそらく東松山にはいないで東京で活躍している筈なのだが。本当に惜しい男が死んでいる。

いつだれが進呈したのか彼をチンパンと呼ぶようになった。御本人も何となくハイカラなその響きにまんざらでも無く受入れていた。ところが9年だったか関西遠征の時、たまたま阪神パークを散歩していたところ、はからずも檻の中に御本尊が鎮座していた。これがいけなかった。その日彼は下唇を噛み顔を青ざめさせながら「こんどからチンパンと呼ぶ奴はブンナグルゾ!」と宣言した。少しも気取ったところのない男だった。

小西正夫君の思い出

後　藤　虎　雄
(昭和14年卒業)

もう10年以上も前になろうか。横浜のニューグランドホテルで、小西君の遺児であるお嬢さんの盛大な結婚披露宴に招かれ、二階堂晴三君や吉沢貞雄君と同席して祝辞を述べた記憶がある。中支に出征中戦病死された小西君の幼い遺児は、小西君の令兄の手許で育てられ立派に成人されご良縁を得られて、この日を迎えられることになったわけで、令兄にご挨拶申し上げるわれわれも、わがことのように嬉しくあらためて小西君の生前を偲び、ご冥福を祈った次第であった。

小西君と小生と岩崎寛貞君とは、昭和8年4月予科入学当時より同じクラスで机を並べサッカー部生活を共にした仲である。しかも、クラスの席順が小西君の次であったからいつも小西君の背中を見ながら授業をうけたという因縁もあり、サッカー部生活を通じても、私的にも、同君に兄事したのである。

入学当時予科は、武蔵野の原野を思わせる石神井の地にあり、サッカー部の汚い部室と草ボウボ

ウのグラウンドでわれわれの部生活が始まったのである。小西君の印象は、真黒な顔に眼ばかり光っている朴訥な地方出の少年という感じであったが、その年の９月から予科が小平の新校舎に移転し、サッカー部の練習も国立の箱根土地のグラウンドや大学構内のフィールドや小平で行われる頃には、小西君の新入部員らしからぬプレイ振りが異彩を放って来た。

先輩部員に混って練習やマッチをしても、彼の流れるようなスムースなボール捌き、止まることのない活動力とファイト溢れるプレイは見るからに魅力的であった。その翌年であったか、初めてオール一橋チームのハーフセンターとして神宮競技場の桧舞台を踏んだときは、朝日新聞紙上で絶讃されたほど、チームの要めとして活躍したものであった。サッカー好きで練習熱心であったことはもちろんであるが、天性の資質にすぐれたものがあったのであろう。

また、われわれも多くの部の後輩諸君も彼の天衣無縫ともいうべき、かざらぬ人柄を敬愛し、卒直にものを見、卒直にものをいう彼の周囲には常に明るい笑いが漂った。いや、彼ばかりではなかったのかも知れない。当時の部員の総てがそれぞれ個性をもちながら、卒直さと明朗さとで和気藹藹とした部の雰囲気を作っていたと思う。小生らが入部したとき最上級生であった長瀬凱昭先輩以来の薫陶と伝統によるのであろうか。小西君はそれをすぐれて体現したリーダーであったのだと思う。

しかし、小西君は本科に進んでから健康を害し、一時プレーも第一線から離れるようになり本人としても残念な時期が続いたことと同情される。その頃より彼の読書量が増し、特に文学・哲学への傾倒が強まったようで、彼の話を聞き、彼の手紙を読むことで啓発されることが多かったものである。

遂に、卒業前は健康がすぐれず留年の止むなきに至った一時期の小西君は、自らの体力を思い、将来を思い、内面的に沈潜のときではなかったかと想像されるが、当時鎌倉に療養中を見舞に訪れた小生と岩崎君に対しては、相変らず部の運営や残る学生生活について種々気をつかい却って激励してくれたことを思い出す。

卒業後小西君が八木商店に入社、大阪に勤務した時代に、たまたま出張中の小生が会う機会が一度あり、新しい仕事に専念する商社マンの元気な彼を力強く感じたことが印象に残っているが、やがて勤務地の上海で召集をうけ出征、不運にも戦病死されるに至ったので、ついに再び彼の明るい笑顔に接することはできなかった。

サッカー部時代を語るとき、小西君は忘れ得ぬ畏友の一人である。

サッカーは苦労と知った

二階堂　晴　三
（昭和15年卒業）

昭和14年秋、本郷のグランドで帝大と引分け、はじめて一部に残ることになり、15年春マネージャーの米山君となんともいえない気持で、戦争の待ちかまえている世の中へ巣だっていった。16年４月南中国広東の部隊へ現地入営したときは、生きて帰れるとも思われず、丸５年という中国軍隊生活への波乱の多い旅立ちであった。しかし、同年の米山君、池尾君、狩森君が、ともに護国の鬼

となり、異郷に散華したのにも拘らず、悪運強く復員して、わが戦後のくらしは始った。

それから今日までいろいろなことをしてきた。会社もかわって4回。ひとところに住みつかない習性か、さまざまなことに遭ってきた。本人は別に意に介していないが、流浪のお蔭で、話し種にはことかかないように思う。そして、波のまにまに漂ったこの生きざまを思うと、本人の意志とは別に、相手から与えられた天命というものに、その因があるのかもしれないともみる。

わが享受せる天命たるや、しからばなにか。余計な説は省略すると、それは苦労の一語に尽きる。悟ったわけではない。仕事をしていく限り、苦労はさけられない。よけては通れない。そして、その苦労をどうにか乗り越えていくと、ひきかえに思い出、それは自分だけが持つことのできる思い出を恵み与えられる。いまサッカーを思う。サッカーこそ、苦労そのものと思う。そして、苦労の度が高ければ高い程、深ければ深い程その思い出は楽しく、美しい。そして純である。この世にあって、とかく人をして道に叛かせる、金・地位・名誉への慾には全く無縁である。サッカーはこの思い出を恵むばかりか、また友情の世界を開いてくれる。この友情は、時としてともしびとなり、行く手を照らすのである。この源泉は、サッカー部の苦労という天命にあると漸く知った。

さてサッカーは、時にわが社会生活に大いなる示唆を与える。糧を与える。指針を示す。それは、サッカーこそ原理原則を忠実に履行しなければならないそのものだからではあるまいか。我流や、ごまかしは通用しない。そして原理は、練習によって体得せられる。ボールを蹴る技術は、教本や、コーチによって教えられても、身につけるにはきびしい練習による他はない。チームプレイ、戦術とて同様である。キックアンドラッシュの原則は、永遠にかわるものではない。いうことはやさしいが、実行となると、瞬発力、柔かい足腰、フットワーク、いずれをとっても日頃の自らの鍛練が必要だ。合宿が、仕上げのプロセスとしたら、先ず個人個人の基本技術の体得、これに必要な体力の充実は、日頃の本人の自覚と度重なる練習による以外はない。それはもう最初から苦労である。そしてこの苦労を通り抜けないで、サッカーはやり通せるものではない。モーロー部員には、サッカーは無理である。

これらのことを至らなかったわれに向っていって聞かせて、60年の部史を顧みると、この無窮のサッカー部に、ひとつの見方をしてみたくなる。それは創業と守成である。サッカー部の創業の年次は、諸兄の御判断にまかせたい。たしかに創業の苦労は多くして厳しい。しかしまた守成のむずかしさは、経験したものでないと分らない。昭和11年一部昇格。12年陥落。13年昇格。サッカー部は限りなく続く。そして伝統というものが、幸い築き上げられたとしても、一瞬の努力を怠ればたちまちにして、過ぎし語り草となる。部員のめいめいが、サッカーと勉強とか、運動は就職の方途とか、かりにもそんな次元の低い、甘い迷いにある限り、部は育たない。選手だけが部員ではない。全員がはかない依頼心を捨てて、たち向うところに守成の可能性がある。そこで、サッカーは苦労と知った。

わたしにとっては、分りかたが遅かった。

昭和15年卒業戦死者を偲ぶ

菅　瀬　十　朗
（昭和15年卒業）

われわれ大正生れは極限状態のなかを生き抜いたしたたかさ、何もないところから経済復興をなしとげた自信、我慢を重ね国のため家庭のため企業のため、自分を犠牲にして働いてきた辛抱強さの自負がある。

昭和15年卒業は５人のうち３人も国のため尊い人生を棒げた。米山・池尾・狩森戦死し、二階堂（晴三）と私が生き残った。米山・池尾は私と中学校（府立五中）も同じで狩森は上野中出身。戦後私はドサ廻りが多く東京勤務が少かったので、遺族の方ともお目にかかる機会もなく申し訳ないと思っている。米山の遺族の方とは一度お目にかかった。当時は母上、弟妹さん共にお元気だった。米山は名マネージャーとして精神的理論的にサッカー部をリードした。三菱商事に入社していたので、若し生きていたら立派な会社のリーダーになっていたに違いない。池尾は頑丈な体、猛烈な体当りシュート等、死にそうもないと思ったが運命は判らない（王子製紙勤務）。狩森は明朗な熱血漢、太った体でキーパーとして頑張っていた。皆から親しまれていたのに残念（三菱商事勤務）。皆全く惜しい人物を亡くした。予科時代にいた長谷川・安田をあわせると７人中５人死んだことになる。全く激動の時代を生き延びたものと思い生き残った者の責任をひしひしと感じる。何もなすことなくすごしてしまったがこれからでもできるだけのことをと思っているのだが。

私は５人のなかでも最も死ぬ確率は高かったと思う。インパール作戦参加、ビルマでしかも歩兵の小隊長として３年間第一線で戦争をしていた。負傷はしたが生き延びた。これも全く運命のなせるわざと思っている。

いずれにしても６年間喜怒哀楽を共にした３人がいないということは、なんとなく淋しく常に頭に浮んで来る。松本大先輩のお宅にお邪魔して楽しくご馳走になったことを懐しく思い出します。サッカー部で鍛えた肉体・精神力で頑張って戦争中も私は生き延びた。亡くなった三兄も同様頑張ったと思うが、平和な時でも何が起るか判らぬ世の中、まして戦争中の事とて、運命のなせるわざ如何とも致し方のなかったことと思う。

殊に最近の世の中、いつ何が起るか判らぬ時代、明日のことも判らぬ毎日、その日その日をベストを尽くして悔のないようにすごさねばならぬと思う。

同僚のほか、先輩後輩にも惜しい人がたくさん亡くなった。松本大先輩も、後輩がしかも惜しい人がたくさん亡くなられたことに対しては親が子を亡くしたように切なく、残念に思われていることと思う。この埋め合わせをするのが生き延びた我々の使命でしょう。

サッカーに感謝

金井雄吾
(昭和16年卒業)

1. 予科入学当時の印象

練習場、試合場での厳しい空気は当然のことながら、一旦練習を終えて着替えに部室に戻ると、上級生・下級生を通じて適当なユーモアを交えた批評やら、それとない教育をされる雰囲気がたまらない程楽しく、また有意義だった。部員相互間の団結や心の交流は主としてこの間に醸成されたと思う。

一方、臥薪嘗胆の長い間の二部時代を這いずり上って一部に昇格した直後だけに、その中心をなす心の持ち方は長瀬東作先輩により打ち樹てられ、築かれてきたことは十分に観念として持っていた積りだが、同先輩がご闘病の末亡くなられ、ご葬儀に参列してさらに何かぐっと自分の身にはっきりとしたものとして感ぜられたことが、未だに強く心に残っている。

当時未だお若い頃の松本大先輩ご夫妻よりあたかも松下村塾とはかくやといった雰囲気で我々部員を包んで下さったご高志を、感謝をもって40年後の今日も持ち続けている。蹴ったり走ったりを通じての鍛練もさることながら、人間としての繋がりを大切にすることをサッカー部に入って教えられたのは、松本大先輩ご夫妻のご薫陶によるものであった。

2. グランドの思い出

正直にいって霜解けの冬の寒い日や、真夏の炎天下、或いは雨風の強い日の練習はつらかったし、気も進まなかった。寒い日にビショビショに濡れたままの練習着に着替える時の気味の悪さは、思い出してもゾーッとする。しかしそれでも毎日練習に積極的に身を入れたのは、やはり勝負に対する執念であることはいうまでもない。今思うと練習で苦しさを味わうことが、すでに生活のリズムになっていたような気がする。たとえ練習の無い日があっても、本を明るい昼間から読む気はしなかったし、映画を見ても何か練習程の充実感が味わえず、どこか満たされないものがあって、苦しいがそのあとの充実感を求めて無意識に練習をしたのに違いない。特に小平のグラウンドの櫟林に囲まれたあの環境とその夕暮れが特に好きだった。自分の青春があの環境で練習に燃え尽くしたことを、今日振り返ってみても全く悔いはない。

特に幸いにも我々昭和16年３月卒業組は同級生及び下級生に恵まれて、華々しいともいえる戦績を挙げることができたのは無上の幸せだった。

予科３年の時は伝統に裏打ちされた対浦和高校定期戦は勿論、慶応のような難敵を向うに廻しての予科リーグ、或いは神戸高商といった名門を最後の全国決勝で破るなど、全勝といってよい戦果を挙げ得た。また学部３年では大学リーグ１位の慶応に続く同点２位ながらもリーグのＡクラスに入った戦績を残し、三商大リーグも楽勝して、一橋蹴球部の生活を終えたのは、この上もない幸せだった。自分の60年余の人生のなかで最も充実した時代であったことを感謝している。

3. サッカーに感謝していること

昭和17年に入営して、直ちに中支に送られ、作戦をしながら初年兵教育を受けたが、すなわち同時に腸チフスとマラリアにかかった。しかし幹候試験に合格するためには入院もできず、垂れ流し

ながら、高熱をおして教育を受けたあの苦しさは忘れられない。

2年後ビルマ貫通大作戦に参加間もなく病気再発して、入院した。今度は病院で連日朝になると周囲のベッドの兵隊が餓鬼のようになりながら死んでいった。自分はサッカーで鍛えられたためか、からだのシンが強く、ナニクソ病気に負けてたまるか、といった精神力でもちこたえて、どうにか内地へ後送後の治療まで漕ぎつけて彼等の仲間入りをしないで済んだ。サッカーでの心身の鍛練がなかったら恐らくは野戦病院で「戦病死」ということで、あっさりこの世から抹消されていたことだろう。

多摩湖線

いやしくも一橋出身者はこの名称に懐しさを感じない人はいないだろう。国分寺から狭山公園に至る短い私鉄で、現在では西武多摩湖線と称して、最近急速に発展した沿線の住民と一橋学生の重要な足となっている。然し戦前の多摩湖線は、現在なら赤字路線としてまっ先に撤去されるぐらい乗客が少なく、予科生が最大のお客であった。そのためこのお客は横暴を極め、寮生がストームをかけて車体を焼いてしまったという事件があったが、余り問題にされなかった程である。国分寺から線路の間の生えた草を分けて左右の薯畑を見ながら走る木造車は誠に牧歌的であったが、新宿あたりで飲んで終電車に間に合わず、30分位かかって寮にたどりつく時に、はじめてその有難味が分るというものであった。終戦後はにわかに人口がふえてきたが、一向に電車の能力に改善がみられず、屋根の上まで人が乗り、木造車体が文字通りふくらんではち切れそうな有様であった。当時としては全線が主食と化した薩摩薯の畑の真中を通るのであるから無理もないことであった。

戦後しばらくの間は、学校正門前の通りの突き当りに商大予科前という立派な駅があり、単線であるからこの駅が上下線の交換駅になっていた。現在は合理化のため予科前駅と次の小平学園駅が廃止され、中間地点に一橋学園駅が設置されて見通しがきかなくなった。昔は30分おきであったから練習後一台見送ると大変であり、時間に間に合わないと遠くから声をかけると待っていてくれたものだった。昭和15年頃に読んだ随筆に、多摩湖線に乗ったが大きなお金ばかりしか持合せがなく、車掌も釣銭がなかったら、車掌は平然として「まけときます」と言ったと書いてあった。伝統ある優雅さは今も残っているであろうか。心地よい風にふかれながら薯畑の中を走る電車の中で、一日の練習の疲れをいやした若い日の想い出をまた味ってみたい。

高橋道太郎君の思い出

あゝ水が飲みたい
綺麗なコップで
水が飲みたい　（高橋君の病床日記より）

早　野　広太郎
（昭和16年卒業）

道太郎君は昭和20年の終戦直後、ある結核療養所で病没した。友人達は遠く戦場にあって未だ帰還せず、ご親戚も戦火のためちりぢりになったとあれば、淋しい臨終であったに違いない。

その後竹中正三郎君（前三井物産取締役）等級友が中心となって、彼の病床日記を基にして追悼文集が企画されたが、戦後のゴタゴタのなかで出版社が倒産、日記も失われてしまったそうだ。しかし冒頭の絶唱を、竹中君は未だに記憶しておって、このたび筆者に語ってくれた。

考えても見よう。高熱にうなされ、食物も充分に得られぬ当時の逆境のなかで、彼の求めたのは冷い一杯の水であった。しかも手アカのつかない、綺麗なコップの水を望んだのである。戦時中の荒涼たる療養所の生活を想像すれば、鬼気迫る思いさえしてくる。その時彼の脳裏を去来したのは、学生時代喫茶店の卓上で飲んだコップの水であったに違いない。

予科・本科、6年間一緒にボールを蹴った高橋君は、フランス語の本を抱え、シャンソンをくちずさむ一面もあった。浦高戦や予科リーグには出場したが、本科になってからは、体調を崩したせいか、グランドで観戦する機会が多かったように記憶する。

亡くなった人の面影には、どこか淋しさがつきまとうものだが、ユニホームには着換えず、外套の襟を立てて、小平の雑木林のなかで練習をみていた彼の姿が浮んでくる。

卒業後日本郵船に入社した。戦時中に発病、長い闘病生活に入ったが、彼に付添って献身的に看護してくれた一女性がいたそうだ。暗い病床生活の中での美しい話として、ここに紹介させて貰っても、差支えあるまい。この話をきくと何やらホッとした思いにさせられるのである。

60年のサッカー部の歴史のなかに、この拙い一文を捧げ、高橋君のご冥福をお祈りする。

つながりのなかで

吉　沢　貞　雄
（昭和16年卒業）

大学に入って、サッカー部に入部したとき、せいぜいクラブ的なチームと予想していたのとは大違いで、平日、日曜、祭日はいうに及ばず、雨天の日も休みなしの猛練習には驚いた。

私が入学したときは、部が四部から連続優勝して、一気に一部までかけ上って来た年だったので、その頃の上級生の方達には、得難い個性を持たれた方々が多かった。故人になられた、浅枝・神野・新井・大掛・小西・米山・狩森等の諸先輩はプレーの上でも、或いは人間的な面でも忘れ得ない人々だ。また同期の高橋・中森（旧姓荒川）後輩の松岡・茂木・松浦の諸兄も昨日会ったばかりの人のように近い人々だ。この方達を含め、人生で一番大切な成育期を部生活を共にしていただいた、先輩、同僚、後輩の方達の影響は、私の人間形成上、何にも増して大きいものだった。このたびはからずも四十雀チームが結成され、40年振りに球に触れる機会に恵まれた。こうした機会に、私達

の卒業後の部の歴史を引き継いでこられた後輩諸君や、現役の人達と接することができるのも、無上の幸せというほかない。

荒川守之助君の追憶

吉田富彦
（昭和16年卒業）

昭和10年4月予科に入学と同時にサッカー部に入部した者は15名を超えていたと記憶する。

昭和16年3月学部卒業まで部生活を続けた者が早野君以下9名だが荒川守之助君もそのうちの一人である。私は予科3組で荒川君・吉沢君と3名が一緒にサッカー部に入ったのが、同君との付き合いのそもそもの始まりだ。守都宮中学出身で、中学時代運動部の選手をしていたわけではないが、ボールを蹴った経験をもっているということで入部してきたようだった。体格は大きいほうではなく中肉中背で頑健というよりむしろ華奢なタイプで器用さを身に付けていた。宇都宮ナマリで話す言葉の一言二言はサッカー部内で特異のもので関西出身者の話す関西弁と共に部内での笑いの種となっていた。

予科3年春の予科リーグ、秋の高商大会にいずれも優勝という輝かしい成績を挙げ、学部になって大学リーグ一部で上位に入る大きな足跡を残した当時の商大サッカー部のその戦績の裏に、日頃激しい練習を通して練磨したフルバックとしての同君の立派な活躍が記されているのだ。合宿練習をはじめ猛練習でくたくたになって部室に帰ってきた時に、荒川君得意の弁舌をよく聞かされたものだ。奇声を発しながらの話がはずんで、皆の爆笑をよぶことがしばしばだった。グチめいたことをこぼすこともあったが、いつも陽気に努めながらも、決っして他の者に負けてはいなかった。

一旦グランドに出るとファイトを燃やしていた。ボールを蹴ることが好きだからサッカーはやめられないといっていたのが思い出される。早稲田、慶応、帝大等の諸強豪のフォワードを相手にして大きくない体でよく走りよく戦った。得意の果敢な猛タックルを相手にくわして、試合の後でしてやったりと喜ぶ賑やかな声、またその反面、敵にやられた時はいつも口惜しがって、繰り返し繰り返し残念がっていた。

常日頃慎重にものを考える人だったが、練習を離れても持ち前の明るさを忘れなかった。相手に文句をいうようなことがあっても不愉快な気持を与えなかった。好き嫌いははっきりした性格だったが、付き合いのよい友達で他人に憎まれるということはなかったろう。それも同君の人徳の致す処と申し上げたい。真面目な生活態度で真剣に事を処することを忘れず、一方いつも明るい話題を部内に提供する人柄は、運動部のチーム団結のために大きな役割を果していた。

私は学部に進んでから奇しくも荻窪の天沼で3年間同じ素人下宿で彼と共に過した。この下宿には2年後輩の山田久寧君も入って来たのだが、運動部の生活を離れて下宿生活にもいつも明朗なよい雰囲気を作ってくれた。とかくルーズになりがちな下宿生活のなかでも、つとめて几帳面に動いて模範を示していた。ゼミナールは我々サッカー部の仲間では1人だけ井藤教授ゼミに進んだが、練習に疲れても真面目に勉強しようという意欲を持っていた態度に敬服させられた。酒はほどほどに飲み過ぎるということはまずなかった。酒を飲むより友達を誘って映画を見に出かけるほうだっ

た。

卒業と共に三菱電機に就職、陸軍に入隊して復員後、中森家へ養子に行かれてその後亡くなられたが、今回追想文を書くことになって、ご命日を確かめようと今さら相済まない気持で未亡人にお電話してうかがった。陸軍に入隊して満州で2年、パラオで2年転戦の上、陸軍中尉で復員、昭和22年結婚、しばらくして三菱電機を退職、足利市の中森家の祖先伝来の家業造り酒屋を継がれて、酒の醸造販売に活躍しておられたが病を得て昭和31年8月3日胃ガンで亡くなられたとのことである。亡くなられてからもう25年を経過した今日あらためて中森君の元気であった学生時代の姿を偲び心からご冥福をお祈りする次第である。

なおご遺族（未亡人）のご住所は下記

足利市通5丁目2822　　中森　薫子　殿

サッカー人生

片　山　光　夫
（昭和16年12月卒業）

「六星霜ボール蹴りつつ暮れにけり。」これが卒業アルバムに載せた私の商大6年間の感想である。予科・本科を通じサッカーのみに生きたといっても過言ではない。

往時、神戸と並んでサッカー王国だった広島に育った私は、小学校5年からボールを蹴り始め6年のときには学童蹴球大会で優勝したこともあり、すっかりサッカーのとりことなった。中学時代は蹴球が校技ともいうべきスポーツで、部生活こそやらなかったが、対外試合も経験し、毎日ゴムマリと遊んで5年間を過した。予科に入るや、身体がよいため特に眼をつけられたボート部の執ような勧誘を退けサッカー部に入部、卒業までボールを蹴りつづけた。同期は小兵ながら頑張り屋のキャプテン鈴木英坊、折下章名マネージャー、優雅なプレーをする「ダボちゃん」こと桜井孝次君（後山本姓となる）。海軍士官で戦死した茂木利孝君。惜しくも病で亡くなった、物凄いスライデングタックルで鳴らした宮崎豊治君。そうして55才余の若い身空でガンに惜しい命をうばわれた私の長年のよき相棒、名インナー松岡義彦君と、私の6人である。当時商大サッカー部は諸先輩の並々ならぬ精進努力のおかげで基礎もすっかり固まり、隆昌の波に乗っており、私達の6年間は正に黄金時代ではなかったかと思う。予科時代は高商大会で3連勝。大学リーグでは一度二部へ落ちた苦い経験があるが、翌年直ちに復帰、大半を一部でプレーすることができた。昭和15年のリーグ戦で早稲田に勝ったことは忘れられないうれしい想い出である。想い出といえば数限りないが、練習後多摩湖線の電車の来る間立寄った武蔵野の林の中の山小屋ブルーベル。冬の高商大会で雪ダルマのようになったボールを蹴り込んで優勝したこと。試合の都度グランド近くの銭湯で着替え、試合後泥んこの身体を洗って迷惑をかけたお風呂屋さんのこと。痛飲して暴れ、本当に楽しかった新井薬師の料亭での毎年末の納会のこと、など走馬灯のように浮んでくる。

さて、予科に入る迄ボールをまともに蹴れないものが大半の商大サッカーが、なんで経歴豊かな選手の多い早・慶などに対等に戦えたのだろうか。これは伝統とファイテングスピリット、練習に次ぐ練習の賜物にほかならない。日夜練習に明け暮れ、合宿の時など血尿が出たこともあり、よく

あれだけ練習をしたものだと思う。もっとも体力に恵まれた私が一番怠け者で先輩・同僚に迷惑をかけたことを思うと今さらながら恥じ入る次第。最近のサッカーは昔と違って華麗というか体当りも少くスマートになったので、昔の練習方式は今は通用しないかも知れない。しかし技術の基本を着実に身につけること。体力をつけて相手に動き、走り負けをしないことは今も変りがない。これには練習以外にないのではなかろうか。

社会に出てからも復員後、職場住友銀行の有志を集めてサッカー部を作り、リーダーとして40才近くまで蹴りつづけた。その後は社内大会などがあれば「いい年をして」と人に笑われながらも白球を追った次第。しばらくボールを蹴る機会に恵まれなかったが、昨年私の所属している神戸キワニスクラブでサッカーの同好会を作ることとなり、すでに還暦を過ぎた身ながら好きな道は忘れられず、年寄り連中のリーダーとして時折ボールを蹴っている。夕陽を浴びて走り廻り汗を流した後のビールの美味さはまた格別である。ああ！ウマ年生れの私はその干支に因んで一生蹴る運命にあるのかも知れない。

最後に松本大先輩を始め諸兄のご多幸を心より祈念するとともに、多くの物故諸兄のご冥福をお祈り申し上げる。

松岡君を憶う

折下　章
（昭和16年12月卒業）

商大サッカー部の黄金時代は、松岡君のシャープなプレー、数多いゴールゲット抜きには語れない。彼は数少いサッカーの経験者として当然の如く入部し、その年の秋には早くも代表メンバーとなって活躍した。以来卒業まで常に左インナーのポジションを守り、左ウィング実兄清水氏との文字通り血の通ったコンビは相手チーム守備陣の突破口であり、商大サッカー部のチャンスの源泉でもあった。もともと、さして体格に恵まれないのに天賦の直感と瞬発力は鋭く、最後の力を振り絞って常に相手ゴール前に躍り出、商大に松岡ありと怖れられていた。

大げさなことの嫌いな、むしろシャイな一面をもつ彼は、クリーンシュートや体当り押し込みでゴールを奪っても、だからといって躍り上って喜ぶでもなく、ガッツポーズをとるでもなく、何でもないような顔をして相手ゴールを背にスタコラと引き上げてくるような男だった。大事な試合を落したり、血の滲むような練習にもかかわらず敗退するようなことがあっても、彼は僚友の涙をよそに決して泣かなかった。だからドライでクールでニヒルな奴との印象を与えさえもした。がそのとき彼は次の行動へ激しい意欲を燃やしていたのである。

彼はおそろしく回転の早い頭脳の持主で、何事によらずあっという間に徹底的に分折し、合理性に立脚して思索し、素晴らしい結論に到達することができる男だった。にも拘らず、人間関係では非常に温い側面があり、サッカー部時代の後輩共は、あの軽妙で機智に富んだ冗談や、ときにはわさびの利いた寸鉄人を刺すような皮肉や警句をぶつけられても（彼は茶目っ気も多く、それによって鈍い相手がどんなふうに反応するか楽しんでもいたようだったが）秀れた兄貴として常に最高に敬慕していた。

彼のこの人間愛はその後戦場や朝日新聞社の中で、彼の鋭さと共に更にさらに成長開花したらしい。彼の没後、朝日の人々によって追悼の文集が編纂されたが、各年代各場所で彼と接触することのできた人々が一様に、彼の鋭敏な頭脳と知性豊かな思索・行動と共に彼の温い人間性との心のぬくもりを覚える交わりを忘れられないと偲んでいる。

トマス・マンの作品が彼の若いときの愛読書だった。小平の練習からの帰途、電車の中で「魔の山」をひもときながら、きっと彼は主人公ハンス・カストルプの深く鋭い思索、そしてその発露としての名文句に触れ、共感してのことだろう、例のハニカミ屋のスタイルよろしく、独り含み笑いしていた姿も忘れられない。彼の人間形成の多くをトマス・マンに負っていると思われてならない。

ベートーベンのクロイツェル・ソナタが好きで「レコード聴きに行こう」と言っては、よく荻窪の家に立寄ってくれた。(他にお目当てがあったかも知れない) クロイツェル・ソナタのあの歯切れの良い主題メロディーが彼の好みにぴったりとマッチしていたのだと思う。

ドイツ空軍の傑作戦闘機メッサーシュミットに惚れ込んでいた。きっとあの科学技術の粋を凝集したような磨き上げられた鋭いスタイルが彼のお気に召していたのだろう。

そして彼自らは帝国陸軍の華と謳われていた機械化10センチ加農砲の青年将校であった。その機動性と精度・威力をきっと誇りにしていたに違いない。もっとも、彼はその後船舶兵部隊に転じ、比島決戦の山野に悪戦苦闘したのであるが、その才気は戦場においても遺憾なく発揮され、多くの人の命を救ったようだ。

松本大先輩の勧奨で朝日新聞社に入社したが、そのときすでに「われは論説委員をめざす」と自らの前途、任務を明言していたと聞く。そして20有余年、講和前のロンドン総局特派員、(当時すでに彼は今日の英国病を予見していたらしい。因習と旧弊の社会が如何に不合理、非現代的であるか、よく聞かされたものだ。) オーストラリヤ特派員、(その間、メルボルンオリンピックの記事、米国海軍機動艦隊に便乗しての南極基地からの通信は忘れられない。) 東京、大阪両経済部部員、デスク、(学生時代もそうだったが、彼はどこで何時勉強するのかわからないけれど、大蔵省記者クラブ―財研―では屈指の理論家、論客で朝日に松岡ありと畏怖されていたらしい。また、後の総理、当時の大蔵大臣池田勇人には格別目をかけられたと聞く。朝日の内部紛糾時には、持前の合理性で対処し、相当頑強に抵抗して所望の方向付けに成功したと聞く。) を経て正に昭和39年に論説委員となった。

彼の論説は経済合理性に立脚し、自由人として縦横に (朝日の) 主張を展開したものだった。「君、僕の書いたもの判る筈だがな」とよく言っていた。(こちらはその実、これは松岡君の筆になるものだとは必ずしも判明しなかったのだが)

左インナー
魔の山
クロイツェル・ソナタ
メッサーシュミット
機械化砲兵
比島決戦
朝日新聞論説委員

脈絡のない羅列のようだが、彼と重ねてみると一つ一つが彼らしさを表現して浮び上ってくる。

惜しくも短かかったが素晴らしい生涯であった。(「あまり大ぎょうな言い方するなよ」と言われそうだ。)

長い短いといってもどうせ大差はない。やがて三途の川の向う側で、その後の報告も含めて歓談しよう。それまでは、われわれの心の中へしばしば訪ねてきて欲しいとねがう。

茂木利孝君を偲ぶ

鈴木英二
(昭和16年12月卒業)

茂木君は、醤油で名高い千葉県野田の産で、東京府立五中(現小石川高校)より、昭和11年4月予科に入学し、サッカー部生活を共にした。偶然同じクラスに編入され、級友には、故松岡義彦君、故宮崎豊治君(途中退部)、そして折下章君がいた。学部に進みゼミナールも金子鷹之助先生のもとで一緒に学んだ。

昭和16年12月卒業し、王子製紙に入社したが、太平洋戦争勃発のため、直ちに海軍主計士官として入隊し、艦船本部詰めを経て戦場に赴き、昭和19年2月17日トラック島において、壮烈な戦死を遂げ、護国の柱となられ、戦功抜群により、海軍主計少佐に、二階級特進の誉れを得られた。

御霊は、まだ南洋の海深くに眠っておられると聞いている。(戒名、竜生院南烈利生大居士)

従って、彼との交遊は、学生時代だけであり、いま私は、40数年前の懐しい数葉の写真を前にして、往時の茂木君の面影を、思い出しながら、この拙文を書いている。

彼の出身東京府立五中は、東京高師(現筑波大学)付属中学と共に、中等サッカー界の名門であったので、ボールを蹴るのが好きで、入部して来たのは、われわれと同じであったと思う。

丸い容貌、短駆ではあるが、内に満々たる闘志をたたえ、そのタックルは、小さい鉄のかたまりが、相手の足もとに、転り込むような、強さをもっていた。

彼は、まことに真面目一途な円満な人柄で、人の話はよく聴いてくれ、私もなにかとアドヴァイスを受けた一人であった。しかし、自分には極めて厳しく、安易な妥協に走ることのできない面を持っていた。

学部に進んだとき、金子ゼミに学び、いわゆる勉強か、運動かの問題に真剣に取組み、悩み抜いた彼は決然として前者を選び、部から離れて行った。しかし、苦悩して歩いてみた路は、必ずしも平坦ではなく、心を満たしてくれるものではないことに思い当り、再び部に戻って来た。

この時の彼の心境は、サッカー部のもつ独特の『良さ』。それは、部員それぞれが、ボールを蹴るという同じ場において互に心技両面を切磋琢磨し、戦い即ち試合によって、総決算をつけ、また、次の向上につなげて行くという具象的な処に心惹かれて来たものと思う。その下地には、ボールを蹴ることがたまらなく好きであったことはいうまでもない。

かく、彼は自らに、峻厳であり、自分が決めたことには逡巡することなく、飛び込んでいく勇気と決断を持っていた。帰部してからの彼は、最上級生として率先してしかも、黙々として、グランドでボールを追っていた姿を思い出す。

今頃は、極楽浄土の蓮の葉の上で松岡君宮崎君ほか、今は亡きサッカー部の諸兄と、楽しくボー

ルを蹴っておられることと思う。

サブとして、またバックとして

村　木　杉太郎
（昭和17年９月卒業）

昭和17年９月30日に学校を卒業するとその翌日には海軍経理学校に入校、４ケ月の補習学生の生活を終了すると同時に巡洋艦筑摩乗組、２ケ月間の見習を経て、翌年４月末にはトラック島で駆逐艦朝凪の主計長として赴任するという、まことに忙しい学生生活との訣別であった。そしてそれは、サッカー部生活との截然とした切り離しでもあった。南方諸島での海上生活、帰国後は大阪での多忙な軍需監理官としての軍人生活は、戦時という特殊環境と東京を離れていたという両方の関係であろう、サッカーとの縁を完全に絶ち切ったようであった。そして戦後の混乱は生活することの苦悩とも連って、サッカーとの縁を益々遠いものとしてしまった。繋がっているのは、松本先輩をはじめとする諸先輩や同僚及び後輩の諸君との交流の絆であろう。そしてこの絆が絶ち切られた青春の思い出を浮び上らせてくれるのである。

サッカー部生活の思い出を辿るとまず浮んでくるのは苦しかったことばかりである。春の国立での合宿―シーズンオフの間に鈍った体に鞭打って谷保天神までの朝のランニング、箱根土地のグランドで一日の練習を終えて富士見通りを馳け足で帰ってきて合宿の玄関でへたり込んだ夕方等今もまざまざと思い出す。

夏の小平の寮での合宿―グランドが目の前にありながら夏の日盛りに西瓜畑の間をぬって遥か津田塾の向うを遠廻りするグランド迄の往復、沙漠のようなグランドで汗と泥で真黒になっての練習、うがいをするためのみに与えられる一口の水は、かえってビールやサイダーやアイスクリームを思い出させる辛さ等昨日のことのように思われる。

これらの苦しい思い出も今ではさわやかな青春賦である。

私にとってサッカー部生活の大部分は練習であった。そしてサブとしてまたバックとしての部生活であった。毎日毎日の真剣な練習が試合の成果を生むことには違いはないが、練習そのものの中に青春を賭ける意味があったのではなかったか。黙々とボールに空気を詰め、レギュラーのためにボールを拾うまたパスを出すサブとしての練習の意義、ティーム全体のためにつくすバックの動き一つ一つの中にサッカー部生活の重みがあったような気がする。

私は昭和25年通産省の役人から警察予備隊の制服組の一員として国の防衛に身を投ずることになった。爾来26年間現役として頑張ってきた。昭和51年に定年でユニホームを脱いだ後も、自衛隊のため国の防衛のためお手伝いをしている。国の防衛は、万一の有事の際に備えて万全の態勢を築いておくために平時から防衛力を準備し訓練をしておくことであるが、最もよいことはその有事を来さないことであり、訓練の成果が現実に問われないことである。あくまで縁の下にあって表に出ないことが最も望ましいことである。

この意味で防衛にたずさわる者の精神とサッカー部のサブのまたバックの精神と相通ずるものがあるのではないかと思う。

私が自衛隊の生活の中で連隊長あるいは師団長として表に出た事はあるが、それは26年の間のわずかに４年間である。それ以外は後方兵站の問題や人事の問題に取り組み、また幕僚として指揮官の頭脳・手足として補佐の努力をしてきた。まさにサブとしての努力であり、一点をとるために押し上げるバックとしてのチームへ貢献の努力であった。

私の青春の思い出が辛く苦しい練習が主なものであり、サブとしてまたバックとしての努力のものであるが、それが少しの悔もないさわやかなものであって、なお私の一生を支配する意義のあるものであったことを嬉しく思うものである。

水島　行君を憶う

村　木　杉太郎
（昭和17年９月卒業）

昭和19年の初夏の候だったと思う。私が駆逐艦乗組を終えて軍需省の軍需監理官として大阪勤務となって間もなくの或る日曜日、夙川の下宿へなんの前ぶれもなく、全く思いがけず水島からの電話がかかってきた。上本町６丁目の近鉄の終点にいるとのことであった　早速道順を教え、時間を見計らって阪急線夙川の駅に出迎えた。彼は少尉の襟章をつけ鉄兜背のうを背負って完全な武装で南方に向う途中立ち寄ってくれたのであった。

その晩は下宿の小母さんに頼んで酒の用意をしてもらい、深更まで飲みかつ語らったのであった。話は、最近の軍隊生活から始まったが、落ちつくところは勿論サッカー部時代の思い出であった。翌朝連れだって下宿を出て、夙川の駅頭で、彼は神戸に向い、私は大阪へと左右に別れた。それが二人の最後の別れとなった。彼は間もなく門司から上船、船団を組んで南下し、比島沖で敵潜水艦の攻撃を受け、乗船は沈没し、彼は若い一生を終わり再び遭うことのない世界へ行ってしまった。

水島行君とは予科の５組で入学当初から一緒であり、教室では同じMの頭文字のために前後して座り、教室を出れば部室、グラウンドでまた一緒という仲であった。

彼は浜松一中時代からサッカーの選手であり、我々同年の仲間で唯一の経験者として最初から綺麗なインステップキックができる新入生であった。彼は人のことは気にせずひとりでさっさと実行するようなところもあったが、一面何となくさびしがり屋のところもあった。水島家の末弟としての育ちから滲みでるものであったろうが。予科入校当初から煙草を吸い、帽子を一寸斜にかぶり、一見遊び人風の姿勢もあったが、根は純情であり、サッカーでは全身をぶつけていくといった激しい情熱を燃やしていた。しかし練習後話をしてみると極めてクールな批判者的態度をしばしば示したのも事実であった。

学生時代の彼の心の中には、怠惰な傍観者的心情と、サッカーに打ち込む情熱とそれらの生活を冷たく見つめる批判者としての心情の三者が常に同居し葛藤を続けていたのではないかと思われる節がある。

昭和13年、我々が予科２年のときの部誌に、彼は、人生を１隻の帆船になぞらえて、３人の乗組員に、１人は怠惰な風まかせの人間の心情を、１人は運命を信じ情熱的な生活を送る人間の心情を、１人には総てを偽りであるとする批判者の心情を語らせている。

昭和15年、本科1年のときの部誌には「随処随想」と題して次のように記している。

「練習のない雨の日の喫茶店で」

道行く人々を硝子戸を越して見る傍観者として感想を述べ、

「埃立つグランドにおいて」

日ざしはもはや夏の合宿を思い起こさせる。汗が目に入り、土埃は渦をなしてきりきりと舞い上る。たちまちにして泥人形ができた。ボールを追う恰好、蹴る姿、意気と熱、偉大なるかな蹴球の姿よ。リアリストもロマンチストもまたデレッタントもペシミストも総てが詩人となって、真を、美を追求す。とサッカーに打ち込む情熱を賛美している。

「夜半下宿の6畳で」

漱石を蘆花を樗牛を想って人生観を求め、「吾人、すべからく現代を超越すべし」と結んでいる。

青年水島行の心情は、吾人の若い日の共通の心情であったように思われるが、これらの心情の総てをサッカーに燃やし尽くして若くして逝った水島のことを思うと今も胸がしめつけられるような気持がする。ご冥福を心から祈る。

あ の 頃

居 川 達 一
(昭和17年9月卒業)

昭和12年4月、広島から上京して、小平の門をくぐった私を待ちうけていたものは、各運動部員の強烈な入部勧誘であった。

中学時代に続けて「バスケット」をしようか、或いは誘われるままに「ア式蹴球」にとびこもうか、と迷っている中に、いつの間にか「グランド」で、球を蹴りはじめていた。昭和17年9月、繰りあげ卒業迄の5年半、春3月の合宿に始まり、年末の3商大戦迄、「練習につぐ練習」の毎日であり「猛練習」の一語につきる部生活であった。シーズン中は講義にも、ゼミナールにも、全く出席することなく、「君たちは学生とは思えない、肉体労働者としか思えない」と、某教授にひやかされた毎日であった。中学時代に選手の経験を持たなかった部員達が、大学リーグ一部で戦い抜くための唯一の生きざまであった。

予科3年秋、浦和高校との定期戦に3対0で完勝、大学リーグ最終年度第1戦に、早大に4対1(2?)で完勝したものの、その後連敗し「2部に転落」という不結果を残し、17年9月卒業、直ちに戦場に馳せ参じたのであった。それから5年間、南方の地に、また海に、青春の情熱を余すところなく注ぎこんだ。戦いに敗れたが、些かの悔いもない。

在学中先輩・同僚・後輩各位の温かい友情にめぐまれて日々を過すことができたが、特に松本大先輩に賜わった恩情は、生涯忘れ得ぬものとして、深く心に残っている。

就職について親身も及ばぬご配慮をいただいたこと、卒業時に箱根にご招待いただいたこと、戦中戦後を通じ新年にご自宅を学生・卒業生に開放していただいたことなど、いずれもが心にしみて有難く、お礼の申しようもありませぬ。

同僚、山田久寧君が「ニューブリテン島ブーゲンビル」で戦病死、また水島行君が「輸送船」と

共に日本近海で沈んだことは、思うだに痛恨きわまりない。山田は、ひたむきに猛進する直情経行の男、水島は「クール」で、時には「ニヒル」の面と表わしながら、実は気の好い「甘えん坊」であった。この二人の仲間は、今何処で何をしているのであろうか。こうして生き永らえていることは、全く申し訳ない。

昭和19年春、海軍主計科士官として勤務していた「台湾高雄海軍航空隊」に、数百名の海軍飛行予備学生が、実用機飛行訓練のため到着した。彼らは大学・高専の勉学を終えた後、選ばれて特別教育を受け、海軍少尉に任官した青年である。

学生長　杉少尉（早大）、学生　大山（帝大）・大塚（慶大）・植村（立大）各少尉は、何れも神宮で相見えた、リーグ戦のプレイヤーであった。これらに加え、関西大学リーグの出場メンバー達と、航空隊の一隅に、グランドを急造し、ボールを追ったものである。

数ケ月の訓練を終えた彼らが、第一線に向って出発した数日後「植村少尉 特攻隊員として出撃・戦死」という電信を手にした時の胸の痛みは未だに忘れられない。

蹴球部史の寄稿ということであるが、私にとっては「青春は即ち戦争」であり、どうしても筆が、この方向に走ってしまう。何卒ご容赦ねがいたい。

山田・水島・植村という、今は亡き友の冥福を祈りつつこの拙文を終える。

サ　ブ　の　心

藤　塚　亮　策
（昭和17年９月卒業）

「君にとって商大蹴球部は何か」と聞かれたら「私にとってそれは心身形成の故里であり、同部の一員であったことを大変誇りに思う」と感謝の念を籠めて答えるであろう。

私は東京府立五中の出身で商大蹴球部には角田さんはじめ多くの先輩がおられたことから入部した。元来運動神経が鈍く、練習は人並み以上に励んだつもりですが一向にうまくならず、本科に進んでからは殆んどをサブ或いはマネジャーとして過ごした。５年半の部生活を兎にも角にもやり遂げることができたのは、商大蹴球部のすばらしい個性に魅せられたからだと思う反面、私自身は何も貢献できなかったのではないかと秘かに危惧している。特に、本３の時のリーグ戦で緒戦に強敵早稲田を破ったものの、その後故障者の続出ということもあって連敗し、先輩が必死で守りつづけた一部の座を失ったことは何とも申し訳なかった。

太平洋戦争も急を告げ、繰り上げ卒業で海軍経理学校を受験したが心臓肥大症ということで身体検査で落された。陸軍でも同様のことで第一乙種と辛うじて合格し、召集兵として東部第77連隊に入隊した。屈強な現役兵に互して連日の猛訓練、どうなることかと思ったが、完全軍装の強行軍でも他に遅れることはなく、そうしたことが買われてかいつの間にか連隊の先任幹部候補生になっていた。５年半の蹴球部での心身の鍛練に較べれば軍隊はそれほど楽だったわけだ。

厳しい階級制度のなかで、時には理不尽なこともあり納得できかねることについてしばしば古参兵に意見を申し入れたが、その都度生意気な奴だと随分撲られたものだった。幸い酒保に２年先輩の堀尾さんがおられ、慰められたりアンパンを頂戴した。あの味は今でも口の中に残っている。

先輩のみなさんそれぞれに、大変お世話になったことは枚挙に暇がないが、殊に松本大先輩にはお世話になり放しで恐縮至極です。入営のときには早朝上野駅までわざわざお見送り下さり、何かのときに頼りにしろと連隊所在地の柏にお住いのご友人石戸長九郎さんをご紹介までして頂いた。

また、卒業前にわれわれを箱根の松阪屋にお招き頂いたことも一生の想い出です。その折同行されたのか別の機会だったのか定かではないが、神野先輩から〝君はいんぎん無礼なところがある〟と指摘されたことを憶えている。東北の農村で育ったせいか、思うことと行動がうまく連動せず今でも反省することがある。

終戦後、疏開先から西荻窪の社宅に移り松本さんのところにご挨拶に伺おうと思っているうちに、1ケ月の余を経過し敷居が高くなっているところで、夜分遅く西荻の駅でパッタリお会いした。「オイ、藤塚君どうした？」「ハイ、これこれしかじかで、つい忙しく申訳ありません。」「そうか総理大臣にでもなったのか？」そのあとは駅前のおでん屋でさんざんご馳走になると共にそれとなく絞られたが、その折も神野さんを思い出した次第です。

断片的な感想の羅列で恐縮ですが、私のサブとしての、またマネジャーとしての師表は米山先輩だった。先輩のお住いは池袋だったが練習が終ってから暗くなるまで、よくボールドの前でキックの相手をして下さった。当時の商大蹴球部が一部で大活躍した蔭には米山さんの名さい配が大きな役割りを果していたように思われる。入営される直前にお宅を尋ねたが、書斉で静かにパスカルを読まれていた姿が今でも脳裏に焼きついている。本当に立派な先輩を戦争で失い痛恨です。

3年ほど前、私が勤めている会社の社内誌に載せた随想のなかで、サブの心について若干触れたことがあるが、意外と多くの人から反応があって意を強くすると共に、商大蹴球部への感謝の念を新たにした次第です。

山田久寧君のこと

藤　塚　亮　策
（昭和17年9月卒業）

君は卒業と同時に海軍経理学校に入校、士官となってからは南方に転戦、終戦をブーゲンビル島で迎えられた。祖国帰還に当って同島の南端から北端の集結地まで人跡稀な熱帯のジャングルを部下を引率して山越えの途中、病に犯されて壮烈な戦病死されたことを、小生復員後伝え聞いた。私共、当時としてはもとより死を覚悟で戦場にのぞんだわけだが、同君の死が終戦後のことだけに返す返すも残念で堪らない。

君は私と同じように余り器用な方ではなかったが、それを補って5年半の蹴球部生活を全うするために人一倍練習に励むと共に、サブとして部の礎たらんと自らに鞭打つ責任感の旺盛な男だった。敗戦で打ちひしがれた部下全員を一日も早く祖国に連れ帰るために己れを捨てて、恐らくは無理に無理を重ねた結果が彼を還らぬ人にしたものと思われる。

彼は首が長くネックとアダ名されていた。首を振り振り疾走するさま、ライトウイングとしてカマキリが獲物を襲うに似た形でゴールに向って眼鏡ごとヘッディングする様子が、昨日のことのように想い浮ばれる。

彼のプレイ振りには猪突なところがあったが、心根は大変デリケートで慎重だったと思う。彼は予科1年の夏の合宿から入部したが、それまでの間、3ツの部を遍歴するも納得がいかず、生れて初めて経験したクラスチャンでのサッカーの試合出場を通じて蹴球部の存在を知って入部し、辛い練習と先輩方にもまれているうちに次第に、己れの青春を注ぎ込む場所はここだと体得するようになったと述懐していた。

君はまた人一倍純情な男で、路傍の小さな花にも愛情を注ぎ「行く末は誰が肌ふれん紅の花」などとつぶやいていたのが耳に残っている。また大変な勉強家でもあった。荻窪に下宿していたが、練習のドロンコ姿とは打って変りキチンとした姿で正座して読書に励んでいた。最初のうちは受験勉強から解放されて選択の自由が得られたこともあってか、文学・社会科学・哲学の各分野に亘って乱読・多読していたようだが、次第に的を絞って哲学系を主体としたものの精読と沈思へと移り変って行った過程が彼の書棚に並ぶ蔵書からもうかがい知ることができ感心したものだった。

ともあれ、商大蹴球部の大きな支えである多くのサブの中でも彼は傑出したサブの一人であったと思う。

悔多きサッカー人生

山　本　孝　次
（昭和17年9月卒業）

一橋へ入ったらサッカーをやろうと心に決めて、他部の勧誘を見向きもせずに始めたサッカーではあるが、考えていたほどやさしくはなかった。中学時代やっていた軟式庭球とはスケールが違って、なかなか球に追い付けないのである。

テレビによる最近のサッカーを見るたびにつくづく思うことは、スタートダッシュの早さを買われてやらせて貰った左右のウイングの私のプレイにもっとキープ力があったら、金井キートン先輩及び地下の松岡ポースケ両インナー氏にもう少し楽をさせることができたのにと今更ながら残念である。

もう一つは合宿前に少しでも自主トレーニングをやっていれば、合宿中に足が痛い、マメができたなんてこともなく、チームプレイの練習に打込めたのにと、これまた悔いを残すことばかりである。

在学中には健康問題で皆さんにいろいろご迷惑をおかけしたが、今頃になって当時鍛えた足腰がものをいってか、ゴルフで若い者に負けない距離を保っているのが唯一の慰めと申すべきか。

四十雀会のご案内も頂くが、約10年前に痛めたアキレス腱が恐くて残念ながら遠慮している次第である。

感謝のことども

宮　沢　　力
(昭和17年９月卒業)

或る日、私はしみじみと自分の顔を鏡に写してみた。どうみても老人といった顔である。正面から見る限り頭髪は無い。額に目尻に皺が一杯である。目の下は垂るみ頬はこけている。還暦も２年以上過ぎているのだから当然といえば当然であろう。しかしこの顔も少年・青年・壮年の各時代を過ぎてきている筈である。しからば若い頃の顔はどんなであったであろうか。そんなことを考えているうちに、私の思いはふと、40年以上を跳び越して或る写真へと移っていったのである。

それは私が予科へ入学し、サッカー部に入部して間もなく、ゴールポストの前で多分練習前だったと思うが、部員全部がユニフォーム姿で写った写真である。確かにそこには私の若い顔があった。じっと見ていると、その顔を持った私という人間の当時の心の中が、ひしひしと伝わってくるようだ。そこには40年余りの空間は無かった。また懐しい顔・顔・顔があった。そしてその一人一人の一挙手一投足が、まるでまのあたりにはっきりと浮んでくる。今にもボールがとび出してきそうな気配である。何かしら胸に迫ってくるのである。何故だろうか、他でもない、それは私にとってサッカーというものが強烈に心の中に焼き付いているからであるに違いない。また私の青春がここから始まったためでもあろう。私は決して熱心な部員ではなかったことを反省しているが、私なりに最後までサッカーをやりおおせたという満足感があった。それがまた私の心の支えになってきたことも事実である。

私は今更ながら恥を申す次第であるが、技は拙なく、気は弱く小さく、何事にも消極的であった私には、連日の激しい練習は極めて重荷であったところへ、級友が次々と退部していくのに誘われてか、入部して数ケ月後予科３年であった吉沢さんに退部を申し出たことがあった。丁度寮の階段のところであったが、私は吉沢さんに、階段から転げ落ちんばかりに、こっぴどく叱られたのであった。なま優しい怒られかたではなかった。そのお蔭で私は退部を思い止まり、曲りなりにもサッカーをやり通すことのできたことを誠に幸いに思っている。吉沢さんには心から感謝している次第である。

私はまた松本先輩には一方ならぬお世話になった者である。私は卒業して在支の会社に就職し、直ちに兵役となり、終戦と同時に復員したのであるが、当然ながらその会社は解散していた。止むを得ず故郷で浪々の身を唧っていたのであるが、終戦翌年の春上京し、松本先輩を訪れ就職をお願いしたところ、早速にもゴム会社にお世話戴いたのである。復員者は街に溢れ、復興しつつある企業とて少ない当時の状況から、就職は極めて困難な時期であっただけに、私は欣喜雀躍天にも昇る思いであった。しかしながら会社は４年有余にして倒産したのである。私は再度松本先輩を訪れ就職をお願いした。そしてまた青木君・石川君の居た昭光商事にお世話戴いたのである。誠に有難い事であった。しかるにこれもまた３年有余で倒産してしまった。両社共それぞれの業界では一流企業であっただけに、これは私に運が無かったためであろうと思うのみである。しかし私は担当していた業務を譲り受け独立し、名ばかりの会社ではあるが、可もなく不可もなく営々として今日に至っている次第である。常々思うのであるが、あの時松本先輩のお世話がなかったら、今日の私はな

かったであろうと言っても過言ではない。酉松会員である事の幸いを思うのである。

私は日々の営みにおいて、殊更にサッカーを意識したことはない。何故ならサッカーの持てる総てのものは、苛酷にも似た長年の激しい練習の積み重ねを通して、私の心の中に、思いの中に、血の中に肉の中に混然と溶け込んでいるからである。

私は商大サッカー部に籍を置き、不充分ながらもサッカーをやり通してよかったとしみじみと感謝する今日この頃である。

母校サッカー部の戦没先輩に思う

瀬藤俊雄
(昭和18年9月卒業)

酉松会名簿を見るにつけても、共にボールを蹴り合った昭和14年卒業以降の気心の知れた諸先輩のうち、優れた多くの方達が、将来の夢を果たされることもなく、青春の生命を戦争のために失われたことが惜しまれる。特にサッカーで鍛えられた頑健なからだと、部生活で習得した自己を滅却して奉仕する精神から、亡くなられた多くの先輩が、敢えて身を挺して危険に立ち向い戦場に消えられたのではないかと思われてならない。

太平洋戦争の戦局が難関に向ったために、6ケ月繰り上げ卒業の措置で、私は昭和18年9年卒業と同時に海軍主計科短期現役に服し、同年10月から翌年2月末までの5ケ月間、海軍経理学校で基礎教育を受けた。その間の相当激しいカッター漕ぎや陸戦訓練等も、サッカーの猛練習に較べれば安易なもので、ただただやたらに腹が空いたことだけが強い印象として残っている。

経理学校卒業を目前に控えて、配置上の希望あれば申出るようにいわれ、私は何の躊躇もなく、また特攻隊を希望するようなさし迫ったような気持からでもなく、小艦艇乗組みを希望した。当時は既に油の貯蔵量も乏しくなってきて、大艦は出動機会乏しく、小艦艇なれば出陣の機会も多からんものと思い、また海軍軍人となったからには軍艦勤務を1度は経験したいという気持と、既に当時旗色芳しくなく、どこにいても結局のところ運が総てを決するものとの諦観的な考えが心の底にあったことは否定できない。3月1日に主計中尉に任官と同時に、我々卒業時の乗組み艦船としては最小型の二等巡洋艦竜田乗組みとなった。乗艦すると直ちにトラック島向け輸送船団護衛の任についたが、横須賀軍港を出て間もなく、八丈島沖で敵潜水艦の魚雷を受けて沈没し、早春の薄ら寒い太平洋上を泳がされた。しかも引き続き7月には1万トン高速油タンカー国洋丸乗組みとなり、空船で呉軍港を出て、マニラを経由バリックパパン精油所に向う途中、深夜に敵潜水艦の魚雷の集中攻撃を受けて沈没し、数時間海上を泳ぐこととなった。しかし短期間の間に2度も乗船が沈んで泳いだため、それが却って幸いして、戦争が真に苛烈さを増してからは内地勤務を続けて、終戦を迎えることとなった。

過ぐる戦争では、身が軍籍にあると否とにかかわらず、おびただしい人達が生死の境を経験したが、軍人としては少くとも、大なり小なり自らの選択で生と死の境目を経験する運命があったのではないかと思う。サッカー部で習得した若さと純情さに溢れるものがあればあるほど、卑怯であってはならぬ、苦しみは自ら求めよ、との天の声の励ましを受けながらも、死にたくはない、生命は

全うしたい、との葛藤のなかで、自らの選択を繰り返しながら、最後にはどれ程の苦しみに耐えながら生命を失われたのかと思うと、敬虔な気持におそわれる。同世代の数多くの人達が、生命を失った戦争の危険に同じように身をさらしながらも、運よく生き残ることができた私達は、代って亡くなられた戦没者に対し、限りない感謝の気持を現わさざるを得ない気持で一杯である。

今日の日本の平和と、経済的繁栄は一にかかって戦争の犠牲になって亡くなられた方達の生命を代償として得られた貴重な果実に他ならない。人口だけに恵まれて、資源に乏しく、狭隘な島国の日本がかくも近代福祉国家として、平和と経済的繁栄を果し得ると誰が予想し得たであろうか。

私も戦争は現世の最大の悪であり、戦争の悲惨さ、生命の尊厳を思えば、戦争に訴えることを正当化する如何なる論拠も絶対にあり得ないと思うものである。それと同時に、戦争を忌み嫌うの余り、戦争の犠牲になられた方達への感謝の現われまでも、軍国主義的傾向と極論する風潮のあることは残念である。

壁パスの味

土屋五郎
(昭和18年9月卒業)

良き先輩、同僚、後輩の集りであるサッカー部の一員であったことは私にとって、この上もなく幸せなことであったとつくづく思う。

思えば予科時代、遅ればせながら入部した私にとって、サッカー部は一つの道場であったと同時に、水を得た魚の如く、グランドの魅力に惹かれた。当時のサッカー部は、「試合は選手のみではなく、サブから先輩も含めた全員の闘いである」ことが強調され、プレイも個人技の弱さをカバーするため、全員が忠実に良く動き廻るサッカーが、要求された。従ってグランド内では、「立ってないで駈けろ！」「早く戻れ！」「一人でボールを持たないで早くパスしろ！」などと怒声が、常に浴びせかけられていた。

昭和17年の学部2年の時に、それ迄大学リーグ一部の桧舞台で活躍していたわれらがチームは、残念ながら二部に転落した。当時40才を僅かしか出ていなかったであろう松本先輩が、村木主将を始めとした学部3年、2年の現役と、病気療養中であった青木兄も含めて総勢10名位の部員を、箱根芦の湯の松坂屋旅館に、一泊ご招待下さりその労をねぎらい、激励して下さったことは、松本先輩のお人柄と共に、忘れることのできない思い出の一である。

その翌年、私達が学部3年になった時、瀬藤主将の下に2部で優勝し、1部に上げて卒業することができた。一つの責任を果したような気はしたものの、グランド内での叱咤の声や、グランド外からのサブや先輩の応援の姿は消えることなく、私の頭のなかに去来し、「もっとチームワークで頑張れ！」とはげまされ続けているような気持を抱いて校門を出た。

卒業後すぐ静岡の部隊に入隊、直ちに中国の広東に送られ、戦地で初年兵教育を受けた。屋外の演習による肉体訓練の烈しさと共に、屋内の内務班の整理整頓が実にきびしく、また戦友同士の連帯性が強く要求された。それはチームワークを求めるサッカーに似ており、私はサッカー部の延長のような気持で、それこそ馬鹿になって、懸命にこれが実行を心掛けた。

たまたま広東で、同じ師団の本部におられた二階堂晴三先輩（当時陸軍主計中尉）にお遭いし、おかげで難なく経理幹部候補生にも合格できた。あの熱帯の如く暑い夏の真昼に、広東の街から1里以上も離れている私の兵舎へ、はるばる自転車で尋ねて下さった時は、実に嬉しく、サッカー部員であることの喜びをしみじみとかみしめたものだった。

終戦後、東京の会社（三井鉱山）に戻ってからは、村井先輩のおかげで、三井物産、三井鉱山、三井木材等の、サッカーＯＢによるオール三井チームが編成され、加茂兄弟のいるオール三菱チームなどと対戦したりした。

昭和26年には大牟田に転勤となり、こんどは折下先輩の指導の下に、三井化学、三井鉱山、東洋高圧で若い人達を集め、三井大牟田チームを編成、九州各地を転戦、おかげでサッカーを十分楽しむことができた。

その後昭和35年に三井鉱山を退職し現在の会社（日本航空電子工業）に入ったが、サッカーとは縁は切れて、ただ会社とわが家を往復する単純な生活を送る身となり今日に至っている。

過ぐる3月四十雀チームが発足し、その2回目の練習の時に初参加して、懐しい小平のグランドで、紅白試合をした。吉沢先輩、外岡幹事や、松本先輩のお孫さんなども、おられた。やるうちについつい熱中して、からだがよく動かぬのも忘れて、シュートを2、3回やったりして腰がギクギクしてしまった。たまたまフォワードが全員敵陣に迫り、右インナー（野上君）からのパスを、ダイレクトで彼に返し、それを彼はみごとにシュートしてゴールインしてしまった。私はアシストの役目を果したのだ。この壁パスが成功したときの嬉しさは格別で、自分が直接蹴込んだとき以上の快感を味わったような気がした。これもあるいは、年令の故かもしれない。昔の自分であれば、直接ゴールインしたときの方が、遥かに快感が上廻っていたに違いないのだが。

ともあれ、38年ぶりで小平のグランドに立ち、思わざる貴重な拾い物をしたような気がして、よい自己満足に浸りながら、帰途についた。

回　想　記

青　木　育　郎
（昭和19年９月卒業）

私が商大予科に入ったのは昭和13年４月で、軍靴の足音が次第次第に高くなってきた頃である。年譜で確めてみると、前年の７月７日に蘆溝橋事件が発生し満州事変が日支事変へと発展している。しかし我々の学生生活の表面にはまだまだ戦争の逼迫感はなく、これが敗戦につながって行くような感は全くなかった。私達は一橋寮歌にある〝自由の砦　自治の城〟にあって、〝自由は死もて守るべし〟と高吟していた。しかし今から考えるとその歌声もいたずらな放歌高吟と言うべく、その後の軍国主義の波にもろくも押し流されていってしまうのである。

そんななかで予科に入学したのだが、入学試験の結果の発表のあった同年の３月某日はうららかに晴れわたった日だった。春の光のさんさんと降るなかを合格の喜びにひたりながら、国立の学園から鉄道沿いに国分寺まで我が世の春といった気分で歩いた事を今も忘れない。一橋寮に入り、サッカー部に入ったが、サッカー部に入ることは実は入学前から心に決めていたことである。中学は

東京府立一中だったから別に中学時代サッカーをやった経験があった訳ではないが、すぐ上の兄貴にサッカーの知識を教えられ、前年秋の大学リーグで商大が一部から二部に落ちたことも知っていたし、名手大掛さんの名前も新聞で読んで知っていた。１年に入った時には多勢の同期生がサッカー部に入って来たが、月日のたつにつれどんどんいなくなり、卒業まで続けたのは、瀬藤と土屋の両君だけで、私自身も大学１年で病気になり本科ではボールを蹴ることもなく、サッカー部中退のような形になってしまった。

大学に進んだのは昭和16年だがその頃になると戦争の方は一層エスカレートしていた。戦争に反対のものはもちろん、非協力的なものも一切排除されていった。私の予科の頃、島木健作の〝生活の探求〟が多くの学生に読まれた。農耕生活にひたむきに打ち込む一青年のことを書いたものだが、生産技術改善の合理性を追求することをテーマとして、当時の軍隊あるいは右翼の神がかりを暗に批判したものであろうか。私の予科３年間は〝生活の探求〟のような意識とか思想とかいうものは何もないがとにかく夢中になってボールを蹴った。汗にまみれて夏の合宿をやり、冬のシーズン・オフにはランニングをやったりした。今それがどこでどう役に立っているのか〝一生懸命やれば何かつかめる〟と言われ〝馬鹿になってやれ〟と言われてやったことだが、当時食べた米の飯やスキ焼肉が今、自分の体のどの部分を形づくっているのかは解らないが、予科時代に一生懸命やったサッカーが自分の人間形成のどこかに宿っていることだけは間違いないと信じている。自分自身としてはやれるだけやったと心秘かに満足している。

昭和16年に本科に進み春のシーズンを終える頃から何となく身体の調子が悪かった。練習中に非常に疲労を覚えたり、時ならぬ冷汗が出たりした。練習を終って風呂に入ると風呂が熱いのか、ぬるいのかの感覚がよく解らないことがあった。それでも根が丈夫だったから結局春のシーズンは曲りなりにも終えたが、夏休みになって肋膜に水がたまり休学することとなった。約２ケ月入院生活を送り、その後神奈川県小田原の祖母の処で療養生活を送ることになった。その年の暮12月８日に我が国は米国、英国に対し宣戦を布告し太平洋戦争に突入した。〝本８日未明帝国陸海軍は西太平において米英両国と戦闘状態に入れり〟という大本営発表をラジオニュースで聞いた時、第一に頭に浮んだことは、この戦争はどうして終結するだろうということであった。まさか南京入城の松井大将のように、何某将軍が馬に跨がり日章旗を立て、威風堂々ワシントン入りをする等ということはあり得ないということだけはわかっていた。それでも忠義な日本国民はそれぞれの疑問を胸に持ちながらも天皇陛下のためにその後何年も戦ったのである。

私はその後約１年程の療養生活を送ったあと17年の秋に学校に戻ったが、19年に卒業するまでとうとうグランドに戻りボールを蹴ることは出来なかった。一方サッカー部も、戦局が厳しくなるにつれその活動に大きな制約を受けることとなったようだし、遂に18年12月には学徒出陣が行われ、私のような病み上りの者以外はすべて戦場に赴き学園は寂寥としてしまった。だから私のサッカー部生活も本科１年の春のシーズン終了までで、中退のまま終ってしまったのである。

そのようななかで私にとって一つの大きな出来事があった。昭和17年の夏私は引続き小田原にいた。その頃はもう病気もあらかたよくなり、秋からは学校にも出ようかと思い毎日をブラブラ過していた。ある日、たしか瀬藤君からの連絡だと思うが、松本大先輩が本科３年、２年生――村木主将以下３年生と瀬藤・土屋の２年生２名――と在京先輩数人を１日箱根芦の湯温泉松坂屋旅館に招待してくださることになったが、松本大先輩のお声がかりで青木もよかったら呼んでやれ、という

話がとどいた。サッカー部をはなれて1年あまりとなり、なすこともなく過ごしていた私にとっては誠に思いがけない嬉しい知らせであった。忘れかけていた懐かしいサッカー部の雰囲気がグーッと胸の中に湧き上るのを感じた。その晩そこに誰と誰が来て、何を語り何を聞いたか今や定かでなくなってしまっている。またいろいろのサッカー部の会合の想い出がダブってしまって、その晩の情景といっても電燈の光の中に、見馴れた顔があったとしか言えない。しかしその日家を出て箱根の山に向う私の胸に湧き上って来た心の躍りは今でもはっきり感ずることができる。もっとうまく表現できたらというもどかしさを感ずるがそれより大切なことはもしこのことがなかったら私はサッカー部中退のままで終り、酉松会名簿にも名を連ねなかったかもしれないということである。ましてその後今日まで長く続いているサッカー部の多くの先輩・後輩との強い絆も望むべくもなかったであろうということでもある。この意味でも私は松本大先輩に深く深く感謝している。

余談になるがその後健康もすっかりよくなり就職もし結婚もした。新婚旅行は終戦後の食糧難の時代ではあったが配給の米とお酒を持って箱根芦の湯温泉松坂屋旅館に行った。

戦争中の蹴球部

鷲　埜　和　夫
（昭和19年９月卒業）

昭和14年４月、東京商科大学予科に入学した時、何か運動をしたいと考えていたが、たまたまア式蹴球部に勧誘され、そのまま入部してしまった。誘って下さったのは確か藤塚先輩ではなかったかと思う。中学の頃は全く運動をしていなかったので、多少のためらいはあったが、官立の学校だからどうせ大したことはなかろうと思っていたのが、１ケ月も経たないうちに大変な見当違いであったことが判った。その後５年足らずではあったが、短くて長い学園生活が始まった。短かったのはシーズン・オフで、長かったのは練習のある期間である。

我々の前後の方々は皆同じ体験をしておられるが、私共は正に戦争と共に青春を送ったと言える。

中学校には配属将校がいた。大尉か少佐であったが、１年生で木銃、４年生になると本物の三八式歩兵銃をかついでの教練である。学校では教練か運動会のスパイク以外はすべて裸足である。通学も素足に下駄で、靴をはく時は医者の証明がないと許されなかった。予科へ入った時は、世の中にこのような自由な世界があったのかと感激したのを覚えている。予科・本科を通じて配属将校もいたし、軍事教練もあったが、中学時代のそれとはすっかり違っていた。つまり配属将校にも学生の人格を認める態度がよく汲み取れたのである。そしてア式蹴球部また然り。大変きつい練習ではあったが、やはり当世言われるシゴキとは全く別の世界であった。きびしい中にも和やかで、のびのびとしたふん囲気があり、それでいて良き秩序が保たれていた。

それにしても練習はかなりきつかった。もともとあまり健康ではなく、また部に入るまでボールを蹴ったこともなかったので随分苦痛に感じたものである。それが最後まで続いたのは、やはり言うに言われぬサッカー部のふん囲気であり、友情であったと思う。おそらく部員の中で最も下手な、そして最もだらしのない一員であったと思うが、その後の人生で心の支えになったのはこの時代のサッカー部の生活にあった事は間違いない。

サッカーも戦争中であった。入部した時、靴は牛皮であったが、次第に豚皮、馬皮、遂には鮫皮の靴になった。ボールはさすがに牛皮であったが、練習の時のボールは皮が薄くなって本来の大きさの倍位にふくれあがった代物である。蹴ってもスピードが出ないため、合わせるタイミングの狂うことはなはだしい。また風が強いと球足が遅く、軽くて大きいためあらぬ方に流されて行く、極端に言えば風船玉の固いものと思えば良い。試合の時たまたまニューボールを使うことがあったが、新しいボールを手にした時は蹴るのがもったいない気がしたものである。赤のジャージィはもちろん試合の時だけ、それもほとんど原色には程遠いものが多かった。

昭和18年の12月、代々木練兵場で東条首相の激励を受けて学徒動員の大号令が下った。我々精鋭？は直ちに学業を捨ててそれぞれの故郷へ帰った。即入隊である。予科２年半、本科２年余り、商大の歴史の中で最も短期間で卒業したのではないかと思う。もっとも動員の時は仮卒業ということで、その後兵役中に卒業免状が来た。ただし卒論は確かに書いて提出したから為念。

昭和16年か17年か忘れたが、北海道の千歳へ飛行場造りに東京の大学生が動員された。その時の飛行場の管轄が海軍であり、その時の銀メシ（白米）の味が忘れられなかった。サッカーのお蔭で甲種合格したのは良いが、徴兵官に海軍へ入りたいと申告したらひどく叱られた。徴兵官は陸軍である。それでも幸い海軍にまわされ、大竹海兵団、土浦航空隊、大井航空隊、鹿島航空隊を経て最後は特攻隊で九州西部で終戦を迎えた。沖縄へ突込む寸前であった。軍隊生活では任官前によく殴られたことを別にすれば、サッカーのおかげで訓練がきついと思ったことはほとんど記憶にない。やはり自然に鍛えられていたのだと思う。

今年還暦を迎えたが未だに足の太さは他にひけを取らない。ただ３人の子供が皆足が太いのは如何したことか？　ありがたいことに孫の足はかなりスマートである。我がサッカーも３代にしてようやく風化しつつあるようである。

戦争とサッカー部

安　田　興三郎
（昭和19年９月卒業）

昭和14年春、私がサッカー部に入った頃は、まだ日本も平和であった。なにしろ私が「モロッコ」を観てカツキチになったのが１年後の春で、当時は往年の欧米の名作はいくらでも名画座で観られたのである。それもつかの間、16年の８月には早くも米画の上映制限が始まって、無味乾燥な国策映画が巾をきかすようになった。

その年の３商大戦は、仏印進駐の余波で中止となり、10月には大学・専門学校の在学年限短縮が発表された。（17年４月より実施）

16年の12月６日から浦高戦に備えて剣道場に合宿したが、２日後の４時限目、講堂に集められて対米宣戦布告を知らされた。大本営発表のラジオ放送に無邪気な拍手を送ったりしたものだ。数日後の浦高戦は、０対１で惜敗した。納会後、多摩湖の終電もなくなり、放歌高吟しながら合宿所まで帰る途中、流れ星を無数に見た記憶がある。

すでに16年の４月には米の配給制が実施されていたが、17年２月には衣料符制も実施され、ボー

ルやサッカー靴の購入もままならなくなった。以下当時の日記から、サッカー部に与えた戦争の影響を拾い書きしてみる。

17年４月７日　入営する早野先輩を東京駅にて見送る。

４月15日　水島甲種合格。本３、坊主頭ふえてかわいらしくなる。

４月17日　敵機、帝都に初空襲。翌日も空襲警報が発令され、対明大練習試合のキックオフが１時間も遅れた。

４月21日　５時、サイレン鳴り、各運動部練習やめて部室に引き揚げるも、警戒警報の誤報とわかり、練習再開。

４月28日　宮沢甲種、山田第１乙

リーグ戦を翌日に控え、長瀬先輩の墓参。

５月24日　サッカー靴、新調。豚皮で25円とは高し。

８月20日　中・高・大学、各修業年限１年短縮の学制改革案発表される。

９月上旬　修業年限半年短縮による変則的学年末試験実施さる。

９月20日　本３の送別会を中野・辰美野にて開催（翌日より、９月29日まで国立富嶽荘で合宿）

10月29日　折下・松岡両先輩、軍服姿でグランド訪れる（31日折下先輩、満州へ）

18年１月27日　村木・居川・山田３海軍主計中尉の送別会（本郷白十字。我、風邪で欠席）

１月31日　出征先輩の武運長久祈願のため松本・大掛先輩と部員、鶴岡八幡宮参拝。

３月７日　専門部庭球部合宿所で合宿開始。17日解散。（大掛・山本先輩等来訪）

４月22日　大掛先輩を、松本先輩と本３、本２、東京駅で送る。

７月10日　インターハイの練習開始。本３の送別会で米山先輩の訃報知らさる。

７月14日　故米山先輩宅弔問（２月、ガダルカナルにてマラリヤで戦病死の由）

７月22日　インターハイ中止と決定。

８月10日　一橋勤労報国隊（本科生のみ）北海道へ勤労奉仕に出発（１ケ月にわたり千歳飛行場整備の土方作業で病人続出）

９月15日　練習開始（予科は１日から）

ステーブルファイバー靴はく気せず、地下足袋で蹴る。（靴の修繕もままならず）

９月23日　理工科系以外の学生の徴兵猶予停止！

９月26日　現役ベストメンバーと先輩８名＋予科生で送別試合（４対１で現役勝つ）。

学徒体育大会はすべて中止となる。

10月１日　入学宣誓式（大学は閉鎖せず、来年２月まで授業あるものとして行う由）

10月２日　12月１日入営と発表されあわてる。

10月９日　コンパで太田主将より休部方針説明、皆の意見まとめる。

10月10日　浦高戦に備え、予科、剣道場で合宿開始（15日浦高戦後解散）

現役代表（太田・西内・加藤（春）・高柳）如水会館で先輩と今後の部の態度につき相談）

10月11日　本科も庭球部合宿所で親睦もはかり最後の合宿開始。

10月17日　午前、対早大戦に大敗、午後から先輩８名と送別試合（現役３対０で敗る）。同夜在京先輩に招待され目黒雅叙園で壮行会

10月18日　合宿所にて解散式行なう。登校後、部員揃って池の畔で記念撮影。

10月20日　体育大会は詰らず。夕方より兼松講堂で出陣学徒壮行会（国立音楽学校生徒の合唱、印象的）

11月20日　兼松講堂にて仮卒業証書授与式。

12月１日　陸軍関係学徒入営。

12月８日　開戦２周年記念日、この日の未明、妹結核にて死す。我、喪を秘して夕刻、町内会の日の丸に送られ、一路横須賀へ。

思い出すこと

太　田　賢　三
（昭和19年９月卒業）

我々は昭和14年に予科に入学したのだが17年４月に学部へ進学した途端、修学年限短縮で、９月に１学年修了、10月２学年となり、18年10月３学年、12月学徒出陣で、19年９月に不在のまま卒業となって終った。あまりにも短かい学生生活であり、瀬藤先輩達が18年９月卒業して最上級生となったものの戦争によって部は壊滅という悲運に襲われたのであった。入隊するまでランニングをし球を蹴って行こうということで、一人一人くにに帰っていくなかで、在京者だけで皆でグランド生活を続けたことを覚えている。

昭和14年・15年は16年卒以下大量の名選手を擁していて、サッカー部として最も充実した頃であった。

その中の１人、高橋道太郎さんと私は縁があった。高橋さんの自宅は私の家の近くであり、指ケ谷小学校の先輩であった。私のサッカー部への入部については、彼に相談に行ってきめたことであった。高橋さんは学部に入ってから、部を去られたので、私はそれを残念に思っている。「俺は村松先生に恋をしてしまったようなものだ……」というようなことを聞いたことがあった。しかし最終学年になった昭和15年に部へ復帰され、グランドで顔を合わすことが出来るようになった。今思うに、私の臆測であるが、その頃すでに体を悪くしていたのではないかと考える。高橋さんは村松恒一郎先生のゼミナリステンであった。それで私も高橋先輩の紹介で村松ゼミに入れて頂いた。先輩は日本郵船に入社後も先生に研究の指導を受けていたようだった。私はあまりよいゼミナリステンとは言えなかったが、それでも先生から〝けっとばしやさん〟と呼ばれて、ゼミの中はそれで通っており、いろいろと面倒をみて頂いた。次の学年の松浦巌と次の次の永倉真平が入るというように村松ゼミのサッカー部員が３年間続いたのであった。また高橋さんは初めて入った喫茶店や食堂でも、そこのメッチェンや小母さんとたちまち仲良くなるという常人に真似の出来ない特技を持っていたようだ。人間的な魅力のある私にとってはなつかしい先輩であった。若くして逝かれたのは惜しい人だと思っている。

私は練習が終って帰るのが、どういうわけか最後になってしまって、瀬藤さんや、藤塚さんと一緒になることがたびたびだった。瀬藤さんは新宿乗り換えで、時たま私も一緒に途中下車し、サブウェイの小狭いスナックに一緒に立寄ったりしたことがあった。帰り支度の早いのは、金原あたりで、練習を引上げたかと思うともう部室から姿が消えていた。早い派と遅い派に分れていたように思う。

昭和17年くらいまでは世の中もそれほど切迫せず、楽しい学生生活が送れたと思う。

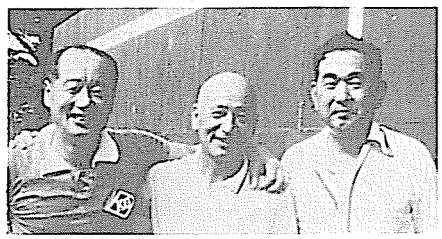
18年の学徒出陣は学校毎に大隊を編成して、神宮グラウンドの雨の中を行進した。12月１日入隊、終戦は流山で迎えた。12月疎開先山形へ復員、21年上京して森永薬品へ入社した。

戦後病気をし、酉松会ともすっかり御無沙汰してしまって、申しわけなく思っています。しかしサッカー部は何といっても私の原点であることに変りはない。

優勝への悲願

――亡き畏友に捧ぐ――

西　内　碩　男
（昭和19年９月卒業）



昭和15年は、商大サッカー部にとって、栄光に輝く記念すべき年となった。

これより先、商大は昭和10年一部リーグ昇格の目標を果たし、以後一部チームとしてほぼ定着し、上位進出を狙っていた。その頃は慶大・早大・東大が３強として常に上位にあり、特に、二宮、播磨、篠崎を擁する慶大は、正に黄金時代というべく無敵の強味を誇っていた。

この昭和15年初めてこの３強に割って入り、慶大に優勝を許したものの、早大と２位を分け合い、商大強しと注目された。

それは、創部以来営々として精進し培かわれて来た、血と汗の伝統がもたらした結実であり、当時の部員の気迫と技術によったものであることは言うをまたない。

そして、予科１年松浦　はこの年のリーグ戦に出場した。中学時代センター・ハーフとして活躍した華々しい戦歴の持主が、この時機に商大を目指して進学して来たことは、もはや、運命的との感慨をもって述べる外ない。

創部以来、チームが最も充実し、伝統的精神が最も高く昇華したこの時機に、プレーヤーとして最も信頼できるこの人物の登場は、その頃の一部リーグ上位進出という目標を、一挙に優勝まで高める作用をした、と言っても過言でないであろう。

この年の２位獲得の成果は、優勝というものを、ごく間近かの現実として、手の届く処にあることを感じさせ、もはや夢ではなくなったのである。

しかし、彼にとってこの年は、最も伸々とサッカーができた年であった。大学チームの強豪と対戦するのも、小平の苛烈な練習も、彼にはファイトを一層高めるだけのものであった。数多い有力な上級生と共に在る商大でのサッカーは、中学時代にあるいは感じたであろう――そしてこれから後には、決して避けることができないこととなる――責任感からの重圧と、精神的な拘束を、今はほとんど意識することなく、サッカーに没入し、ひたすらボールに打込むことができたのである。

かくして栄光の年は移って行った。そして優勝は、もはや現実の目標として残され、その担い手の１人として、それが誰かということは、全ての人が確かな期待として、等しくその人を思っていた。そして、その人も、この使命が自分にあることを自覚していくのである。にこやかで円満な風貌に、信頼と包容力を感じさせる頑健な体格の彼は、ガンさんと呼ばれ、誰からも愛された。

学年の進級は、精神の内省を深めて行くことでもあった。

彼は、サッカーだけでよいのか、と自問する。学生として、もっと学問的なものによって自分の

行動を価値づけ、実際社会を解明し、それに働きかけ得るものを求めなければならないのではないかと、深く悩んだ。それは、誰もが何等かの形で、悩み苦しみ、自分で自分の途を見出していくほかない心の内面の戦いであった。

彼は「一身を投げ込んで、自己を捧げ切って行動する場」を持たなければ、全て漫然とした、上滑りのものとなり、真の学問も、人間形成もできない、厳しさの中に居なければ何事にも本物になれない、と思い至る。サッカーとサッカー部を愛することがその「場」なのである。

また、自分の進級は、その分だけ上級生を送り出すことであった。精神的にも、技術的にも最も優れ、尊敬と信頼を寄せていた人々を送り出すということであった。

しかも、戦争の影は色濃く学窓を蔽い、学年短縮は慌ただしく進級を進め、上級生は相次いで戦線に赴いた。上級生の抜けた穴は埋められねばならぬ。しかももっと強力に。有力な新人も入部し、練習の精進も実を結んで来ていた。

その頃、彼はまだもちろん、部の指導者でも、責任者でもなかった。しかし、彼は、すでに自己を厳しく律していた。敗けた時は自分の責任だと思った。気力に欠けた戦いがあれば、自分が悪いためだと強く自責した。足を傷めて欠場した時は、ふがいない自分を激しくのろった。しかし、孤独の悲哀とか、絶望の悲歎とか、そのような心の傾斜は最も憎んだ。厳しい心の戒律と、強靱な精神はそれを許さなかった。そのような時彼は、嵐のような行動の中に没入した。

そしてさらに、自分が精神的にも肉体的にも、限界のそのまた限界を越えてまで、やれるだけやって、そうすることによって皆を引張って行かなければならないと、心に期していた。チームに弱点があれば全て自分がカバーして徹底的に守り抜き、積極的に攻撃を押し進め、自ら敵ゴールに突込んで得点しなければならないと心に決めていた。

その頃すでに、優勝達成の願いは、彼の心の中に根差していた。それを押し進めるのは自分に課せられた責任であり、使命であると心に誓った。

昭和16年のリーグ第1戦は、優勝候補東大。一進一退のうち前半終り頃、我が主軸敵のため負傷退場。フォワード4人の背水の陣。全員火となって走りに走った。彼はもはや怒りの鬼となり、阿修羅となって攻め防ぎ、燃えに燃え、耐えに耐えた。正に死闘であった。遂に引分。第2戦慶大には先制したが逆転され、次いで早大戦に敗れ、今季4位に終る。上位の壁厚かったのか、我々の力はまだ足りなかったのか、精神的重圧は強かった。

翌17年は、拡大された戦争のためリーグ戦は春に繰り上り、緒戦早大に快勝。しかし、以後3敗し、遂に対立大入替戦の瀬戸際に立たされた。必死のこの試合も、主力の負傷相次ぎ、死闘また死闘を重ね、雷雨、凄惨な戦いとなった。満身創痍、終盤遂に敗れた。痛恨窮まって、声もなかった。

その時、彼の自責は誰よりも深く、心の底は激しい痛みに刺されていた。しかし——現実は冷厳である、立ち向って行かなければ破滅である、現実の試練から逃避は許されない、それを押し切ってやって行かなければならぬ、それはただ再起を期するのみ——と彼は奮然立上った。しかし、果たさねばならぬ使命は、今や如何ともしがたく、それは悲願の玉として心の奥に秘められねばならなかった。

翌18年、奮闘し二部に全勝、一部復帰をなし遂げたが、戦争は破局を迎え、その年の末、僚友と共に彼も一切を捨てて、学徒として出陣して行った。

焦土の中に終戦となり、彼の復員と共にサッカー部の再建が進められた。友人達は学窓に帰らず、

衣食住はかつて経験したこともない極限の世情の中、もはや名実ともに指導者である彼は、よき後輩たちと共に立上った。

昭和21年早春の戦後初の公式戦である東西学生選抜戦において「東軍センタ・ハーフ商大松浦、タイム・アップ寸前、西軍ゴール前に突進、クリーン・シュートを決め、2対2のタイとなり、両軍感嘆」とのことで、彼の面目を目のあたりに見る気がする。

その年、中断されていた一部リーグが再開され、最悪の環境の中で善戦した。しかし翌22年、遂に最下位。

この時、商大サッカー部を全人格で支えて来た不屈不撓の名プレーヤーは、社会の一員としてもっと重い責任と使命を果たすため、学窓を去って行ったのである。

以後永く、商大サッカー部の名が一部リーグに現われることはなかった。

昭和55年11月28日　兼松江商社長　松浦　巌　急逝　59才

彼が自分に課した使命は、悲願となって残されている。この悲願は達せられねばならない。そしてそれは、我々全ての人の願いである。

荒正、金ちゃんのこと

高　橋　三　善
（昭和21年卒業）

昭和15年、予科入学。小平南寮2階の4人部屋。窓よりテニスコート、ラグビーのグランド、サッカーのグランドが見える、日光のよく入る部屋でした。

部屋に入って自己紹介したところ先ずびっくり。部屋長が当時2年の西内碩男さんで、サッカー部、同学年の荒川正三郎君（通称荒正）がサッカー部希望、4人の内3人までがサッカー部員ということで部生活がスタートいたしました。

同学年は、巌さん（松浦巌）、助さん（助川実）、荒正、金ちゃん（金原実）、宇都宮英一君（旧姓遠藤）の6名でした。

巌さんのことは皆様ご承知のことと思いますが、荒正、金ちゃんは学徒出陣で陸軍に入隊、帰らぬ人となりました。今思いましても、懐しさと共に残念でなりません。

寮の部屋は万年床、そのせいかどうか分りませんが、先ず荒正が陰金になって寝てからぼりぼり掻きはじめ、次に小生（他の2人は何でもなかったみたい）練習が終ってから多摩湖電車で国分寺の医者へ行き太陽燈をあててもらい、昼休みは窓より両脚を出して日光浴、はたより見れば、あきれかえったのではないかと思いますが、当人達は真剣そのものの、ほほえましい光景でした。

金ちゃんとは予科の級が一緒。洗練された紳士でした。終戦後浜松へ行くことがありましたので、お線香でもと思い金ちゃん宅を訪ねましたところ、お兄さん（一橋陸上競技部）がおられ、仏壇の前には遺品の軍刀がおかれており、当時の状況を語られた時は、お気の毒で、何とも言いようのない気持でした。

同学年の物故者は3名です。

他にもエピソードは沢山ありますが、当時をかえりみると、本当によき先輩、同輩、後輩にめぐ

まれ、部生活を過すことが出来たのは、幸であると共に誇りに思っております。社会へ出てからも、ご指導、ご鞭撻をいただき、お世話になったことを紙上をかりてお礼申し上げます。

2年半の青春

奥村一郎
（昭和21年卒業）

私は昭和16年に予科へ入り、18年9月に予科を卒業して、10月には本科へ入学したが、サッカー部としては18年春のリーグ戦が最後であったので、サッカーをやったのは正味2年半である。

我々の同期では永倉が八中で選手であったのですぐ大学リーグへ出て緒戦の早稲田戦で1人で4得点を稼いで（当時ハットトリックなどという言葉はなかったが）我々を熱狂させ、佐藤は油面小学校のエースで上手く、加藤も八中でいくらか素養があったようだが、その他の面々はズブの素人で、ボールドの前で、西内さんに足をとって、プレースキックから教わったのである。インステップキックとサイドキックがあることを初めて知り、自分の足を蹴とばして飛び上り、硬いクツのため両かかとに大きなマメを造り、そのマメが破れて化のうした上からガーゼとバンソー膏を貼って、練習した。最初は痛いけれどすぐ痛くなくなって何とかやれるものだった。

予科1年の時は本3は年が5つも6つも離れており、体力も段違いで、合宿でも、私は疲れてグッタリしているのに、平気でマージャンなどやっているのでビックリした。私は虚弱児童上りなので、今から考えると随分無理をしていたと思うが、幸に心臓だけは丈夫なのと若さで何とかついて行けたと思う。その証拠に合宿が終ると必ず軽い風邪とか腹下しをしたものである。だから休みの間病気して練習の始まる時は参加して、ほとんど休まなかったのだから、当時は随分真面目であったし、サッカーが面白く好きであったと思う。運動神経の鈍い私でも毎日やっていると少しは進歩するものだし、当時は部員が少いので試合にも出してもらえるということで続いたと思うが、当時はこう言っては申し訳ないが、上手でなくてサッカーを愛する先輩部員が多かったので、その点は気が楽だったと言える。

長い首を振立てて走るのでネックという名をもらった山田さん、論客の茂木さん、金原亭馬風を号し、歳時記を合宿へ持込んだ文化人で軽妙な毒舌に先輩連もギャフンと言わせた金原さん、飄々と奴凧が切れたようなスタイルでやさしいお兄さんの真面目な荒川さん。何れも戦雲の中に没した忘れられない人々である。

サッカー部生活は予科の2年半であったし、我々の青春というのはサッカー部であり予科であった。学部へ行ってからは勤労奉仕と陸軍経理学校の特別甲種幹部候補生生活であり、軍隊の悲惨さに比べれば、勤労奉仕の方はなかなか面白い点もあったが、本来の自由な学生生活とは比べようもない。

試合の思い出としては、予科3の時の浦高戦（小平）で私のパスを佐藤が右へ廻り込んで放ったシュートが見事に決まり、その1点を守り切って勝ったのと、予科リーグで専修に当り、韓国出身の選手が多く、強靱な足腰と強い当りに閉口したこと、18年の最後のリーグ戦の緒戦、法大戦で、瀬藤さんがコーナーキックを決めた時の嬉しさ。これでグッと我校ペースとなり3戦全勝のキッカ

ケになったのである。我々は練習に練習を重ねて、勝てるという考えは持っていたのだが、実際最初は5分5分のような気がして不安が一杯であったのだが、あの小柄な瀬藤さんがヘッディングシュートを決めたことで、これで良かったと自信もつき、ムードもグッと変ったのだから不思議なものであった。

我々が予科1で寮にいた時、ガンさんは部屋長で寮にいて、ベクさんを囲んで、純粋理性批判の原書講読をやっていると聞いていた。部史を編集するというので世に出て来た、刊行されなかった昭和17年の部誌にガンさんが学問と運動の相克を書いているが、私などサッカーをやるのに精一杯で、夜あんなややこしいドイツ語を勉強するなど思いも寄らなかったので、ガンさんは体力気力共我々と出来が全く違うと思ったものである。

当時のサッカー部は日曜も練習したこともあり、試合の翌日だけが休みということもあった。2年半訳も分らずやって来たサッカーがいくらか分りかけた時に戦争で中断されたので、もう少しやっていれば、もう少しはうまくなれたのにという悔は残っている。それが、この年になっても四十雀サッカーへと私を駆り立てているのかもしれない。

ボール、軍隊、ボール

永　倉　真　平
（昭和23年卒業）

昭和20年9月に復員してから再びボールを蹴れたことの喜びは、実に何とも言えないものがあった。

思えば府立八中で6年間――1年浪人したので――商大予科で2年半、学部で半年と続いたサッカー生活に別れを告げ、昭和18年11月28日に、いわゆる学徒出陣で品川駅を出発し、12月5日に北鮮の会寧にある朝鮮8505連隊に入隊したときはもうボールを蹴ることは絶望と思ったわけである。それでもサッカー部魂で頑張っていたところ、陸軍特別操縦見習士官の試験に合格し、19年5月末に内地に帰ってきた。何とも不思議としか考えられなかった次第である。

その後は軽井沢でグライダー訓練、次いで岩手県藤根の飛行場での初等飛行訓練を終え、埼玉県桶川で戦斗訓練にあけくれた。戦局不利となり米軍の爆撃もはげしくなったため、20年5月札幌へ移動し、特攻隊要員として毎日小樽港で突込みの訓練にはげんでいたところ終戦となり、9月に除隊して幸手にある我が家に帰還したわけである。

これでとにかく再び学生生活、否、サッカー生活ができることになったわけで、巌さんを中心に商大サッカー部の再建を目指して、練習に励んだわけである。

しかし当時は極端な食糧事情の悪化や経済変動のため、アルバイトに精を出さなければならなかったので、全員が揃って練習することは到底不可能であった。それでも励まし合い何とかリーグ一部に残ることができた。そして巌さんの後をうけ、私が主将となった22年には3商大戦も復活し6月末、西宮グランドで行われることになった。当時の状態では関西遠征といえば現在の海外遠征に相当する位の重みをもっていたのでその準備は大変だった。遠征費用捻出のため加藤省君宅に泊めてもらい、私、外岡、佐藤、高柳、加藤の諸君と日清製粉にアルバイトに行き12、3才のチンピラに

適当にあしらわれながら、何とか金策をつけ諸先輩の温い御援助と合せて無事終了することができたのは、戦績とは別に戦後初の大事業だったので印象に強く残っている。この時大阪にいた加藤春樹君には並々ならぬ世話になり本当に有難かったことを付け加えさせてもらう。

さて秋のリーグ戦を目指し合宿を行うことになり諸先輩の多大の応援をいただき、9月松本浅間温泉に集合した。この合宿で第1日に練習後に長距離ランニングをやったところ、距離測定の誤りと舗装道路を走ったため、下級生が足をいため精神的に参ってしまい、さらに外岡君が急性腸炎で入院し一時は危険な状態になるという事件が生じた。また下級生の期末試験が切迫しており、予定を早めて合宿を切り上げざるを得ない状態になったのも苦く懐しい想い出である。

その後も厳しい社会環境にもめげず歯をくいしばって練習に励みリーグ戦に臨んだわけであるが、早・慶・東・文理大に敗れ、最終戦の千葉医大にも敗退し、ついに二部に転落してしまった。先輩が血と汗で築き上げた栄光ある伝統を傷つけたこととなり、何とも申し訳けなく思っている次第である。

最後に敗戦後2年目の一人一人が生きていくのが精一杯という今日では到底想像もできない貧困きわまりない時代に、温い手を差し伸べて下さった諸先輩に対し、またそれぞれが喰うために一生懸命アルバイトに精を出しながら一緒にサッカーに青春を注ぎ込みおのれのベストをつくした同僚、下級生諸君に対し心から感謝申し上げて筆をおく。

サッカーと私

佐　藤　裕　之
（昭和23年卒業）

私は目黒区の油面小学校でサッカーを覚えた。油面は当時数少い小学サッカーの名門校であった。ところが進学した府立四中は勉強一点張りの固い学校で運動は盛んでなかった。それで商大予科へ入学すると、迷うことなくサッカー部へ入部した。しかし私は寮に入らず通学していたためと、身体がそれほど強くなかったので最初は非常に練習が大変で、時々休むこともあった。しかし1年を終る頃から身体も鍛えられて丈夫になってきて、順調に部生活を送れるようになって来たが、時代がそれを許さないようになって来た。

最も印象に残っているのは17年秋の浦高戦で私が1点入れて勝った試合である。それと戦後の苦しい時代の部の再建である。このことは他の人が書いていると思うので省略するが、私のサッカー生活は、卒業して千代田化工へ入ってからの方が長くなっている。三菱グループの試合で瀬藤さんとも、またお兄さんの瀬藤氏（三菱化成）とも顔を合せたし、加納孝（兄）氏とは会社のチームメートとして多くの試合も闘った。50才前後まで現役として出場したのは、私の誇りとするところであるし、サッカーを通して、先輩・後輩いろいろの人と交流出来たことが私の最も楽しい思い出となっている。これからは一橋四十雀にも事情の許すかぎり出場して、より長くサッカーを楽しんで行きたいと思っている。

負けた試合

川　端　良　三
（昭和18年予科卒業）

私がミスキックしたボールを敵のセンターホワードにとられ、ぬかれた。追いかけたが届かない、むしろ離される一方だ、遂に１点献上、そして間もなく２点目、これも私の責任だ、顔がボーッとほてり、頭が混乱して来る。足腰がガクガクして思うように走れない。こんなはずではなかった。せり合い、走り合いでは誰にも負けない自信があったのに、その自信がものの見事にくつがえされた。遂に惨敗、０対３か０対４ではなかったかと思う（奥村君からもらった記録表では０対１とあるが）。私にとって予科時代最後の浦高戦でした。

私の不心得から体調を崩し、試合当日まで回復できないまま、こんな結果になってしまいました。ミスは誰にもあるが、何としても勝たなければならない試合に臨みながら、基本となる体調を崩していてはお話にならない。

屈辱感と同時に勝負のそしてスポーツのきびしさをしみじみ味わった一戦であり、私にとって最も印象に残った試合でした。

先日奥村君から昭和16年以降の試合一覧表を送ってもらったが、私が出た試合ははっきり憶えています。前記の試合とは反対の懐しい思い出が、そして勝利の美酒に酔った楽しい思い出が次々とよみがえって来ます。

忘れもしない昭和17年暮れ近い浦高戦で１対０でしのぎ切り、最後のホイッスルを聞いた瞬間の勝利の感激は今でも忘れることはできません。勝利旗を手にする永倉君の涙の笑顔が懐しく思い出されます。

さて当時のことを思い出すままに書き綴っておりますが、皆様には本当にご無沙汰しておりました。奥村君からは時々近況報告をしてもらっておりましたが、今回サッカー部史を通して懐しい皆様と接する機会を得て嬉しく思います。現役当時の印象に残る思い出は前記のほか多々ありますが、あれからもう40年近い歳月が過ぎ去ったかと思うと、全く夢のようです。

松浦先輩が最近亡くなられた由、奥村君からの連絡がありましたが、先輩の変則的ながらスナップのきいた独得のキックが、当時キックの下手だった私にとって本当にうらやましかった。今でもあの明るい暖かみのある笑顔が懐しくよみがえって来ます。松浦先輩や戦死した諸先輩のありし日の面影をしのび心からご冥福をお祈りします。

また、僚友西浦とは旭川の陸軍病院で別れたのが最後でした。初年兵当時、私が急性肺炎で旭川陸軍病院に入院した時、彼も結核で入院しており、その後兵役免除で帰郷したが、私がソ連から引揚げて来たときにはすでに亡き人となっていた。戦中・戦後を通じて東京と北海道の実家を何回となく往復し、途中必ず函館の私の家に立寄り、家族をなぐさめてくれたそうです。西浦とは高橋・金原両先輩の勧誘で手を取り合ってサッカー部に入った訳ですが、顔を真赤にして鼻の頭に汗をかきながら練習していた、当時の彼が懐しく思い出されます。

憶い出すまゝに

加　藤　春　樹
（昭和21年卒業）

編輯委員からやいのやいのと催促され、締切を目前に控えて筆をとったが、忘却の年令となった現在では年月も定かではなく、憶い出すままに在部時代のことを記してみたい。

私の年令の連中は、戦争の拡大に絶えず追いまくられた感があり、次第に緊迫して来る情勢の中で、サッカー部の生活は唯一の楽しい憶い出として、今でも懐しく憶い起こされる。

昭和18年の学徒出陣に、年令が僅かに不足した私は、年末からその翌年の正月にかけ、部の先輩の入営に誠に慌しく、また悲壮な告別を重ね、自分自身も次第に戦死を前提とした心構えを強くして行った。学園は急激に人影が減り、僅かな部員で練習を続けたがそれも勤労動員で中断されることが多くなり、ついに19年に至り、柔道、剣道等の僅かな部以外は閉鎖する旨の命令を受け、私はその報告に高柳と共に松本先輩宅を訪問した。先輩は黙然として聞いて居られたが、次第に顔面紅潮し、遂に一喝してその非を詰り、私共２人は顔も上げえぬ状態であった。ようようにして辞した後、駅に至る路上で高柳は泣きだし、自分達の考え方を理解して戴けなかった事を悔しがった。先輩には充分に説明し得なかったが、私共にとってサッカー部は学園に在りながら、それとは独立した存在であり、いわば故郷のような存在であった。学園の組織上の消滅は、いずれ私達も下級生も戦場に赴くという前提の下では何も問題とすべき事ではなく、自分達の心の支えとして永遠に残る筈のものと考えていた。出陣、戦死を前提とした私達の当時の切迫した環境では、そのような求心的な考え方が日常生活の総てを支配していたのである。当時残留していた部員は恐らく同じ考え方と推量するが如何なものであろうか。ただし、今の時点で反省すれば、松本先輩を初めとして、内地・戦地を問わず、先輩方の気持としては、形の上にもサッカー部が存続して、永遠に心の帰所であってほしかったであろうことは推察できる。純真ではあったが、反面その点を察し得なかった私達の不明をお詫び致します。

その頃の憶い出として矢張り戦死された部員のことになるが、１年上級の荒川さんの入営の朝はどういうものか鮮明に記憶に残っている。品川に集合を命ぜられた部員を見送りに行った際、階段の途中で声をかけられた荒川さんの紅潮した顔。練習中お世辞にも上手とはいえない私の守備を、ネットの後から絶えず励まして下さった声も忘れられない。邪心の全くない、しかもサブの立場を身を以って示して下さった先輩を懐しく思い出して居ります。また同じく１年上級の金原さんのユーモア溢れる毒舌も忘れることは無いでしょう。この学年は最近になってガンさんも失い、誠に淋しく感じられます。

書き出しと違い、大変しんみりとした話になってしまったが、年月の有難さは、淡いベールの中で、どれも楽しい憶い出に変り、夏の合宿の辛さ、リーグ戦・定期戦に於ける敗戦の悔しさも、今となっては寧ろ懐しくかみしめて居ります。現役の諸君の健闘を祈って筆を擱きます。

サッカー部生活回顧

高　柳　　晋
（昭和23年卒業）

私は昭和17年予科入学と同時にサッカー部に入った。練習は激しく、部生活の規律は厳しかったが、それ以上にボールを蹴ることが楽しかった。サッカー部としては、心身の鍛練を目的としたいわば道場的性格のものを目指していたが、これは学生スポーツの在り方として当然のものであると思う。私も次第にその方向に惹かれて行った。

新入部員としてサッカー部に入り一番初めに驚いたことは練習を日曜日も行うことであった。シーズン入りをすると１ケ月に31日学校に行くことになる。次にはシーズン中の禁酒禁煙に驚いたのではなく、これを皆が守っているのに驚いた。寮のコンパがあっても、サッカー部員だけは酒も煙草ものまずに居った。三番目にはグラウンド内の敬称省略であった。上級生を呼ぶときも絶対に「さん」付けをしない。あだ名があればそれで呼捨てする。始めは変に感じたがこれはすぐに慣れた。また部生活を通じて１度もビンタなど行われたことが無かった。これは当時の軍国的風潮の中にあっては珍らしいものであったと思う。合宿のときには、最新の映画雑誌を沢山持参してくる上級生が居り、夕食後のひとときを映画女優の写真を眺めることは、不思議に楽しかった。

予科２年（昭和18年）春に、レギュラーメンバーに選ばれて非常に嬉しかった。本科生であってもサブに廻った人がいたのであるが実に感動的だったことは、この本科生が平然として熱心にレギュラーの相手を努め、誰よりも真剣に練習に打込んでいる姿であった。私はこの上級生を心から尊敬した。

前年に大学リーグ一部を陥落しているので、復帰を目指してキャプテンは必死の思いだったのであろう、この年の練習は猛烈を極めた。小平のグランドで正午頃から予科生が練習を始め、午後２時頃本科生が国立からやって来てレギュラーの練習となり、終るのはいつも夕暮れである。うす暗くなったグランドでは、色の黒かったＦＷの人などその所在が見えなくなり、ただ元気な声だけは良く聞えたのも印象的であった。学校中で一番遅くまで練習しているのは常にサッカー部であった。やがてリーグ戦が始まると連戦連勝であり、全勝で二部優勝となった。勝ちゲームの楽しさは格別であった。練習が辛かっただけに一層そのように感じた。リーグ戦は以後戦争のため中止となり、学徒動員により学生の大半は出征してしまい、我がサッカー部も休部ということになった。

昭和19年小平校舎は軍に徴用されて、予科生も国立に通うことになった。我々は部生活の根を残すことを考え、サッカー部員を中心として滑空班を組織した。ところが練習用のプライマリーグライダーは第１回の練習で壊れてしまい、修理に出したはずが遂に戻って来なかった。私たちは保管してあったボールを持ち出してサッカーを始めた。靴も不足しているので全員裸足で蹴っていたが、それで結構面白かった。終戦後サッカー部再建となり、旧制高校や専門部からも優秀なメンバーが入部したが、それでも部員は少なかった。物資不足、インフレなど生活困難な時代であった。合宿しても芋が主食であり、また合宿費を稼ぎ出すために全員で倉庫会社に荷役のアルバイトに行ったこともあった。

昭和21年秋大学リーグ戦が再開されリーグ一部に出場した。連戦連敗であったが辛うじて１勝し

一部に留まった。何しろメンバー不足であり、入部数ケ月の未経験同然の者も試合に出てもらう状態でもあったが、自分自身の未熟さをも痛感させられた。翌22年には全敗して遂に一部陥落という事になった。その最終戦の前々日より私は発熱して家で寝込んでいたが、学生時代最後の公式戦でもあり思い切って出場したが、グランドに出ると却ってスッキリした気分になった。この試合で今でも思い起すことは、ゲームそのものは我方が幾分優勢であったが、仲々点が入らないで一進一退していた。このゲームに負けた方が陥落して二部となってしまうので双方必死であった。その中に逆に1点入れられてしまった。こちらは良い所までいくが決めることができない。その時突然に、我方のＣＦが血相凄まじくボールを両手に摑み、相手ゴールに投げ付けようとした。勿論反則をとられたが、その気魄の激しさは恐ろしい位に感じた。ふだん温厚な人であっただけに特にそう感じた。ラグビーはサッカーに由来するとされているが、正にその発祥のさまを見る思いであった。

この年（昭和22年）春に3商大リーグ戦で大阪に遠征した。結果は1勝1敗であったが、その帰途に大阪在住の先輩の所に寄った。私より1年上級で既に卒業し就職していたが、あらかじめ「自分が新入生の頃は上級生からいろいろと面倒みて貰い随分とごちそうになったりしたが、自分が上級生になった時は戦争が始まり、物資不足となって下級生に何もしてやれなかった。だから今度大阪へ来たら皆で寄って貰いたい。できる限りの接待をするから」といわれていた。彼は私たち全員を2日に亘って歓待し、京都大阪を案内してくれた。いま思えば大変な出費であったであろうが、学生の私たちはそんな事考えず心から喜んだ。

最近たまたま小平のグラウンドに行き、サッカー部室に入ったとき、今昔の感を覚えた。部室の中はボールと靴が一杯で足の踏場もない程である。私たちの頃はボールも靴も貴重品であり、練習終了後は必ず手入れをし大切に保管場所に納めたものだが、今はボールも靴も豊富になり質も良くなっているようだ。もう1つの今昔感は技術レベルである。今の現役は個人プレイにしろチームプレイにしろ、私たちの頃より遥かに上手である。練習のやり方の良否ではなく、社会的サッカーレベルが向上したのであろう。従って古いＯＢは現役に対しての技術的アドバイスはあまりやらないで、専ら精神論を語ることとなる。しかしそれらの精神論の中から少しでも現役諸君の心の内に入り込むことのできるものがあれば、誠に幸いであると思うものである。

戦後のサッカー部再建について

加　藤　　省
（昭和23年卒業）

終戦とともに疎開先から東京に引揚げてきたが、東京は見渡す限りの焼土であった。はるか向うまで眼をさえぎる物すらなく、焼跡特有の異様な臭気がたちこめていた。昔盛り場であった処には闇市が立ち、戦時中影をひそめていた物資が売られており、活気に満ちていた。しかし肩で風をきって歩く進駐軍や闇屋とは対照的に、ぼろをまとった人々の眼には生気がなかった。景気づけにスピーカーから流される流行歌も、いたずらに虚無感をかきたてるだけであった。使命感に燃えて出陣した我々学徒兵にとっては、この祖国の変り方は精神的に大変に大きな衝撃であり、敗戦の悲哀をいやという程味合わされた。将来に対する希望すら失いかけながら、国立に復学届を出しに行き、

赤松の林の間に懐しい校舎を見、グランドのゴールポストを見た時は、胸が熱くなるのを禁じ得なかった。軍隊で夢にまで見たものが、そのままそこに残っていたからである。

終戦翌年の春になると、続々と帰還した学生でにぎわった学園も漸く落着きを取戻してきた。大半の学生は学業の後れを取戻すことに懸命であったが、一部の学生は社会主義運動を派手にやっていた。

その頃になって松浦巌さんから「サッカーの練習を始めようや」という声がかかった。当時はまだリーグ戦が復活したわけでもなく、また社会環境はサッカーのような激しいスポーツができる状態ではなかったが、我々は戦前小平で練習を始めた時のような極く当り前の気持でグランドに集合した。サッカーについて禁断症状であったのは事実であったが、サッカーをやるという事が生活の一部になっていたからであろう。

しかしボールを蹴り、走ってみて現実の厳しさをいやという程感じた。第一に腹がへってどうにもならぬし、身につける物は軍隊のシャツであり、地下足袋であり、用具類は無に等しかったからである。そうするうちに秋にはリーグ戦が再開されることになり、巌さんの本格的な部再建運動が始った。空き腹をかかえて練習をした後で、松本さんはじめ諸先輩に援助をお願いし、資材の調達に走り廻ったのであるから、その苦労は並大抵のものではなかっただろう。戦前の学部生としては唯一人残られ、部再建については使命感を持って居られた。卓抜した指導力と、稀にみる包容力を発揮され、我々後輩に部再建の苦労を殆んど気付かせなかった。勿論我々が部生活を続けるについて、個人的には想像もできない困難があったが、巌さんの存在がなければ今の部は相当変ったものになっていたに違いない。

当時はモラトリアム、新円切換という我が国金融史上に残る措置が行われ、自分の預金があっても封鎖されて手をつけることができなかった。さらに加速されたインフレに生活の維持には、闇収入のある者以外は等しく苦しんでいたなかで、松本さんはじめ諸先輩が寄せられた御援助は、普通の先輩後輩の関係ではとても考えられないものであった。他校では随分派手にやっていたところもあるが、我々の部が本来的な意味のアマチュアリズムに徹していた事は誠に幸であったかもしれない。かくして先輩の暖い御援助と巌さんの指導力によって、戦前と全く同じ部再建の基礎をつくることができた。

しかし部の運営上大きな問題があった。当部は地方出身者も可成り多く、折からの住宅難・食糧難は地方出身者の上京を殆んど不可能にしていた。当校は他校に比較して数が少なかったから、チームの編成すら困難であった。

幸にして専門部出身の鈴木・蛯子・丸山君、松本高校出身の外岡君、東京外語出身の森重君等の参加を得て、漸く部としての体裁が整った。部創設以来最も多彩なキャリヤーの部員構成となった。今にして不思議に思うのは、当時それ等の人の参加を得ても、全く異和感を感じなかった事である。反って部の運営やら技術な面で、極めて有益な意見をうることができ、部再建の大きな力となった。もしこれらの人々の参加がなければ部の再建は非常に困難であったと思われる。

当時サッカーのあり方については、全国どこでも同じ健全な考え方を持っていたからであろう。

戦後部の再建には非常に苦労してきたが、昔も今も変らない指導理念に貫かれた部が存続できたということは、これこそ伝統の力であるということができよう。

苦難のサッカー生活

外　岡　諒三郎
（昭和23年卒業）

終戦を愛知県豊橋で迎え、８月20日過ぎ、東京の治安状態視察の命令をもらって上京、本郷の自宅に２、３日滞在しました。強制疎開で、家を取り壊され、その上転居先でも焼け出され、家の中はがらんどう、それでも父が勤務先の倉庫に預けてくれたお蔭で、学生服・角帽は無事でした。さっそく取り寄せて復学出来る喜びに浸ったものでした。豊橋へ帰任のための切符を買いに上野駅に出向き駅頭憲兵の一隊に、服装を咎められました。軍刀まで佩用した軍装なのに、何と戦闘帽ならぬ角帽を着用していたのです。玄関の帽子掛で取り違えたのですが、軍法会議ものだぞと嚇かされました。

国立へは、９月中旬から登校したのは覚えていますが、初めてグランドに出てボールを蹴った時の事は残念ながらはっきりしません。学業に戻ることより、ボールを蹴ることばかり軍隊では夢に見たのですが。

「宝くじは買っても無駄ですよ。当る確率はほとんど零に等しいんですから」中山伊知郎教授が統計学の講義中に駄弁った言葉です。関西遠征の費用を作るためだったか、同期の加藤省君達と、日清製粉川崎工場に働きに行き、一日中麻袋の運搬をやらされました。上野広小路の焼跡で、煙草欲しさで買った三角くじ、煙草がもらえた上、何と１等賞金（２千円？）までせしめてしまいました。１日だけでアルバイトは中止、川島一郎君（第一勧銀→共和電業）と旅に出、山形に疎開中の伯母を訪ね、ピカピカ光る米をたらふく食べて来ました。関西遠征（３商大戦）は、大阪には大勝、神戸には大敗でした。父は一昨年30万円を当てましたが、小生はその後宝くじには、手を出さずに来ています。

昭和21年秋、東大御殿下グランドでのリーグ戦、東大二宮君が中盤右サイドから蹴り上げたボールが、前に出ていたキーパーの頭上を越えて我がゴールに入ってしまったのが、印象強く残っています。翌22年のリーグ戦に備えての合宿は、９月初旬松本市外浅間温泉、亀の湯旅館でした。合宿の段取はすべて私がしたと思います。それなのに、前年リーグ戦の時と同じ腹痛で、遅参しただけでなく、腹痛・呕吐・下痢がひどく、宿の若主人二木氏の取り計らいで国立病院に入院、東京から両親の到着する時まで、永倉・森重両兄に徹底的に看病してもらいました。台風もあってのことでしたが、私のダウンで合宿中止に到らしめた事で、皆さんに改めてお詫び申し上げたい気持です。丸１ケ月の入院後帰京、衰弱激しく駅の階段を杖に縋って昇りました。また二部転落をきめた最終千葉医大戦を観戦して興奮のあまり帰宅後当分熱が下がらず、脈拍が治まらずあわてたものでした。

昭和22～23年頃には、物さえ確保すれば何でも金になりました。友人の世話で保革油を相当量入手したものですから、売って差益を部費に当てることにしました。飛び込みで、通りすがりの靴屋に売りつけたり、まとめて高島屋に売り込んだのは、やはり巌さんでした。加藤君や私は後について歩くだけ、やはり巌さんには商社の代表になれる素質が、この辺にもうかがえたわけです。

卒業してから30年余り、とぎれとぎれでしたが今日まで現役と付き合って来ました。慣れとは恐ろしいもので、リーグ戦の戦績、新四年生の顔ぶれを見て予想すると、不思議なくらいはずれない

ようになってしまいました。本年は１ケ月程、新コーチ品村氏の着任が遅れたので、不安材料は残りますが上位入替戦の権利を手にすることは間違いないところでしょうし、波に乗れば関東リーグ入りの可能性も出て来ています。

私のサッカーと人生

鈴　木　哲　夫
（昭和23年卒業）

今でも残念に思うのは、昭和22年の秋の一部リーグ戦でした。どこかチームに勝たなければ一部に残留できません。早大の主将は、藤枝東校で共に汗を流した寺島君で、フルバックのポジションにおり、気軽に戦った結果12対０の大敗でした。昔の中学時代、サッカーの選手として、経験の少い、当校のメンバーでは当然だったかもしれません。しかし、ファイトはどこのチームにも負けないつもりでした。

次に慶応大学と対戦しましたが、ＦＣをつとめていた私に、バックから再三好球をもらい、左足のボレーシュートが決り、前半２対０とリードしました。勝算既に我にありでしたが、後半、慶大の二宮監督の叱咤激励に奮起した攻撃を支えきれず、４点を献上し、２対４の負けとなりました。この対戦は、当時の日本ニュースのフィルムに収録され、映画館で上映されましたが、映画館の入口に掲示された一駒の写真が、今手元にあります。これを見る度に東大の御殿山のサッカーグランドでの無念さを思い出します。前半もう１点私がゲットしていたら……と。それ程チャンスはあったのにと……。その後、千葉大学に１対０と惜敗し、通算０勝１引分けで二部転落となりました。先輩が栄光の下に築き上げた一部から、二部に転落させた責任と悔しさは、今でも忘れることはできません。

卒業後、静岡県代表チームに選抜され、国体に３回程出場しましたが、全早大のＷＭＷやオール関学等の強豪チームがおり、準々決勝進出が最高の成績でした。私の青春はサッカーなしでは考えられませんでしたが、多くの喜びと悔しさと、色合いに富んでおり、本当に良かったと思います。

現在のサッカーは、戦術・テクニックとも当時に比して、大変革を来しています。奥行きが非常に深くなったように感じます。しかし、選手の交替も認められなかった昔の方が、何かファイトをむき出しに出来たような気がします。その意味で、南米チームの個人技と強引さに魅力を感じます。ボールを持たない選手のポジションが課題と解説者は言いますが、強引な意外性のプレーで、局面を打開するのも、ボールを持った選手に課せられた課題だと思います。その積極性に欠けるのが日本のサッカーのように感ぜられます。意外性とは創意です。これがサッカーから得た私の人生訓です。後輩の人達も一生懸命練習に励んでいると思いますが、いかなる時代でも創意を忘れないように念願します。

焼跡からのサッカー

森　重　利　直
（昭和24年卒業）

昭和24年３月卒業のサッカー部員は、僕と蛯子君の２人きりである。従って昭和23年度の戦績を書くことは、我々にとって当然の任務である。しかし僕のサッカー部生活の思い出の中で、この23年度は一番ふれられたくない慚愧の年であり、正直なところ、この年のサッカーについて僕にはほとんど記憶がないのである。サッカーというよりサッカー部に対する僕の情熱は、昭和21、22年の２年間で燃えつくしてしまって、一番大切な最終学年の部生活に、ポッカリと大きな空洞をつくってしまったのである。

戦後の社会的荒廃から未だ立ち直り切っていない昭和21年、すでに軍隊から復員していた主将の松浦巌さんをはじめ、永倉さん・佐藤さん・外岡さん・鈴木さん等々が、この日を待ちかねたように国立のグランドに集り、秋のリーグ戦復活を目指してボールを蹴りはじめていた。この時の一橋は先輩の遺産を継承して戦前実績の一部リーグに属していた。

ところがなにせ戦後の混乱期である。物が足りないどころか、メンバーが足りない、キーパーがいないといった騒ぎで、全く素人の僕がひょんなことから高柳さんに部室に連れて行かれた。そこで巌さんの人柄に接し、真平さんらからおだてられて、なんとなくサッカー部に入部し、とうとう誰も引き受け手のないキーパーをやるはめに陥った。今から考えれば随分無茶な話だったと思うが、背に腹はかえられない部の事情と、一寸した俠気が重なり合って、思いもかけなかった僕のサッカー部史がはじまったわけである。

大体があまり物おじしない方だったので、あまり違和感もなく部生活を楽しんだし、練習がつらいと思うこともなかった。ただ何せ素人の速成キーパー、練習のたびにツキ指がふえて、とうとう指が10本とも腫れ上って曲らなくなり、高柳さんが済まなそうに懸命にマッサージしてくれたりした。こうしてそれなりの特訓がはじまり、大いに意気も上って本郷の御殿下グランドでの復活リーグの第１戦に臨んだのである。本当は颯爽と出場ぐらいに書きたかったが、靴がないので地下足袋をはき、薄汚れた手ぬぐいで頭をしばった姿は、お世辞にもイイ恰好と言えるものではなかった。それでもこの年は１勝４敗で辛じて一部に残った。

翌昭和22年は巌さんが卒業したものの、真平さんはじめレギュラーの大部分が残り、二部から上って来たのが千葉医大なので、これならまた一部に残れるのではないかと思った。ところが案に相違して、これが最悪の年になったのである。

３商大戦のあと、夏の終りに秋のリーグ戦に備えて松本で合宿が行われた。宿屋に泊るのに米を持参しなければならない時代で、物々交換のタイヤまで調達した苦労の合宿だったが、この頃から不運の前兆が現れはじめた。松本の合宿は外岡さんの世話だったが、肝心の外岡さんが突然発熱し、激しい呕吐に襲われて国立病院に緊急入院し、そのまま長い療養生活に入ってしまった。そのうち予科の部員が試験のため合宿を切り上げて帰京することになり、残った本科生が６人という何とも意気の上がらない合宿になってしまった。９月に入って大きな台風があり、真平さんの家も被害をうけて学校に現われなくなった。外岡さんは全快に至らず出場を断念。学生結婚をしていた高柳さ

んは子供が生まれるといって気もそぞろになり、奥さんから敗けてもいいから怪我をするなと励される始末。こうして最悪の事態で迎えた秋のリーグ戦は、気ばかりあせって連戦連敗し、遂に最下位となってあえなく二部に転落した。

昭和23年になると前の年のレギュラーが全員卒業し、何か独り卒業できず取り残されたような孤独感を味わわされた。二部陥落という何かプツンと糸の切れたような虚脱感が、部への情熱に水をさした。反面ゼミの生活が面白くなり、村松祐次先生への傾斜が急激に加速した。インフレが亢進して、生活を補うアルバイトも、部生活への没入に障害となった。

本当は最高学年なので蛯子君か僕が面倒をみなければならなかったのに、僕は彼をあてにし、彼は僕をあてにして、とうとう誰がリーダーかわからない曖昧な形のまま戦線を離脱し、結果的には責任を放棄して、この年二部から更に三部に転落するという顔向けできない悔いを千載に残した。

考えてみれば短い期間の部生活であった。しかし僕はここで仲間との温いつき合いを堪能した。互いに助け合うチームプレーを実感した。自分の勝手な事情で大きな迷惑をチームに及ぼしたという気持ちの借りもつくった。

そんな昭和21年から23年の３年間は、我が人生の中で最も物質的に恵れない荒廃した世相の中の生活ではあったが、同時に我が生涯の最も豊かな、そして多彩な青春の日々でもあったと懐しく思い出している。

回　想　録

渡　辺　俊　夫
（昭和26年卒業）

今振り返ってみると、私の学生時代のサッカー部生活は、あらゆる意味で本当に苦難に満ちたものだった。旧府立四中時代にはサッカーのサの字も知らない私だったが、今迄締めつけられて来た５年間のスパルタ教育から、何か机の上の学問とは異質のもっと大きな広々とした、しかも厳しい、激しいものの中に飛込んで行きたい気持があり、幸い脚が早かったので勧誘されるままにサッカー部に籍を置くことになった。

しかし予科入学からわずか６ケ月後の昭和18年秋には、太平洋戦争の煽りで球技は一切禁止となり、また12月には学徒第１陣として戦争に狩り出されてしまった。昭和21年夏、南方から復員したその足で馳けつけた小平のグランドは、破壊されたサーチライトの破片で、とても使い物にならず、また校舎の窓ガラスは至る処破れ放しで全く唖然としたものである。

復員の身の上に母を抱えていたので、先ずは喰う事が先決、たまたま国電の中で出合った友人の世話で、やっと進駐軍のアルバイトを見つけ、漸く糊口を凌ぐことが出来た。

戦後の喰うや喰わずの苛酷な環境下で、果して再び部生活を始めるべきかどうか、いや出来るかどうか――私の精神的闘争があった。これを断行したのには２つの要因がある。すなわち当時の予科長の「平和日本再建のためには、ひたすらな学究と旺盛なファイティング・スピリット」との御教示と、戦争が教えた静の脆さ儚なさ、ひいては動の躍動的哲学とチャレンジ精神であった。でも本音を言えば、アルバイトとサッカーとゼミ、喰うや喰わずの毎日、本当に辛かった。軍靴が駄目

になり、新宿の闇市で漸く入手した靴は底がハードボードのちゃちな物で、パンツも50円、股がすり切れる程だった。練習前にはよく小平でまずい蕾を買い漁った。この蕾が全員アルバイトの数少ない週２回の部員を集める方法の１つにもなった事は、当時笑えぬ切実な事実であった。

このような情況が長い間続き、脱落して行く仲間も少くなかったが、部活動の上で一番大きな痛手を蒙ったのは、昭和23年春先輩と私の仲間９人が大挙卒業したことであった。11人ぎりぎりの部員、戦力は無惨にも低下、昭和23年遂に関東リーグ最下位の三部に転落してしまった。

昭和24年、25年とキャプテンをやったが、何とか再度二部昇格を果すべく全力を傾倒した結果、昭和24年秋頃には漸く食糧事情も持ち直して来た事もあり、年間を通じ長雨続きの泥濘戦で苦戦も多かったが、５勝２不戦勝で宿願の二部昇格を果し得たのは望外の喜びであった。当時の三部の中には、あんちゃん風の輩が多く、中には試合中あきらめてグランドにあぐらをかいて坐り込む奴等がおり、全くサッカーを侮辱するものと憤慨にたえなかった。この意味でも昇格して安堵の胸を撫で下した次第である。

卒業後も昭和35年迄三井物産で球を蹴り、三井蹴球連盟の幹事もやったが、生涯の想い出となる事は、卒業迄進駐軍、四谷税務署、英語家庭教師（鈴木彰先輩の御紹介）とアルバイト続きで、週２日、多くて３日の練習だったのに、よくもまあ頑張り通して商大サッカー部を卒業出来た事、昭和24年母が急逝、天涯孤独になった時、近所の人の急報もグランドで一人ボールを蹴っていた私の耳には届かず、末期の水もくめなかった事、昭和46年三井物産メルボルン店へ転勤の際、飛行場からグランドに直行、故巌さんより在濠日本人子弟のコーチ引継ぎをし、４年間毎土曜日球を蹴った事等である。

私をして今日あらしめた諸先輩の御指導、御教示に対し、本紙上を借り厚く御礼申し上げると共に、酉松会の栄々発展を切に祈って止まない。

若き日の回顧

篠宮　清
（昭和27年卒業）

昭和21年秋、私共７人（吉沢・鵜飼・小林・井田・木滑・堤・篠宮）は予科の門をくぐった。

終戦の翌年で世相は混沌としており、米の飯は銀メシと言われ、未だ庶民の口に出来ない食糧難の時代であった。春の入学が半年延びた事情は陸士・海兵出身者の制限問題で、G.H.Qともめていたためと記憶する。我々の同期の中にも、小林・堤の両君は陸士、小生は海兵組であった。同期の特徴は、戦後のことでもあり、兵隊に行きかなり遅れた人達と若い連中との間には６才位の隔りがあった。吉沢・鵜飼の両兄は、オッサンの貫録があり、小生らは紅顔の美少年であった。入校と同時に早速各部からの勧誘ががあり、たまたまサッカー部に入った７人組であった。23年卒の永倉・加藤さんらの上級生の猛烈な勧誘に抗し切れず、伝統ある一橋ア式蹴球部の一員となることになった次第である。

当時の一橋サッカーは、関東大学一部に所属し、先輩の築いたこの堂々たる地位と伝統を守ることが至上命令であった。最上級生には故人となられた松浦巌さんがおられ、名実共にチームの重鎮

であり、後輩からガンさん、ガンさんと尊敬され、親しまれていた。今にして思えば、我々素人の７人が、あの食糧難の時代に、途中で落ちこぼれることもなく６年間サッカーに打ち込むことが出来たのも、入部当時の偉大なる先輩のリーダーシップと人間的魅力に惹かれてしまったからかもしれない。予科３年間は衣食住にわたって耐乏の時代であったが、精神的には最も自由を謳歌出来た時代でもあった。予科長の高島先生の社会科学としての経済学を説く熱弁に耳を傾け、若きヴェルテルの悩みを独乙語で読んだのも懐しい思い出である。我々の日課は午後授業が終ると、直ちに多摩湖線に乗って（屋根の上）国立のグランドに練習に通った。スライディング・タックルの練習で目の前が黄色くなることもしばしばで、猛烈にシゴかれた。上級生の顔が鬼に見えたし、兵学校時代に逆戻りしたような錯覚に陥ったりもした。

昭和22年、松浦さんが卒業され、永倉さんが主将となられた。夏の松本での合宿――浅間温泉から松本高校グランドのランニングのつらかったこと。宿舎に帰って食べたスイトンのあつかったこと等、昨日のことのように思い浮ぶ。また松本先輩から頂いたリヤカーのタイヤを農家で甘藷に代えてやった国立での合宿も思い出深い。

一部残留をかけて臨んだその年の秋のリーグ戦に、小生はＣＨとして出場した。加藤・外岡の両先輩が両ＦＢで、穴をカバーして頂いたが、随分と迷惑をおかけしたことだろう。優秀な上級生がいたにもかかわらず、我々若手の力不足でチームは敗け、二部転落を余儀なくされた。東大御殿下グランドで悔しさと申し訳けなさに涙も出なかったこと。一人一人がもっと向上しなければ勝てないと痛感したことを思い出す。

昭和23年、頼りの最上級生が大勢卒業し、小生は予科の主将になり、森重さん、森さん、渡辺、石川、松本のすぐ上の先輩達と一緒に、我々同期も急にチームの中堅として頑張る立場に立たされた。しかし戦力の低下は如何ともしがたく、その年のリーグ戦も不成績で三部に転落するハメとなった。翌24年我々は学部に進み、サッカー部の建て直しにかかった。幸い後輩達も順調に伸びてくれてその秋のリーグ戦で優勝し二部復帰が叶った。

卒業の前年我々は最上級生となり、吉沢が主将、小生がマネージャーでＣＨ、両ＦＢは堤・小林がレギュラーであったが、他の諸兄も出場する場面もあった。最後の慈恵大との試合で、生まれて初めて１点入れ、引分けたのが、何よりも嬉しい思い出であった。

その後我々は卒業し夫々の道に進んだ。頻繁に会うこともないが、共に汗を流しボールを蹴った友情の絆は何物にも代え難い。卒業して30年近くなるが、あの若き青春の６年間が、我々の原点であると強く自覚する今日此頃である。若くして逝った堤君の御冥福を祈って、筆を擱く。

七　人　の　侍

針　谷　　操
（昭和28年卒業）

昭和27年最上級学年となった七人の侍についての人物評を、当時の一橋大学サッカー部の部報によって紹介してみよう。

堤　光義（昭和27年・主将）

気がやさしくて力持ち、たたけば鼓の音がする。その鼓の音に惚れ込んで慕い寄る乙女も現れました。ファイトはいやが上にも高まり、試合の時の勲（いさおし）は陽焼けの色が物語っています。お察しあれ！　その純情の程を。今後二年間の奮闘が見ものです。

高橋　敬蔵（昭和27年・マネージャー）

ウリの様だった顔にもいつの間にか荒熊さんのようなひげが生え始めました。蕎麦が好きな故か身長も伸びて六尺に垂んとしています。部に於ける親子二代の活躍は周知の所。明朗にして素直、品のいい典型的なスポーツマン。一橋蹴球部の名物男としてその大成を望むや切。

針谷　操（昭和27年・協会学連担当）

引緊めた顎。油をつけぬそのバサバサな髪。針谷君は仲々一徹な人です。練習中の気慨は部員一同を圧するの感があります。惜しいかな、その堂々たる体軀もこの所胸を痛めていささか消耗気味です。本来の調子に立帰れば再び獅子奮迅の活躍が見られることでしょう。

斎藤　隆（昭和27年・グランドマネージャー）

よくたべよく眠る。部員一同の寵愛を一身に担っているのは、人格円満さの然らしめる所でしょう。その紅顔に似ず、試合中の「ネバリ」は賞すべきだが、惜しむらくは駿足を持たず。「ロング」を嫌いて上にも伸びず。好漢中の好漢。

石井　弘志（昭和27年）

世界は自分のために存在していると信じている立派な男。学校に出てくる事では人後におちません。江戸ッ子的ビジネスマンの香りフンプン。身体の弱いのが傷ですが、ポジションは何処にでも使える重宝な男です。

田原　洋二（昭和27年）

黙々として球を蹴り、黙々として球を追う。

その名ＲＨぶりはすでに衆人の認める所。品行方正・学術優秀の点は他の者の以て範とすべき所です。近時喫煙をおぼえた様ですが、段々隅にも置けなくなってくることでしょう。

高田　菊夫（昭和27年）

部内でも有数のセオリスト。身体はスマートだが、仲々実行力に富んでいる。真白な歯をむき出して、ニコリと笑う笑顔は妙に愛くるしい。性極めて真面目。その活躍は今秋随一のみものとならん。美わしき夢を求めて、美しき夢にあわず。あゝ！

以上の七人の侍ならぬ三バカ四テイノウのチームワークのよさは、最高学年（堤・高橋・針谷が

学部３年、斎藤・石井・田原・高田は新制４年）となった昭和27年の春から、秋の大学リーグ戦をへて、打ち上げコンパを三日三晩、千葉富浦寮で〝雀鬼〟に終始、卒業の決まった昭和28年早春の箱根のサヨナラコンパと、変わることなく続いていった。

昭和22年に旧制の予科に入った三バカ、実は堤君はその一年前に入学していながら、心なき岩田一男氏の試験監督によって、答案を他人に見られたがために一年降ってきた悲劇の主人公だったが、その彼と、高橋、針谷の旧制３人男に、前記の新制大学第一期の４人衆（４テイノウ）が加わり最高学年を形成、一橋蹴球部に一大エポックをもたらしたといえよう。

ただ、この中の４テイノウこと新制第一期の諸君は、ついに最上級生の特権を行使することなく卒業した不運の年代ではなかったろうか。

斎藤・石井・田原・高田と多彩ながら、気性のおだやかな四天王だったから、また、堤君という一歩人生の先を歩む、温厚にして、まさに〝大人〟のキャプテンが中心に存在したればこそ、三羽烏四天王のチームワークがキャンパス内の名物となったのだろう。

全く仲好く、いつもつながって、グラウンドに、部室に、雀荘に、阿佐谷北口のラーメン屋「特一番」へと編隊を組んで、ぞろぞろと中央線を西へ東へと移動して歩いたものであった。

亡き堤君

針谷　操
（昭和28年卒業）

堤君はやはり兄貴分で終始ぼくらをリードしてくれた。一段上の〝大人〟の風格をもちしかもえらぶらず、つねに笑顔を絶やさず、サッカー部の中心にあって、温かく同輩・後輩のために尽してくれた彼。

戦前の府立一中（現都立日比谷高）時代の堤君のことを、恩師の生物の尾畑先生は、今でもなつかしそうに語る。

陸士から復員して商大予科に入り、わがサッカー部の一員となる。

敗戦翌年から卒業の昭和28年春まで、ただ生きのびるだけでも大変な時期に、本当によくサッカー部のためにがんばってくれた彼。

誰もがそうだったが、彼でさえもご多分に洩れずアルバイトを探していた。たまたま、ぼくが一年近く勤めた外務省を辞めて、ある税理士事務所まがいの仕事を始める男に、協力を頼まれたとき、ぼく自身余り気は進まなかったが生活のために彼とそこの仕事を手伝ったのだった。

真夏の焼跡に水たまりの多い新小岩駅近くの事務所に、彼と通ったころを思い出す。

台風で大水害を受けた下町一帯の被災地に税金とり立ての嵐が吹き荒れ、泥水の腰近くまでたまった中を、自転車を押して、れい細な町工場の人たちのために税務署へ行ったことが忘れられない。

浅草の吉原入口の大きな材木屋のご主人にいろいろ親切なアドバイスを受けながら、彼と二人でバイトをして歩いたあの夏の日は、もはや再び戻ってはこない。

しかも堤君までもその夏の日のように、遠い彼方の人となってしまった。

口惜しいことだ。

合宿の想い出

森　康全
(昭和29年卒業)

当時、合宿ともなれば、マネージャーの、特に裏方の苦労は大変なものであった。今と違って何よりも先づ食糧の補給。借り着の学生服な身に纏い、都内の先輩を次々と訪ねて、寄付金の他に現物寄付も御願いして廻った。明治製菓の鵜飼さんからは、甘い御菓子、日冷の森重さんからは鯨冷凍肉など差入れを仰いで、その日ばかりは大盤振るまい。「ゲイテキ（鯨肉ステーキ）」の他にも、当時、身体虚弱と称する（？）寮生に「ララ物資」の特配があったのをこれ幸と、マネージャとしては然るべきルートと手だてでこれを掠めて、部員の食卓にのせたりしたものでした。

激しい練習後、夕食も終えて寝床で明日の練習か、ナイス・ショットを夢見てボストン・バックを枕にしている花形選手の橋本君や当時としては最高のフトンにくるまって昼の疲れをものともせず、読書には精出す山下君のこと。

練習前のグランド整備で、戦時中の軍の忘れもの（我々にとっては新兵器）の手動ローラーを引廻す重労働を力を合せて（？）行ったこと。

乏しいながらも精一杯燃えた青春の日々でした。

マネージャーとしては「食べ物の恨み」だけは買わずに済んだのは最高でした。諸先輩に深謝。

回　　想

高田勝己
(昭和30年卒業)

我々の悲願は一部復帰であるが、これを達成するには他校に比べて「技術」「体力」共に未熟なレベルの当時の我部員としては、総合力に飛躍的な進歩を遂げなければならない。これは容易に達成出来るものではなく、血のにじむ様な努力を長年積み重ねる必要があることはわかるものの、その具体的な方法については暗中模索の状態であった。

この様な中で我々が最上級生として行ったことの内、特記するのは次の項目である。

1, 練習日の増加

従来の週４～５日を６日とする。

但しゼミ、アルバイト（やむを得ない者のみ）等のため１日休むことは認める。

2, 練習出席率の向上

シーズン開始前に前年度の出席率が悪く春合宿にも不参加の部員を本人の意向確認後退部させた。

3, 技術向上

コーチを立川高校松浦先生（文理大卒、幻の東京五輪候補）にお願いした。

我々が最も苦労したのは学問と運動の両立よりも、生活が苦しい部員を含めいかにして厳しい練習を行い、母校を代表する運動部としての雰囲気と、まとまりを作り、又如何にして技術を向上させるかであった。

松浦先生にコーチをお願いして先ず第一に、指摘されたことは「基礎技術の未熟」「サッカー常識の欠如」であった。

春の三商大戦に連敗し悲壮な覚悟で秋のリーグ戦に臨み、不満足乍ち一応の戦績を挙げた事は、今振り返り多々後悔する点もあるが二度と来ない青春の想い出である。

又、青学大戦終了後武蔵野蹴球場の風呂につかりながら、これで学生時代のサッサー部生活が終ったのかと思った時の寂しさと悔しさが入りまじった気持は27年後の今も忘れる事が出来ない。

新しい試み

昭和31年卒業生

昭和30年は、いくつかの新しい試みがなされた年であった。その一つは高田先輩の進言もあって、立川高校の松浦先生を初の校外コーチとして迎えたことである。松浦コーチは教育大サッカー部のＯＢで、基礎トレーニングに重点を置くとともに、豊富な経験から独自のフォーメーション理論を展開され、オープン攻撃・ポジションチェンジ等我々には目新しい戦法を教え込まれたものである。

その二つは関東・関西二部の東西対抗を初めて行ったことである。関東は農大の見目氏が監督となり、甲南大グラウンドで西軍と対戦したが、１：２で惜敗した。わが一橋からは主将の志摩がフルバックで出場した。

〔石原慎太郎君のこと〕

31年卒業のチームメートは７名であったが、中途退部した中に石原君がいた。石原君とは他ならぬ代議士の慎太郎君である。

今では、時々世間を騒がせているが、サッカー部２年間の在籍中は極めて真面目な部員であった。とはいうものの作家としての素養や大衆にアッピールする人間的魅力は当時から秘められていたように思う。サッカー選手を題材とする作品を一橋文芸に発表したが、そのモデルは知る人ぞ知るＡ先輩であった。

また、彼のヘッディングは、ミートよりはヘッディングの華麗さを絵にしたいというスタイリストの面目躍如たる一面もあった。ボールは頭をかすめるのが多かったが、見事選良の地位を当てた。サッカー部員が皆見習っては困るが、同僚としては誠に喜ばしいことである。　（志摩）

〔想い出〕

人間は限界ぎりぎりの所に挑戦して、それを乗り超えた時、始めて一歩だけ前進し得るもののようである。

あれは２年の時だったろうか？　特訓の一つにいわゆる「ムリ・キック」というのがあった。定位置について爪先立ったキッカーは、三メートル前から左右後方あるいは真後に放り上げられるボールを百八十度逆方向に蹴り返すという私には至難の技であった。その日の私の相手は鬼の高田氏。

実に意地悪くこちらの思惑の逆、逆に投げ上げる。ボールを追う自分の足は遂にもつれ始めた。体力・集中力の限界は超えたと思いボールを追うのを止めた私は、高田さんに対する憎しみと自分の不甲斐なさに対する口惜し涙を浮べて、「こんなムリキック出来るか〆」と先輩につかみかかった。

今、塾をしていて想う。「自分にはあれだけの愛情があるだろうか？」と。　（中岡）

〔三商大戦と中山伊知郎先生〕

三商大戦が近づき、神戸・大阪のマネージャーと日程やら宿舎の打合せをしている時に、優勝カップをつくったらという話になった。それまではカップどころではなかったが、戦後10年、そろそろ「もはや戦後ではない」時代に入りつつあったのだろう。

三大学の学長杯とする・各学長に夫々五千円の寄付をお願いするという案が決まったある日、主将の志摩と二人で国立の学長室に中山伊知郎先生を訪れた。美人の秘書嬢に来意を告げると中山先生が出てこられ、ソファーをすすめてくださった。経済原論の講義の時、はるか後の席からお見かけするだけで、直接お会いするのは初めてであり、やゝ緊張しながら趣旨を申し上げると、「それは結構ですね。では５千円」とおっしゃって財布から５千円をさっと抜いて机の上におかれた。いかにもテキパキとした気持のよいなされ方だった。

三商大戦を前にしてチームの調子は良くなかったが、異例の強化合宿の成果が表れたか試合は一橋４：０大阪、一橋２：０神戸ときれいなスコアで優勝。新調の天皇杯型カップはわが一橋の手に。早速優勝カップを学長室にお届けしたのはいうまでもない。

中山先生も大変お喜びになり、「しばらく学長室に飾りましょう。」とおっしゃって下さった。

その中山先生も今は亡いが、あの温顔とさっと５千円を机の上におかれたお姿は、今もはっきりと思い出される。　（馬場）

サッカー部生活と寮生活

中　路　　信
（昭和32年卒業）

我々が入学した昭和28年は、未だ戦後の物資不足が続いていた時代であった。このため地方から一橋に憧れて上京した者の大半は寮生活を経験していたように思う。我々32年卒のサッカー部員は、偶々全員が寮生であったことから、当時の寮生活とサッカー部の生活は不可分であり、その意味で当時を振返って見たい。

昭和28年は、小平の一橋寮に四人部屋の洋風タタミ式二段ベッドの新寮が丁度オープンされ、当時としては快適な寮生活が出来る環境が整えられることになり、それまで寮として利用されていた学生食堂棟の西半分も各運動部の部室や合宿所に返却された年である。

小生は、入学当初は田舎からポット出であり東京での独力での学生生活をどう送るかの目途も立っておらず、サッカーをやれるとは思ってもいなかった。ところが同クラスの浅井君や寮生の嶋田君、日方君、佐竹君等が、寮の目の前のグランドで精一杯走り廻りボールを蹴っている様を見ている中に、何とか仲間入り出来ぬかと思うようになった。当時は神代さんが、キャップテンであり、浅井君を通じ入部の相談に行ったところ、寮生活でアルバイトをしながらでも部生活がやれること

を、御自身の体験も示され激励されたので入部の決心をした。この時の決心がその後の小生の人生の方向付けになったことを思う時、神代さんの助言を非常に有難く思い出している。

当時一橋寮には、一年上に中岡氏、松丸氏、石原氏の部員が居り同年生には前述の諸兄の他に中沢君も居たが、寮生で昼の講義出席と運動部練習、夜のアルバイトの循環生活を送る寮生も少くなくない状況であった。その仲間にはラグビー小林君、ホッケーの長崎、豊田、田坂君等が居た。

また、当時は各運動部で小平に本拠のある部は交替で部室二階の合宿所又は柔道場に寝具を持込んで合宿するのが通例であり、食事は寮の賄いに依頼する方法をとっていた。そのため、日頃寮の食事に慣れぬ通学生部員の中には合宿の食事に参った人も少くなかったと思うが、合宿中はまだ良い方で通常の寮生活では、寮の食事は質量とも遥るかに劣るものであった。これを補うため青大将や野良猫を料理した血気盛んな寮生もあり、武蔵野の甘藷を月や星の神に供え、それを相伴にあずかる行事も行われていた。それでも当時の寮生は、元気に溢れておりサッカー部のみならず各運動部でも主要な役割りを果していたと思う。

我々にとってサッカー部は、先輩から後輩に縦に継いで行くものとしての心の故郷であり、学生時代の物心両面に亘る諸先輩の援助と鞭達を忘るることなく常に思いを後輩の上に馳せて同じことを伝統として伝えて行く場であるが、寮あるいはゼミも同時期に同じことをやった仲間として何年経っても心おきなく話し合える場としてやはり心の故郷である。

最近の如水会報を見ると戦争末期から昭和30年代の初めの日本の最も苦難の時期に同じ寮生活を送った仲間が集る会がよく目につくが、これも心の故郷がそうさせるのではないだろうか。小生はサッカー部と寮との縦と横の二つの心の故郷を持っており卒業後年が経つにつれ、心の故郷への思いが益々強くなって行くような気がする。

回　　想

昭和33年卒業生

1　練習など

主将の中田がシーズン開始間もなく、たしか6月だったと思うが、練習中に膝を捻り、グランド復帰まで2～3ケ月を要するというアクシデントがあった。

残った4年生は岩坂、清水、林、桧山の4人となった。

練習は日曜を除く週6日、そのうちゼミの日は休みで、部員個々人についていえば週5日の練習であった。

先輩では高田勝己さん（昭30卒）がよくグランドへ来て下さり、経験不足の我々4年生を助けて下さったのが思い出される。その外グランドへ来て下さった先輩は、思い出すままに記せば、吉沢貞雄さん（昭16卒）、瀬藤俊雄さん（昭18卒）、なくなられた松浦厳さん（昭22卒）、外岡諒三郎さん（昭23卒）、加藤省さん（昭和23卒）、針谷操さん（昭28卒）、橋本昭一さん（昭31卒）などの皆様であった。

2　部員など

部員は各学年５～６人といったところで、総勢25人前後、常時練習参加者は15～20人であった。

未経験者にとって練習は相当きつく、又学問との両立に疑問をいだきながら退部していく部員もおり、入部後夏の合宿までにこういう部員が数名いるのが通例であったように思う。結局、今になって思えば、４年間部生活を継続した幸せをつくづく感じる訳であるが、一方、もう少し勉強しておけばよかったし又やり方によってはそれも可能であったなぁ、と反省するところしきりである。である。

3　合宿など

合宿は春と夏の２回、小平で実施した。

１回10日間程度であったと思う。

当時は貸蒲団などなく、各自が自宅又は寮から、蒲団などを電車に乗せて運んで来た。来る時はまだしも、合宿が終って疲れた体で大きな蒲団包をもって帰るのは全くしんどかった。

宿泊は現在もそのまま部室になっているあの古いバラック建ての２階の二部屋であった。ただし１・２年の頃は焼ける前の柔道場であったと思う。

起床後、全員で散歩をし、午前と午後それぞれ２～３時間の練習をした。夕食後一橋大学駅前（当時）の通称リンソバで氷水を飲むのが唯一の楽しみであった。（それぞれ２杯から３杯は飲んだように思う。）

部生活４年間を顧りみて

昭和34年卒業生

小平のグランドを去ってから早や20数年たちますが、折にふれ苦しくも楽しかった小平での生活が懐しく思い出されます。

部史編纂の話があり、先日久々にグランドの周辺を散策してみました。当時グランドをびょうぶのようにとり囲んでいた豊かな緑はめっきり減って、代って住宅がグランド近くまで迫ってきている情景には驚かされるとともに、つくづく歳月の流れを感じましたが、佇んでいるとボールを蹴る音、部員の掛声が聞えてくるようで、当時の練習風景が昨日のことのように鮮やかに蘇ってきます。

この間わが国のサッカーは、東京オリンピックを一つの契機としてめざましい発展をとげ、極めてポピュラーなスポーツになりましたが、当時は野球が国民的スポーツで、サッカーはマイナースポーツの一つに過ぎず、そのため特に学生数の少ない我が校では、高校でのサッカー経験者も少なく、新人にはイロハから教えこむという状況でした。

３、４年の短期間で高度の技術を身につけることは並大底なことではなく、自づと限界がありますので、技術で及ばないところは体力、気力で補うというのが我々のモットーでした。このため日曜日も含め毎日が練習日で、重点項目、ランニング、紅白試合を組み合わせた週単位のスケジュールにのって練習しましたが、基礎体力、忍耐力を養うためのランニングだけは毎日欠かさずやったように覚えています。ロングと称した多摩湖、国立などへの往復ランニングはほんとに苦しいトレーニングでした。とにかく毎日が練習日でしたから、授業への出席も制約され、下級生、特に勉学

の意欲に燃える１年生の中にはサッカーと学問の両立の悩みを訴える者も多くいました。同じ悩みを経験した我々は、上級生、先輩から受けたと同じように、サッカーを続けることの意義を説き、慰留に努めるうち半年もすると悩みもふっきれ、大半の者はグランドに残り、サッカーに専念できるようになりました。社会へ出てからの自らの経験に照らしてみて、我々の説得は決して間違っていなかったと確信しております。

我々４年生はわずか４人と少なかったためいきおいチーム編成面でも練習面でも８人の３年生が柱でしたが、彼等は我々の足りないところをよく補ってくれ、全体としてまとまりのよいチーム作り、スムーズな部運営ができたように思います。

いずれにしても、こうした過密な練習の成果を実戦につなげるため、合間をみてはよく一部リーグの大学、実業団など実力のあるチームの胸を借りました。一部リーグの雄早大には歯が立たず敗れましたが、慶大、教育大、農大には勝をおさめ、今年こそ二部リーグ優勝も夢ではないと意気ごんだものです。勝敗は別にして一部リーグプレーヤーの技術は参考にするには彼我の差がありすぎましたが、それでも彼等の絶えずゴールを目指すすさまじい執念、気迫には大いに教えられ、一点の壁を打ち破ることの難しさに悩んでいた我々にとって誠に有益な経験でした。

春、夏の合宿も懐しい思い出の１つです。合宿所は部室と同じ棟の２階にあり、この畳敷きの大広間に各自ふとんを持込み、雑魚寝するといった具合で、今の若い人には想像もつかない合宿風景が展開されます。苦しい昼の練習の疲れをいやすものといえば、近くの銭湯につかるか、駅前のりんそばで氷水をのむことぐらいで、日頃通いなれた中央沿線の喫茶店、飲み屋が無精に恋しくなったものです。

こうして長くてつらい練習を経て秋のリーグ戦に臨みましたが、前半で４年生の酒井が鎖骨骨折、鈴木が脚の肉離れで早くも戦列を離れ、以後非常に苦しい戦を強いられましたが、残る４年生の大石、駒井を中心に一層結束を固め無事リーグ戦を乗り切ることができました。結果は優勝を目指した当初の決意には及ばず４？位に終り、伝統あるわがサッカー部史を輝かしい１ページで飾れなかったのは残念でした。

小平でのサッカー生活は、長い人生のほんの一こまに過ぎませんが、青春を燃やし充実した４年間でした。そしてサッカーは我々に対し、苦楽を分かち合える終生の友人、苦難に耐えうる心身、一つのことをやりとげた満足感と自信など何物にも代え難い貴重な財産を与えてくれました。部史編纂を期に「サッカーをやってほんとうによかった」という感慨を新たにしているところです。

戦後は終った

石　原　良　三
（昭和35年卒業）

「もはや戦後は終った」というサブ・タイトルの経済白書が出され、戦後の経済復興が一段落し、新しい成長の時代の幕あけにさしかかっていた昭和31年４月、23名という大量の新入部員が押しかけて、上級生やＯＢを驚かせたものだった。

一橋の運動部は、必ずしも経験者ばかりでなく、ズブの素人でも、運動部での大学生活の意義と

充実感を求めて入部する気風があり、各運動部に数多くの新人が入る動機もその辺にあった。折しもサッカー部出身の石原慎太郎先輩が「太陽の季節」で芥川賞をとり、華々しく文壇にデビューしたのも、大量新人を発生させた一因とまったく無関係ではなかったようだ。

世俗的には力道山のプロレスや日本シリーズを街頭テレビで見たのもこの頃までで、電気釜、冷蔵庫とともに、貴重品だったテレビもぼつぼつ家庭に入り出した時代であったように思う。

我々が入部した年は、戦後最強のチーム力といわれ、惜しくも2部優勝を果せなかった31年度卒業生が中心となり、夢を後輩に託した若手ＯＢが熱心にグランドに足を運ばれ、手とり足とり懇切に指導され、ＯＢの活動がひときわ盛んになった年だった。

春夏の合宿は、我々の年代までは遠出することなく、すべて小平であった。合宿中日の日曜日はＯＢ戦が組まれ、ラウンド・キックの輪が2つ、グランド一杯にひろがって球を蹴り合う様は何とも壮観であった。

当時の合宿所は、小平のクラブ集会所の2階と学食の脇の部屋の2ケ所で分宿するか、スプリングのきいた柔道場のいずれかであった。各自ひとかかえもある布団袋をかついでの合宿入りで、よくもまああんな大きな袋を電車で運んだものだと、今更ながら感心する。

我々の在学中は、自慢ではないが伝統ある関東大学リーグ二部の常連で、良くも悪しくも入れ替戦の経験はない。その頃の制度は、一・二部各8チームで、これが関東の強豪とされ、やゝ格が落ちて三部に何グループかがあった。確か二部では法政、農大が一部と行ったりきたりで、東大、日大、日体大が上位を占めていた。

我々が3年の時は、鈴木、駒井、大石、酒井の4名が最上級生で、不思議と印象に残る試合がいくつかあった。まず春の国公立大会での優勝。小金井の学芸大のグランドで東大を破り、カップでビールを飲む経験を初めて味わった。また相手はこれも東大であったが、秋のリーグ戦を小石川サッカー場で、なんと有料試合をしたものだ。そのいきさつは忘れてしまったが、この試合はアジア大会のために作ったサッカー専用グランドでのリーグ戦で、分不相応にも切符とプログラムを発行し、それなりの格好をつけた。入場者もまずまずで、試合は０－１で敗戦に終ったが、鎗田のロング・シュートがバーをたたいたり、押し気味の惜しい試合だった。たまたま岡野俊一郎氏が東大のコーチ格で「やられた試合だった」と話し合っているのを小耳にはさんだことを思い出す。

最上級生となった年は、有望新人も加わり、戦力充実、チーム・ワークも上々で、久々に二部優勝の呼び声すらかかった。合宿入りに際して、綿密なトレーニング計画書を作り、瀬藤先輩宅で指示をいただくなど、ＯＢの熱の入れようもひとしおであった。リーグ戦直前には短期合宿を張るなど必勝の意気に燃えてリーグ戦を迎えた。戦績は別表の通りで、１、２戦を順調に勝ち進んで、出足は上々であった。ところが戦前の下馬評では勝てる筈であった武蔵と成城に引き分け、にわかにあせりはじめた。天王山は日大戦。勝てば優勝の目もある試合。松本先輩をはじめ大勢のＯＢが見守るなか、御殿下のグランドはいささか興奮ぎみ。結果は日大の快足左ウイングにやられた形で残念無念。その後は、緊張の糸がプッツリ切れ、東大と防大に大敗を喫し、リーグ戦はあえなく4位に終った。大きなチャンスを逃したようでもあり、また実力相応のようでもあり、兵ものどもの夢のあとは何やらホロ苦かった。

時移って20年。今も会うたびに、武蔵、成城戦をくやみ、日大戦のやられを語り草に杯を重ねている。

経済成長と安保の時代

日　巻　久匂男
（昭和37年卒業）

われわれが、部生活を過したのは、日本経済が高度成長期に移行し、経済学の主要テーマが、「失業」から「経済成長」にとって代った時期である。

入学した32年は、４年生は中田主将以下５名、３年生が４名、２年生が多く、チームの編成は２年生中心の感があった。１年生の入部者は20名を超え、３年の駒井さんが、１年生の練習を指導された。部員総数が40名を超え、１軍と２軍とに分れて練習するようになったのはこの年からであったと思う。また合宿に米を持参したのもこの年が最後だったような気がする。

昭和33年のチームは、わたしが在学中での最強のチームだったように思う。リーグ戦まえの練習試合ではあったが一部と互角に戦った。

９月18日　学習院大（３部）　３－０勝
９月20日　早　　大（１部）　１－２敗
10月４日　農　　大（１部）　０－３敗
10月９日　慶　　大（１部）　２－１勝
10月11日　教　　大（１部）　３－１勝

特に２－１で慶大を破った試合は忘れられない。この今年関東大学一部リーグでは、志賀、二宮、耳野の強力ＦＷの慶大が、八重樫の抜けた早大を上回るというのが大方の予想であったが、予想に反して早大が優勝し、余勢をかって関西リーグで優勝したＣＦ李を中心とした関学を下し学生№１となった。この頃の日本のサッサーの典型的なフォーメションは、ＷＭフォーメーションであったが、早大工藤監督は、日本で初めて４・３・３システムを採用した。新聞はこれをボルト・システムと紹介したが、いわゆるボルト・システムとは一味違ったフォーメーションだったと思う。その後は４・２・４などめずらしくなくなったが、当時は早大のシステムはいかにも斬新であった。

34年のチームも33年に匹敵する好チームだったが、後半３戦は惨敗した。第３戦の対武蔵大、第４戦の対成城大に引分けて、チームの盛上りが急速に欠けていった。

33年、34年のチームは本当に優勝を狙えるチームだったように思う。

昭和35年最上級生としてのシーズンは、いわゆる「60年安保」の年で、岸内閣が崩壊し、池田時代がスタートした年である。死者を出した国会乱入の日は、１－３年生のデモ参加のため、練習を中止してほしいとの要望をけって練習を強行するつもりであったが、大雨で練習を中止せざるをえなかった。部室の黒板に「練習中止、自重されたし」と書いたことを、いまも懐しく思い出す。

この年のサッカー部の財政はピンチの状態だった。春の合宿の諸雑費は、小沢マネのポケットマネーでまかなわれた。しかも、この年の三商大戦は大阪で行われることになっていたし、今村主将の強い希望で、小平以外での夏の合宿を計画していたので、夏休み前までに部の財政を再建することが、小沢マネと私の重要な課題だった。リーグ戦の成績は、第６位と振るわなかったが、夏の合宿を湯桧曽で行い、かなり余裕のある決算で次年度に引継ぐことができたことに一応満足した。

主将今村とは、１年のときからよくサッカー論議をやった仲なので、４年で主将・Ｇマネになると、お互い気心を知っているために、かえってつまらぬ遠慮をし、譲り合った点があったと思う。33年の第一戦、日大戦と引分けた後で、Ｇマネの駒井さんに「日巻、あと何勝したら最下位にならないですむかなぁ」といわれたが、リーグ戦中の２ケ月は、Ｇマネにとって本当に長い２ケ月だった。しかし、もう一度あの頃にもどれたら、また小平のグランドで笛を吹きたいと思う。

サッカー部活動の回想

梅　田　　清
（昭和37年卒業）

部活動については、日誌等の記録も無く、20年前のことであり記憶も定かではない。

その中で36年の新メンバーにとって最初の公式戦であった全国大学選手権大会と、最後の締めくくりともいうべきリーグ戦については比較的鮮明に覚えているのでこれらを中心に回顧してみたい。

全国大学選手権大会は35年12月に東大御殿下グランドと小石川サッカー場で行われた。１回戦は前年の大会で関東の雄早大を破る健闘をみせた松山商大が相手であった。

試合は立ち上がりから七分三分でボールを支配され、さすがにそのパスワークは冴えているかに見えた。しかし相手は細いパスをつなぎ緩やかなペースで攻めてくるため、最終ラインではほとんどボールをカットすることができた。又シュートはなかなか枠に入らず押されている割には圧力を感じなかった。

一方我軍は長いリーグ戦の後で体も軽く解放感もあり、天下の強豪に胸を借りるような具合でかなり伸び伸びプレー出来たようだ。

展開としては、前線へ上がり切った相手バックスの背後をつく好パスがしばしば生まれ、いわゆる逆襲をくり返えすうちに先取点を奪い、これが相手の焦りを誘い、形勢は徐々に優位な方向に転換し、最後には５対０になったと思う。

２回戦は慶応大学と当たり、この試合もかなり善戦したが３－１で敗れたと記憶している。慶応大学には当時全日本のメンバーであった片山選手（後に三菱重工）がベンチにおりながら、この試合には出場しなかったのが残念であった。

その後、春の合宿練習から新人戦、国公立大会、三商大対抗戦、夏の合宿練習（前半を妙高高原池の平寮で実施）とスケジュールを消化し、いよいよ秋のリーグ戦である。

戦績に明らかな通り、引分けが多かった。

引分けた相手は本来勝てる相手であったと思う。勝たねばならないという気が強過ぎて余裕を失なってしまうというパターンが多かったと記憶している。試合中勝てない相手ではないと思いつつもゴールが割れないときの焦りといらだち、そして思いがけない引分けに喜ぶ相手方の顔・顔が今でも思い出される。秋は深まって行くが、勝点の方は遅々として伸びず、やきもきしたものだ。

最終的には７戦して一勝もあげることができず、日体大と同率で７位となり、改めて７、８位決定戦を行うこととなった。最下位は三部リーグの一位チームと入替戦を行うこととなっていた。

決定戦は御殿下グランドで行われ、両チーム文字通り決死の戦いとなり、一進一退を繰り返えし

たが、我軍は後半池田君（当時２年生、現日本鉱業勤務）のミドルシュートによる値千金の一点を得て辛じて勝利を得た。

この結果一橋大学は７位となり二部残留が決まり、敗れた日体大は、その後の入替戦でも勝運に恵まれず、三部転落となった。

以上の通り、まさに薄氷を踏む思いで、先輩の遺産である二部の座を守った次第であり、それだけにサッカー生活の思い出は何とも云えぬ厳しさと爽やかさを伴なったものとして今も胸の底にある。中でも、最後の土壇場まで死力を尽して戦ってくれた仲間達への感謝の気持は、一生忘れないだろう。又、練習で試合で、常に指導し励ましていただいた先輩方の存在も、どんなに心の支えとなったことか、誠に頭の下がる思いがする。

ところで、現在でも時おり、練習スケジュールを何故か全く消化しないままにリーグ戦を迎え困惑している情景、或いは練習に熱中のあまり国立校舎での授業に出られず卒業ができなくなってしまった場面等々を夢に見る。

それだけ真剣にサッカーに、又勉学に取組んでいた証拠であろうか。

昭和37年のシーズンを回顧して

昭和38年卒業生

過日、昭和38年３月卒業の同期のメンバーが東京に集まり、部史編集の為の会議と称して一晩飲み明した。当日は激動のテヘランにいる細野を除き、在京組の岡田、吉田、清水、菊地、野上、神戸からの石井、大分からの伊藤の７名が集合、19年前の思い出を語り合い、楽しいひとときであった。昭和37年に限って当時の戦績等を回顧した訳だが、何分、リーグ戦の戦績以外は正確な記録がなく、（これも几帳面な野上がノートに記録していた為）部史編集のようなことがあると、つくづく記録保管システムの確立をこの際特に要望しておき度いものである。

さて、我々４年の昭和37はどういう年であったか。先ず思い起される事は、前年我々が３年生の時に初めて経験した、日体大との２回に亘る関東大学リーグ二部最下位決定戦である。幸いにして二部に留まったが、この薄氷を踏むような苦い経験から、絶対に前年の二の舞を踏むまいという決意が全員にみなぎっていた事である。

春のシーズンの出足は好調で、国公立大会では積年の宿敵である東大を準決勝で破り決勝では一部の教育大を破るという大番狂せを演じ優勝したことは、戦後の一橋サッカー部の歴史において特筆大書されてよいことと自負している次第である。

更に国公立優勝の余勢をかって関西遠征に臨んだ三商大戦においても、１勝１分けで、関西リーグ一部の神戸大と優勝を分け合い、優勝カップを東京に持ち帰ったことは、今も懐しい思い出である。

このように春はまずまずの成績で、メインエベントである秋のリーグ戦に東大連破等必勝を期して臨んだのである。

合宿は部生活の強烈な思い出の一つだが、37年は春、夏共に地方での合宿は行わずに、練習条件

の良い小平のグランドで行った。特にリーグ戦直前に行った、レギュラー合宿はリーグ戦に臨む我我の意欲を示すもので、その当時の興奮状態、緊張感が今でも伝わってくるようである。

リーグ戦は緒戦で春の国公立大会で打破した東大と相対したが、吾々の奮戦空しく惜敗し、結局3勝4敗、勝点で3位、得失点差で5位という成績に終った。

当時のチームの特長は、二部のベストイレブンに選ばれる位の実力の岡田キャプテンを中心に、4年生は菊地以外は全員東京出身でまとまりが良く、石井グラマネ、菊地マネージャーのもとによく結束していた。4年生のフォワード陣は、岡田、野上、伊藤、バックス陣は、清水、吉田、細野とそろってはいたが、戦力面で、ねばっこい3年生の石綿、永山、池田、石井、森岡、大橋、2年生の古川、1年生の清水等の下級生に大いに助けられたチームであった。他校のチームからは、体当りでくる恐い集団と云われたごとく、技よりも敢闘精神でもっていた泥臭いチームであったといえよう。

部長は故山田欽一先生、コーチは高田先輩、韓国よりの韓さんにも色々御世話になった。

練習以外では、一杯40円のトリスを飲んで人生を語り合った阿佐ケ谷のシロ、ドリーム、猫、犬を含め一串5円のモツ焼で精力つけた新宿西口の屋台、4年間同じ話しをして涙にくれる泣上戸の吉田の話しを聞きしんみり、笑上戸の野上を見てばか笑いをした、新宿ライオンビヤホール、在京メンバーの自宅訪問、細野の影響によるダンス練習、吉田のコーチによるマージャン等々が懐しい。

汗と涙を流したグランドにも数々の思い出がしみ込んでいる。まず小平、リーグ戦の御殿下、東伏見の早大グランド、泥んこの上智大、その他明大、農大、学習院等が懐しく思い出される。

往時を回顧すると、若干の悔いも残るが、4年間の団体生活を通じ、何か一つの事をやり遂げたという自負もある。よき先輩、後輩に恵まれて、思い出多い部生活を送れた事をここで感謝したい。

回　　想

昭和39年卒業生

素人集団のサッカー

我々の時代のチームメンバーは大学で初めてサッカーを始めた者が大半であった。素人の集団が関東大学二部リーグによく残っておれたものだと思う。

我々のサッカーに対する姿勢は、人生を語るがごときまことに真摯なものがあったし、練習も二部リーグ優勝をめざしてかなりハードなものであった。

練習方法については、当時種々論議されたが、部員個々の素質、体力等彼我の戦力を比するとき、おもむくところ「走る」「当る」といったサッカーのより基礎的な面に重点をおいた練習に偏りがちであったし、闘志、根性といった精神主義がさかんに鼓吹されたものである。

往時を想うとき、もう少しレベルの高いサッカーをめざしたかったが、素人集団のサッカーはこれが限界であったろうし、素人ががむしゃらに打ち込んだが故に今となって当時が特に思い出深く感ぜられるのであろうか。

（池田記）

己との闘い

「よし、明日こそマネージャーを思いきり蹴りとばし、合宿をオサラバしよう。」しかし、まてよ。「このままヤメたら苦しい部生活を全う出来なかった落伍者一今様にいえばオチコボレーになるぞ。」　今思へば、この二つの壁の狭間でどれだけ苦しんだか、私の場合は精神的苦痛より肉体的なそれが大だった為尚更である。「己との闘いで己に勝てなくてどうして相手に勝てるのか」陽も暮れんとする小平で聞いた橋本先輩の言葉を今もはっきり憶えている。何と気高く、厳しい言葉であろう。そして、何と言い難く、又行い難き事であろうか。　（石井記）

決勝点

我々が４年生の時は、三商大・国公立に優勝するなど思い出深いものがあるが、何といっても秋のリーグ戦最終戦（対農大）で小生の決勝点で二部６位に留まり、入替戦を免れたことである。その他一橋サッカーを甘くみていた小生にとって、３年生になって三商大戦関西遠征メンバーに選ばれた時の感激も良き思い出である。小平の緑に囲まれたグランド、あの汗と脂の匂いの部屋は今どうなっているであろうか。　（大橋記）

追憶

卒業して16年、今こうして振り返ってみて、青春の一時期を一橋大学サッカー部で過せたことを幸せに思う。それは、他の世界では得られない「何か」を把んだような気がするからだ。それは、強いて言えば、結果はどうであれ、精一杯やったという「満足感」なのかもしれない。今は「体力」及び「根性」も若干、萎えてしまい、長野の地にいて、友情を暖める機会が無いのは残念だけど、いずれ悠々自適の人生を送れる時期が来たら、思い出の一コマ、一コマを引出しから繰り返し繰り返し楽しみたいものだ。　（永山記）

武蔵野

「……武蔵野は林である。木は主に楢の類で冬は悉く落葉し、春は滴る計りの新緑の萌え出ずる其変化は……」と国木田独歩は書いたが、昭和30年代後半の小平は、まだ武蔵野の面影でいっぱいだった。玉川上水ぞいは、緑のトンネルの中に奔流があるという感じだった。

あれから17年が経つ。私も東京から出たり入ったりでグランドには、すっかり御無沙汰となってしまったが、小平の４年は、すばらしい仲間達、そして武蔵野の面影とともにいつも懐しい。

（松島記）

わが同期

南国土佐を後にして、東京へ行っちちの恋人を追う如く、僕らは一橋へ集まった。国会周辺にインターナショナルが高唱される中、芽吹く櫟に包まれた小平グランドに馳せ参じた新入部員は17名に上った。荻窪の伊勢広で可愛いミヨちゃんとジンジロゲを歌ってのスタートコンペも、湯桧曽の夏合宿では早や河原の枯れすすき。池の平、小平、北軽井沢、はては阿佐ケ谷請川、一番街、かつは、風月、佐野屋、みどりの娘と匂いやさしい白百合を誰よりも誰よりも愛しているうちに、アカシアの雨は止み、病葉を浮かべて川は流れ、エリカの花は咲いた。赤いハンカチもてどこか遠くへ

行きたいと思う頃には、仲間は10名に減っていた。

それはお世辞にもスマートな集団とはいえなかった。地方出身（従い寮生）が多かったこともあるが、ボール蹴りの経験のあるもの、金のあるもの、風采のあがるもの、女にもてるもの、とびきり学才に秀でたもの、いずれも皆無に近く、それだけに純朴で、忍耐強く、気のいい奴が多かった。サッカーセンスの不足は体力とチームワークで、キックアンドラッシュとの評ものかわ、リーグ戦を戦いぬいた。

ゲルピン、ゼミと卒論、就職等々、若い日々を揺れ、惑いながらも、下手は下手なりに〝好きだからやる。やるからにはやる〟の４年間も往事茫々、時折の集いに櫟林の小平に思いを馳せる40男10名。

（森岡記）

回　　想

山　田　充　夫
（昭和40年卒業）

我々の仲間は全部で16人入部した。その中で本当の経験者は一人も居ないということで毎日清水先輩から基礎練習の繰り返しをさせられた。授業に出たのは、出席をとる午前中の語学の授業だけで午後は毎日練習であった。１年生の大事な仕事は、ボールの空気入作業で、新しいボールの場合はうまく口紐が締るから良いが、ボールが古くなると、イビツになり、口紐を締める時にニードルでゴムを突き破ってしまうことが多かった。又練習中に先輩から、空気の入りが甘い、紐が良く締っていない、と毎日おこられた。たしかに紐が良く締っていないとヘディングの時に相当痛い思いをするということを後で実感した。

初めての夏の合宿は妙高の大学山荘で行ったが、我々新人にとっては、誠に苦しい合宿であった。靴ずれ、爪のはがれ等で靴をはけなくなった新人は、裸足で走っていたが、中から１人、２人と抜け、合宿が終った時には半分。８人に減っていた。最終日の野尻湖周回マラソンは、集中豪雨の中でマネジャーが道を間違えたのではないかと思うぐらい長いコースであった。

当時の我々には、秋山マネジャーのギョロ目が狂人の目に見えたものである。面白いもので３年後、我々が最高学年の時の寺西マネジャーの目もこれに非常に似ていた。

キャプテンの古川君は、器用な方ではないが、向う気の強さと馬力を買われて、又朝来野君は多少の経験があった為、それぞれ早い時期からレギュラーに加わって練習する機会が多かった。白石君はべらんめえの江戸ッ子、朝来野君は東京ッ子という感じで、他の４人のお上りさんとは違ったムードを持っていた。村林君はヘッディングする度に、眼鏡をとばしながら、小さい体で夢中で走っていた。最後の私は、グランドにおっこちた斉藤君のコンタクトレンズを探すことに於いては誰にも負けなかった。

朝鮮大学との練習試合は、楽しい機会であった。泥にまみれた練習着のまま大学の正門に入ると、先方の学長以下数百名の男女学生が華やかに迎えてくれ、試合が終ると昼食堂で、たいへんうまい昼食を出してくれた。彼等と話していると、祖国建設の心意気を切々と聞かされ、単純な私などは、唯々感心して聞いていた。ところが試合になると、プレーばかりでなく、どなり声までも、ものす

ごく荒っぽく、その極端な変化にびっくりしたものである。

合宿中は、せんべいブトンの中で、終ったら、ダンスを習いに行って、阿佐ケ谷のバーに行って、などとあれこれ話し合ったものである。普段からあまり、女子大学や、女性との交流の少い連中だったので、合宿になると特に女性が恋しくなったものらしい。一橋寮では、押入れの扉を破ってタキギとし、洗面器でスキヤキを作ったり、又安いマトンを大量に買ってきて、ジンギスカンのまね事をして楽しんだ時代であった。

回　　想

田　中　好　輔
（昭和41年卒業）

あれから16年、信じられない光陰の速さである。なる程、当時の記憶が全く不確かになり、ともすると試合の結果まで覚束なくなっていることは、それだけの歳月が流れていることの一つの証左でもあろう。

しかし、多分に小生の身に備わった健忘症的性癖によるものかも知れない。時間の経過と共に記憶が薄れ、それを取り戻そうとすればする程、抽象化され、一種のイリュージョンと化して行くことをどうすることもできない。

その意味で、小生ここで筆を取る資格については大いに疑問があり、よりクリアーに記憶されている先輩、同期生、後輩からのご叱正を覚悟している。

ここでは、かなり私物化されたイリュジョンの一端を随想的に披歴し、与えられた責めを果すこととしたい。

第１点は、リーグ戦終了後に感じたあの〝安堵感〟についてである。

年史にも記した通り、秋の関東大学二部リーグ戦は緒戦より苦戦が続き、最終戦を残した時点での戦績は、１勝１分４敗という不本意なものであった。確か、その時点で防衛大が１勝１分、農大が１勝２分という状態であったと思う。最終戦の対農大戦に勝たなければ、最下位の惧れが濃厚であった。

最終戦を前にしての練習が何と重苦しいものであったことか。最下位を免れるためには最終戦の対農大戦に勝つしかないのである。逃げ場のない、切羽詰った空気が我々を包んでいた。

しかし、最下位回避にかける我々の執念は報われた。得点力に主眼を置いた新布陣のギャンブルが当り、３対１で勝ったのである。試合終了のホイッスルの音色は何とも甘く、晴れやかなものであった。その時の安堵感を想起するたびに今でも胸の中が熱くなる。

第２点は、その後に感じた伝統の重みと先輩の有難さである。

現役時代には、建前では叱咤する先輩に感謝しながらも、本音では重苦しくのしかかる伝統の化体者とゆう受取り方が卒直なところであった。不明を恥ずべきではあるが、伝統、先輩の有難さが解ってきたのは、リーグ戦の終盤、現役を退く頃からである。土壇場での反発力を醸成して呉れたのは、やはり伝統と先輩方の存在であったと思う。

自主管理を行う学生チームにとって、伝統は極めて重要な意味を持っている。たとえ技術が優れ

ていても、伝統を軽んずるチームは、それを纏める規範を見失い、自己満足に堕すことになろう。先輩と現役の間で共有、共感される伝統こそ、その規範と言えよう。

現役の４年間の回転の中で受け継がれ、変化して行く伝統の動態に加えて、離れた先輩が直接伝統の旧き息吹きを伝えることは不可欠なことのように思われる。

第３点は、上述のこととも深く係わることであるが、我々は先輩から受け継いだ伝統を充分に後輩に伝えることができたであろうかとゆう自戒と反省の念である。

昭和41年度に関東二部を落ちたことは誠に残念なことであった。（お節介は止めて呉れと言われるかも知れないが）そのことに対する責めの一半は我々にもあるように思えるのである。我々40年度のチームの戦力は、多くを３年生に負うていた。その３年生を叱咤激励し、何とか関東大学リーグ二部６位に踏み留ることができた。しかし、当面急を告げる戦局に眼を奪われ、後輩の成長の芽を摘むようなことがなかっただろうか、また翌年度まで展望した布陣と指導を行っただろうか……。

今でもまだ贖罪を受けていない悔恨の疼きが残っているのは小生だけではあるまい。

最後に、同期内輪のことでやゝ面映いが、弱体の同期生を引張り、チームを牽引して呉れた主将清水君への感謝と畏敬の念である。

我々同期生５名、人材不足の中で、彼は主将とグラマネを兼務するという重い責務を担うこととなった。チームの精神的支柱、試合でのキーマンとしての役柄に加え、嫌われ役としてのグラマネとゆう、言わば異質の二役が彼に課されたのである。

しかし、彼は、持前の不屈の精神力でこれを立派に果して呉れた。

リーグ戦の負けが込み、重圧に耐え兼ねて沈鬱な空気が我々を包んだ時でも、彼は屹然としていた。常に先頭を走り、我々同期生を鼓舞し、チームを勇気づけて呉れた。

関東大学リーグ二部６位とゆうリーグ戦績は決して誇れるものではないが、しかし、あの苦しい状況の中でこのポジションを確保できたのは、ひとえに主将、清水君の活躍によるものである。

回　　想

昭和42年卒業生

昭和41年度のチームは、前年度のレギュラーが、７名残り、かつ、４月に、当時としては、珍しく、高校時代からの経験者が多く入部し、これは、大いに頑張り、立派な、成績をあげなければならないと思ったものである。我々４年生も、全員３年から、リーグ戦に出場しており、この経験をもとに、何といっても我々の終局的な目標である秋のリーグ戦にむけて、どの様なチーム作りをしたら良いのか、話し合った事を覚えている。

春には、国公立大大会、三商大戦の他、出来る丈多くの練習試合を行った。これらの練習試合のうち、記憶にあるものは、当時、関東大学リーグ一部の常連であった、日大に４－３で勝ち、立教大には、２－２で引分け、同じ二部の、成城大には１－２で負けた。毎年行っていた、近所の朝鮮大にはどうしても勝てなかった。

この様な練習試合、そして勿論毎日の練習の蓄積で、チーム力の向上をはかっていたにも拘らず、

国公立大会及び三商大戦では、芳しい成績を残す事が出来ず、秋のリーグ戦迄の間に、春のシーズンの経験を活かし、もう一度はじめから、鍛え直さなければならないと考えたものだった。

夏の合宿は、何処かに出て行うよりも、腰を据えて、みっちりやる方が、身につくと考え、小平のグランドで約2週間行った。合宿では、毎年の事であるが、毎夜全員でのミーティングの後、4年生丈が、学校裏のスナックで、反省。翌日の練習方針等を、話し合った。

さて、秋のリーグ戦だが、戦績の方に書いた通り、第2戦の農大戦に勝ったものの、第3戦の一部から落ちて来た強豪日体大に完敗し、勝たなければいけない上智大に引分けたあたりから、チームの調子がおかしくなり、後から考えれば、以降の試合は、何か浮き足だち、力を十分発揮出来ないまゝ、ズルズルと、リーグ戦が終了し、入替戦でも三部優勝の国士館大になすゝべなく破れてしまった様な感じだった。振りかえって見れば、二部の中では、もともと技術が落ちる我々のチームは、他校より多い練習を通じて得た体力と精神力で、試合に於いて持てる力を、実力以上に発揮し技術力のハンディを克服しなければ、勝って行けない訳だが、我々4年生がそれをチーム全員に認識させ、実行出来る様な練習方針に徹しなかった事が、不成績の大きな原因ではなかったかと、思う。昭和39年の東京オリンピック以後、関東大学リーグに加盟する大学が増え、我々の頃一部から八部まであったものが、二部と三部では、大変な違いがあり、二部以上の国立大と云えば、東大と我校だけ、又、二部であれば、一部の強豪大も、練習試合に応じてくれた様な時であった。従い我我4年生の年に三部に落ちる結果となった事は、それ迄二部を維持した先輩及び後輩に、大変申訳なく、思ったものである。

しかし、今となって見るに、大学4年間のサッカー部生活は、確かに苦しかった思い出もあるが、最も楽しかった良き時代であり、又、その間、身をもって得たものは、具体的に形となって現れる事はないが、その後の人生において、大きなバックボーンとなっていると信じている。

ちなみに、我々が4年生の昭和41年度は、一部では、全日本代表の、釜本、森、大野らを4年生に擁する早稲田大学の全盛期であり、リーグ戦は勿論、正月の全日本選手権（天皇杯）にも、日本リーグのチームを破り優勝した年であった。

三部優勝ならず

高峯文世
（昭和43年卒業）

我々が過ごした4年間（39年～42年）には我が一橋ア式蹴球部にとっても又日本サッカー界にとっても様々な出来事があった。

入学した39年は東京オリンピックがあり、世界の高度なサッカーを目のあたりにしたし、あの駒沢でのアルゼンチン戦の劇的な勝利に狂喜した。これを機に日本サッカーへの関心も高まり、サッカーブームのはしりとなったことを記憶している。

我々サッカーをプレーする者も大きな顔をして「俺はサッカーをやっています。関東リーグ二部で一部入りを目指しています。」と何か誇らしい気分になっていた。実際には1年生の時二部とはいえ、又それだからこそ苦しい試合の連続であり、練習も他校のテクニックを粉砕するには体力で

あり、走り負けないことであるとしてハードそのものであった。かぜで微熱があり当日、練習を休む旨、当時の古川主将に了解を取りに部室に行くと、スパイクのひもを結びつつ〝ぐっ〟と目を細めて「お前立っているじゃないか、着替えてグランドで立って見てろ」と言われ、一言もなくグランドへ出たことがあった。不思議と翌日はカゼはなおっていたことを思い出す。

1年生～3年生の時代は二部という誇りと下級生の気安さもあり厳しい練習ではあったが楽しくサッカーに打ち込むことが出来た。

3年の時入れ替戦で国士館大に敗れ、三部転落となり、三浦主将から〝来年頼むぞ〟と言われた時から「二部復帰」というやらねばならぬ明確な目標を目前に4年生としての責任、自覚がぐっぐっと胸にこみ上げてきた。

試合経験の少なかった我々新4年生5名は部内のコミュニケーション、規律、ムード作りから始めている。小林がグラマネ専任を心よく受けてくれたし、佐藤がそのユニークな人柄で新入生中心の指導を引き受け、文集「ぱすける」（表紙は2年の内村君デザイン）を創刊してくれた。又、馬場、松崎がバッククスを、高田（旧姓可部）がフォワード中心に部内をまとめてくれた。

その頃、映画にＴＶに若き加山雄三の若大将シリーズが明るく楽しくその歌声と共に活躍していた。そんな中で我々4年は喫茶店「みどり」「ベレット」でそんな歌声を聞きつつ連日のように、練習計画、反省、作戦等ミーティングを重ねていた。三部へ落ちた翌年に直ぐ上らねばずるずる三部に定着してしまうぞという危機感。他校は高校時代からクラマー氏式の練習をしている洗練されたセンスの持主も多くこれに当るには走力、集中力による効率の良い得点と粘り強いマークによる守備でいくしかない。試合に出る4年が少ないだけに、3年以下のレギュラーが特に4年と同じ意識で部生活、試合をしろと、今から思えば随分酷な要請をしていたものである。

小林グラマネの努力で練習は充実したものであったし、得点力のなさを何とか耐え忍ぶ持久力でリーグ戦前半は乗り切ったが、第5戦、敗けなしの当面の敵、東学大には小雨降るグランドで力つき、敗れてしまった。ここに三部優勝の望みはほぼなくなり、その時の虚脱感は何とも言えず、私は試合後のミーティングもそこそこ、一人で帰り、深夜まで酒をくらい、一種の緊張からの心地良い解放感に浸ったことを生々しく思い出すのである。

この年、私はそれまでつけてきたことのなかった日記なるものをつけていたが、その日記の年末所感の冒頭に次のように記している。『覚悟していた1年であったが、やるだけやった。一応思い残すことはない。……しかし、三部優勝、二部復帰を達成出来ず残念だ。残念という言葉では表わせない。「皆よくやってくれた」そう思う思いで一杯だ。優勝するにはそれでも力が不足していたのだ。サッカーに精神、肉体とも打ち込んだ一年、主将としての責任、色々感慨は多い』

私自身、4年の時のサッカーは思い出したくない。又、試合経過など全く憶えていない。それが今回の部誌編纂の企画で、古い日記をひもとき思い出させられてしまった。

久しぶりに会った同期6名、しんどかったなぁの思いを新たにした次第である。

回　　想

有　田　　稔
（昭和44年卒業）

昭和40年の回想（１年生）

厳しいクラブを選択しようとサッカー部に入部した。大学は勉学に勤しむものと思いきや、午後の授業は全てボイコット。たゞたゞ小平グランドにてボール蹴り。ボールを蹴る前に１年生は昼休み時間にボールの空気入れ。今のボールと大違い。ポンプを差し込んでたゞ空気を入れるなんて、そんな生易しいもんじゃない。十手と称する金具でもって、皮ヒモをギュッと締めなくちゃ。皮ヒモを穴に通す際にチェープを突刺し、ボールをパンクさせること十数回。堀江さん（当時の主務）に何度叱られたか。

練習は厳しいの一言。清水征四郎キャプテンのドスの利いた顔と鋭い目付。スロー・クイックの繰り返しと雨の日の多摩湖までのマラソン。合宿は禁酒、禁煙。夏合宿で、トイレにタバコの吸殻が落ちていたと一騒動。

昭和41年の回想（２年生）

二部転落の年であった。忘れもしない駒沢サブグランドでの国士館大戦。ヤーさん風体の部員が何と多いことか。２～３ｍ間隔でグランドを取り囲みフィールド内の戦いよりその光景は圧巻であった。入替戦に敗れ、三浦主将を初めとする４年生の心の痛み、悔しさが胸を打った。来年は頑張ろうと心に誓った。

昭和42年の回想（３年生）

多くの友が部を去っていった。３年生も６人となってしまった。

二部復帰を合言葉に高峯主将、小林グラマネの下、例年に無い猛練習が続いた。小林さんのあの華奢な体のどこに気力と執念が籠っているのか。「勝負は技術ではない。体力と技術だ」を徹底的に叩き込まれた。

リーグ戦の天下分け目の大試合。雨の中の学芸大戦に敗れた。技術ではなかった。体力負であったような気がする。小林グラマネの教えを生かせなかった３年生として申し訳ない気持で一杯であった。

昭和43年の回想（４年生）

いよいよ最高学年。当然のことながら二部復帰を目標とした。プレーイング・グラマネの清水。１年の新人戦で膝を重傷、２年目でヘルニアとそのハンディを克服したサッカーへの執着心。ＦＢの要、天野。色の浅黒さは南洋人もビックリ。２年目で肝蔵疾患、長期休部したものゝ、無類のサッカー好き。清水・天野とともに我々にとっては、頼もしい「帰って来たサッカーマン」であった。主務の佐藤は嫌な顔もせず、雑務と後輩の面倒を良く見て呉れた。ＧＫの中沢は唯ひたすらにゴールを死守。ＦＷの鈴木は寝ている時だけではなく昼間、しかも練習中にも歯ぎしりをするという特技で後輩の人望を集めた。素人キャプテンを素晴しき５人の仲間が補佐し、この年入替戦挑戦権を賭けた、トーナメントまで進出することができた。想い出に残る順天大戦は昭和

43年戦績のとおりである。

小平のサッカーを想う時、あの関東ローム層の「土」を想い出さずにはいられない。4年間の内、何度スライディングで尻にビフテキを作ったことか。汗と泥にぬれた練習着にあの「土」がこびりつき洗濯に閉口したものである。

当時の練習は伝統的な当りの強さ、ボールへの寄り、走り負けないスタミナ等々、技術より粘り執着心、体力の養成にあった。格好良さより泥臭さで勝負した。正にあの「土」が全てを象徴していたように想う。

卒業後社会人となり、あの「土」に未だ会っていないような気がする。

背番号の数字

背番号というと「3」は長島選手、「8」は原選手とか野球がすぐ頭にうかぶが、背番号はスポーツにはつき物であって、背番号をつけないのは日本古来のスポーツと水泳ぐらいであろう。ところでサッカーやラグビーの背番号については、他のスポーツと数字の取扱いが異るようである。もっとも最近は欧州、南米のプロサッカーの影響があり、選手数がふえてきたせいもあるが、昔は番号は完全にポジションを意味していた。例えば「1」はGK、「5」はHC、「11」はLWという如くであり、12以上は補欠であった。サッカー部に籍をおく者は早く1から11迄のユニフォームを着て、いわゆる正選手の地位を得たいと精進したものである。

ところで背番号の数字であるが、最近のものは遠くからでも判別できるように大きな数字がついており、中にはコンピューター用の特殊な数字を使っているものもある。然し戦前のものは現在の半分位しかなく、眼の悪い人は遠くからは判らない位であった。21年秋に戦後の大学リーグ戦が復活したが、当校のユニフォームは戦災で焼けてしまい、その入手には非常に苦労したものである。幸にして先輩が都合をつけて下さり、鮮かな真紅のユニフォームを目のあたりにし、何度もながめたり触ったりしたものである。然し背中を見て驚いた。背番号が異常に大きく、これはてっきり業者が寸法を間違えたに相違ないと思ったが、試合直前のことで如何ともし難かった。果せるかなそのユニフォームを着て東大御殿下グランドに立った時、観衆から「大きな番号だな！」と嘆声が聞かれた。しかし、しばらくたつうちに反って見易く、その後外国チームが日本に来て試合をやるのを見ると、当校同様大きな番号をつけているではないか。それから何時の間にか日本のサッカーも大きな背番号をつけるようになってしまった。当校は番号については日本で先端をきったということになる。

昭和44年・回想

土　井　徳　秋
（昭和45年卒業）

昭和44年と言えば３億円事件の翌年である。内村君が当時のサッカー部の部誌「ぱすける」に次のように書いている。「４月25日号の週刊朝日に高度8200メートルから３億円事件の犯行現場を写した航空写真がのっている。その写真にわれわれのサッカーグランドが黒い長方形となってけっこうそれとわかる程に写っている……」

この黒い長方形のグランドで、われわれは４年間を過ごした。われわれの、どれだけの量の汗が、このグランドに吸いこまれていたのだろうか。考えてみると、この週刊朝日の出た頃は、新入生を数多く迎えて（マイケル・Ｒ・セジュリ君という外人もいた。）二部復帰へとスタートダッシュをかけていた時期である。練習している姿が写っていたか、どうか。

われわれが一橋の門をくぐったのは昭和41年。その年のリーグ戦の最終戦は、東大御殿下グランドで行なわれた。この試合に敗れると入替え戦というとき、無念にもリードを許し、もはやタイムアップ寸前。見上げると安田講堂の、あの時計の針が無情に動いたのをいまでも、鮮明に記憶している。

「二部復帰」これが、それ以後、われわれのスローガンになった。

しかし、その年、われわれ新入り一年生はかなり問題児であったらしい。カルピス事件というのがある。小平での夏合宿。はじめて経験する、あの炎暑の中の猛練習。夕方練習のあと学食に帰って来ると、先輩の差入れらしいカルピスがよく冷えている。飲みはじめたら止まらない。あっという間に、先輩に無断で、一年生だけで飲みほした。大目玉だ。

多摩湖への雨中マラソンもよくあった。ある時、出原君が出発したばかりの府中街道あたりで姿を消した。当時４年生だった市川さんや槇田さんがさがしてみると、木のかげに隠れているところを発見。本人の供述によると「みんなが帰って来たら、何くわぬ顔をして合流しよう、と思った。」と言うから知能犯だ。三浦主将もあきれていた。

われわれが２年になった時のグラマネは小林さん。厳しい練習だった。基礎体力づくりのハードトレーニング。われわれは、そのつらさのあまり、練習帰りによく、「寺田屋」ならぬ「大黒屋」に集まって、うっぷんをはらしたものだ。大黒屋は小金井にあったヤキトリ屋。煮込みがうまくて50円。ヤキトリ１本10円。シロ、タン、レバー。「まぜて20本。」とおばさんに頼む。これは、練習の時の小林さんのかけ声と同じである。「ジャンプヘッドをまぜて20本！」あのハードトレーニングがなつかしい。授業のあと、みんながすでに炎天下で水まきしているグランドへ遅れて出ると「水まきと授業とどっちが大事だと思ってるんだ」と、どなられた。その気迫に、声も出なかった。一橋サッカー語録に入る言葉であろう。

小金井の「大黒屋」から歩いて５～６分のところに「つづみ」があった。定食 150円。うまい米を腹一杯食べさせてくれた。おばさんが親切だった。合宿の時の「おくに」もなつかしい店だ。「つづみ」には種田君や、吉川君がよく通っていた。渡辺君、望月君、岡君も集まって、二階でサッカ

ーの話に夢中になっていたのが、昨日のことのようである。

タオルに水をひたしておいて、チュウチュウ吸っていた。17秒・43秒のインターバルのとき、自分に向かってどなっていた。合宿の夜、風呂に行く途中で月を見ながら、あの月が満月になれば帰れると思った……。そんなサッカー部生活も最後の年が来た。昭和44年。

誰もが想いは同じだった。関東大学リーグ二部に復帰させて卒業したかった。外岡先輩はじめ諸先輩の期待に応えたかった。

小平の夏合宿。予期せぬ事が起こった。津田へのランニングを繰り返すうちに一年生の広田昭久君がダウン。念のため救急車で桜堤病院へ運んだが、かなりの重症。われわれも徹夜で看護にあたり、やっと3日目の朝、回復したときは一同、胸をなでおろした。合宿前の東北無銭旅行の疲労が原因らしかった。

二次合宿は菅平。やや天候に恵まれなかったものの、かなりの練習量をこなした。夜は焼肉屋でスタミナもつけた。そして、秋のリーグ戦に備えた……。

ついに二部復帰の夢は実現できなかった。しかし、小平の黒い長方形のグランドは、われわれに、語りつくせぬ多くのものを与えてくれたのである。

我が同期考

竿　代　興　志
（昭和46年卒業）

社会ではまだまだ小僧っ子扱いである我々も、この3月で早、卒業10周年を迎えた。11人の同期生のうち、現在5人が海外で活躍中、名古屋・大阪・金沢に各1人という訳で、東京在住は僅かの3人である。学生当時、自宅通学をしていたため、マネジャーとサブマネジャーを引受けるハメに陥った吉川君と小生は、生まれてこの方、東京近辺をウロついていることになる。そのためか今回の原稿も2人で分担することになった次第である。

学生当時を振返ってみると、我々の同期は実にユニークな存在であったように思う。しかも良い点よりも悪い点の方がはるかに大きい、劣等生集団であった。何せ就職試験を受ける時点（つまり3年間）で優の数が2ケタであったのは2～3名、しかも最高といわれたU君でも15～6、結局、卒業時に20の大台にのったのが1人だけという有様であった。

一方、勉学以外でもエピソードには事欠かない。それは新入生歓迎コンパにまでさかのぼる。歓迎コンパはいつの年でもにぎやかなものであるが、この年のはケタ外れであった。42年5月、吉祥寺の寿司屋に集合した1年生、その数20数名が酒の怖さも知らずに飲んだからたまらない。コンパの終った時の光景はまさに戦場のようであった。寿司桶を洗面器代りに何杯も戻すS君・K君。豪快に飲み且歌った水戸一高トリオ（残念ながら1年生の間に全員退部）、1人静かにコップ酒を飲んでいたが立上ろうとした途端に腰を抜かしたH君（その夜、彼は突然大声で校歌を歌い出し、家じゅうの人を起してしまったとか）帰りに吉祥寺の駅で人事不省？となり危うく救急車の御世話になりかかったM君等々、翌年のコンパの開催を拒否されたのはもちろん、現在であれば新聞沙汰にもなり兼ねない状況であった。

次には競馬である。世の競馬ブームにあおられたこともあり、H君・U君を震源地にまたたく間に伝染し、11人中悪の道に手を染めなかったのは、2～3名のみであったと思われる。毎週金・土曜日の練習後、国分寺の喫茶店「レイエンダ」に集合し、検討会？を開いた。一言弁明をさせていただくと、これはあくまで練習を済ませてからの息抜きといったもので、決してサッカーの手を抜いていた訳ではないと断言できる。何はともあれ、賢明なる他の学年にこのフィーバーが飛び火しなかった事はご同慶の至りである。

最後になったが、本業のサッカーについて。我々の世代は丁度一橋サッカー部の歴史上、1つの過渡期にあったような気がする。それまでの伝統として、技術の不足を相手に勝る運動量と、旺盛なファイティングスピリットとで補ってきた。その結果、強いチームとの試合でもそこそこ善戦をするかわりに、弱いチームとの試合でも楽勝ということはほとんどなかった。そしてこれは、我が一橋の主力が中学・高校でサッカーを経験していなかった者で占められていたことも一因ではなかったかと小生なりに考える。それが東京・メキシコオリンピックをジャンプ台にして底辺が急速に広がり、一橋サッカー部員でも、経験者の占める割合が大きくなってきた。我々は未経験者中心の最後の世代となったと思われる。これは卒業3年目に2部復帰を果たした年の入替戦をみて痛感した事であった。時代の流れともいうべきものであろうかと思うが、向上した技術に、伝統の豊富な運動量、ファイティングスピリットを加え、一橋サッカー部が益々発展することを期待する。

昭和46年回想

湯　浦　俊　一
（昭和47年卒業）

私が在籍していた頃の我が部は関東リーグ2部復帰が部の最終目標でしたが、そのためには東京リーグで4位以内となり関東大会出場権を得ることが当面の課題でした。

しかし乍ら昭和46年のシーズンをふり返ってみると誠に厳しい条件下のスタートであり、目標達成どころか、下手をすると東京リーグ2部転落の恐れもありました。即ち、

①大量の卒業生を出しレギュラーが4人と激減、一時的に大巾な戦力ダウンとなった点。

②他校は選手を集めておりチーム力が上昇しているにもかかわらず、当方のそれは停滞、又は下降気味である点。（東京リーグ発足以来4位、5位、6位と毎年順位が落ちていた）

③この年よりリーグの制度が改訂され1部は8チームとなり5位以下は2部との入替戦が義務づけられた点。（当時のままでは4位以内は難しく、2部には専修大など我校より実力ありと思われる学校があった。）

④上級生が4年2人、3年3人と少なく下級生主体の為意志の統一にやや難があり、チームとしてのまとまりが懸念された点。（彼らは下級生という立場の気楽さから状況の深刻さの認識がなく、練習日の削減等を申し出たりして困らされました。）

更にＯＢよりの期待とプレッシャーも加わり前途多難どころかお先真暗の感じでした。

幸い結果はリーグ戦4位、関東大会出場とほぼ満足すべきもので、翌年以降に期待を継げることができ責務は果したと思います。

この年は以上の様な悪条件下でいかにして勝ち残るかに腐心しましたが、一方我が部にとって種々の画期的ともいえる事柄もあり、それなりに楽しい一年でありました。

その第一は初めて女子マネージャーが出現したことです。採用に至る経緯は忘れましたが3年生から話が持ちこまれたようです。

特に異議を唱える者もなく、とにかくやってもらうこととなりましたが、今までと異なり雰囲気が和やかになったようです。

1年生のKなどはそのうちの1人に熱をあげたりしていました。

グランド関係ではこの年の春に改修工事がなされ向きが90度変わり、タッチライン沿いには林のかわりにホッケー、野球のグランドが接し、従来とは変わった雰囲気となりました。工事でグランド使用不能の為、春の合宿は国立で行いましたが、従来とは異ったパターンで格好の気分転換となりました。

合宿といえば暑くて苦しいものといったイメージですが、それを打ち破るべく心を配りました。夏の合宿はこれまでと全くちがったところで山中湖となりましたが、決定までに別の候補地もあり視察旅行をしたりしました。

山中湖の合宿は夜は寒いくらいで従来の夏合宿よりもはるかに体は楽でした。更にどういうわけか文化女子大バレー部と同宿になり4年の特権をフルに利用、自由時間を楽しく過ごしたり、またこの時の縁で後日彼女らの学校祭に私だけ招待されるなど、4年間で最も思い出深い合宿でした。

いま一つは弱体化を心配されたOBの骨折で元全日本・古河電工の内野氏の指導を仰ぐようになったことです。外部より、また本格的にコーチを迎えることは初の試みであり双方不慣れな点もありましたが沢山のことを学びました。最も印象に残るのは青学との練習試合でCFにサッカー歴半年足らずの1年生を起用したことです。彼はとても試合に出るような段階でないと誰もが思っていましたが、始まってみるとチームで一番キープ力があり相手BKは恐慌状態に陥る始末。内野氏の炯眼に恐れ入ると同時に人をみること、評価することの難しさを考えさせられた点です。

昭和46年はバラエティに富み、学生生活の最後の年としてはまずまずの年であったと思います。

とりとめのない文章となりましたが最後に現役、特に4年生諸君には再度関東リーグ復帰を目ざし努力されんことを望みます。

状況の正しい認識、適切な戦略、戦術の策定を通し目標を達成しOBの夢を是非かなえて下さい。

回　想　録

押　本　俊　明
（昭和48年卒業）

敵のエースの足元に左側からパスが出る。思い切って体を投げ出してカットに飛び込む。「やった！」と思ったその瞬間、「ガッシャーン」という大音響と共に右足に激痛。ハッとして目が覚めると、足元に置いたはずの扇風機がどこかに吹き飛び、足の甲から血がタラタラ……。全く、現役時代は夢もウツツもサッカーでありました。

1年生の時は確か10人ぐらい居たのではないかと記憶しますが、私の年次で卒業まで続けたのは、

新福、矢尾板、矢野、それに私のわずか４人でした。もっとも矢尾板はマネージャーとして用具の購入、先輩諸兄との連絡等々に４年間の大半を奔走した〝ホワイトカラー〟でありましたし、矢野は４年生になった途端、一念発起、公務員試験を受けると言い出し、あの特徴的な顔をあまりグランドに出さなくなってしまいましたし、かく言う私自身も、１年生のシーズンが終わらないうちに「より多角的な学生生活をもとめて」退部、結局「やっぱり他にやることねえや」という理由で３年生の夏から出戻ったという脛に傷持つ身でありましたから、名実ともに「４年間汗と泥にまみれたぞ」と胸を張れるのは新福一人ということになります。そんな最上級生達であったから（ではないと本当は信じているのですが）、最後のリーグ戦の成績もビリから二番目で、やっと入替戦に勝った時は、情ないやら嬉しいやら……。

しかし、いまだから言いますが、あのリーグ戦、実はかなりの自信がありました。当時の一橋サッカー部は、東京リーグ一部の真中から少し下ぐらいの地位が定位置となってしまっており、「関東リーグ復帰」の掛け声も、建前だけのカラ廻りになり勝ちな状況でした。そこで部員の一人ひとりを〝真実その気にさせる〟極めて具体的な方策を主将の新福と２人で練りに練ったものでした。日々の練習は、ほんのわずかでもよいから「俺は昨日にくらべてここが良くなった」というはっきりした自覚が持てることを眼目として計画し実行したつもりですし、グランドを離れても、例えば試合が近くなると、予め撮影しておいた相手チームの顔写真を部室にズラリと貼り出し、利き足はどちらか、フェイントの癖はどうかなど、誰でも気の付いたことを書き込むようにするとか、とにかく色々やりました。春合宿、三商大戦と上々のコンディションのうちに過ぎ、「相当やれるぞ」という確信のもとに入ったリーグ戦であっただけに、戦いが進み、週が深まるにつれ、茫然たる気持ちに襲われたものでした。それでも今だにひとつだけ誇れるのは、そうした中にあっても、部内に不協和音や対立が全然起らなかったことです。伊豆で行なった最後の〝追コン〟で、無論酒のせいもあるのでしょうが、下級生のほとんど全員がボロボロ涙をこぼして「来年」を誓ってくれた時、そしてその約束通り、翌年、あの大宮サッカー場で上智を２－０で下して悲願の関東リーグ復帰を果してくれた時、多勢の賢弟に恵まれた我々愚兄４人は、全く、この上なく幸せでした。

自分がいまのところ健康だからこそ言えるのでしょうが、「健康のためのジョギングブーム」などというものに、何とはなしの不快感を覚えます。「健康のため」というところに何か打算的な響きを感じます。「健康になってどうしようというのだ」とヒネクレたくなります。あの時、僕らは決して健康のためなんかにサッカーをやっていたのではなくて、それじゃあ一体何のためだと言われるとうまく答えられないけれど、願わくばもう一度、あの激しい戦いをやってみたいものだと思います。

サッカー部生活の頃

昭和49年卒業生

原稿の締切りに追われるのは何年振りの事だろうか。我々の学生の頃、「パスケル」という部誌を発行していた。これは部員相互の理解を深め、ひいてはチームワークの発展に資することを期待

して数年前より発行していたもので、毎年新入部員を迎えた５月末頃を締切りとして自選他薦により選ばれた編集委員が練習後の汚い部室を催促して歩いた。我々が入部した頃の４年生の間では、なぜかチームメイトを競争馬にみたてて紹介するという型式がはやっていて、当時競馬などヤクザのするものと思っていた地方の高校を卒業したての純真な私など上級生との距離を感じたものだ。我々の４年の頃は既に競馬に関心をもつ者もなく、数ケ月前から構想を練ったと思われる大作（長いという意味）、私小説、サッカー論、麻雀小説等々バラエティーに富んでおり、普段のサッカーからは想像も出来ない知的な面を垣間見せられ再認識することも多く、刊行の目的は充分果たしていたように思う。その後何号か続いた後廃刊となったが、後輩達が決めたことなので仕方ないとはいえ無駄の精神をなくしたようで残念な気がする。今回60年史への投稿の話がもちあがり、まず浮かんだのは「パスケル」のことである。

本来我々を代表する筈の主将山崎が現在米国留学中の他、マネージャーも地方在勤中につき私の処に筆が回ってきた。役目を充分に果たす表現力を持っていないことは「パスケル」でも実証済であるが、60年の歴史の中で近年の部の快挙として我々の時代の関東２部復帰は記録に留めておきたいと思い、僭越ながら筆をとった。過去に幾多の先輩が挑戦し、チーム力では高く評価されながらも初戦の躓きから報われなかった年、逆に余り期待されなかったが故に敵のマークにもあわず意外といい成績を残せた年。我々が２部に昇格できた時も、リーグ戦では最終戦の勝利でかろうじで４位を確保し、その後の関東大会でもＰＫ合戦で勝ち進むという薄氷の思いで入替戦にたどりついたのだ。私の学生時代の試合の記憶といえば、この浦和での入替戦くらいしか残ってないが、それもあやふやなものになっている。最後は時の勢いで勝ったとしかいいようがないが、このような勝負運の強さの裏には過去の先輩達から受け継がれてきた、目に見えない経験の蓄積があったことを感じないわけにはいかなかった。過去からの怨念のようなものを晴らし、酉松会のご支援に報いることが出来たことは誠に光栄なことと今でも思っている。

ＯＢの方々のお力添えといえば、２年の時から古河電工の内野氏、三菱重工の片山氏といった全日本経験者をコーチにお迎えしたこと、その結果それまででは考えられないような日本リーグのチームや実業団の胸を借りることが出来たことは、チーム力向上になくてはならないものだった。

これらコーチの指導に応えて、我々なりにも工夫はした。大きな模造紙に相手チームのメンバーの顔写真（自分のチームの試合も観ずに偵察に行き、望遠レンズで盗み撮りしてくるのである）を貼り、それぞれの動きの特徴、行動範囲、攻守の型をたたき込むことが試合前日のミーティングのパターンとなった。（相手チームは我々など余りマークしていない筈だ）また、改修工事によって２年の時から排水の良くなったグランドの整備は、ボールタッチをソフトにするにはまず平らなグランドからという発想からであり、壊れたイスを工夫して４人乗りトンボを作ったりした。（改修工事によりグランドの向きは東西から南北に90度回転、また雨が振ると出現していた小平湖にも以後あまりお目にかからなくなった。）

強いチームを求め三商大戦を足場に、関西遠征を本格的にするようになったのも我々の頃からであろう。当時早稲田と大学サッカー界を二分していた大商大に、敵の部員100人が見守る中でコテンパンにやられた後のビールは体中に滲みていくようで旨かった。先輩の遺産を受け継いだ我々はこうして強くなり、その後数年間に亘りチーム力は充実していたと思う。

ラクビー部の募集広告をみて間違って小平にきたために女性マネージャーとなった猿渡啓子、河

野恵美子さんも、初代女性マネージャーとしてサッカー部の歴史に花を添えてくれた。

既に10年も昔のこととなってしまったが、サッカー自体については大部分のものの記憶が薄れてしまっているのは、恐らくサッカーが生活そのものだったからだろう。練習、試合は我々の日々の営みだったから、ただサッカーをやっていたという漠然とした記憶しかないのだ。今もサッカーは続けているが、こちらの方は週1回なので数少ない得点シーンなどしつこく覚えて忘れそうもない。いやなOBになりそうだ。当時も激しい戦いの後の自販機の缶ビールは美味しかったが、今ではビールだけが楽しみとすらなっている。

目的はどこにあれ、サッカーを楽しく続けられているのも、勝つことを目標に4年間のすべてをサッカーに委ね、それが報われたという運のよい経験をもっているからだろうか。

回　想　録

内　田　　守
（昭和50年卒業）

楽しいこともあり、また、苦しいこともあった大学生活、否、一橋大学ア式蹴球部の生活でありましたが、今振り返ってみると、そこには、ただ素晴しき思い出のみが残っています。

大学サッカー部生活では、多くの友を得、また、多くの体験をすることができました。しかし、それだけではなく、我々昭和50年卒の仲間は、1度ならず2度までも、一生の思い出となる素晴しき感激・興奮を味わうことができたことを大いに感謝しております。

一つは、3年生の秋、薄氷を踏む思いで勝ち進み、関東二部との入替戦に出場し、浦和駒場サッカー場において上智大学を破り、遂に、長年の夢であった念願の関東二部リーグ入りを果たしたこと。

また、一つは、最終学年の秋季リーグ戦3勝4敗乍らも関東二部7位に終り、その結果駒沢競技場で行なわれた入替戦において、非常に苦しい戦いの末、駒沢大学を破り、関東二部残留を果たしたことであります。

この2度の試合ともに、我々サッカー部は全員が一丸となって試合に臨み、また、タイムアップのホイッスルと同時に、お互いに抱き合い、涙を流さんばかりに喜んだのですが、そのことが、つい昨日のことの様に、今でも浮かんできます。残念乍ら、それ以後、今日まで、あの興奮、あの感激を味わうことはできません。それほど、素晴しい体験でした。

あの感激は何だったのでしょうか。念願の関東二部昇格を果たした喜び。また、関東二部残留を決めたことの喜び。確かに、それもあるでしょう。しかし、いま思うに、あの感激は、数々の苦しみや辛さを乗り越え精進した結果、幸運にも目標を果たすことが出来た喜びから生まれたものでないでしょうか。

一橋大学ア式蹴球部は、プロのサッカー選手の集団ではありません。小学生時代からずっとサッカーをやっている人もいれば、健康のために、大学に入って初めてサッカー部に入部した人もいます。高校時代に、全国大会に出た人もいれば、出ると負けのチームの無名選手だった人もいます。しかし、全員がそれぞれ個々の意見を持ちながら、それぞれの個性を発揮して、一橋大学ア式蹴球

部という一つの集団を形成しているのです。その集団の運営は、部員自身に任されており、つきっきりのコーチも監督もいません。全てが、部員に委ねられているのです。何と素晴しい集団ではありませんか。その素晴しさ故に、一年間の間には、分解寸前になる様なことも、また、強固な一枚岩になることもあります。そして、その様な幾多の試練・危機を乗り起えて、最後に、部員全員が一丸となって、劇的に目標を果たすことが出来たとき、最大の興奮感激を味わうことが出来るのではないでしょうか。

大学のサッカー部での経験が、社会に出てから大いに役立つ云々という、実利的な面も確かにあるでしょうが、あの時の、あの興奮、感激こそ、我々にとって全てでした。

一橋大学ア式蹴球部が、いつまでも素晴しい集団であってほしい。

そして、全員が個性を発揮して、素晴しい思い出を作って欲しい。

そして、みんなで興奮して感激して欲しい。

一橋、フレッ！フレッ！フレッ！

回　　想

河　内　純一郎
（昭和51年卒業）

前年に引き続き、関東二部でプレー出来たことは、我々にとって非常に幸運なことであった。特に、春季一、二部対抗オープン・リーグでは、早稲田・慶応・明治の名門3チームに胸を借りることができた。結果は大敗を喫することとなったが、厳しい教訓として大いに役立った。その1つの証拠として、春0対5で負けた明治に、秋は、敗れはしたものの1対3まで追撃できたのである。

秋のリーグは、善戦むなしく最下位になったが、下位リーグの専修との入替戦では、6対2で大勝し、関東リーグに踏みとどまった。これは、日々の練習の成果と、関東リーグの強い当たりの中でもまれたチームの成長を示す事実である。

最高学年のメンバーを紹介しよう。主将の木内は、ゴールキーパーとして、チームの全面的な信頼を受けて、ゴールを良く守った。また、下級生の相談役として、クラブ全体をまとめてくれた。

フォワードのコンビは、何と言っても、カツ（池田克彦）とリャンタ（高橋）である。我々を指導していただいた元全日本フルバック片山氏（三菱重工）が、常に強調されていた〝ペア〟の重要性を、彼ら二人が最もよく実践していた。

もうひとりのフォワード谷口のシュートで思い出すのは、何といっても朝鮮大での1点だ。この年は、朝鮮大と何回か試合をしたが、敵さんは何といっても、関東一部より実力は上といわれる相手だから、そこから奪ったあの得点は今も忘れられない。

ハーフは、瀬川と阿部だ。二人とも誠実なプレーでチームに貢献し、特に下級生からの信頼が厚かった。

バックは、アイチャン（池田篤）、この人は一対一にめっぽう強い人で、ボールに対する粘りではチームでピカ一だった。続いてケンタ（佐藤）は、スイーパーのポジションで、常に沈着冷静、まるで一杯やってきたようなプレーをいつもする。

ウマ（寺尾）は、4年間で一番のびた選手だ。入部した時はシロウトだったが、最後は〝カマ

（鎌）〃として相手フォワードを刈り取る役目を十分に果した。特に最後の入替戦では、相手のエースを刈り取り、チームを大勝利に導いた。

また主務の倉田は、一番やっかいな連盟の仕事をやってくれ、正にチームの裏方として我々を支えてくれた。

以上に、グランド・マネージャーの私（河内）を加え、4年生合わせて、ちょうど11人が、各自各様に力を合わせ、とにかく最後だけは、きちんと締めることが出来、ラッキーな年だったと思う。

なお、通称〝コロ〟こと河内は当チームの名ハーフ且つスイーパーである。（木内注）

12人の中から

古　荘　健　一
（昭和52年卒業）

木村という男がいた。通称キムという。彼が我年代のキャプテンであった。現在は三菱商事にて活躍中である。今でこそ見る影もなく、ペンギンの如く肥えているという噂を耳にするのだが、当時から小肥りであった？……彼は仲々の自信家で、いずれ社長とは言はぬまでも、三菱商事の屋台骨のどこかを支える人間にはなるかもしれない。ポジションはフルバックであった。ファイターの彼は、常に鋭く思いきったタックルで味方のピンチを救った。が、ボールを取った後、自信に満ちたドリブルで相手をかわし、前線に上がろうとするのがいけない。敵にボールを取り返され、再びその必殺タックルを敢行せねばならなかったのである。しかし他面、彼は非常に面倒見がよく、私も幾度か尋ねた彼の下宿に、ファンレターばりの手紙を見つけて驚いたものだった。人の悩みを聞く彼の暖かみは、私自身忘れられぬものがある。

最後尾守備の要、リベロはボンという。関西の若旦那である所からそう呼ばれていたのだが、体つきからしてなんとピッタリした仇名であったなあと、私も今感心しながら思い出している。彼は素晴しいキックの持主で、良くその激務をこなしていた。

我等のポイントゲッターは安部である。通称ヤスベーという。性格温厚な二枚目で、彼を慕う女性も多かったと思うのだが、彼自身余り気がないので、彼もそれに気づいていまい。そんな訳でまだ独身である。彼は個人技に勝れ、キープ力もあり、中央突破もできるというサッカー部きっての逸材で、早くから注目をあびていた。がゴール前１、２ｍという至近距離のシュートを宇宙開発するという超美技の持主でもあり、それを得意のスマイルで、頭をかきながら謝る所など、これは将来大物だと皆でうなったものである。

今一人個人技に勝れた選手がいる。セメル（内田泰彰）という。何故セメルというのかというと、内田マモルという同姓の先輩がいたからなのであるが、その名の通り攻撃面では素晴しかったが、守備になると何故か試合の局面からその姿を消す神出鬼没のプレーヤーであった。しかしサッカー部随一の個人技を持ち、その巧みなドリブルから繰り出すネッツァーばりのロングパスは、我チームの攻撃の起点であった。

バックスではあったが、加藤もドリブルが巧かった。挑戦型プレーヤーで、得意のオーバーラップからチャンスを作る事が多かったのを記憶している。私など二軍でバックをやりながら、彼の様

なプレーヤーになりたいと、いつも羨望の眼差しで見ていたものである。全身油ぎった超人的体力の持主で、試合中縦横無尽に走り廻っていた。彼がグラマネをやった４年生時代は、後輩からアブラ人間と仇名され恐れられていた。そうした因果からか彼は現在東京銀行員としてアラブに滞在している。

もう一人のグラマネを養田という。ヨーダと読むのだが、別にスターウォーズの妖怪ではない。歴とした人間である。彼はレギュラーではなかったが、サッカーを愛する事、海よりも深く、サッカーを知る事山よりも高いという男である。理論面で彼の右に出る者はなく、彼の履歴には一橋大学サッカー学学士と書いてあるのではないかと考える程である。激戦のリーグ戦を、我々より遥かに巧い相手と闘っていかに勝つかを考え、外から常に冷静に試合を分析していた。縁の下の力持ちの一人である。余談だが彼の数少ないもう一つの趣味は麻雀で、凝り性の彼は、近代麻雀学なる雑誌を片手に研究を重ねていた。その理論は、うたぬ様に常に安全牌を数牌溜ておくおりの戦術であり、おかげで私も彼には非常にお世話になった記憶がある。

まだまだ紹介したい仲間や思い出が多いのだが、紙面の都合で諦めざるを得ない。一つのボールに集うた我が素晴しき仲間の今後の御活躍を期してここにペンを置きたいと思います。

52年の思い出

浅　井　幸　一
（昭和53年卒業）

私と同期の仲間の紹介を中心に思い出を語ることとしたい。講議で顔を合わせることは極めてまれであったが、シーズン中は日曜日を含め週５日の練習で必ず顔を合わせた仲間であり、オフの時も旅行に行ったり様々な思い出を残してきた仲間である。

まず、主将の佐藤。富山中部出身で、最後まで残った同期９名中の中で唯一の寮生である。ハッスルボーイであり練習中は卒先して声を出し、マラソンではいつも渋谷と競い合っていた。腕を上げ指さしてのキックは名物であった。キック力抜群、がっしりした体から別名をマッスル佐藤という。

ＧＭ小林。立川高出身で正にサッカーをやるために生まれてきたような男である。強力なジャンプヘッド、及びその異質な体型からカエル、爬虫類というニックネームがついた。なぜかいじめられやすく、２年の合宿では体中に赤チンを塗られ、４年の時はサッカーの練習着のまま風呂に投げ入れられたりした。逸話も多く、１年の水泳の試験で力感的な平泳ぎなのだが全然前へ進まなかったという話、卒業前のハワイ旅行での空中爆発の話（彼の名誉を守るため多くは書かない）など。

ＧＭ栗原。名門石神井高出身、我々の中では珍しくテクニシャンに属する。４年のリーグ戦の最中にケガで入院する不運もあった。彼とは他の仲間も含め、山や海、スキーにもよく行ってオフの楽しい思い出を残した。しゃべり方がやさしくて、どことなく女性的な感じを受けることがあったが、別にその気はなかったようである。

渋谷。立川高出身で大学に入ってからサッカーを始めた。一見メガネをかけた博士風であるが、骨張った体での当りは強烈で、練習中に被害を受けた部員も多かった。酒好きで、意識不明のまま

東京一高尾間を２往復し、おまけに階段から落ちてメガネを割ったという話や、コンパで悪い先輩にしょう油を飲まされたという逸話もある。彼はシーズン途中でＧＭに加わった。

深谷。浦和出身のキーパーで、水戸勝田との試合で鼻を折ったり、リーグ戦の東大戦で足を折ったりした。しかしケガを克服し４年間頑張った。麻雀が好きで、勝負に対する執着心は相当なものである。修善寺の栗原の別荘に泊まった時、戦争というトランプゲームをやったのだが、惨敗し、その夜寝言で「池田、２で勝負だ」と言った話は有名である。

池田。山形東出身で彼も大学に入ってからサッカーを始めた。先輩、後輩を問わず好かれる好人物。２年の那須の合宿では雨上がりの練習で、両足数十カ所もブヨに刺され、虫にも好かれることを証明した。ニックネームはアホ。悪い先輩につけられたものだが、４年間変わることはなかった。彼は下宿を３回変えたが、バラックの２階とかお世辞にも良い下宿とは言えない所で、部屋の汚し方も見事であった。

田中耕太郎。広島学院出身で広島弁丸出しの人気物。野性児でヒバゴンとは彼のことではないかというううわさもある。足首のケガでプレーの方はほとんどしていないが、４年間在籍した。彼の東京花小金井の家は、サッカー部のたまり場のようであった。

道正。開成出身の名ドリブラー。彼は他の８人より入学は１年早かったが、卒業は一緒になった。他の全員が１浪であるため、結局全員が同い年である。理論派であり、映画、ボクシングに詳しい一面もあった。

最後に私（浅井）だが、戸山高出身で会計を担当した。当時予算に余裕がなかったため緊縮財政で苦労した。自宅通学者の中では最も外泊が多かったと思う。４年の夏合宿の前海へ行って海中で足を切り、前半は草むしりに終わった苦い思い出もある。

以上９名のほか途中で退部した者も何人かいるが、その中には腕力ドリブルが得意のギャンブラー森などユニークな者もいた。

合宿での思い出も多い。１年菅平、２年那須、３年山中湖、４年津南。津南では日射病患者が出るほどの暑い合宿で、グランドから宿舎へ帰るまで坂を登るのがしんどかった。

この年の出来事としてはプロ野球巨人軍の王選手が 756号の世界記録を樹立したことや、サッカーの王様ペレの引退、古河電工の奥寺が西ドイツＩＦＣケルンでプロとしてデビュー、そして11月関東２部の入替戦で宿敵の東大、立教が敗れ都リーグへ陥落したことなどがある。

回　　想

山　原　義　彦
（昭和54年卒業）

我々の同期は、総勢12名という大人数、しかもそれぞれ個性豊かな人物がそろっていた。ここでは同期12人の人となりを振り返ってみたい。なお(　)内は現在の勤務先。

まず、石川哲。田舎者が多く、ファッション的には、今ひとつという同期生の中で、スタイリストとして際立った存在だった。しかし他人の下宿に上り込み、冷蔵庫を空にして帰るという悪魔のような一面も併せもっていた。プレーの上でも相手に悪魔と恐れられていたかどうかは、誰も知ら

ない。（日産自動車）

野村隆。無口な男で根は真面目なのだが、練習着を何日も洗わないまま着用する図太い神経には皆驚嘆したものだ。それでも甘いマスクと堅実なプレーで、一部の女性ファンには人気を博していたらしい。（丸紅）

小池直之。人望厚い名主将。酒仙と讃われる程に酒をこよなく愛し、またチーム随一のヘビースモーカーでもあった。ファッションセンスがまた抜群（？）で、いつかはトレーニングウエアの上下に黒の革靴といういでたちで、登場、注目を集めたものである。（諏訪精工舎）

高槌宏敦。女に生まれたなら、安産型のそのヒップといい、大和撫子そのままの内股で色気を振りまくその様といい、どんなにか男心を揺さぶったに違いない。もっともプレーの方は、その外観に似ず、ラフファイトもしばしば、頼れるＢＫであった。（住友海上）

鈴木茂。小柄ながらも沖雅也ばりのルックスは、羨望の的であった。それでいて性格的には強気一点張り。それがプレーにも反映して、強引さと意外性で敵を圧倒したことは忘れ難い。（三菱商事）

高野啓太。（本人曰く）華麗なドリブルで観衆をうならせた。（もっとも「ドリブルおもちゃ」との陰の声がなきにしもあらず）麻雀の名人としてもその名は高く、彼に生活費まで貢いだ者も数多いとか。（住友商事）

加藤幸雄。秩父の熊五郎との異名の持ち主。同期では最も常識人として通っていた。しかし酔うとやや常識から足を踏みはずし、小平付近の飲屋では、ちょうちん、のれんの類の粉失が相次いだとの噂もある。それでも常識人は常識人で、学業成績は抜群だった。（住友海上）

大西康夫。試合中はベンチをあずかる監督役を果たした。そのどっしりした風貌から適任だったといえよう。体に似あわず、ピアノを奏で、野口五郎の歌を絶唱するという特技も有していた。(丸紅)

五座哲也。通称ゴザル（もちろん猿に似た容貌ゆえの命名）試合では相手のキーマンをマークする役目。そのダニのようなプレーぶりは、相手を大いに苦しめた。彼なくして、リーグ戦優勝は考えられなかっただろう。（三菱重工）

寺西純之。最年少ながら最も老成した人物だった。一旦安田火災に入社しながら、初志を貫き、英語教師に転じた異色の人物。造語の名人としても知られ、彼の手になる新語がチーム内で横行、そのため部外者とのコミュニケーションに一時支障が生じたりもしたものだ。（石川県某中学教師）

五味正秀。恐らく彼は勉強家である。他人より一年長く大学で勉学に励んだのだから。無芸大食の輩が多い我が同期生の中にあって、貴重な芸達者だったことは特筆に値する。（博報堂）

山原義彦。筆者自身のことだが、グランドでは鬼のグラマネと呼ばれ、実生活では、月初に御大尽、月末に乞食同然といった有様、生活無能力者と嘲けられていた。（博報堂）

以上が同期でサッカーをプレーした仲間だが、我々にとって忘れてはならない人物がもう一人いる。佐藤博子、いやイモケンといった方が通りがよかろう。彼女はマネージャーの仕事以上に、精神面でも我々をよく援助してくれた。この場を借りて感謝の意を表したい。（富士ゼロックス）

昭和54年度回想録

清　水　靖　雄
（昭和55年卒業）

例年４月には多くの新入部員を迎えるが、54年度もいつに変りなく10名以上の個性豊かな新戦力を迎え、我部は総勢およそ35名の大所帯、部のよき伝統である学年の隔たりを感じさせない和やかな雰囲気が、常に部室を満たしていた。

部室というところは実に面白いところである。あれ程汚ない所も、そうたくさんあるものでもないが、その汚なさを忘れさせてしまう居心地の良さがある。（もっとも、その汚なさに慣れ親しんでいた者もいたようであるが……。）何といっても楽しい。40人近い人間が集まっていると、さすがに話題に事欠かず、４年をダシにする者、前日の麻雀の結果を報告するもの、中には一人で漫才をやっている者もいた。こうした和やかな雰囲気は、私が入部した時、最初に驚かされたもので、特にその当時、私の隣りにいた先輩などは、上級生を呼び捨てにしながら、楽しそうに話をしており（K氏である）、彼氏によって、それまで私が持っていた「体育会＝封建的社会」という観念は、一掃されたといってよい。

さて、この場をかりて我等４年生を簡単に紹介させていただこう。

入江……彼の行く所、常に笑いあり。そのエンターテイナー振りは、あまりにも有名。

吉田……〝四天王〟の一人。彼の一言（毒舌？）に悩まされ、考えさせられた者は数知れない。

青木……我学年のブレイン的存在。ただし眼鏡をかけ、黙ってさえいればの話。

種岡……名うてのプレイボーイと巷では有名。彼の後輩に与えた影響は大きい?!

石田……我学年で唯一安心して会計という大役を任せられる人物。

袴田……夏合宿の時。雌牛に発情して鼻血を出した彼も、結婚を控え最近はめっきり落着いている？

清水……存在感を感じさせないところに、存在価値があるとまでいわれた男。

――何かの機会にふと、これらの人間がいたことを思い出して頂ければ幸いである。

昭和55年度を振り返って

――祇園の思い出――

桜　井　真　二
（昭和56年卒業）

灼熱の太陽の下で、必死に歯をくいしばりながら、ボールを蹴った思い出。頬を突き刺す寒風の中でボールを追った思い出。そして不本意なリーグ戦（１勝６分）となり、涙した思い出。いま思えば、苦しく、くやしい思い出の方が数多く脳裏に浮かび上ります。それでも、この一年の間には楽しい思い出も幾つかありました。

三商大の定期戦を控え、我々は例年より早く関西に乗り込み、京大、京教大との練習試合を消化

しました。定期戦の前々日、京大戦の後、同僚大倉君の親父さんのご好意により、我々総勢20数名が、晩餐会に招待されました。その豪華さは、とても言葉では表わせるものではありませんでした。

ただそれだけでも満足した我々でしたが、これを〝ひょうたんからこま〟と言うのでしょう。冗談で、「京都に来たのだから、舞妓さんに会いたい。」との誰かの言葉に、大倉君の親父さん、その場でＯＫサインを出し、いざ祇園に向ったのです。

着いた所が、祇園の中でも特に有名な「一力」の宿で、我々は奥座敷に通されました。太い柱には歴史の年輪を感じずにはおれません。ここで維新の志士が集まり、新撰組が作戦を練ったと思うと、感無量でした。しばらくすると、舞妓さんが一人、座敷にやって来ました。またしばらくして一人、また一人と、全部で四名集まりました。祇園でも舞妓さんは全部で16名しかいないそうで、一度に４人も揃うのは、年に数えるほどとのことです。

我々は、目の前、それもすぐそばに座っている舞妓さんの姿にただ、驚き、感動を越え言葉も出ない状態でした。美しさと可愛らしさの混じり合った日本女性の美の極を見る思いでした。クライマックスは、４人の「祇園小唄」による舞いです。４人が小唄に合わせ銘々の舞いを演じる光景は、華麗で、豪奢で可憐でした。

このような、素晴しい光景にめぐり会えた我々は幸せ者です。当然、55年度の三商大の定期戦は、神戸大に９－１の大勝、大阪市大には２－１と、ひさし振りの全勝優勝を遂げたのです。この優勝ができたのも、大倉君の親父さんのおかげだと感じています。やはり期待を背に、それに応えなければならないという部員一人一人の気持ちが、今回の三商大戦では一つになったのだと思います。

第4部　座談会



座　談　会

開催月日・場所

昭和56年７月29日　於三菱重工業代々木会館

出　席　者

村井（13）、金井（16）、瀬藤（18）、永倉（23）、渡辺（26）、針谷（28）、高田（30）、橋本（31）、日巻（37）、野上（38）、森岡（39）、山田（40）、高峯（43）、杉山（49）、山原（54）、松村（現役４年）

司　会　　加藤（23）

（注）カッコ内は卒業年次　いずれも昭和

瀬藤　今度60年史を作ることになりましたが、この間は日本にとっても激動の60年でありました。この60年の間には政治・社会生活の変化、学校制度の変化、或いは価値観の変化といったものが非常に沢山あった。これは会員諸兄から寄せられた回想録の中で充分ふれていただきたかったが、なかなか表現できないものがあるので、各年代を代表する方達に集っていただき、その変化の態様をうまく表現していただきたいと思います。

その変化の中で、昔から今に至るまでのサッカー部生活の基本指導理念に変化があったのか無かったのか、その辺までこの座談会で話が進めば非常に有難いと考えている次第であります。よろしくお願いいたします。

戦前の学校生活と母校サッカー部

村井　私が出席者の中で一番古いので、私から当時の学生の勉強と就職といったところから、口火を切ってみよう。本校は大正10年に、高等商業学校から大学に昇格して、本科３年予科３年と専門部３年という学制になりました。当時学校を出た連中は本科の成績、即ち優の数が就職に影響しました。予科の成績は就職には関係しませんでした。本科の受講単位は、３年間で36単位あって、２年までの成績が会社の採用に影響した。従って36単位の３分の２の24単位のうち優が幾つあるかが、就職の際の話題となりました。だから予科は卒業できればよく、本科に入って２ケタの優がとれれば、どこかに入れるだろうという気持でした。しかし深刻な悩み、すなわち学問をするか、サッカーをやるかについて悩んだ人もいた。この辺のことは戦後の学制改革以降の学生とは気分的に相当違ったものがあるのではないかと思います。ですから予科の３年間はサッカーをやって、本科で止める人も多かった。従ってサッカーの練習に対する態度とか、いろいろな面で呑気な状態で、昭和４～６年位までは部としてもかなりルーズな練習だったように聞いていました。

それが昭和７年位からかなりきびしくなり、試合をやる以上はなんとか強くなろうという気になり、文字通りの猛練習の時代に入った。それで戦争直前の良いチームになったわけです。

加藤　そうすると大正末期の草創期を経て、昭和の初めをクラブチーム的存在ですごし、７年頃から大きな意識変革が起こり、本来的な部生活が指向された。それが練習に現われて部らしい基礎固

めができたということになるわけですね。

村井　それは部らしい、いわゆる大学の体育会に属するサッカー部意識ができたのが大正13年らしいのです。それまでは寄せ集めの部だったようで、13年からは練習に出ない者は試合に出さなくなったし、練習にこない者はオミットされた。それで一応強くなったのですが、また昭和3、4年頃からたががゆるんで自由なムードになってしまったようです。昭和6年に3部で全敗した時は、大方の人はこんな弱い部にいてもつまらんとやめてしまいました。それらの人の中に、ラグビー部に移り、非常に強い部を作り上げた人が数人おります。この昭和6年のショックから立直り、どうしたら強くなれるか、各人が考えて、非常に厳しい練習態度に変ったのだと思いますね。

加藤　その当時の中心的存在だったのは誰ですか。

村井　長瀬、二階堂（謹）さんです。それに後藤博基さんが加わるでしょうね。長瀬、二階堂さんらは、猛練習についてこない者はこないでもよいから、ついてくる者だけで強いチームを作ろうと練習をやりました。私が昭和7年に入った時は上級生は10人しかいなかったから、予科1年からもレギュラーを出さざるをえなかった。

針谷　大正13年に部を結成したということですが、サッカー年表でみますと「大正13年関東、関西にカレッヂ・リーグはじまる」と、あります。そんな事と関連があったのですか。

村井　その前に大正11年に一応カレッヂ・リーグの前身ができていますね。それが大震災で一応途切れ、それからカレッヂ・リーグを作ったのです。13年はクラブチームのようなもので、13年に入学した連中が14年から張切ってやったと思えばよい。

加藤　昭和2年に金融恐慌が起きて、5年に金輸出解禁が行われ、6年には満州事変が始っています。その頃までは就職面で「大学は出たけれど」といった社会環境にあったように聞いておりますが、学生生活はどうだったのですか。

村井　その頃の学生に聞きますと、卒業近くなってはじめて就職はなかなか大変だと感じたようですね。特に昭和5、6年の方は骨が折れたようです。しかし僕等の頃はなんとかならあなという気持でした。

加藤　昭和11、12年頃というと軍拡中で、昭和40年代の高度成長期と同じように、人材難の時代に入っていたのではないですか。

村井　やはり商大という大学のおかげで、方々の学校が就職に困っていた時期にも商大だけは100%就職していました。1学年の人数も少ないしね。有難い学校ですよ。

瀬藤　ちょっと話が戻りますが、大正12年の大震災で神田一ッ橋の校舎が焼け、そのため予科は石神井に移り、本科は一ッ橋の校舎を修復して、石神井と一ッ橋に分かれて講義を聞いたという話ですが、その頃の状況はどうだったのですか。

村井　これは瀬社家さんに聞いたのですが、震災までは予科も神田にあって、震災で焼けたのを機会に予科を石神井に建てました。その時に本科と予科が分れたそうです。この時はじめて石神井にグランドが持てたそうです。ですから神田にいる本科生がわざわざ石神井に行くことは、よほど好きでなければなかったでしょうね。

瀬藤　国立に本科が移転したのが、昭和5年。それから昭和8年に予科が小平に移ったということですが、その頃の事を村井さんはご存知ですか。

村井　私が予科2年の時に引越したのです。私が入った昭和7年は石神井で練習しました。本科の

人は西荻窪からバスに乗り練習にきた。その頃本科生は３名しかいなかった。来なければサボッてやろうと思うと本科生がやってくる。本科生が来るとピリッとしまるわけ。今日は来ないと思うと１台後のバスで来たりしてね。グランドはサッカーとラグビーが共用でした。

瀬藤　専用グランドができたのは昭和10年小平ですね。

村井　９年でしょう。それまでは国立の陸上競技場で練習しました。それは約半年位で、昭和８年のシーズンはほとんど国立でやりました。

永倉　予科生は石神井から通っていたのですか。

村井　そうです。専門部は国立に専用グランドを持って練習していました。だから昭和５年頃から専門部はオール一橋のメンバーに入らないで単独チームをつくりました。そういうことから高商大会に予科と専門部の２チームが出場して、他校から文句を言われました。

金井　ところがね、教員養成所が専門部に併設されていた。僕等の時にね、教員養成所の枝村さんが――この人は青山師範時代からの名選手でね――我々本科・予科のチームに参加した。これはどうしてですかね。

村井　それには訳があって、専門部もオール一橋のメンバーではないか。専門部も一緒にやろうじゃないかというのに、おれはいやだよと言うから、それならそうしなさいということになったのです。

金井　それなのに枝村さんがこっちに参加したのはどういうことですか。

村井　あまりもめるものだから、２年間やって、あと１年は専門部に帰って練習したということです。同時に予科は高商大会に出ないことになったのです。

学徒動員と戦時体制下のスポーツ

加藤　今までお話のあった時代を経て当校サッカー部は黄金時代を迎えるわけですね。その時期を過ぎて本格的な戦時体制に入り、終戦前と後の混乱期と、新しい学制改革が行われました。学制改革は運動部生活にもいろいろな影響を与えたわけですが、戦時体制に入った時の徴兵猶予停止、修学年限の短縮といったことについて瀬藤さんお願いいたします。

瀬藤　学生生活を規定通り送られたのは16年の金井さん達のクラスまでで、次の鈴木さんのクラスからは本科を３年やるところ３カ月短縮され、さらに次の村木さんの年次は６カ月短縮されました。またその次は私達の年次で、19年３月卒業のところ18年９月に繰り上げて卒業しました。

金井さんの次の鈴木さんの年次までは、春は予科リーグ、秋は大学リーグ戦というスケジュールを整々としてやっていました。次の村木さんの年次から大学リーグ戦を春に繰り上げ、18年９月卒業の私達の時まで続きました。続いて18年12月には、文科系の学生全部について徴兵猶予は停止となり、徴兵年令（満20才）に達した者はすべて徴兵され、18年12月１日を期していわゆる学徒総出陣が行われたわけです。さらにその後徴兵年令は19才に引き下げられました。これが戦時中の修学年限短縮、徴兵猶予の停止という大事件です。それで戦争がますます苛烈となり、遂に20年８月に終戦を迎えたわけです。

戦争が苛烈となり、戦時色が濃くなるにつれ、それと併行して外来スポーツの禁止が行われました。それについて加藤君から話をして下さい。

加藤　昭和18年10月に大学リーグをやった想い出の神宮競技場（現国立競技場）で学徒出陣壮行会

が、ものすごい雨の中で行われました。これは戦前派としては、非常に印象に残る事件でありました。これに伴い運動部にもいろいろの制約が出てきました。これより先、18年４月から一見軟弱に見えるスポーツ、例えばテニス、バレーボール、ホッケー等の部が廃部になりました。戦局の悪化につれ、18年９月にはすべての外来スポーツ禁止という愚劣な指示が文部省から出されたわけです。わずかにラグビーが闘球という名前で残されました。ともかく学徒出陣後は学部の学生の大半がいなくなったのですから、部としての形ができないわけです。

当時私の兄と高柳さんが、兵隊に行かない最年長者として、ともかく文部省の指示に従って当分の間休部しようという結論を出し、松本先輩のところにご了解を得に参りました。ところが松本先輩から「君等は何を言うんだ。出征した先輩の魂の拠どころがなくなってしまうではないか」と、ひどく叱られたようですが、当時はどうすることもできなかったわけです。実際に18年12月１日の学徒入営が行われますと、これを機に部活動はできなくなりました。その後は予科生が中心となり、グライダー部をつくり、体操をしたり、ランニングをしたり実質的にサッカーの予備運動をそのまま持ち込んだようなことをやっておりました。19年春を過ぎると、本格的な長期の勤労奉仕にかり出され、部活動は完全に停止しました。サッカー部に在籍した者で、19年春まで残った者は７～８名位だったと思います。

当時学部に残った者としては奥村さんと、私の兄のほか淵上さんという方がおられました。淵上さんは体が悪いため徴兵検査にも不合格になられたのですが、当時の社会的雰囲気から非常に悩まれ、兄の許に切々たる退部届を寄せられたと聞いております。その心境はわれわれにとっては、痛い程よくわかる気がしました。

学生がいなくなってしまったものですから、19年春、それは３月末か４月の初めだったと思いますが、小平予科校舎が陸軍電波学校に接収され、学生は全部国立に集結しました。このほか兼松講堂は中島飛行機の工場に転用されたり、専門部の一部が軍に接収されました。19年４月以降、学校には学生の姿はほとんど見受けられませんでした。

金井　私が中国の前線にいた時、予科は陸軍予備経理学校になったと聞き、本科は南京にあったものですから、予備の経理学校に入るのを楽しみにしていたのですが。

加藤　それは間違いで、多摩湖線の向う側に経理学校がありました。

戦後の学制改革

針谷　近代体育スポーツ年表によると、社会一般に19年９月27日東京商科大学を東京産業大学に改称するとあります。

加藤　それが戦後、再び東京商科大学に戻ったのは22年３月です。24年５月には一橋大学という新制大学になりました。この新旧の学制改革について、高田君お願いいたします。

高田　針谷さんは当時おられたわけですね。

針谷　私は旧制の最後の卒業生です。

加藤　その切換を具体的に説明して下さい。

針谷　当時私学は旧制の最後が先に卒業し，新制のトップが続いて卒業したのですが、官学は新旧同時に卒業しました。新制のトップで卒業した年代は、23年に予科に入り、予科を１年やっただけで、24年には新制大学の１年となり、４年間大学に在学して28年に卒業しました。すなわち新制の

トップで卒業した者は予科・大学を通じ計５年で、また旧制の人は予科３年・大学３年計６年で、28年に同時に卒業したことになります。また23年に中学５年になった者の大半は、翌24年の新制切換時には新制高校３年となり、25年に大学に進学しました。従ってこの人達は29年の大学卒業となったわけです。

加藤　終戦前後の学制臨時措置にはいろいろ珍現象がありました。19年９月だったと思いますが、予科の修業年限は２年半からさらに２年に短縮され、20年３月には19年10月１日以降入営した者は１年間履修したものとみなすという特例が出ました。そこで私事で恐縮ですが、私は19年10月２日に入営しましたので、知らないうちに予科を卒業して大学に進学してしまいました。終戦後は９月26日に復学届を出しましたら、年度末に９月30日までに復学届を出した者は、１年間履修したものと認められ、私は結局予科・本科を通じ、正味４年と数日で卒業してしまいました。

渡辺　私の場合は全く逆で、予科１年で兵隊に行き、帰ってきて高島先生に「私は24才にもなっているので、ぜひ学部に入れてくれ」と頼みましたが、予科２年からやれと言われました。たまたま学制が戦前のそれ、すなわち予科３年学部３年に戻ったものだから、私の場合は学生生活を余分にやったような結果になりました。

当時新旧学制の切換と同時に、私のように年をとった者にとっては学生生活と社会生活が混こうして大変でした。戦争から帰ってきたと思ったら、今まで敵だった進駐軍にアルバイトに行ったり。しかも新制あり旧制あり、また陸軍とか海軍とか、戦争中の身分区分が社会生活の中に活きていました。

終戦直後の学生生活とサッカー部の復活

加藤　先程村井さんから戦前の良き時代の就職にからんだ学生生活についてお話をうかがったのですが、永倉さんから終戦直後の学生気質、サッカー部の復活，サッカーに対する考え方とか、どうやって学生生活を推持してきたかお話をお願いします。

永倉　それは私や同期の人の回想録に書かれておりますので省略させて下さい。ただ言えることは、軍隊にいるときも、帰ってきて生活に追われている時も、心の拠どころとなったのはサッカーであったということです。

加藤　二階堂さん時代の真面目な部生活という意識が、当時は生活が苦しくサッカーをやること自体が大変だったけれどもわれわれの部生活の支えとなっていた気がします。戦前の気風を受け継いだ松浦さんほか数人がいたということも、伝統が途切れないで幸せだったと思います。

永倉　結局巌さん時代の人で残ったのは、巌さん１人であったから、精神的にも大変な負担であったでしょう。

針谷　日本サッカー協会も、21年に関東大学リーグを復活した主役は東大，早慶、文理大、明治等で、それらの熱心な協力に支えられたわけですね。

新学制下では練習期間が少な過ぎる

加藤　若い時代に移りましょうか。

瀬藤　さっきから話に出ていたように、昔は予科３年本科３年合計６年に対して、新制になると前期２年後期２年合計４年となります。さらに戦前の制度は予科という練習に専念できる時代があった。

それが合計４年となるといろいろな意味でせち辛くなったのではないか。その辺の話をしてくれませんか。高田君どうぞ。

高田　私が入ったのは昭和26年でしたから、先程のような戦後の混乱は次第に落ち着いておりました。学校の制度としても、完全に新制に切換わっておりました。ただ私の入った時には旧制本科の一番上が吉沢、篠宮さん等の本科３年、針谷、堤さん等が本科２年で、結局旧制２学年新制３学年計５学年でした。その翌年も旧制最後の１学年と、新制の最上級生ですが、いわゆる最上級生で最上級生になれなかった４年生をトップに新制が４学年、計５学年がいたわけです。新制になって一橋大学としての在学期間が短くなったのですが、私はそれ程成績などは気にしていませんでした。

サッカーをやっていて、一番感じたことは、３年間たつともう最上級生である。昔ですと、われわれの４年は本科の１年ですから、いわばこれからというところですが、われわれはもう卒業です。結局ズブの素人が３年やって最上級生になり、その１年無我夢中で過してある程度サッカーがわかりかけてきた時に、学校を出るという感がしました。従来一橋のサッカー部は６年かけて良い伝統ができたのが、新制大学になってからは全員が中途半端に終ってしまうのではないか。こういう点に技術的にも、精神的にも、また部のまとめという点においても戦前の黄金時代のレベルにはどうしてもいかないという原因があったのではないかと思います。私が入学した時には戦前１部で活躍された先輩も、まだボールが蹴れたし、ＯＢ戦ではいつもＯＢに敗けており、技術的には戦前の方がすぐれておりました。私はやっぱり６年もやれば、あの位になれるのかなと思っておりましたが、われわれはなかなかそれまでに達することはできませんでした。そういうことの繰り返しの中で貯金をはたくように、先ず一橋から技術が失われていったのではないか。

たしかに新制の４年と旧制予科・大学の６年の差はわずかに２年ですが、それはいわば仕上げの２年で、それがなくなったというのが一橋に大きな影響を与えたのではないか。

橋本　私は高田さんの直後ですから、部の構成は同じだったと思いますが、私も４年では少ないと思います。当時は入学試験が難しくなってきまして、合格して入ってくる人も浪人をした人が大分多かった。その間勉強を一途にやってきたということになると、元に戻るのもなかなか難しい。高校でミッチリ勉強して、大学に入ったら運動をやろうといって、サッカー部に入ってきた人も相当おりました。私共の年次は非常に多かったが、体力が無く、部に入ってやる気があっても、なかなかついていけない人が大分おりました。

加藤　最近は底辺が広くなってきましたが、野上君や森岡君達の時代にはそういう兆が出てきたのではないですか。

野上　われわれの時は、入学試験が終り、部の方から勧誘をうけて入部した人が大半でした。最初は４年間サッカーをやろうという確たる気持を持たない人も多く、卒業までには３分の２はやめました。しかし最近は部員の数も多くなり、練習の組立ても楽になってきたと思います。われわれの代としては最初は入学試験の難関を突破してきたという気持が濃く出ていましたが、部に残った者は１年たち、２年たちするうちに部生活が生活の中心になって参りました。当時は関東大学リーグは１部、２部、それから３部が４ブロックあり、それぞれが８チームありましたからかなりのチーム数になりました。当時のわれわれの時代は２部を死守するというのが、第一命題でした。何度か入替戦の心配がありましたが、われわれの４年間には幸いにして、そのような経験をせずにすみました。ともかく入替戦になっては困るということで、ＯＢの方もよく指導に来られました。

少くとも2部にいる限りは、少々技術がなくとも走りまけず、ボールに喰いついていけば何とかなると教えられましたし、事実今でもそのような気持でおります。

学生紛争とサッカー部

加藤　30年代後半に入ると高度成長時代に入るわけですが、同時に安保闘争とか、安田講堂事件とか、いわゆる学生紛争が起ってきました。その頃の運動部生活はどうだったのですか。

日巻　34年の年頭、本学の中山教授が「賃金2倍論」を唱えられ、2月には池田首相も「月給2倍論」を展開されました。

これより前、昭和33年夏下村開銀理事がいわゆる下村理論を展開され、当時の池田通産相の進言を入れ、岸首相は「所得倍増計画」の立案を指示しました。こうして成長力論争がまき起った一方、35年に入ると安保条約改定をめぐる学生運動が激化してきました。韓国の李政権の崩壊、米大統領の訪日中止等政治的不安が背景にありながら、本格的な日本経済の発展が始っていました。

安保闘争の女子学生死亡事故のあった国会デモの日（35年6月15日）は朝から強い雨が降っていた。前日一部の部員からデモ参加のため練習を中止してほしいとの声があったが、予定通り実施を指示しました。しかし当日は豪雨で練習を中止せざるをえませんでした。一方大学自治会は女子学生死亡により全学ストに入り、体育会も国公立大会不参加を決議してしまいました。しかし岸内閣が総辞職してストが解除となり、ほとんどの部が国公立大会に参加しました。スト中、当部は三商大戦のため大阪に遠征をしており、また国公立大会は2位になりました。同期の韓英沢君は日本の学生運動は、経済的安定の上で甘えていると批判的であったのが印象に残っております。

高峯　安田講堂事件のあった学生紛争は、私の卒業後の43年から44年の事で、はっきりはわかりませんが、後輩から聞いた話では練習は通常通り行っていたそうです。活動家連中からは白い眼で見られていたそうです。

同好会と部生活の変化について

加藤　最近はいわゆる部生活でしばられるよりは、同好会的な動きが強くなっていると聞きますが、如何ですか。

杉山　私がサッカー部に入部した時は、ほとんどが高校時代に部生活を経験しておりました。われわれはサッカーについての厳しさは充分知っているという意識でやってきました。だから44年から45年頃にできた同好会とは、本質的に違うのだという誇を持っていました。

また就職とか成績についても、ほとんど気にしていませんでした。

高峯　変ったことと言えば、私の頃までは試合の時は詰襟の学生服、夏は開襟シャツを着用していましたが、卒業後いつ頃からかその習慣がなくなりました。気がついてみたら、女子マネージャーがいた。49年卒の小山君に聞いたら彼の時にお願いしたとのことでした。外見的には時代の変化と共に若干変ってきましたが、中味の精神は杉山君の言ったように大して変らないと思います。

ただ練習方法とか、技術的な面については、私の3～4年後位から変ってきたように思います。

杉山　私が入学した45年には、3～4年生は学生服を持っていましたが、われわれはもう持っていませんでした。

高峯さんからサッカーが変ったのではないかというお話がありましたが、当時は高校時代からの

経験者が多かったことのほか、46年春の合宿で古河電工の内野さんの指導を受け、特に基礎体力、基礎技術の大切さを痛感しました。また47～48年に三菱重工の片山さんの指導を受け、夏の合宿にも参加していただき、実戦面での徹底的指導を受けました。

このことは初めて外部のコーチを受けたことでもあり、新鮮な印象を持ちました。自分達はあまり意識していませんが、サッカーが変ったと見られるならこんなことが原因かもしれません。

金井　女子学生というのは今どの位いるの。

松村　今は1学年1000人のうち50人位ですから、5％というところです。

山原　女子マネージャーは当校の学生ではなく津田の学生で、自発的にやってもらっています。前にやっていた人が、適当な子に引き継いでいるようです。

杉山　女子マネージャーのことですが、私の2年の時に津田塾の人と、武蔵野音楽大学の人が、ラグビー部のマネージャーになりたいと、間違って小平のサッカー部の部室に入ってきたのが最初です。その当時には受験地獄が始まっていて、女性との交際もないので、この辺で女性との交際があった方が良いのではないかという、圧倒的意見でお願いしたというのが当時の経緯です。

針谷　重要な史実ですな。

金井　話が戻りますが、私達の頃は入学後勧誘されて初めてボールを蹴ったというのが大半だったのですが、最近では経験者が非常に多くなったという話がありました。これはオリンピックの影響が大きかったのですかね。

杉山　私が小学校6年の時がオリンピックの年に当りますが、中学に入ってクラブに入る場合東京オリンピックにおけるサッカーのイメージは強烈でした。またその頃にサッカーをやり始めた人が多かったようです。

針谷　それを具体的に言いますと、東京の高校のチームは、30年頃は50チームも無かったのが、東京オリンピックを機会にふえて、現在では野球と同じく約300校になっています。6倍になっていますね。特に文武両道を指向する高校にサッカー部の強いところがふえてきましたので、当校にも良い影響を与えていると思います。

加藤　だけど平均的にレベルが上っているから相対関係は変らないのではないか。

各時代の練習状況と合宿の想い出など

加藤　ところで女子マネージャーができたり、経験者が新入生の大半だというと、古い方はびっくりされると思いますが、練習状況とか合宿を中心にした部生活はどんなものでしたか。黄金時代の村井さんの頃は如何でしたか。

村井　私が入学したのは昭和7年ですが、それ以前はそれ程のこともなかったのですが、7年からは月曜日から土曜日まで、毎日練習していました。しかし練習の合理化とか、効率化ということはまだ考えていなかった。とにかくへとへとになるまで、がむしゃらに練習しましたね。日曜日は練習をしませんでした。

加藤　日曜日も練習するようになったのは、金井さんの頃ですか。

金井　しませんでしたね。

村井　試合はやりましたよ。それからゼミナールも場合によっては、教授にお願いして、リーグ戦などの時は勘弁してもらうこともありました。

瀬藤　海軍の訓練が月月火水木金金でしたが、われわれのサッカーも月月火水木金金で、当然日曜日も小平に練習に行きましたよ。

金井　それは君の頃ですね。私はその記憶がありませんね。

瀬藤　もちろん試合の翌日は休みました。しかしそれは試合があったための休みで、試合がない限り月月火水木金金が続いていました。

加藤　金井さんの頃は経験者はごく稀だったのですか。

金井　われわれの頃と、そのすぐ後位は経験者が入っていましたが、比率は経験者２に対し未経験者は８位の割合でした。

村井　経験者といっても、サッカーの盛んな神戸一中、広島一中、東京の五中、附属中とかで、選手でなくても球を蹴っていた者も入るので、部のレギュラーとしての経験者は極めて稀だったね。

加藤　大体シーズンというのは、春の合宿から大学リーグ戦までですか。

村井　春の合宿を始めたのはたしか９年からだと思います。７年８年は９月１日か２日から合宿をやりました。オフは12月の三商大戦が終ってからでした。

金井　その頃春の合宿なんてやったの。

村井　やったよ。

瀬藤　国立の一橋館でやりましたよ。夏は予科の寮で。

金井　はじめは一橋館でやったはずだよ。

村井　というのは卒業生が出た後はそんなに人数がいないからね。合宿の話をすると、７年８年には合宿の戒律というのは何もなかった。朝、午前、午後何時に練習開始ということだけで、煙草を吸おうが、何をしようが何も言われなかった。しかし言われなくても酒を飲む者はいなかったね。おそくまで玉を突いたり、麻雀をやったりした者もいたが、その代り練習で音をあげるなよということだった。９年頃から効率的な練習を合宿に持ち込んだ。

加藤　金井さんの頃は相当厳しかったのでしょう。

金井　村井さんの頃と同じですが、ただ想い出すのは、小平のグランドに向って右側にボールドがあったでしょう。あれは私の入った翌々年位にできたものです。とにかくボールに慣れること、つまり感覚を養うことが大事であると、暇があるとボールドに向って蹴っていましたね。本科にいって午後の授業に出ると練習に間に合わないので、食事がすむとすぐ小平に行って、予科の授業が終るまでボールを蹴っていました。練習前に自ら進んで積極的にやっていましたね。

加藤　17年に２部に落ちましたね。それからの練習は相当きつかったようですが、瀬藤さんお願いします。

瀬藤　私が13年に入学して、ずっと１部の試合を経験してきましたが、17年に青天のへきれきのように２部に落ちました。２部に安住しては大変なことであると、死にものぐるいに練習したように思います。２部に落ちて２部のチームを相手に試合をしてみると、１部とはかなり腕前に差がありました。本来なら６チームで５試合あるはずでしたが、３試合で１部に復帰することができました。結局当時はメンバー全部が１部の経験者であって、総合力で大きな格差があったわけです。

加藤　永倉さんから戦後一番大変な時のリーグ戦の感想を。

永倉　感想と言われても困るのですが、当時は官立と私立に分けた場合、練習量とか人数の面ではかなり違っていたのではないですか。もちろん質的にも違っていたと思います。サッカーはイレブ

ンのチームワークによるプレーだと思います。当時われわれは数すらまとまらず、毎日４～５人しか集まらないで、今日はＧＫがいないとか、ＦＷが２人とか。個人技の練習が主体で、チームワークをつくることは全くできなかったのが実態でしたね。

加藤　そういう時代をうけて、渡辺さんの時代になると、インフレも進みさらに深刻で大変だったと思いますが。

渡辺　大変も大変。先程瀬藤さんから青天のへきれきというお話がありましたが、われわれの時代はそうならざるをえない程環境が極端に悪かったのです。23年頃からインフレも一段とひどく、いよいよ食うに困るという状態で学業よりアルバイトに精を出すという有様でした。23年には名簿を見ても分るように、ＦＷからＢＫまで９人のレギュラーが一度に卒業された。私の卒業した府立四中、今の戸山高校ではボール競技は女のやることだ、球技で許されたのはバレーボールとバスケットだけでした。あとは柔道・剣道です。足でやる球技は知りませんでした。私自身が基礎もないし、予科に入ってその年の12月には入営してしまったので、教えるにも教えられない。先輩に暇を見付けて指導してもらうのも難しく、24年にはついに３部に落ちるべくして落ちてしまった。

しかし瀬藤さんも言われたが、３部に落ちて驚きました。試合相手が自分のキャプテン、マネージャーの言うことを聞かない。無頼の徒か、与太者の集団ではないかと思いました。試合中にグランドに座ってしまうし、笛が鳴っても便所から出てこなかったりして、こんな調子で３部に滞ってはとても駄目だと思いました。25年に入り先輩も積極的に指導して下さり、25年には１年間でどうやら２部に復帰しました。２部に復帰して本当によかったと思いました。

加藤　日巻君の頃はどうですか。

日巻　私の入った年に20名位、その前年にも26名入部し、経験者は各年４～５名位でした。夏休みまでに半分位減り、４年間を通じ秋のリーグ戦の頃は大体総数33～34名位でした。

受験勉強から開放され運動でもやってみようと軽い気持で入部しましたが、最初の練習は「キツイな」という印象でした。20名以上入部しても練習に出てくるのは半分位で、「運動でも」という軽い気持ではとてもついていけない。ＯＢ戦や日曜日の練習に見えるＯＢの話を聞き、本気にサッカーと取組もうと決心した者が夏の合宿に参加したと思います。

後期に移る時は、スポーツと学問の選択に悩みやめる人も多く、練習量は多かった。「うまくなくとも強くなろう」と、いうのが部の運営の底流にありました。技術の拙劣さは、練習で補わざるをえなかった。サッカー部の印象は一橋の学生は上品であるという一般的イメージとは著しくかけはなれ、かなりがむしゃらで私の場合は４年間サッカーを続けられないで、何ができるかと思ってやってきました。

私が入部した頃から部員が急増したので、２つに分けて練習しました。33年に駒井さんがグランド・マネージャーの時、組織的に練習し、夏の合宿までは基礎体力養成に重点をおき、ランニング、柔軟体操等で鍛えられました。この33年のシーズンが、私の在学中では最強だったと思います。

秋のリーグ戦前の練習試合で、八重樫がぬけ、宮本、川淵が入った早大には（１―２）で敗けましたが、慶大には（２―１）で勝ちました。慶大のレフェリーが真暗になるまで、時間が過ぎてもやめなかったのを思い出します。教育大に（３―１）で勝ち、農大に（０―３）で敗け、１部チームを相手に２勝２敗という成績でした。マネージャー会議では２部では一橋が優勝だと言われ、大変強いチームができましたが、リーグ戦では途中で敗けて４位に終りました。31年入学の上級生が

2年の時から部の中心であって、卒業までやっていたので強かったのだと思います。

部の財政のことですが、34年と35年の酉松会の予算決算書があるのですが、年間総額43万円位でした。酉松会から23万円位支援をうけ、部員が20万円を負担しています。ボールが1個2200円、スパイク3000円、合宿費は1日140円で、32年は1日100円だったと思います。当時はまだ合宿には米を持参しました。寝具以外に米や着換等を運ばなければならないので、2日に分けて合宿所に運んだものでした。

針谷　26年の年間予算が12万1千円ですね。

加藤　高峯君の頃の合宿や練習はどうでした。

高峯　練習は先輩からの伝統を受け継ぎ日曜日もやりました。合宿は外に出ることがなく春も夏も全部小平で、畳も柔道場から運び、部室に敷いてやっていました。禁酒禁煙で、便所の中に吸殻があったと夜のミーティングで4年生にしぼられたこともあります。暑い、変りばえもしない小平で2週間も3週間も合宿するというので、いらいらしたこともあります。変化のある所でやりたかったが、皆の経済的事情もあり、地方出身者も多くアルバイトをしている者もいたので、外に出ることはありませんでした。合宿には良い想い出はありませんね。

加藤　村井さんとか、金井さんの頃の合宿が一番優雅だったようですね。

村井　優雅といえば優雅だけど、中味は相当なものだったよ。

加藤　何といっても一番みじめだったのは22年の松本の合宿でしょうな。

渡辺　栄養も良くなかったしね。

永倉　松本先輩からタイヤを2組いただいて、農家に持っていって米と取換えて貰いましてね。

針谷　ゴールポストがいたんで、木材を担いだこともありましたね。

渡辺　ゴールポストが腐ってしまいましてね。専門部の丸山君が参加したこともあり、誰も使っていない専門部のゴールポストを外して本科のグランドに立てました。それもボールが当ると、ぐらぐらゆれる有様でした。当時はお金があっても物が買えない時代で、部員の友達が立川で材木屋をやっておりましたので、そこに頼み込み、立川から交代で担いで持ってきたことがあります。その後しばらくしてようやくネットを手に入れました。それまでは部員が11人も揃わないのに、ゴールの後で5人位で球拾いをする有様でした。そうしないとボールが無くなってしまうのです。

針谷　シーズンはじめは国立のグランド全体が膝より高い草で被われてましてね。おまけに地下足袋を片方ずつはいてね。1人に1足はなかったんだから、ひどいものでした。

グランド周辺の変貌 ── 都市化の標本 ──

加藤　ところでグランドの状況や、大学の環境も、相当大幅に変ってしまいました。今見ますと大学周辺は住宅で取り囲まれておりますし、多摩湖線の駅の位置も変っています。村井さん、金井さんの頃の小平周辺はどうだったのですか。

村井　何もなく、雑木林だけでした。桜上水の学校側に細い小川があったでしょう。練習中にその小川に4つ位の女の子が落ち、僕と荒井ともう1人が流れにとび込んで助けようとしたが、流れが強く、足がすべって流されそうになり、ようやく救い上げたことがありました。僕等が練習していなかったら、あの子は死んでいたね。

金井　とにかく予科の周囲には何もなかったよ。ブルーベルという喫茶店が櫟林の中にあったきり

だね。

村井　皆ずいぶん行ったのではないかね。汁粉を飲んだり、煎餅を食ったり。煎餅は１枚５厘だったね。

金井　われわれには今人家が建っているといわれても想像できないね。

瀬藤　練習後グランドのそばで何かお腹に入る物を売っている店がブルーベル支店でね。そこで何か腹に入れて電車にとび乗るということを何度もした。電車がついているので、先に行った者が「ちょっと待て、ちょっと待て」と電車を止め、こっちはベルで口に入れて走って行ったものだ。

加藤　今では考えられませんね。

金井　僕等が走っているのに電車を出したら、駅長にかみついたものだ。

村井　金井君が２年の時だろう。電車をぶち壊したのは。

金井　いや１年の時だよ。

針谷　戦後は屋根まで乗りましたね。ノロノロ電車だから、屋根から落ちた者がいたが、怪我はなかった。戦後芋の買出しに、多摩湖線の奥まで出掛けました。電車の窓に、横に桟を打ちつけてあり、それに芋の袋をぶら下げたので、前から見ると電車がふくらんだように見えました。

金井　僕等の頃に、国分寺の駅のちょっと上の台のところは、一面苺畑だった。今はあの辺は全部人家でしょうね。

加藤　桜堤の駅が無くなり、小平学園と予科前駅が合併して、中間に駅ができたのは何年位ですか。

日巻　桜堤が無くなって、次に合併が行われました。

高峯　今の駅になったのは私達の時で、41年です。私が入って２年までは一橋大学、小平学園で、今は一緒になって一橋学園になりました。

瀬藤　その頃は駅前はもう賑かだったの。

高峯　なっていましたね。中華料理屋とかそば屋とかいろいろありました。

金井　今は予科前の大通りの突当りには駅は無いのですか。

瀬藤　駅は突当って左へ行くのです。その駅が国分寺からの最初の駅です。駅前はかなり賑かで、吉祥寺とはいかないまでも、昔の武蔵境、小金井よりよほど賑かです。

橋本　昔はグランドから津田までは雑木林で何もなく良い散歩道でしたが、ある年の夏休みか春休みを終って学校に出てきたら、ずっと住宅ができていたのには驚きました。都営住宅だと思います。

加藤　何しろ小平にしろ国立にしろ、35年頃からの都市化のスピードは早かったですね。朝夕はもちろんのこと、夜鳥の啼声なども非常に風流だったし、桜上水の水量なども全く豊かでしたね。今では太宰治が心中したといっても、どうやって死んだのかと思う位ですものね。

時代と共にグランドもあちこち移った

瀬藤　ちょっと聞いておきたいのは、戦前予科のグランドは運動場の南側、桜上水と併行にあったけど、戦争中には高射砲陣地に変ったでしょう。その後はどう変ったのだろう。

杉山　私が入学した41年には桜上水と併行でした。その１年後には桜上水と直角、すなわち今と同じになりました。

瀬藤　国立で練習していたのが、小平に移転したのは何年。

高田　あれは27年です。僕が２年の時です。ただグランドをならしたばかりでぶかぶかで、使える

時と使えない時がありました。

加藤　たしか小平に移った初めは、ホッケーグランドでやってましたね。あれは共用だったのですか。

高田　使わせてもらっていたのです。サッカーグランドも使っているうちに、しまるだろうということです。

橋本　皆でリヤカーを引いて、ずいぶん砂を入れましたね。専用グランドができたということで一生懸命で、練習時間の半分位は土方をやっていたという感じでした。砂は学校で買ってくれました。

渡辺　21年夏に帰ってきた時は、サーチライトのガラスの破片が散乱し、全然使えませんでした。実はホッケー部は金持で、一番最初にあそこに立派なグランドを作ったのです。それを今三井物産にいる水野君に頼みこみ、足袋はだしで練習しました。ともかくシュートをするとき踏み込むと、足跡がつくので閉口しました。

高田　戦後小平のグランドが完全にできたのは、先程も申した通り28年になってからで、私の２年の頃は自分達のグランドだからということで積極的に労力奉仕をしました。私が３年になってからは大分使えるようになりました。

加藤　今はグランドが東西に３つ並んでいるわけですか。

杉山　先ず東側からホッケー、真中にサッカー、それから野球場です。野球場は野球とアメリカンフットボールの共用ですが、両方一緒にはできません。

瀬藤　部室はどうなっているの。

村井　戦前の部室は陸軍に接収された時に、撤去されたのでしょうね。

橋本　私の入った時（27年）は、体育館で着換えをしました。これはひどいと思いました。それは体操の用具置場で、高校だって専用の部室がありましたからね。当時食堂の棟続きが寮になっていました。新寮ができて移転した後、部室として使えるようになった時はうれしかったですね。

高田　だけど寮に使っていたので、壁は落書だらけで今も残っています。そのうちに有名人の落書があったと評判になるかもしれません。

橋本　先程物置小屋でがっかりしたと言いましたがユニフォームにも失望しましたね。大体パンツから下は揃っていないのですよ。ユニフォームだけで、それも洗いざらしで何かピラピラする感じのもので、背番号は斜になっていました。その後３年の時に、これは戦前からのスクールカラーであるといって、紅のユニフォームを作りました。ストッキングも紺に赤線の入ったものが復活しました。

村井　たしか昭和７年から紅になった。６年までは不二絹で、胸の一方の半分が白で、片方が鼠色の２色でした。左の胸には紅でマーキュリーが刺繍してありました。それが７年になってスクールカラーの紅となり、襟は白でした。生地は最初毛で、とても暑くてかなわないということで、９年頃には綿にしました。

渡辺　そういえば、われわれが入部した頃、毛の桃色みたいのを着たことがありました。縮んでしまって、こうやって下に引張らないと腹が出てしまってね。

高田　橋本君の言っていた27年頃のユニフォームは、木綿のひどいものでした。たしか３年の時、巌さんがこれはひどいなと言われ、エリオット商会の二宮さんに紹介して下さって作ったものです。マネージャーだった同期の石井君がユニフォームをとりに行きながら、二宮さんからいろいろサッ

カーの話を聞いたと言っていました。おかげさまでやっと一人前のユニフォームを着ることができたわけです。

加藤　最近は紅でないユニフォームを着ているようですが、なんとか復活してほしいものです。

むすび

村井　冒頭に瀬藤君が、「この60年は激動の60年だ」と、言いましたが、こうやっていろいろ話を聞いてみますと、時代の変化と共にずいぶん変ってきたものだと思います。炎の盛りの時もあったし、消えかけた時もありました。しかし皆さんのお話から考えてみますと、それぞれの時代に本当に苦労に苦労を重ねて伝統を受け継いできてくれたと思いますし、また古い人の考え方と現在の部員の考え方には本質的にあまり差がないように思われます。私が50年前にボールを蹴っていた頃の考え方と、どうしてそんなに差がないのだろうと、かえって不思議に思える程です。われわれが60年間に育んできたものは、この現在においても充分通用するものだし、大切にしなければならないものと思います。これが正に伝統というもので、これからさらに磨きあげていかなければならないと思います。

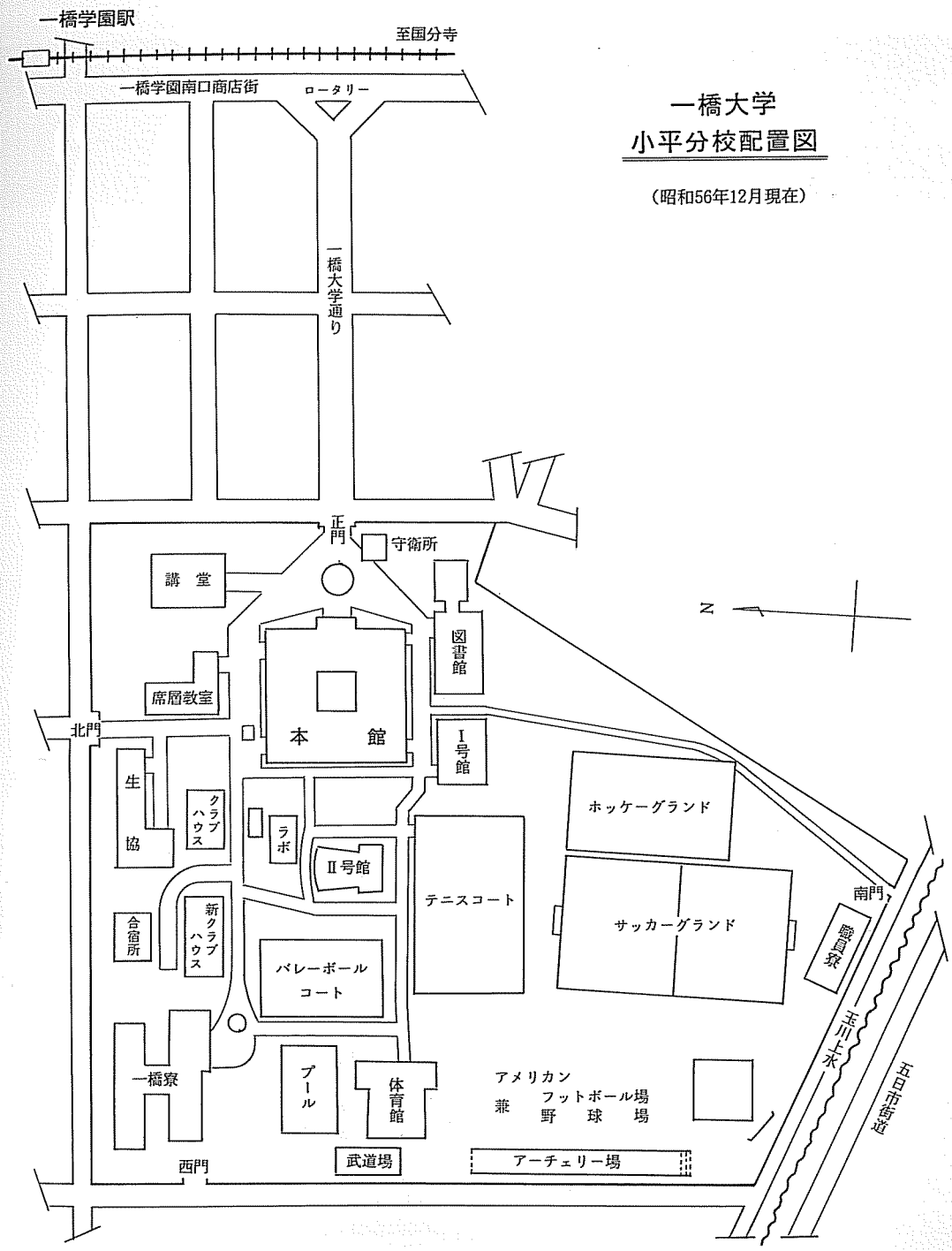
瀬藤　この60年史の編集にあたり、戦前から戦後にかけて大学サッカーの好敵手であり、また主役でもあった慶大、早大それに東大の50年史や先輩団の記録を拝見しました。昔の名選手といわれた人々の手記に、われわれが伝統として大切にしてきたものを何とかして守っていかなければ学生サッカーは堕落していくのではないかと、警告しているのを見て胸を打たれました。わが母校のサッカー部は現在低位にありますが、幸いにして若い人達の部生活は真面目であり、また健在であり、その点は大いに力強く感じております。しかし現在の位置は如何にも不本意で、できるだけ早い時期に昔の水準にまで回復してほしいと祈らずにはおられません。若い人達が、この60年史に綴られた先輩達の歩みを読まれ、何かをつかんでいただければ幸いと思います。

加藤　まだまだ話し足りない感じがしますが、大分時間もたちましたので、この位にいたします。今日はどうも有難うございました。

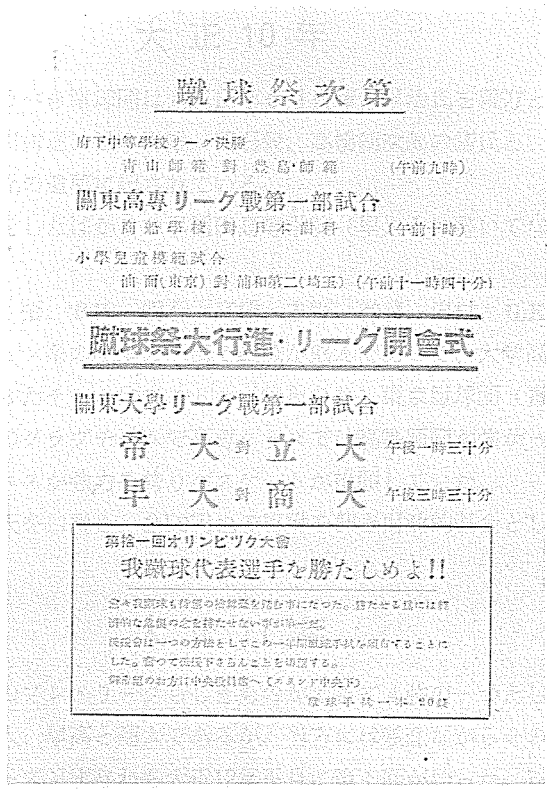
〝おわび〟とおことわり　取りまとめの関係からご発言の一部を勝手に割あいさせていただきましたので、あしからずご了承ください。また座談会の出席者は編集委員が選ばせていただきました。

一橋大学
小平分校配置図

（昭和56年12月現在）



第5部　年　史



蹴球祭次第

府下中等學校リーグ決勝
　青山師範 對 豊島・師範　（午前九時）

關東高專リーグ戰第一部試合
　商船學校 對 戸木商科　（午前十時）

小學兒童模範試合
　油面（東京）對 浦和第二（埼玉）（午前十一時四十分）

蹴球祭大行進・リーグ開會式

關東大學リーグ戰第一部試合

帝　大 對 立　大　午後一時三十分

早　大 對 商　大　午後三時三十分

第拾一回オリンピック大會

我蹴球代表選手を勝たしめよ!!

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前　　史

年表に先立って、日本のサッカー界の状況を先ず記す。

日露戦争後英人デ・ハビランド氏が東京高師にサッカーを導入した由である。これより高師を卒業して各地中学教諭に赴任した者が、それぞれ中学にサッカーの種子を蒔きつけた。総じて師範学校において特に盛んで、関東では青山、豊島、埼玉。関西では御影、奈良、姫路。東海では愛知等であった。それら師範学校ではそれぞれの付属小学校においてもサッカーが盛んになってきた。その他ミッション系の中学でも外人教師により芽生えが出始めたが、専問学校大学までには及んでいない。

大正２年の極東大会には東京高師が出場したが大敗している。

大正７年には関東中学大会では豊島師範が、関西大会では御影師範が、東海大会では八高がそれぞれ優勝している。

大正10年に大日本蹴球協会が発足し、第１回全日本選手権が催され東京蹴球団が制覇した。

大 正 10 年

商大蹴球部の前身ともいうべき蹴球団は大正10年６月兵藤世平治氏を親方として産ぶ声をあげた。馳せ参じた者進藤静太郎、川村通、松本正雄、明石毅、高橋朝次郎の諸氏と、助っ人として支那留学生諸氏であったと、川村氏の遺稿に記されている。

第１戦は、これも旗上げをしたばかりの早稲田高等学院（早大とは書いてない）結果は０－０であった。

F.W. 王、干、兵藤、呉、張、**B.K.** 明石、高橋、吉野、進藤、川村、**G.K.** 松本

当時は師範学校とミッション系の中学の一部で蹴球が盛んであって、大学高専では同好会程度であったと思う。従って強かったチームはアストラ（暁星ＯＢ）東京蹴球団（青山師範ＯＢ）豊島サッカー（豊島師範ＯＢ）等のクラブチームで高専クラスでは高等師範が強かった。

一方一橋ではボート、テニスが強力を誇りバスケットが抬頭していた。

この年大先輩田中虎之輔氏を口説き、金50円也の寄附を仰ぎ財政的基金とした。

大 正 11 年

この年にカレッヂリーグのプレ・リーグらしきものができて４強の一つとして商大の名が記されている。すなわち高師、東大、早高と商大であるが、当方には残念ながらその記録は見あたらない。

インター・ハイはこのシーズンすなわち大正12年正月に第１回が始った。これが昭和初期の東大黄金時代の温床となった。

○全日本選手権　名古屋蹴球団（関東代表　アストラクラブ）

大 正 12 年

新入部員　瀬社家

9月1日関東大震災で神田校舎全焼す。

4校リーグに明大予科が加入するもその直後このリーグは解消し、カレッヂリーグ（大学高専リーグ）が誕生する。

○全日本選手権　アストラクラブ

大 正 13 年

全一橋主将　進藤静太郎　　予科主将　林　　氏　　予科委員長　三宅定夫

新入部員　渡辺(弘)、渡辺(村)、城島、星野、森、伊東、神戸、近藤、田口、吉田、田部

（この年から昭和4年までの記録は主として、古い部誌に載っている渡辺（弘）氏の記事を基礎に記す。）

試合メンバー

（本3）進藤　（本2）松本・川村　（本1）高橋　（専3）三宅　（専2）藤井

（予3）林・呉・王　（予2）瀬社家

戦　績

○カレッヂリーグ（大学高専リーグ）始まる。

対外語（1―2敗)、 対青学（0―4敗)、 対一高（0―4敗)、 対東歯（3―1勝）

対明治（1―3敗）

1部順位　早稲田、東大、高師、法政、慶応、農大

2部順位　一高、明治、外語、青学、商大、東歯

1部最下位と2部優勝は翌シーズン入れ替る。

○インターハイ　対八高（0―2敗）

○全日本選手権　広島鯉城クラブ（関東代表　全豊島）

記　事

商大は1勝4敗で第5位であった。東歯を破っただけで他は皆負けた。当時はクラブチームの域をようやく出たか出ないかの程度であって、わが商大においても平素練習に出ていない、いわば昔とった杵柄という人達が出場している。対明治、一高、外語の3戦に出場したものは延べ19名で、3戦全部に出ているのは5名のみ、2戦出場者は3名、残り11名は1戦のみにしか出ていない。結局まとまりのつかないメンバーであったと渡辺氏は嘆いて記されている。

石神井グランド（ラクビーと共用）ができた。

大 正 14 年

新入部員　豊田、平松、津田、恵藤、半沢

試合メンバー

（予３）瀬社家主将　（予２）神戸・伊東・近藤・星野・森・城島・渡辺（村）

（予１）恵藤・半沢・津田・平松・豊田　（専１）山下　（本２）高橋（渡辺忌欠の為出場）

戦　績

○カレッヂリーグ

対青学（２―１勝）、対外語（１―３敗／瀬社家病欠）、対明治（１―３敗／渡辺(村)忌欠）

対農大（１―２敗）、対東歯（１―０勝）

１部順位　高師、東大、早稲田、法政、一高、慶応

２部順位　農大、明治、外語、青学、商大、東歯

○インターハイ　対法政予科（１―２敗）

○全日本選手権　鯉城クラブ（関東代表　東大）

記　事

カレッヂリーグが３部制（６：６：７）となる。

この年より予科が主力となり本科は指導役となる。瀬社家と両渡辺が中心となり練習を正確に行うこととなった。本科生と専問部にとって神田から石神井に通うのはかなり重荷であったことと想像される。またこの年にアストラクラブの川村、足立両氏をコーチに招き、さらに７月から８月にかけて約１ケ月間千葉県保田で合宿を行い団結力の強化をはかった。

老朽を淘汰し、練習不参加はオミットして団結力によって戦ったシーズンであり、商大蹴球部の為にというより仲間意識の方が強かったと記されている。

オフサイドルールが変わりバックに不利となる。

大 正 15 年

新入部員　高橋(啓)、酒井、黄、栗山、小林、西川、高橋(重)

試合メンバー

（本１）瀬社家主将　（専２）山下・沢田　（予３）田口・森・城島・渡辺村（予科主将）

（予２）恵藤・半沢・津田・豊田　（予１）高橋(啓)・西川・黄・酒井

戦　績

○カレッヂリーグ

対青学（１―１分）、対明治（１―０勝）、対外語（１―１分）、対慶応（０―２敗）

対東歯（６―２勝　明薬と入れ替る）

1部順位　東大、法政、早稲田、高師、一高、農大

2部順位　慶応、明治、商大、青学、外語、東歯

○インターハイ　天皇崩御の為中止

記　事

伊東、神戸、星野、平松発病。近藤家庭事情の為退部す。

この年から商大蹴球部の為という意識が強くなってきたらしい。

昭和2年

予科委員長　豊田達治　一橋会よりの予算175円となる。

新入部員　西田、勝田、前田、橋本、山根、高橋(義)、佐野、大熊

試合メンバー

（本1）渡辺（村）　（専3）山下　（予3）恵藤・安野（半沢改め）・豊田　（予2）西川・高橋（啓）・栗山・酒井・黄・小林　（予1）高橋（義）・前田・西田

戦　績

○カレッヂリーグ

対明治（1－3敗）、対農大（0－0分）、対明薬（1－2敗）、対青学（3－2勝）

対外語（5－0勝）

1部順位　東大、慶応、高師、早稲田、一高、法政

2部順位　明治、農大、明薬、商大、外語、青学（東高と入れ替る）

○神宮大会予選　対水高（0－2敗）

○インターハイ　欠場。以来招請状がこなくなる。

○全日本選手権　神中クラブ（関東代表WMW）

記　事

東大はリーグ専一となり全日本には出場しなくなる。

この年早稲田の本田氏よりコーチを受けた。

昭和3年

新入部員　長瀬、石田、吉村、岡田、牧野、篠原

試合メンバー

（本2）渡辺　（本1）安野・豊田　（予3）西川・栗山・酒井・黄　（予2）高橋・西田・山根　（予1）吉村・長瀬・篠原

戦　績
○カレッヂリーグ
対農大（0－0分）、対法政（2－3敗）、対東高（1－2敗）、対外語（3－2勝）
対明薬（1－0勝）
1部順位　東大、慶応、早稲田、明治、高師、一高
2部順位　農大、法政、東高、商大、明薬、外語（青学と入れ替る）
○全日本選手権　早稲田

昭和4年

新入部員　二階堂、後藤、上野、仁木、丸尾、田中、佐原、高橋、高野、吉野、岡部、小橋
阿部

試合メンバー
（本2）豊田　（本1）栗山　（予3）高橋・西田　（予2）吉村・長瀬　（予1）丸尾・後藤・田中・佐原・二階堂・岡部

戦　績
○カレッヂリーグ
対青学（2－2分）、対法政（0－0分）、対一高（0－8敗）、対東高（1－1分）
対明薬（記録なし　勝）
1部順位　東大、明治、早稲田、慶応、高師、農大
2部順位　一高、東高、法政、商大、明薬、青学（成城と入れ替る）
○浦和高校と定期戦始まる
春季（0－7敗）　秋季（3－2勝）
東大岸山氏のコーチを受ける。
○全日本選手権　関学クラブ（関東代表　法政）

昭和5年

予科委員長　長瀬東作　一橋会より201円70銭

新入部員　神野、水野、荒瀬

戦　績
○カレッヂリーグ
1部順位　東大、早稲田、慶応、一高、高師（明大は前年のラフプレーにより謹慎出場辞退）
2部順位　農大、東高、成城、法政、明薬、商大（3部に転落）
○全日本選手権　関学クラブ（関東　ＢＲＢ）

記　事

この年の記録は全くない。練習も11人を欠くことが多く、練習もせずに試合に出る人が出始めて、再び昔のクラブチーム化していったらしい。

この頃より専門部は国立にグランドを持ち独自のチームを作ったらしい。

世は、金解禁―不景気―大学は出たけれど、の時代となる。

昭和6年

新入部員　世良、堀、浅枝、角田、斉藤、荒井、鈴木、森田、田島、橘

試合メンバー

○オール一橋

（本2）西田・高橋　（本1）長瀬・吉村　（予3）佐原・二階堂・後藤　（予2）神野・水野・荒瀬　（予1）荒井・角田・橘・堀・鈴木・浅枝

○予科チーム

F.W. 神野・荒井・水野・佐原・角田

B.K. 橘・二階堂・荒瀬・堀・後藤

G.K. 浅枝

戦　績

○カレッヂリーグ（3部）　カレッヂリーグは5部までできる。

対国学院（1―8敗）、対日歯（3―3分）、対中央（0―6敗）、対立教（1―5敗）

対商船（0―5敗）

1部順位　東大、慶応、早稲田、一高、農大、明治

2部順位　文理、法政、成城、東高、工大、明薬（立教と入れ替る）

3部順位　立教、国学院、中央、日歯、商船、商大（4部に転落）

○浦高定期戦

春期（2―0勝）　秋期（1―1分）

記　事

10月文部当局の緊縮計画の一環として予科専門部廃止の断案下り、いわゆる篭城事件が捲き起る。事件最中も一橋会の諒解を得てリーグ戦に出陣するも勝つこと能わず。長瀬病んで後半戦出場できず。

この年9月満州事件始まる。これが第2次大戦につながるとは国民の誰が予測していたか。徴兵検査―兵役というものが我等青年にとってうっとうしいものであったのは事実だ。誰も兵役は免れたがっていた。

大正14年　秋
於　石神井予科グラウンド

後列　恵藤、津田、伊東、渡辺(村)、近藤、瀬社家、豊田
前列　平松、清水、渡辺(弘)、松本、川村、城島





昭和５年　？

後列　？　？　二階堂　？　？
　　後藤　？　？　？　？　？
中列　？　？　豊田
前列　？　？　西田、神野、長瀬、？

昭和７年12月３日
甲子園（全部員）

後列　荒瀬、村井、鈴木、二階堂、長瀬、重見
前列　林田、神野、田島、浅枝、後藤、荒井、森田



昭 和 7 年

主将　二階堂謹司（本１）　　委員長　神野光司（予３）

予科主将　荒瀬（予３）

新入部員　大掛、重見、林田、浅田、村井

試合メンバー

○オール一橋

（本２）長瀬　（本１）二階堂・後藤　（予３）神野・荒瀬　（予２）浅枝・荒井・角田・森田・鈴木・田島　（予１）大掛・村井

○予科チーム

F.W. 神野・大掛・浅枝・水野・角田

B.K. 森田・荒瀬・鈴木・村井・荒井

G.K. 田島

戦　績

○カレッヂリーグ（４部）

対外語（４－０勝）、対東歯（６－１勝）、対拓殖（３－３分）

対日大（１－１分　大掛負傷退場）、対成蹊（５－０勝）

１部順位　慶応、早稲田、東大、文理、農大、一高

２部順位　成城、法政、東高、立教、明治、工大

３部順位　商船、中央、日歯、国学院、慈恵、明薬

４部順位　商大、日大、拓殖、外語、東歯、成蹊

４部で優勝す。

○浦高定期戦

春期（２－１勝　水野負傷途中退場）　秋期（２－０勝）

○三商大戦始まる

対大阪（３－５敗）、対神戸（４－２勝）

○高商大会

対高千穂（５－０勝）、対横浜（４－２勝）、対大倉（４－３勝）関東代表となる

対関学高商部（２－１敗）

記　事

この年５・15事件起る。７月はロスアンゼルスオリンピックで水泳ニッポンが賞の大半をせしめ大いに意気上る。

高商大会に本学から専門部及び予科の２チームを送ることに物議をかもしたが、事実上別々のチームであることを説明し押切った。他チームにはかなり疑問があった模様。

昭 和 8 年

主将　二階堂謹司（本２）　　委員長　田島輝重（予３）
予科主将　浅枝彦太郎（予３）

新入部員　水島（名古屋高商より本科へ）、小西、後藤（虎）、岩崎、熊沢

試合メンバー

○オール一橋

（本３）長瀬　（本２）二階堂・後藤　（本１）神野・水島　（予３）荒井・浅枝・角田・森田・田島　（予２）大掛・村井・鈴木

○予科チーム

F.W.　林田・荒井・浅枝・角田・大掛
B.K.　小西・森田・重見・村井・鈴木
G.K.　田島

戦　績

○カレッヂリーグ（３部）

対国学院（５－１勝）、対日歯（６－４勝　村井発病）、対中央（２－０勝）
対慈恵（８－１勝）、対工大（８－１勝）
１部順位　早稲田、慶応、東大、文理、農大、成城
２部順位　立教、法政、明治、東高、商船、一高
３部順位　商大、中央、日歯、国学院、慈恵、工大
去年に続き３部で優勝す。

○浦高定期戦

春期（１－１分）　秋期（３－０勝）

○三商大戦

対大阪（２－２分）　神戸は東上せず。

○高商大会

対専門部（１－２敗）

記　事

予科が石神井から小平へ移り、しばらくの間グランドは国立の陸上競技場を使用した。

昭 和 9 年

主将　二階堂謹司（本３）　　協会庶務　後藤博基（本３）　　委員長　神野光司（本２）
予科主将　鈴木彰（予３）　　予科委員長　大掛隆久（予３）

新入部員　枝村（青山師範より養成所へ）、長谷川、二階堂（晴）、狩森、池尾、菅瀬、米山

試合メンバー

○オール一橋

（本３）二階堂　（本２）神野・水島　（本１）荒井・浅枝・角田・森田・田島

（養１）枝村　（予３）大掛・村井・鈴木

○予科チーム

F.W. 林田・大掛・熊沢・長谷川・村井

B.K. 岩崎・小西・重見・後藤・鈴木

G.K. 浅田

戦　績

○カレッヂリーグ（２部）

対東高（10月１日／２－０勝／於石神井）、対商船（11月３日／11－３勝／於石神井）

対明治（11月９日／３－１勝／於石神井）、対成城（11月17日／３－１勝／於石神井）

対法政（11月22日／９－０勝／於神宮）

１部順位　早稲田、慶応、立教、東大、文理、農大

２部順位　商大、商船、明治、東高、成城、法政

引き続いて２部で優勝し、念願の１部昇格を果す。

○浦高定期戦

春期（６月２日／２－２分／於浦和）　秋期（12月８日／勝／於小平）

○三商大戦

対神戸（２－２分）、対大阪（圧勝）

記　事

枝村を全一橋メンバーとしたことから専門部より苦情が出された。養成所は専門部の附属機関であるからとの理由であった。これは一橋会理事まで捲き込み大問題となった。枝村がすでに完成された名手であったが為である。御本人ははなはだ迷惑な次第でさぞかし困られたことと深く同情すると同時に同じ商大の構成員の中からかかる問題が出されたこと自体、変則的な現象であったことを思い出す。かくて高商大会には予科は出場しなかった。

正月過ぎてから予科リーグが開始された。試験を間近に控えているので出場しないことにした。予科リーグは第２回から春に行うこととなっている。

合宿はこの年から国立の下宿屋一橋館に定着した。

５月オリンピック体操選手本間氏より体操の指導を受ける。柔軟で強い筋力を養成する目的である。我々のカラダはいわゆるかたくてきかない。体操とはつまらなくて、且つきついものだ。この時から練習の前後に必らずランニングと体操を併用することになる。

昭和８年　春　於　石神井予科グラウンド　？



後列　？　岩崎、児玉、熊沢、後藤(虎)、森田、後藤(博)、二階堂、角田、大掛、浅田、鈴木　？

前列　浅枝、荒井、村井、神野、水島、長瀬、重見、田島



昭和８年９月１日
合　宿

後列　大掛、荒井、後藤、浅枝、神野、森田、熊沢、岩崎、角田、水島

前列　田島、重見、村井、長瀬、二階堂、浅田

昭和９年４月11日
長瀬、吉村を送る宴
於　柳橋「フタバ」

後列　大掛、神野、村井、後藤(虎)、田島

中列　熊沢、二階堂、浅枝、鈴木、荒井、森田、角田

前列　重見、長瀬、吉村、林田、浅田



昭和９年11月９日
明大を破り一部昇格をきめた試合後

後列　村井、二階堂、枝村、鈴木、浅枝、大掛
前列　角田、田島、水島、荒井、森田





昭和９年11月22日
神宮の芝生に全勝の喜びを味う

後列　重見、浅田、林田、角田、大掛、荒井、浅枝、枝村、後藤、神野
前列　森田　村井、鈴木、田島、二階堂、水島



浅枝

昭 和 10 年

主将　水島茂（本３）　　監督　神野孝司（本３）　　委員長　重見敏之（本１）
予科主将　小西正夫（予３）　　予科委員長　熊沢博文（予３）

新入部員　清水、金井、吉田、早野、堀尾、荒川、高橋、石割、吉沢、山田(秀)

試合メンバー

○オール一橋

（本３）水島　（本２）荒井・浅枝・角田・森田・田島　（本１）大掛・林田・村井・鈴木
（予３）岩崎・小西・後藤　（予１）清水・金井・早野　（養２）枝村

○予科チーム

（予３）熊沢・後藤・岩崎・小西　（予２）池尾・菅瀬・二階堂・狩森
（予１）清水・金井・早野・高橋

浅枝、森田、小西、枝村の負傷や病気のため若い予科１年生の起用をはかった。この新人群が後年の黄金時代の頂点となった。

戦　績

○関東大学リーグ戦（１部）　カレッヂリーグは大学と高専に分離する。

対早稲田（10月６日／１－７敗／於神宮／浅枝負傷す）、対慶応（10月28日／１－５敗／於小平）
対立教（11月７日／４－３勝／於石神井）、対東大（11月15日／２－５敗／於神宮）
対文理（11月23日／１－２敗／於石神井）
１部順位　早稲田、東大、文理、慶応、商大、立教
２部順位　農大、明治、拓殖、法政

○予科リーグ　５校ずつリーグ戦方式で戦い最後に両リーグのトップが決戦する。当校はＡ組で出場した。グランドは明治代田橋

対法政（５月19日／１－１分）、　対慈恵（５月25日／２－０勝）、
対早稲田（６月９日／１－９敗）、　対立教（６月15日／０－４敗）

○浦高定期戦

春期（６月23日／１－１分／於浦和）、　秋期（12月７日／３－１勝／於小平）

○三商大戦

対神戸（４－６敗／於石神井）、　対大阪（９－０勝／於東大本郷）

記　事

夏休末期より白票事件が起り、教授間の争いから学内はゼミナール別に二つに割れ揺らいだ。幸い蹴球部においては分裂は起らず練習に励むことができた。学生は一橋会を中心に概ね助教授サイドに立ち７教授及び佐野学長を排する立場の者が多かったようだ。これ以上本件については書きたくない。

11年２月26日　学期末試験中に２・26事件起る。部生活には影響を与えなかったが何となく物情騒然としてくる。

部員も30名を越す大世帯となり、全員が試合に出る機会も薄くなり、部の運営、練習方法等新たな工夫を必要とするようになった。一方部員の自信も高められ伝統がようやく緒につきかけてきた。

昭 和 11 年

主将　浅枝彦太郎（本３）　　委員長　重見敏之（本２）

予科主将　二階堂晴三（予３）、　予科委員長　米山大三（予３）

最高学年生　荒井文雄、田島輝重、角田昇、森田昭之

新入部員　松岡、桜井、渡辺、折下、片山、鈴木、茂木、宮崎、大上戸

試合メンバー

○オール一橋

（本３）荒井・浅枝・角田・森田　（本２）林田・大掛・村井・鈴木　（本１）小西・後藤

（予２）金井・早野・高橋・吉沢　（予１）片山

○予科チーム

（予３）池尾・菅瀬・二階堂・狩森　（予２）清水・金井・吉田・荒川・堀尾・早野・高橋

（予１）松岡・片山

戦　績

○関東大学リーグ戦（１部）

対早稲田（９月26日／６－４勝／早野負傷／於神宮）、

対慶応（10月４日／０－４敗／於東高笹塚）、対農大（11月１日／３－２勝／於東大本郷）、

対東大（11月８日／０－３敗／小西負傷／於明治和泉）、

対文理（11月28日／２－７敗／荒井病欠／於明治和泉）

１部順位　早稲田、慶応、文理、東大、商大、農大

２部順位　明治、立教、拓殖、法政

○総合選手権

対慈恵（６月６日／２－０勝）、対東京蹴球団（６月７日／４－１勝）、

対WMW（６月13日／１－２敗）

○予科リーグ

対早稲田（５月16日／２－１勝／於早大東伏見）、対立教（５月23日／０－２敗／於慶応日吉）

対慈恵（５月31日／８－０勝／於明治和泉）

○浦高定期戦

春期（６月27日／２－０勝／於浦和）、秋期（12月５日／４－１勝／於小平）

○三商大戦

対神戸（12月28日／２－３敗／於甲子園）、対大阪（12月30日／３－１勝／於甲子園）

○高商大会

対専門部（7－2勝／於明治和泉）、 対高千穂（5－0勝／於明治和泉）

対福島（3－1勝／於明治和泉）、 対神戸（5－3勝／於甲子園）

記　事

ベルリンオリンピックへ主力選手多数を送った早稲田の留守部隊を緒戦に破り、農大に逆転辛勝し1部に残る。

枝村問題でこじれていた専門部との関係を、今後円満にやっていくために枝村等の骨折によって和解することができた。

昭 和 12 年

主将　鈴木彰（本3）　　委員長　重見敏之（本3）

予科主将　吉沢貞雄（予3）　　予科委員長　堀尾貞一（予3）

最高学年生　大掛隆久、林田毅、村井恒典、浅田英三

新入部員　藤塚、居川、渕上、水島、村木、建部、根本、宮沢、山田、山形、清水（和）
岡田、栗原、渋谷

試合メンバー

○オール一橋

（本3）林田・大掛・村井・鈴木　（本2）小西・後藤　（本1）菅瀬・二階堂

（予3）金井・早野・高橋・吉沢　（予2）松岡・桜井・片山

○予科チーム

（予3）清水・金井・吉田・堀尾・早野・荒川・高橋・吉沢

（予2）松岡・片山・鈴木・宮崎・桜井

戦　績

○関東大学リーグ戦（1部）

対東大（10月4日／1－4敗／鈴木病欠／於神宮）

対明治（11月4日／0－2敗／於東大本郷）

対早稲田（11月13日／0－4敗／村井負傷／於東高笹塚）

対慶応（11月20日／0－7敗／小西負傷／於神宮）

対文理（11月27日／2－4敗／於神宮）

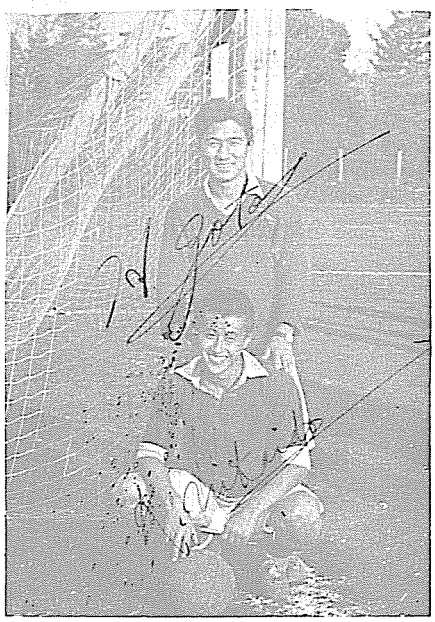
1部順位　慶応、東大、早稲田、明治、文理、商大（2部へ転落）

2部順位　農大、立教、法政、慈恵

○総合選手権

対明治（5月9日／1－1抽籤勝／於東高笹塚）

対早稲田（5月16日／0－6敗／於明治和泉）



▲ 昭和10年卒業

後　後藤　博基
前　二階堂謹二

昭和11年
リーグ戦を終って

後列　池尾、重見、金井、宮崎、
吉田、桜井、渡辺、狩森、
片山、鈴木(英)、二階堂、
石割、清水、早野、荒川、
小西
中列　熊沢、村井、鈴木、大掛、
米山、松岡、松本
前列　堀尾、岩崎、荒井、浅枝、
角田、田島、森田、高橋、
▼　茂木





◀ 昭和12年卒業

荒井、浅枝、角田、田島、森田

○予科リーグ

対中央（５月18日／４－１勝／於高円寺）、 対立教（５月31日／６－１勝／於石神井）

対慶応（６月４日／４－２勝／於明治和泉）、 対農大（６月20日／４－２勝／於明治和泉）

○浦高定期戦

春期（６月12日／２－１勝／於浦和）、 秋期（12月４日／３－０勝／於小平）

○三商大戦

対神戸（12月28日／２－４敗／於小平）、 対大阪（12月30日／９－１勝／於明治和泉）

○高商大会　於明治和泉

対横浜商専（12月25日／５－１勝）、 対高千穂（12月26日／８－０勝）

対専門部（12月27日／３－０勝）、 対同志社高商部（12月30日／７－０勝）

記　事

緒戦の東大との試合を病気療養中の長瀬がそっと観戦し「ちっとも走っていないじゃないか」と嘆いていた由。いくばくもなく長瀬倒るの悲報は長瀬東作を親しく知っている我々本科生に大きな衝撃を与えた。何とも残念で呆然として了った。残りの４戦を何とか物にしようとまさにジタバタしたが、あせりの方が先に立ったのか、力足らずか、不甲斐ない結果になって了った。本３がダラシなかったからという批判も敢えて受けよう。

全一橋チームは不本意ながらリーグ戦に全敗し２部転落となったが、予科チームは予科リーグに、高商大会に。定期戦に、全勝無敗。３年後には全国制覇の大いなる夢がふくらんできた。

７月日支事変始まる。

昭 和 13 年

主将　後藤虎雄（本３）　　委員長　米山大三（本２）

予科主将　鈴木英二（予３）　　予科委員長　折下章（予３）

最高学年生　岩崎寛貞

試合メンバー

○オール一橋

F.W. 金井（本１）・清水（本１）・片山（予３）・松岡（予３）・桜井（予３）・橋本（予１）

B.K. 後藤（本３）・岩崎（本３）・二階堂（本２）・早野（本１）・荒川（本１）・堀尾（本１）
鈴木（予３）

G.K. 吉沢（本１）

○予科チーム

F.W. 松岡（予３）・桜井（予３）・藤塚（予２）・渕上（予２）・橋本（予１）・三觜（予１）

B.K. 村木（予２）・宮崎（予３）・片山（予３）・鈴木（予３）・水島（予２）・清水（予２）

G.K. 居川（予２）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対千葉医（10月３日／５－２勝／於慈恵医大）、対拓殖（10月23日／６－１勝／於慈恵医大）

対慈恵（10月30日／４－１勝／於青山師範）、対立教（11月６日／２－０勝／於青山師範）

対法政（11月13日／５－１勝／於青山師範）

全勝で１部復帰を果す。

○総合選手権関東予選

対豊島サッカー（５月21日／０－０抽籤敗／於青山師範）

○予科リーグ戦

対農大（５月15日／３－０勝／於元住吉）、対中央（５月19日／３－０勝／於東伏見）

対法政（５月31日／４－０勝／於小平）、対慶応（６月12日／１－４敗／於日吉）

Ａ組優勝成る。

○浦高定期戦

春期（６月18日／２－３敗／於浦和）　秋期（12月３日／２－３敗／於小平）

○三商大戦

対神戸（12月24日／２－４敗／於甲子園）、対大阪（12月25日／７－３勝／於東遊園地）

記　事

この年の最上級生は、後藤（虎）と岩崎の２人であった。同期生４人のうち、小西正夫君が病を得て休学留年の止むなきに至り、熊沢博文君が中途退部したためである。小西君が健在であれば、当然チームの牽引車として、またすぐれた指導者として活躍願えたのであったが、止むを得ず後藤が主将の重責を担うこととなった。

前年１部リーグで全敗し、２部に落ちたので何としてでも１部復帰を果して卒業したいものと、岩崎と共に心に期して、シーズン当初から優勝を絶対目標として掲げスタートした。

幸いにして、わがオール一橋チームはまさに多士済々であった。いちいち名前を挙げきれない位であったが、二階堂晴三、米山大三の両君がチーム団結の支えとして、また早野広太郎、吉沢貞雄のバック陣、金井雄吾、片山光夫、清水睦美、松岡義彦のフォワード陣、これらレギュラーの諸君が戦力の中心となると共に、全部員をリードして、上記年間の戦績にみられるようなめざましい活躍を展開したのであった。予科も本科も一つになって秋のリーグ戦をめざし頑張ってくれたおかげで、このシーズン全勝して、１部リーグ復帰を果たしバトンを渡すことができた次第で、忘れ得ぬ快事であった。

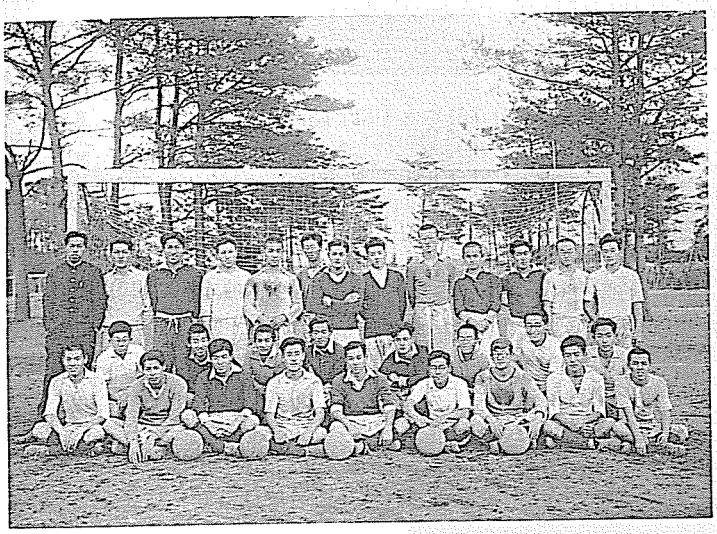
また、このリーグ第１戦の対千葉医大において、フルバックを勤めた主将後藤のオウンゴールで先取点を与えてしまった苦い記憶も、今はなつかしい思い出として、語り草として残っている。

この年に示されたチームの爆発的な力のきざしは、その後に続く一橋サッカー全盛時代を築くのであったが、これらの活躍したメンバーのうち、あるいは戦場に倒れられ、あるいは不幸にも病に臥されたことは、まことに惜しみても余りあり、その思いは筆舌に尽し難い。

昭和13年卒業

浅田、林田、大掛、
重見、村井、鈴木





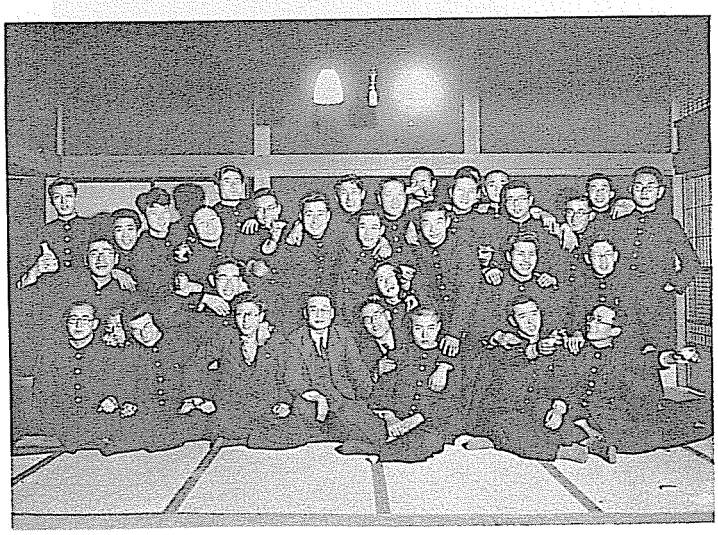
昭和13年

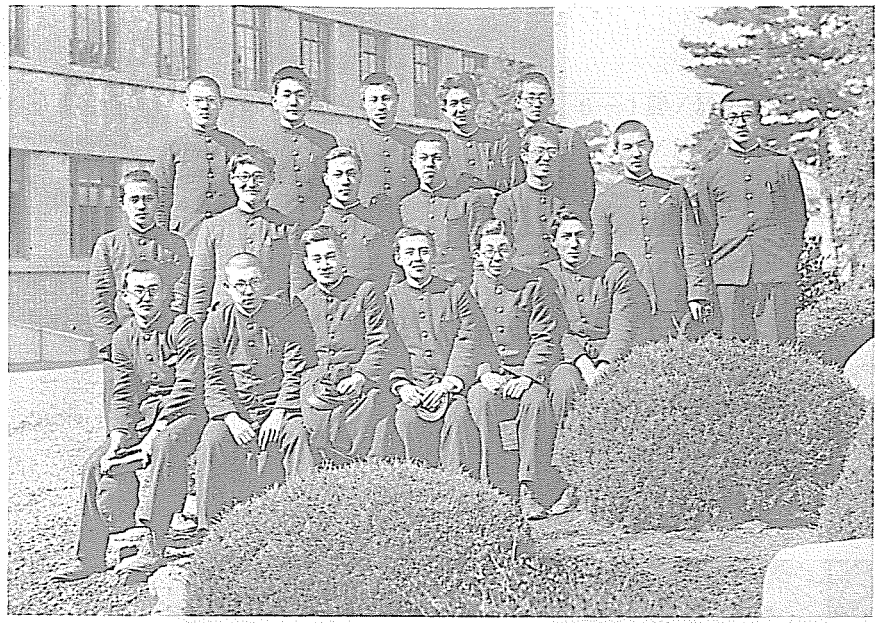
後列　村木、金井、片山、藤塚、青木、山田(久)、池尾、清水(睦美)、居川、吉岡、堀尾、折下、松岡

中列　山本(桜井)、橋本、瀬藤、石割、吉沢、三觜、萩原、水島

前列　渕上、早野、菅瀬、後藤、岩崎、米山、狩森、二階堂(晴)、茂木

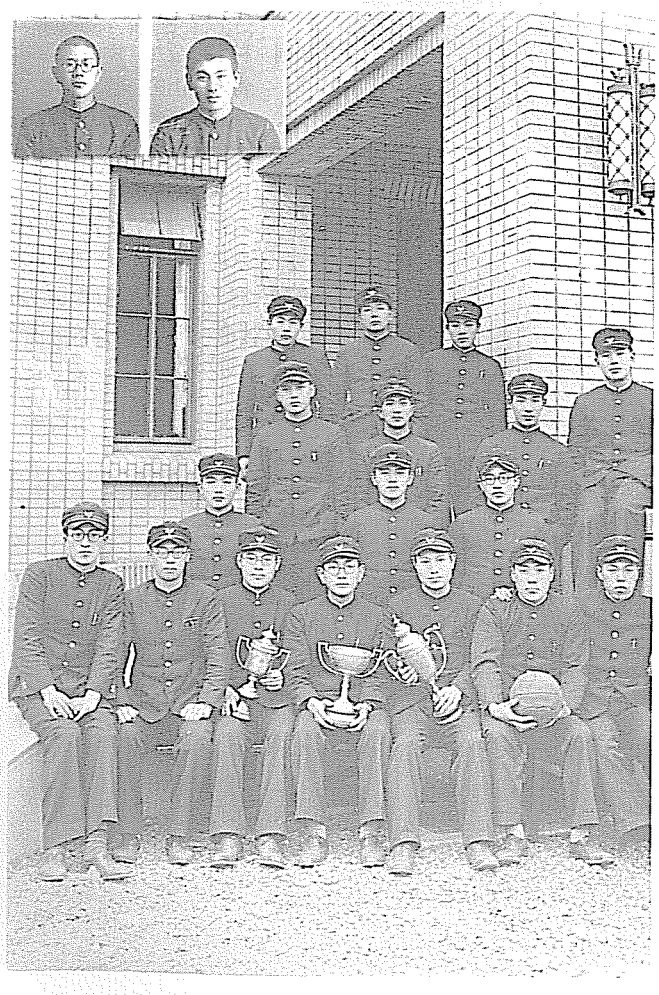
昭和13年
納　会





▲ 昭和13年　予科

後列　渕上、水島、藤塚、瀬藤、
　　橋本
中列　吉岡、萩原、宮沢、村木、
　　山田、青木、居川
前列　折下、鈴木(英)、松岡、
　　茂木、桜井(山本)、片山



◀

昭和14年　予科

太田、山路
四列　鷲埜、安田、古賀
三列　土屋、瀬藤、青木、笠原
二列　白鳥、吉岡、西内
一列　居川、山田、渕上、水島、
　　藤塚、宮沢、村木

昭 和 14 年

主将　二階堂晴三（本３）　　委員長　米山大三（本３）
予科主将　水島行（予３）　　予科委員長　藤塚亮策（予３）
最高学年生　小西正夫、菅瀬十朗、池尾隆二、狩森正雄

試合メンバー

○オール一橋

F.W. 菅瀬（本３）・金井（本２）・清水（本２）・片山（本１）・松岡（本１）・桜井（本１）
B.K. 二階堂（本３）・早野（本２）・荒川（本２）・堀尾（本２）・鈴木（本１）・渕上（予３）
G.K. 吉沢（本２）

○予科チーム

F.W. 渕上（予３）・藤塚（予３）・山田（予３）・青木（予２）・瀬藤（予２）・安田（予１）
高橋（予１）
B.K. 宮沢（予３）・村木（予３）・水島（予３）・古賀（予１）・西内（予１）・鷲埜（予１）
G.K. 居川（予３）

戦　績

○関東大学リーグ戦（１部）

対慶応（10月１日／１－７敗／於神宮）、対東大（10月８日／１－１分／於東大）
対早稲田（11月５日／０－５敗／於神宮）、対明治（11月19日／４－２勝／於東大）
対農大（11月25日／１－１分／於東伏見）
１部順位　慶応、早稲田、東大、明治、商大、農大

○総合選手権関東予選

対慶応ＢＲＢ（５月21日／１－７敗）

○神宮大会関東予選

対東大（９月17日／１－３敗）

○予科リーグ戦

対明治（５月24日／２－３敗／於日吉）、対慶応（５月31日／０－２敗／於小平）
対早高（６月５日／１－８敗／於東伏見）

○浦高定期戦

春期（６月21日／１－４敗／於浦和）　秋期（12月９日／３－０勝／於小平）

○三商大戦

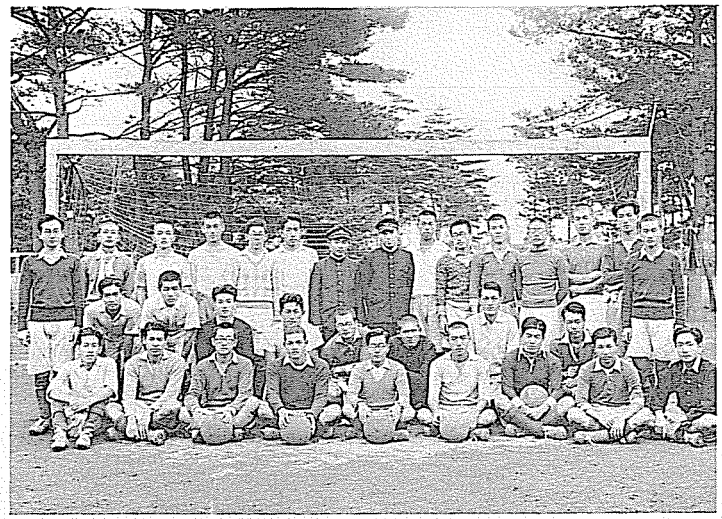
対神戸（12月24日／１－０勝／於東大）、対大阪（12月25日／11－０勝／於東大）

記　事

当時のサッカーの大きな課題は、なんといっても３Ｂシステムの導入であった。サッカーの先進国で開発されたこのシステムは、上位各チームが競ってこれを採用、急速に普及した。それまでは、

昭和14年 ►

後列　折下、安田、百鳥、山地、
　　山本(桜井)、吉田、石割、
　　藤塚、村木、西内、太田、
　　？　居川、松岡
中列　瀬藤、古賀、清水、片山、
　　吉沢、小西、金井、荒川
前列　堀尾、早野、狩森、池尾、
　　米山、二階堂(晴)、菅瀬、
　　鈴木、水島





◄
昭和14年
部室の前

後列　荒川、渕上、片山、米山、
　　宮沢、山田
中列　狩森、居川、青木、村木、
　　太田、水島
前列　瀬藤、金井、藤塚、堀尾、
　　吉田

昭和14年 ►
小平の部室の前

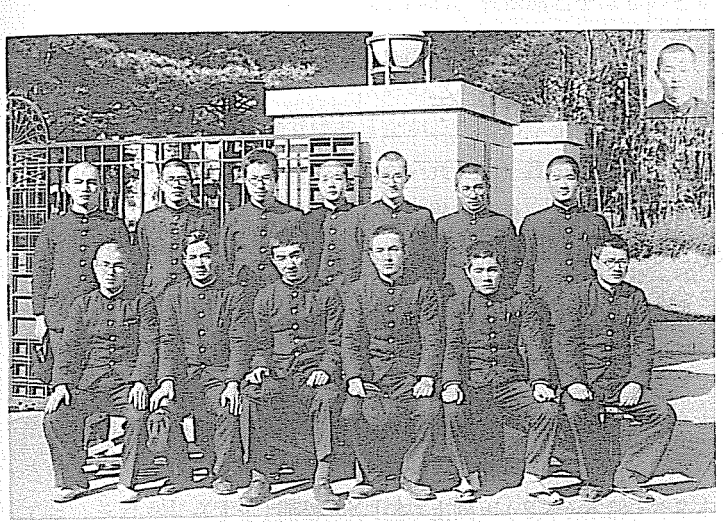
四列　藤塚、堀尾、片山、菅瀬、
　　居川、山田、水島
三列　青木、太田、村木、金井、
　　二階堂、松岡
二列　吉田、安田、折下、早野、
　　白鳥、西内、米山
一列　清水、荒川、鈴木、宮沢、
　　瀬藤、狩森、渕上、池尾



昭和14年
部室の前

後列　狩森、吉田
中列　村木、太田、居川、瀬藤、
　　水島、堀尾、米山
前列　青木、宮沢、山田



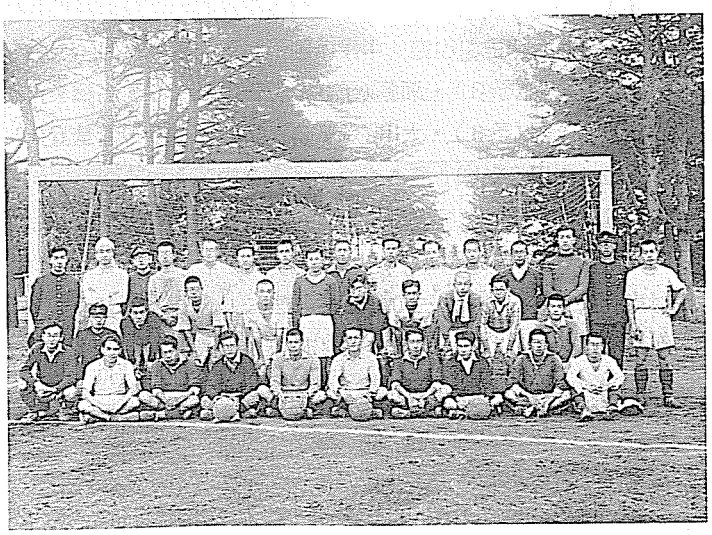


昭和15年　予科

後列　白鳥、太田、内田、安田、
　　助川、高橋、松浦
前列　五月女、瀬藤、青木、土屋、
　　古賀、荒川

昭和15年

後列　青木、遠藤、水島、内田、
　　助川、藤塚、土屋、鈴木、
　　片山、村木、宮沢、松浦、
　　高橋(三善)、居川、山田
　　(久)、鷲埜
中列　西内、古賀、太田、白鳥、
　　松岡、瀬藤、安田、桜井
　　(山本)、渕上
前列　折下、高橋(道)、荒川、吉
　　沢、早野、金井、吉田、清
　　水、堀尾、五月女



ＨＢサイドハーフは中盤相手方インナーをマーク、終盤はウイングをマーク、このため中盤と終盤の分れ目の引きつぎから起るＦＢとのマークのチェンジが、ともすると失点につながるトラブルを起していた。しかしこの３Ｂシステムは、サイドハーフはインナー、フルバックはウイングを終始マーク、ＣＨは下って相手ＣＦをマーク、また両サイドハーフは進んで攻撃に参加するという合理的戦法で、練習もこの新しいシステムのマスターが最大の課題であった。そして、ひと試合ごとにそれなりに成果をあげていった。

緒戦リーグ開会式神宮で、昨年の１位慶大に敗れ、東大と分けて、早大に敗れ、明大に勝ち、２部に陥落した農大と分けて、１部に留まることとなった。最終対農大戦の引分けは痛恨に堪えない。試合前に１部残留が決っていたので、緊張がゆるんだのか、当日のグラウンドコンデイションが悪かったとはいいながら、まさに頂門の一針。

その他は、予科リーグ不振、浦高戦１勝１敗、三商大戦全勝。しかし、商大サッカー部の原動力は、予科にありという原理は変らず、この状態が維持される限り、サッカー部の基盤は不動という認識はますます強くなった。

昭 和 15 年

主将　早野広太郎（本３）　　委員長　折下章（本２）　会計委員長　吉田富彦（本３）
予科主将　青木育郎（予３）　　予科委員長　瀬藤俊雄（予３）
最高学年生　金井雄吾、吉沢貞雄、堀尾真一、石割知之、清水睦美、荒川守之助、高橋道太郎

試合メンバー

○オール一橋

F.W. 金井（本３）・清水（本３）・吉田（本３）・片山（本２）・山本（本２）・松岡（本２）
土屋（予３）

B.K. 早野（本３）・荒川（本３）・鈴木（本２）・渕上（本１）・松浦（予１）

G.K. 吉沢（本３）

○予科チーム

F.W. 青木（予３）・瀬藤（予３）・安田（予２）・高橋（予１）・佐藤（予１）

B.K. 土屋（予３）・太田（予２）・古賀（予２）・鷲埜（予２）・松浦（予１）

G.K. 内田（予１）

戦　績

○関東大学リーグ戦（１部）

対東大（10月６日／１－０勝／於神宮）、　対慶応（10月19日／１－３敗／於神宮）
対早稲田（10月27日／２－１勝／於東大御殿下）、　対文理（11月10日／２－４敗／於東伏見）、
対明治（11月17日／４－０勝／於東大御殿下）
１部順位　慶応、早稲田・商大同位、東大・文理同位、明治

○総合選手権関東予選

対早稲田ＷＭＷ（４月29日／２－３敗／於青山師範）

○予科リーグ戦

対法政（5月21日／4－0勝／於小平）、 対早稲田（5月30日／0－5敗／於小平）

対慶応（6月4日／1－4敗／不詳）

○浦高定期戦

春期（6月17日／1－1分／於浦和） 秋期（12月7日／2－2分／於小平）

○三商大戦

対神戸（12月25日／3－3分／於甲子園）、 対大阪（12月26日／9－2勝／於東遊園地）

記 事

この年はわがサッカー部の歴史のなかでも、特筆すべき年であった。大学1部のリーグ戦で、早慶東明文の強豪に伍して善戦、優勝の慶応に次いで2位を早大と分けあったのである。

先輩から受けついだ部精神を基にして、当時の最上級生が9人（うち荒川君、高橋君物故）もおったことと、2年生以下にも、故松岡君、故松浦君をはじめとする優秀な選手が多数いて、部員総数も50名を超す大世帯であったことが、この好成績の最大の原因といえる。そして、その裏側には、かつて予科リーグに優勝した自信があったことも、見逃せない。

卒業即軍隊生活の時代ではあったが、楽しい学生生活を送れたのも、まだ米国との戦争が始まらず、日本国内に多少の余力が残っていたせいであろう。

しかしユニホームがペラペラのスフとなり、サッカー靴も牛皮から豚皮に変った。徐々に戦時色が部生活にも波及してきたのである。翌16年3月卒業したその年末に、太平洋戦争に突入したのだから、我々の時代がツカの間のよき時代の最後であった。試合を応援してくれた先輩のなかに、軍服姿が多数見られたのも、当時の時代を反映していたのである。

今年（昭和56年）の5月、吉沢のキモ入りで、銀座の明治屋で久方ぶりに会合した。金井、吉沢、清水、石割、堀尾、早野（吉田所用欠席）の計6名。還暦をトオに過ぎた年令とあって、金井を除き皆一病の持主。本来なら景気よくビールで乾盃といくところだが、懐中に持薬を秘する身とあっては、それもならず、当初10分間位はボソボソした話ぶりであったが、たちまち往年の部室の趣を再現、爆笑の渦となった。

なかでも昭和15年秋の事実上優勝をかけた対慶応戦に話題が集中、慶応に先取された1点について、当時の名キーパー吉沢が手振り身振りでその瞬間を説明してくれた。「昔から物忘れのいい俺も、この時のことは昨日の如くよく覚えている」とは吉沢自身の弁。

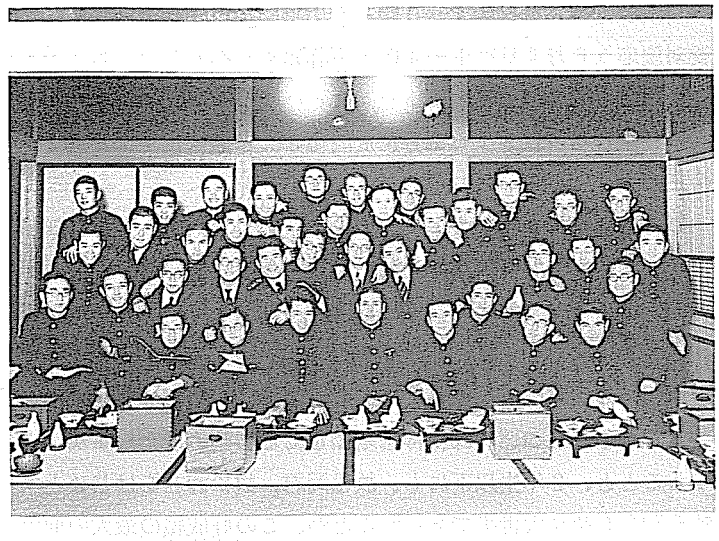
卒業して40年。卒業―戦争―戦後の荒廃という苦労をくぐってきた我々の時代。ふり返って見て、よき先輩、よき同僚、よき後輩に恵まれたことは、何物にも替え難き宝であり、真実有難く思っている。とは出席者全員の声であった。

昭 和 16 年

主将 鈴木英二（本3） 委員長 折下章（本3） 会計委員長 山田久寧（本2）

予科主将 太田賢三（予3） 予科委員長 古賀文之介（予3）

▼　昭和16年４月　卒業生送別会　於　中野(一月字)辰美野



四列　安田、古賀、松浦、宮沢、水島、助川、太田、松岡、居川、奥村、高橋

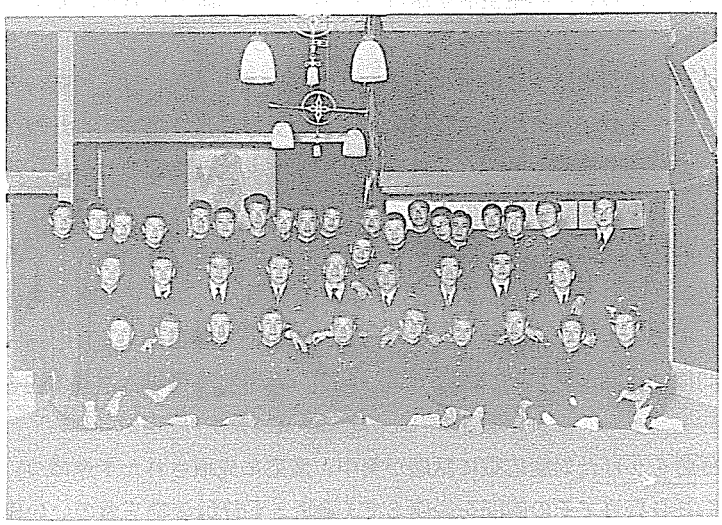
三列　後藤、土屋、片山、青木、鈴木、藤塚、村木

二列　鷲埜、米山、狩森、菅瀬、山田、大掛、二階堂、瀬藤、五月女、桜井、荻原、白鳥

一列　折下、○金井、○堀尾、○吉沢、○荒川、○早野、○清水、○吉田、○高橋

（○卒業生）

▼　昭和16年12月　卒業生送別会　於　中野辰美野



後列　高橋、安田、奥村、金原、荒川、古賀、山田、助川、宮沢、川端、野尻、藤塚、遠藤、西内、瀬藤、太田、山本、土屋、大掛

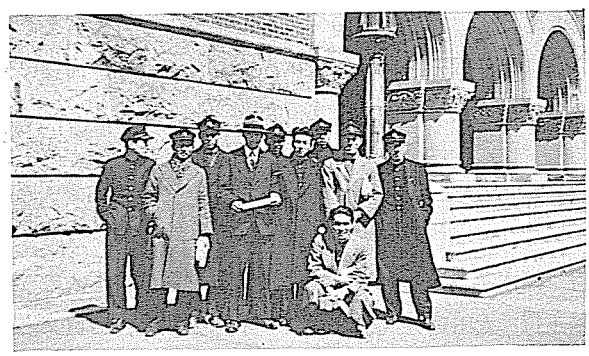
中列　鷲埜、清水、早野、二階堂、松本、松浦、神野、小林、枝村、堀尾

前列　佐藤、外池、茂木、片山、鈴木、折下、松岡、村木、永倉、加藤

昭和16年

兼松講堂前　►

松岡、瀬藤、土屋、早野、鈴木、清水、村木、金井、高橋(道)、堀尾



最高学年生　片山光夫、松岡義彦、茂木利孝

試合メンバー

○オール一橋

F.W. 片山（本３）・松岡（本３）・山本（本３）・土屋（本１）・永倉（予１）

B.K. 鈴木（本３）・村木（本２）・瀬藤（本１）・太田（予３）・古賀（予３）・松浦（予２）

G.K. 居川（本２）

○予科チーム

F.W. 安田（予３）・佐藤（予１）・遠藤（予１）・高橋（予２）・永倉（予１）・助川（予２）

B.K. 太田（予３）・鷲埜（予３）・古賀（予３）・松浦（予２）・荒川（予２）

G.K. 加藤（予１）

戦　績

○関東大学リーグ戦（１部）

対東大（９月28日／０－０分／於神宮）、対慶応（10月４日／１－２敗／於神宮）

対早稲田（10月19日／０－４敗／於神宮）、対文理（10月25日／２－０勝／於神宮）

対立教（11月２日／０－０分／於日吉）

１部順位　東大・早稲田同位、慶応、商大、立教、文理

○予科リーグ戦

対専修（５月11日／１－２敗／於小平）、対農大（５月17日／１－４敗／於小平）

対法政（５月25日／３－０勝／於元住吉）、対明治（６月２日／１－１分／於小平）

○浦高定期戦

春期（６月21日／０－５敗／於浦和）　秋期（12月13日／０－１敗／於小平）

○三商大戦は時局柄中止

記　事

秋の大学リーグ第１戦対東大。前半互角に戦うもハーフタイム直前に、村木が有馬に足を蹴られてほとんど動けなくなり後半松岡をＨＢに下げ、執ように相手をつぶして引分けに持ち込む。

第２戦対慶大戦では前半ＦＷ快調に圧倒して土屋ヘッデングで先取点をとるも後半ラスト近くに２点入れられ涙をのむ。

第３戦対早大。夜来の雨でグランドが滑りがち、風も強く、終始押されて惨敗す。

第４戦対文理大戦は終始攻勢を続け圧勝。

第５戦対立大戦双方凡戦に終始し引分ける。

12月８日大東亜戦争に突入し、激動の世界の幕あける。多くのＯＢが命を落されて痛恨に堪えない。

昭和17年

主将　村木杉太郎（本３）　委員長　藤塚亮策（本３）　会計委員長　山田久寧（本３）

予科主将　松浦巌（予３）　　予科委員長　西内碩男（予３）

最高学年生　居川達一、山本孝次、宮沢力、水島行

試合メンバー

○オール一橋

F.W.　山本（本３）・瀬藤（本２）・土屋（本２）・安田（本１）・永倉（予２）

B.K.　村木（本３）・宮沢（本３）・水島（本３）・太田（本１）・鷲埜（本１）・松浦（予３）

G.K.　居川（本３）

○予科チーム

F.W.　高橋（予３）・奥村（予２）・永倉（予２）・佐藤（予２）

B.K.　高柳（予１）・松浦（予３）・川端（予２）・金原（予１）・荒川（予３）

G.K.　加藤（予２）

戦　績

○関東大学リーグ戦（１部）

対早稲田（４月29日／４－２勝／於神宮）、対東大（５月17日／０－５敗／於一高駒場）

対慶応（５月23日／０－５敗／於神宮）、対立教（６月６日／１－１分／於神宮）

対明治（６月21日／１－４敗／不詳）

○２部入替戦

対立教（６月28日／０－２敗／於東大御殿下）

１部順位　東大、早稲田、明治、慶応、立教、商大

○総合選手権関東予選

対千葉医（11月15日／４－３勝／於日医大）、対上智（11月22日／５－１勝／於東大御殿下）

対早稲田（11月23日／１－７敗／於東大御殿下）

○予科リーグ戦

対専修（10月４日／３－７敗／於小平）、対慶応（10月10日／０－５敗／於日吉）

対早高（10月15日／０－４敗／於東伏見）

○浦高定期戦

春期（７月11日／０－３敗／於浦和）　秋期（12月５日／１－０勝／於小平）

○三商大戦

対神戸（７月20日／０－０分／於東大御殿下）、対大阪（７月21日／０－１敗／於東大御殿下）

記　事

昭和17年に入ると戦時色も次第に深まりつつあって、大学の卒業は９月30日に繰りあげられることも決定された。これに伴って毎年秋に行われていた大学リーグ戦も春に実施することとなった。３月末合宿、３試合程練習試合をして、４月29日対早大戦を皮切りにリーグ戦に入るといったあわただしい空気のうちに部生活が進んでいった。東京に空襲警報が初めて出された４月19日に明大と練習試合をしたのも思い出の１つであった。

練習試合では、文理大に敗けたとはいえ、慶応に２対１で勝ち、明治とは１対１で引き分けるなどまあまあの成績であった。

リーグ戦に入るに当って残念だったのは、ＦＷから山本が、ＨＢから松浦が第２戦以後病気で欠場したことであった。

４月29日、天長節の日に神宮において、対早大戦でリーグ戦の幕が切って落された。１点を先取されたが、ＦＷ土屋と永倉のコンビが絶妙で前半１点、後半２点を入れて逆転優勢に立ち、さらにコーナーキックで早大ＧＫのミスに乗じて押し込み４点とした。バックもまたよく守り、コーナーキックで１点を返されただけで快勝した。この試合で永倉は今でいうハットトリックをやった訳である。

第２戦東大戦・第３戦慶大戦は、リンクマンとしての松浦を欠いたためＦＷとＢＫの連係がとれず、バックもねばりに負けて惨敗となってしまった。

第３戦立大戦は、前半土屋の１点でリードしたが、後半１点を返され引き分けに終った。

第４戦明大戦は、健闘したが、わが方はペナルティキックもものにできず、惜敗となってしまった。

６月28日１勝１分の同率となった立教大学と１部最下位決定２部入替戦を戦うこととなった。この試合は不運ともいえるものであった。押しつ押されつの熱戦であったが、前半再三再四のチャンスに恵まれたが、土屋・永倉のシュートがゴールのバーやポストに当ってどうしても得点ができなかった。最後の10分前に村木が足を痛めて、バックが崩れ、残すところ数分というところでバタバタと２点を取られ、万事窮して２部に転落することになった。先輩後輩に対して誠に申し訳ないことであったと、今も残念さがこみ上げてくる。

浦高戦も善戦したが、後半崩れて敗れた。

三商大戦は33度をこす猛暑の中に行われた。土屋・山本を欠いて予科から永倉を加えたメンバーであったが、押し気味であったにかかわらずシュートが決まらず無得点で神商大と引き分け、大商大戦は例年勝ってきたが本年は後半に１点を決められ、ずるずるとそのまま押し切られ最後の試合としては誠に残念なものになってしまった。

17年の公式戦はベストメンバーで戦えなかったことが口惜しく思われる。

昭 和 18 年

主将　前期・瀬藤俊雄（本３）　後期・太田賢三（本３）

マネジャー　前期・西内碩男（本２）　後期・西内碩男（本３）

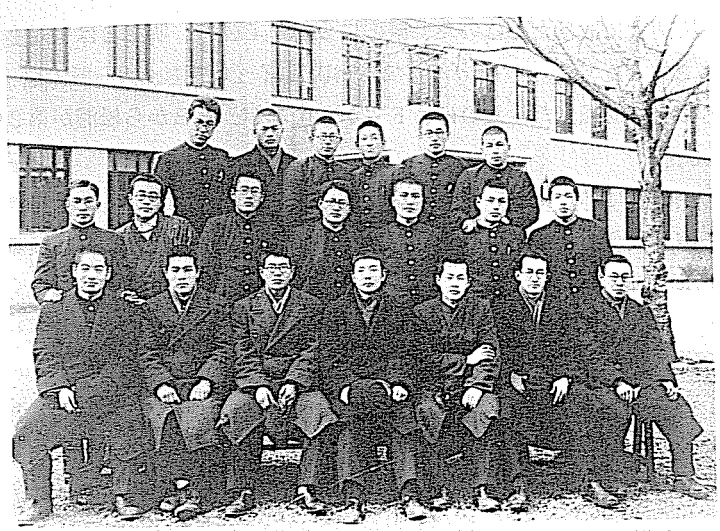
最高学年生前期・土屋五郎、後期・青木育郎、安田興三郎、鷲埜和夫

（注）修業年限の６ケ月短縮に伴い、春に繰りあげられた大学リーグ戦終了時点で主将は交代した。

試合メンバー

F.W. 永倉（予３）・瀬藤（本３）・土屋（本３）・安田（本２）・奥村（予３）

B.K. 高柳（予２）・松浦（本１）・金原（本１）・鷲埜（本２）・太田（本２）



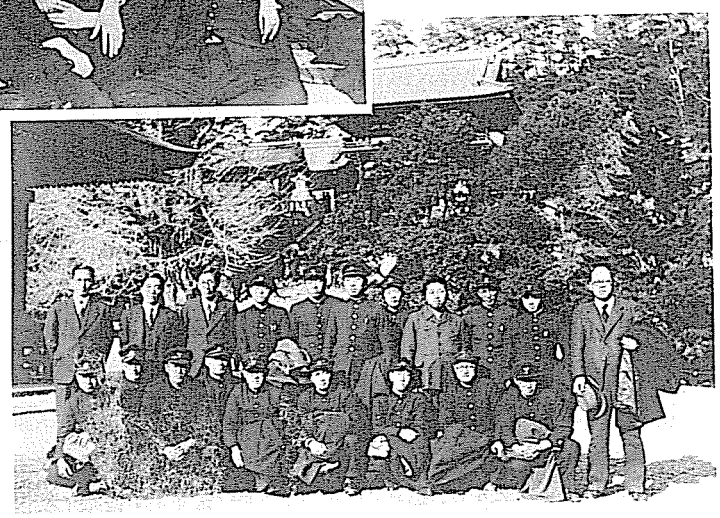
▲ 昭和17年３月　予科

後列　内田、佐藤、奥村、永倉、西内、外池
中列　高橋、西内、加藤、荒川、野尻、浅野、川端
前列　松浦、古賀、太田、安田、鷲埜、助川、金原



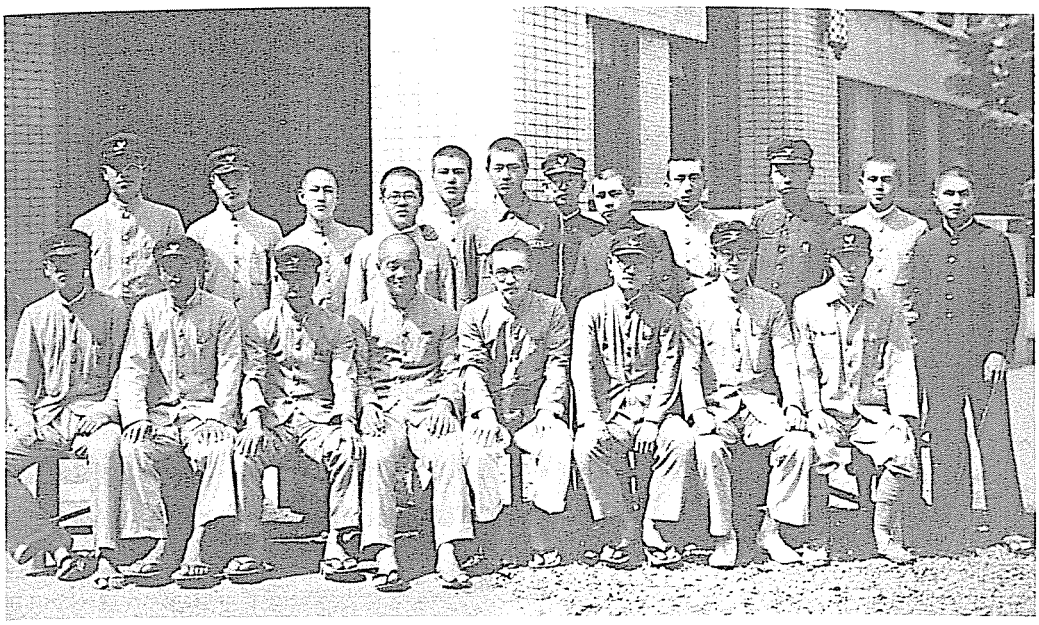
◄ 昭和17年　秋
浦高戦祝勝会

後列　竹山、高橋、安田、土屋、瀬藤、金原、西内、佐藤、太田、鷲埜
中列　松浦、荒川、西浦、岡本
前列　松岡、床宿、永倉、川端、？　加藤、奥村、高柳



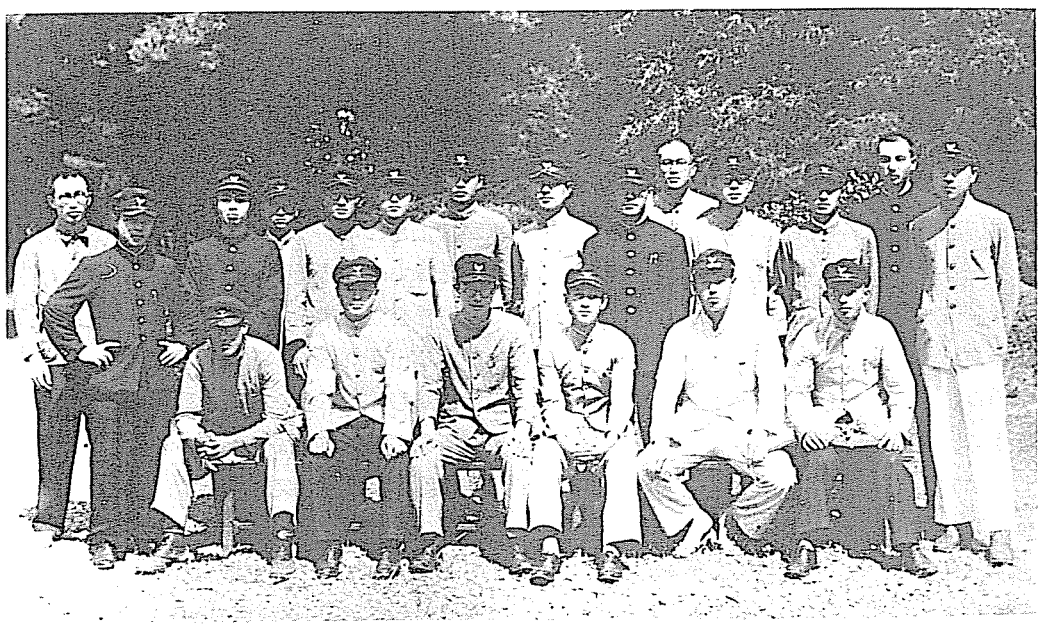
昭和18年１月31日　►
出征先輩武運長久祈願
於　鎌倉鶴岡八幡宮

後列　大掛先輩、神野先輩、重見先輩、高柳、川端、松岡、鷲埜、田島先輩、高橋、床宿、松本大先輩、
前列　金原、西内、加藤(春)、松浦、西浦、瀬藤、永倉、荒川(正)、奥村



▲ 昭和17年９月

後列　竹山、佐藤、永倉、西浦、野尻、川端、岡本、床宿、？　松岡、高柳、林
前列　加藤、高橋、金原、松浦、西内、荒川、助川、奥村



▲ 昭和18年９月

後列　？　床宿、茂木、鎌野、大河内、高柳、小島、布谷、渡辺、加藤(省)、森、中西、酒井
前列　加藤(春)、佐藤、奥村、永倉、川端、田淵

G.K. 加藤春（予３）

戦　　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対法政（５月２日／７－０勝／於小平）

対農大（５月15日／４－０勝／於小平／気迫では敗けていた）

対工大（５月23日／５－１勝／於元住吉農大）

全勝にて念願の１部昇格が決定。

○浦高定期戦

春期（６月12日／０－１敗／於浦高）

F.W. 田淵（予３）・永倉（予３）・佐藤（予３）・林（予２）・奥村（予３）

B.K. 高柳（予２）・川端（予３）・松岡（予２）・床宿（予２）・加藤弟（予１）

G.K. 加藤兄（予３）

伯仲の試合であったが後半ゴール前に上った球を押し込まれ惜敗した。

秋期（10月15日／０－３敗／於浦高）

記　　事

１部復帰を目指したが、リーグ戦は圧倒的な力で優勝し、目標を達成することができた。予科チームは浦高戦には惜しくも敗れたが、チーム力は充実し、夏休みに開催されるインターハイに初めて出場することに決め、精進を重ねた。しかし戦局の悪化に伴い、インターハイ開始１週間前に文部省より中止命令が出て、さらに文科系学生の徴兵猶予の特典は全面的に停止され（10月２日）、学園はにわかに戦時色が濃くなった。10月21日には大学リーグ戦の行われた神宮競技場（現国立競技場）において、折からの豪雨をついて、学徒出陣壮行会が行われた。我々の青春において忘れることのできない一コマである。

学徒出陣と共に運動部に対しても種々の制約が加えられ、先づバレー、ホッケー、野球等が禁止され、続いてラグビーを除くその他の外来スポーツが禁止された。サッカー部は18年冬に滑空班（グライダー部）として転進し、再び球を蹴る日に備え体力の維持増強につとめた。

サッカー部の存続については、松本大先輩をはじめ酉松会先輩諸兄と再三にわたり熱心な議論が重ねられたが、部員は続々と入営し、また勤労奉仕に駆り出される等、チーム編成は不可能となり、部の存続は事実上不可能となった。戦場に赴いた先輩に対しては、我々銃後に残った者の不甲斐なさから、先輩諸兄が大切に育ててきた青春の心の拠り所を失くしてしまったという悔恨の情を拭うことができなかった。これは先輩の戦死の報を聞く度に胸に痛みを覚えた。

昭和19年

学徒動員により学部学生の大半は入営してしまい、予科校舎は軍に接収された為学生は国立の学部、専門部の校舎に集中された。したがって予科一橋寮も19年春専門部講堂を寮に改造して移転することになり、寮生は隊伍を組んで小平の寮を去り、国立まで徒歩で移動した。

運動部の練習の本拠は国立の陸上競技場と野球場となったが、一般の学生も新入生も入営前の貴

重な時間を運動部の活動に割こうという雰囲気は全くなかった。練習に集る者は予科で球を蹴った者ばかりで、それも球を蹴ることは許されず、ランニングや柔軟体操程度で意気は全く上らなかった。校内にも軍人の姿が見受けられるようになり、毎日の生活に充実感はなく、お互いの存在を確認する程度であった。

夏休みを過ぎる頃になって本格的な勤労動員が行われ、学校生活も部活動も完全に停止した。戦局の悪化から予科はさらに6ケ月修業年限が短縮されて2年間となり、19年10月1日以降に入営した者は1年間の課程を履修したものと見做され進級を認められた。

19年、年末になるや、東京もB29の爆撃、艦砲射撃にさらされ、我々の会員も多数被災した。

終戦を迎えて

満州事変から10年近くにわたる戦争も「終戦の詔勅」と共に終結をとげ、戦場に銃をとった兵士は続々と帰国してきた。市中にはカーキ色の軍服を着た復員兵があふれ、爆撃による焼跡には闇市が立ち、街はにわかに活気がよみがえってきた。しかし社会環境はまさに無法状態で、警察力は無に等しく、暴力団が幅をきかし進駐軍によってようやく秩序が保たれていた。従って進駐軍が肩で風を切って濶歩する有様で、進駐軍物資（煙草・チョコレート・鑵詰等）は高値で取引されていた。GHQ・RTO・PX等見慣れない標識が氾濫した。ボロをまとった戦災孤児がうろつき、駅や地下道には浮浪者が充満し、夜になれば街角には女達が進駐軍相手に春をひさぐといった有様であった。都内に焼残った施設は運動施設も含め主要なものは殆んど接収され“OFF LIMIT”の看板は我我に敗戦をいや応なしに印象づけた。懐しい神宮競技場（現国立競技場）も中をのぞくことすらできなかった。

小平の予科校舎は陸軍電波学校に接収されていたが、戦後の状態は校舎に黒い迷彩が施され、周辺の松の大木は切り倒されたものも多く、グランドには探照灯等の兵器が放置され、反射鏡の破片が散乱して、とても練習ができる状態ではなかった。周囲の雑木林も昔日の面影はなく、林の中にとび込んだボールを探しに行く時に悩まされた女郎蜘蛛も住み家を追われ、どこかに姿を消してしまっていた。我々が戦前に青春を楽しんだ国木田独歩の武蔵野に書かれた風情は全く失われ荒涼としていた。

復員してきた学生は国立の校舎に帰ってきて、すっかり趣の変ってしまった学園に懐しい想い出を探しているようであり、また久し振りに会った友達同志お互いの無事を喜び合い、未だ消息のない友人の安否を気づかったりしていた。在学中に戦線にかり出された前後5年分位の学生が一時に復学した為、ただでさえ小人数の学園はたちまち超満員となり、かなり早く学校に行かないと席もとれず、永い間講義に飢えた学生が廊下にまで溢れ出ていた。

終戦後2～3ケ月経過する頃に虚脱状態から抜け出るように運動部復活の声が出はじめた。しかし各部は練習場と用具の確保には非常に苦労したものである。サッカー部は国立の競技場の陸上競技部の部室の一部にようやく部室を確保した。

今から考えると想像もできないような苦労を重ねたが、それにもまして太陽の下にスポーツをすることは何物にも代え難い喜びであった。我々の青春が再び戻ってきたという感が深かったが、この戦争は個人の境遇も大きく変え、永久に学園に、グランドに戻らなかった友人が少なからず居た

ことははなはだ心残りであった。この部史の筆をとりながら、ともあれ卒業までボールを蹴ることができた我々は全く幸福であったと思うし、できうればこの部史編集を一つの媒として、昔の友人との附き合いが復活できたらと念ずるものである。

昭 和 21 年

主将　松浦巌（本３）
マネジャー　佐藤裕之（本２）
最高学年生　奥村一郎、加藤春樹

試合メンバー
F.W. 永倉（本２）・鈴木（本２）・佐藤（本２）・奥村（本３）・小島（本２）・若杉（予３）
B.K. 高柳（本２）・蛯子（本２）・松浦（本３）・外岡（本２）・加藤弟（本２）
G.K. 加藤（本３）・森重（本１）

戦　績
○関東大学リーグ戦（１部）於東大御殿下
対早稲田（１－３敗）、対東大（０－８敗）、対文理（１－２敗）、対慶応（０－５敗）
対立教（２－０勝）
１部順位　早稲田（４勝１分）　東　大（４勝１敗）　文　理（３勝２敗）
慶　応（２勝２敗１分）、東産大（１勝４敗）　立　教（５敗）
（注）当校は戦争末期に東京産業大学と名称が変更された。

記　事
今年より戦後はじめて関東大学リーグ戦が、神宮競技場が進駐軍に接収されていた為、東大御殿下グランドで再開され、当校は１部校として出場した。

対早大戦にはかなり積極的な攻撃を行い心胆を寒からしめたが、早大には加納、藤井等の全日本級選手が多く、善戦したのに止まった。

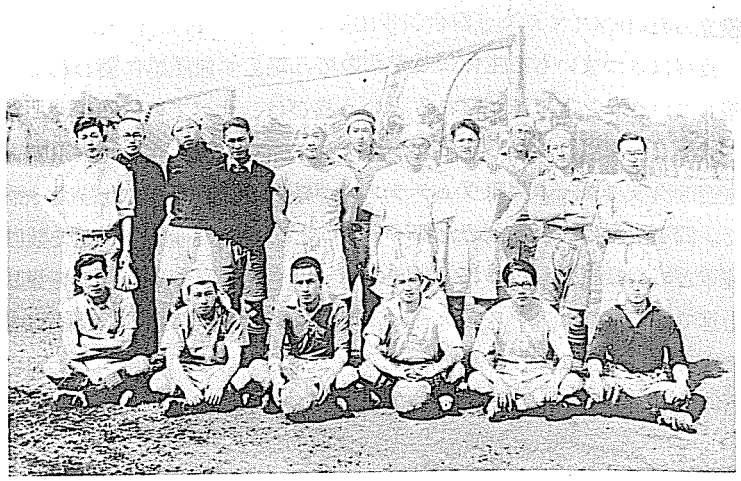
対東大戦では東大ＦＷ二宮の右からのロビングボールが、ＧＫの頭を越して得点となってからは、守備体形が乱れ意外な大差となった。その他の試合もいずれも善戦しながら得点に結びつかず、守備のもろさから勝を失った。対立大戦は２部転落をかけた試合であったが、当校優勢のうちに進み久し振りの快勝となり、ようやく１部に留ることになった。

終戦より１年後に、もうリーグ戦が復活したということは、非常に驚くべきことであったが、各校はメンバーの編成には非常に苦労したようだ。戦争の永い間のブランクをうめるため大学院に籍をおいた学生も多かったが、今年は特別に大学院在学生も出場することができた。また文理大にはスジョノ君というインドネシヤ人がいて、浮き球の処理には独特の技術を持ち非常に注目された。

当時の我が商大は他校に比しいかにも質量共劣勢であった為、陸上競技部の部室の２階で９月中旬から約１ケ月の合宿を行った。これは松浦主将の発案によるものであったが、ガラス戸のガラス

昭和18年　春

後列　安田、西内、松岡、
　　高橋、松浦、川端、
　　奥村、荒川、加藤、
　　永倉、金原
前列　鷲埜、床宿、土屋、
　　瀬藤、太田、高柳





昭和18年　秋

後列　床宿、西内、加藤、
　　松浦、金原、高柳、
　　安田、林、奥村
前列　佐藤、川端、太田、
　　武市、永倉、鷲埜

昭和22年９月
松本浅間温泉・亀湯旅館
にて合宿

後列　森重、松本、森、加
　　藤、鵜飼、高柳、蛯
　　子、高橋、鈴木
中列　堤、永倉
前列　佐藤、吉沢、木滑、
　　石川、外岡



はあちこち破れており雨が吹込むのには閉口したが、戦力の向上とチームワークの養成には大いに役立った。

食糧はさつまいもを主体にしたもので、絶えず飢餓感に襲われていたが、弾丸もとんでこず、空襲もないグランドで球が蹴れるという喜びは、すべての困難を克服していった。

大学リーグ戦は秋から始ったが、それに先立ち21年春には東京の大学有名選手とＯＢによって同好会的クラブチーム東京ヴェテランズが結成され、我々のサッカー欲を大いに刺激したものであった。同チームはＯＢも含めた都下チームと東大御殿下グランドで数回にわたり試合を行うと共に進駐軍との交歓試合も行われ、当時のサッカー愛好家に平和再来を強烈に印象づけた。また英国海軍士官で編成されたアチス・チーム（連合軍翻訳通訳部）には英国有名大学の名選手がおり、我々の技術との差を見せつけられた。

昭 和 22 年

主将　永倉真平（本３）

マネジャー　佐藤裕之（本３）

最高学年生　鈴木哲夫、高柳晋、外岡諒三郎、小島壽、加藤省

試合メンバー

F.W. 永倉（本３）・鈴木（本３）・森（本１）・吉沢（予３）・丸山（専３）

B.K. 高柳（本３）・佐藤（本３）・松本（予３）・篠宮（予２）・加藤（本３）

G.K. 森（本１）

戦　績

○**関東大学リーグ戦（１部）** 10月11日より於東大御殿下グランド

対早稲田（０―12敗）、対慶応（２－４敗）、対東大（０－７敗）、対文理（０－５敗）

対千葉医大（１－２敗）

１部順位　早稲田（全勝）　慶　応（３勝１敗１分）、東　大（３勝２敗）

文　理（２勝２敗１分）、千葉医大（１勝４敗）、　東商大（５敗）

（注）当校は東京商科大学と戦前の名称が復活した。

○**東京選手権大会**（関東蹴球協会主催第一新聞社後援）９月13日～９月18日

東大御殿下グランドと東京第一師範両グランドで第２回大会が開催されたが、当校は準々決勝で全早稲田（ＷＭＷ）と対戦した。

対全早稲田（１－７敗）

全早稲田は決勝で東大ＬＢと対戦し（２－１）．で優勝した。

○**三商大戦** ６月29・30日

対大阪（５－０勝／於西宮）、対神戸（０－８敗／於西宮）

部もようやく軌道に乗り、戦前からの最大の定期戦であった三商大戦が復活した。資金不足は先輩の寄附とアルバイトで補い、米を持参しての大会であった。当時神戸は賀川・則武・皆木等の

全日本チームに選抜された選手を揃え全盛時代を誇っており、試合は一方的であった。しかし大阪に対しては一日の長があり楽勝であった。阪急宝塚線の中山寺に合宿しグランドに通ったが、宝塚少女歌劇見物の女性客には汗くさいユニフォームで大いに迷惑をかけた。

記　事

戦後の急激なインフレと政治的不安定による社会の混乱は、フルメンバーによる練習の継続を益益困難にし、また中核的存在であったＲＨ松浦の卒業した穴は攻守に弱点となり、松本合宿で病に倒れたＬＢ外岡の欠場と共に大量失点につながった。試合メンバーはそのつど変り予科生、専門部生の出場によりやっとメンバーの編成が可能であった。

対早大戦は激しい雨の中で行われた。開始してしばらくたって、ゴールインしたと思った球が無情にもゴールライン直前で止ってしまい得点にならなかったのは残念であった。かえって当時の名選手岩谷の負傷は敵の戦意をあおり大量失点となった。

対慶大戦では前半押し気味に試合を進め、再三の好機があったにもかかわらず、２点に止まり、結局後半敵の立直りにより惜しい試合を失った。対千葉医大戦にはもう一歩の押しが足らず、後半押しながら勝利を得ることができなかった。この為、戦後わずかに２年にして先輩の努力に報いることができず２部に転落することになった。

今年のリーグ戦では当校の選手層はいかにも薄く、社会環境の悪さは新入部員を集めても練習に参加させることが第一に大問題で、技術力の向上は極めて難しかった。我が校の大きな戦力の柱であった闘志をもって技術を補うにはあまりにも較差が大きすぎた。この時期において新人の技能養成ができなかった事が、次年度以降の成績に極めて大きな影響を与えたということができよう。

なお、この年の末に行われた第５回東西学生ＯＢ対抗戦に当校からＯＢの松浦が東軍ＯＢ代表のＦＢとして参加し、（１－０）で勝った。

昭 和 23 年

最高学年生　森重利直、蛯子義文

試合メンバー

F.W. 渡辺（本１）・石川（本１）・松本（本１）・鵜飼（予３）・井田（予３）

B.K. 蛯子（本３）・小林（予３）・吉沢（予３）・針谷（予２）・森（本２）・篠宮（予３）
堤（予２）

G.K. 森重（本３）・木滑（予３）・高橋（予２）

今となっては殆んど記録らしい記録がなく、わずかに針谷君（昭28年卒）の日記及びメモから模索した戦績は次の通りである。

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）於小石川

対法政（10月10日／０－２敗）、対立教（10月17日／０－７敗）

対日医大（10月24日／0－1敗）、 対慈恵（11月6日／点差不詳敗）
対中央（日時・点差不詳敗）
2部順位　立教（5勝0敗）、 法政（4勝1敗）、 中央（3勝2敗）
慈恵（2勝3敗）、 日医大（1勝4敗）、 商大（0勝5敗）
この結果、2部リーグ1年にして3部に転落した。
○三商大戦　於西宮第3球技場
対神戸（12月14日／0－8敗）、 対大阪（12月15日／4－1勝）
14日は雨中戦。15日は泥濘戦であったが1勝1敗の順当な戦績であった。

記　事

前年度1部リーグで全敗を喫したため、この年は2部リーグで戦わなければならなくなった。しかし前の年のレギュラー部員8名が卒業してしまったので、技量も低下し、部員数も極度に減少して、わずか3～4名の本科生と、8名の予科生とでかろうじてメンバーを揃えて試合に臨むという始末で、ついに5戦5敗してあえなく2部リーグ1年でさらに3部リーグへと転落した。この年は特に高学年部員が極度に少い年で、アルバイト、食糧難等の経済的社会的悪条件も重って、全員揃って練習することも極めてまれであった。それどころか、試合のたびに11人のメンバーを揃えるのに大変な苦労をし、集ったメンバーの顔ぶれを見た上で、そのつどポジションが決まるといった有様であった。従って誰がキャプテンであったかも必ずしも明確ではなく、いわば主将不在の不毛の年度で、一時は部の存続すら危ぶまれる最悪の事態にたち至った。しかし予科生が主体となって、よく耐え、よく忍んで、リーグ戦を戦い抜いたので、これ以上弱体化することはなく、この年をドン底の年として、翌年に飛躍の可能性をつないだ。

昭 和 24 年

主将　渡辺俊夫
最高学年生　森一美

試合メンバー

F.W. 井田（本1）・石川（本2）・渡辺（本2）・松本（本2）・富山（不詳）・相川（不詳）
B.K. 小林（本1）・吉沢（本1）・堤（予3）・針谷（予3）・石井（新1）
G.K. 高橋（予3）

戦　績
○関東大学リーグ戦（3部）
対国学院（10月15日／2－1勝）、 対日大（10月22日／2－0勝）
対東歯大（10月29日／3－2勝）、 対東工大（11月5日／1－0勝）
対駒沢（11月12日／4－0勝）、 対紅陵（11月19日／不戦勝）、 対専修（11月26日／不戦勝）
3部優勝、2部昇格を果す。

○三商大戦　日時不詳

対神戸（1－5敗）、 対大阪（4－2勝）

記　　事

本年より学制改革が行われ、6：5：3：3より6：3：3：4に移行、本校でも4月から新制1年が誕生した。

昨年9人もの大量卒業による痛手尚いえず新制1年生4人入部したが、病気休学もあり11人のメンバーを集めるのに苦労した。その為入部はしなかったが、高校時代の経験者である富山、相川両君に臨時出場を要請した結果、ようやくリーグ戦の為のフォーメーションを組むことができた。

このように学部、予科、新制、臨時メンバーと従来あるいは将来共に到底考えられない混成チームとなったが、3部転落の憂き目を何とか晴らしたいという全員の熱烈なファイトが盛り上り、年間を通じ長雨の泥濘戦ではあったが、5戦5勝2不戦勝の戦績を挙げ、ついに待望の2部昇格を果すことができ、全く感無量の一言に尽きた。

この赫々たる戦績を挙げ得たのは、諸先輩の必死の応援と、技術指導もさることながら、専門部から移したポールが腐り使いものにならなくなり、買うに金無く、結局部員の友人の世話で、立川から材木をかついで帰るという全員一致の燃えるようなファイトがあったからだと確言できる。

特に3部の中には、やくざ風の者もおり、試合を投げてグランドに坐り込む奴もいて全くサッカーを侮辱するものと憤慨に堪えず、この点からも3部脱出は商大サッカー部のプレステイッヂの為にもよかったと思った。

なお昇格を機に、ガリ版刷りだが、蹴球部部報創刊号を出す。ただし資料散逸の為内容は不明。惜しい資料を無くしたと残念でならない。

昭 和 25 年

主将　渡辺俊夫（本3）

マネジャー　石川正和（本3）

最高学年生　松本由之

試合メンバー

F.W. 井田（本2）・石川（本3）・松本（本3）・渡辺（本3）・斉藤（新2）・高田（新2）

B.K. 吉沢（本2）・針谷（本1）・田原（新2）・小林（本2）・堤（本1）

G.K. 高橋（本1）

戦　　績

○関東大学リーグ戦（2部）

対慈恵（10月7日／0－5敗／於東大）、 対千葉医大（10月14日／0－3敗／於八幡山）

対日医大（10月29日／5－0勝／於武蔵野）、 対農大（11月5日／3－1勝／於東大）

対明大（11月18日／0－7敗／於武蔵野）

2勝3敗　第4位

昭和24年10月15日
3部秋季リーグ戦開会式

右側　田原、石川、井田、
堤、小林、高橋
左側　渡辺、松本、吉沢、
針谷、石井





昭和26年
三商大戦対神戸
於　武蔵野グランド



昭和27年　春
国立からグラウンド
を移した時

○三商大戦

長年にわたった三商大戦は、学制改革により大阪商大が無くなった為、一応伝統試合の幕を閉じた。

記　事

食糧、衣服等を始めとする社会環境は本年に至りようやく安定のきざしが見え始めた。

それにつれて部員数も増加、総勢24名の大世帯になり部活動もやっと軌道に乗った。

従って久方振りの大人数の夏季合宿は、前年度の２部昇格もあり、活気に満ちたもので、グランドに出たボールの数は、ここ数年振りに多かった。

特にこの合宿で記憶に残っていることは、有力メンバー２人が部をやめたいと申し出で、長時間にわたり、無い頭脳を絞り哲学論、人生論を戦かわした末、ようやく部に踏み留まることに決定し、無事合宿の成果を挙げたことである。

しかしさてリーグ戦になると、２部には強豪が多く、２勝３敗と奮わなかったが、全員ベストを尽くした結果であり、今後の発展の礎ができたと思う。

一方多年にわたる伝統ある三商大戦は、学制改革により、東京商大が現在の一橋大学へと校名を変更したように、他の２校も種々変革があり、昨24年をもって一応試合を打切ることとなり、惜しくも幕を閉じた。

なお本年度「蹴球部部報」第２号には、当時の部長藻利教授の巻頭言を初め、部員各位のそれぞれの若い心が赤裸々に述べられており、戦後始めての活字となった部員の心情がよく伺われて誠に興味深い。

この貴重な資料は、針谷兄の秘蔵のものであることを一言つけ加えて置きたい。

昭和26年

主将　吉沢弘泰（本３）

マネジャー　篠宮清（本３）

最高学年生　井田登也、小林達夫、鵜飼質、木滑勇

試合メンバー

F.W. 井田（本３）・高末（新２）・宮田（新２）・高田菊（新３）・斉藤（新３）・高田勝（新１）

B.K. 田原（新３）・針谷（本２）・篠宮（本２）・吉沢（本３）・石井（新３）・堤（本２）

G.K. 高橋（本２）・田中（新２）

○関東大学リーグ戦（２部）

対法政（10月13日／点差不詳／敗）、対日医大（10月21日／５－０勝）

対東工大（10月28日／点差不詳／敗）、対慈恵（２－２分）

対千葉（11月18日／点差不詳／勝）、対農大（11月23日／点差不詳／勝）

○三商大戦

対神戸（６月18日／０－３敗）

大阪市大は不参加。

記　事

最上級生の責任ある立場となって、話し合ったことは、技術面での欠陥は気力と相手を上廻る動きと、チームワークで補おうということであった。

練習は一日おき、午後１時半より日没まで、国立グランドにおいてであった。日曜は練習マッチＯＢ戦をできるだけ組み、実戦と先輩を頼りにチーム力をアップするようにした。当時は、めん類とコッペパンはあったが、米飯は配給制であり、各自袋に入れて合宿に参加したと思う。

メンバー編成は、いろいろ苦労したが両ウイングに俊足の井田・高木・高田勝、ＣＦに俊足でシュート力のある高田菊、両インナーはキープ力のある宮田・斉藤、両サイドハーフは、活動量のある吉沢・田原、ＣＨと両バックは堅実型の篠宮・堤・石井、ＧＫは長身の高橋という布陣にきめた。もちろん不調の者のあった場合は流動的に変えた。吉沢主将が、今でいうゲームメーカーで、精力的にかけ廻っていたのが、印象に強い。

公式戦の皮切りは三商大神戸戦で、当時関西１部リーグの上位にいた神戸は、さすがに強く、完敗してしまった。試合後主将吉沢に活を入れられ、全員グランドを数周走らせられたことを覚えている。

夏の厳しい合宿を終え、チーム力もかなり向上し、いよいよ本番秋のリーグ戦を迎えた。グランドは三鷹の武蔵野サッカー場が主で、土のグランドとしてはよく整備されていたが、風が吹くと砂塵が舞い上がりひどかった。

個々の試合の内容は、記録も手元になく詳細は思い出せないが、東工大にハッサンというインドネシアの留学生がいて、群を抜いたテクニシャンだったことが印象的である。

我がチームは、ＦＷはボールと一緒にゴールに飛び込め、バックとキーパーは体を張ってゴールを死守せよということで、90分間かけ廻ることを武器に戦ってきた。力足りず結果は、４位か５位に終った。責任者として数々の反省は残った。しかし全員が一生懸命戦い抜いたというすがすがしさも残すことができた。今にして思えば、サッカーに明け、サッカーに暮れた最後の１年であった。これで卒業する２人とＯＢも一緒に、松本先輩のお宅でお酒をご馳走になったが、１年間の疲れがドッとでて、２人とも翌朝までダウンしてしまったことを思い出す。われわれ最上級生を助けて、一生懸命ともにチームのために尽してくれた下級生諸君に感謝している。

昭 和 27 年

主将　堤光義（本３）

マネジャー　高橋敬蔵（本３）

グランドマネジャー　斉藤隆（新４）

最高学年生　針谷操（本３）、石井弘志（新４）、田原洋二（新４）、高田菊夫（新４）

試合メンバー

F.W. 石井徹（新２）・橋本（新１）・高田菊（新４）・宮田（新３）・斉藤（新４）・高末（新３）

B.K. 堤（本３）・石井弘（新４）・志摩（新１）・田原（新４）・針谷（本３）・神代（新３）

G.K. 高橋（本３）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対農大（10月12日／２－１勝／於武蔵野）、対青学（10月19日／０－１敗／於武蔵野）

対東工大（10月26日／０－２敗／於武蔵野）、対法政（11月９日／１－３敗／於武蔵野）

対千葉（11月15日／２－２分／於東大）、対慈恵（11月23日／２－１勝／於武蔵野）

２部順位　青学、法政、東工大、一橋

○三商大戦

対神戸大（６月24日／０－４敗／於神戸大）

この年、大阪市大戦はなし。

記　事

本年は旧制大生の最後の年であり、また新制大生の最初の年であった。従って旧制３年と新制４年が同時に卒業するという珍しい年であり、新制４年生は最高学年生としての責任を一応旧制３年生と分ち合ったともいえる。

本年以降はすべて新制の４学年生のみとなった。

昭和28年

主将　神代祥男（４）

マネジャー　森康全（４）

最高学年生　高末隆、田中豊二、宮田幸三、山下誠一

試合メンバー

F.W. 高末（４）・宮田（４）・石井徹（３）・中岡（２）・橋本（２）・石原（２）・日方（１）

B.K. 神代（４）・高末（４）・宮田（４）・山下（４）・高田勝（３）・石原（２）・志摩（２）
馬場（２）・松丸（２）・福江（２）・桃井（２）・佐竹（１）・嶋田（１）・中路（１）

G.K. 田中（４）・高田勝（３）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）於武蔵野市民グランド

対横浜市大（１－４敗）、対千葉（６－２勝）、対法政（０－２敗）、対農大（０－３敗）

対東工大（１－２敗）、対青学（０－４敗）

１勝５敗　第５位。

記　事

春３月に旧制３名（堤・高橋・針谷）新制４名（石井弘・斉藤・高田菊・田原）の計７名の先輩

◄ 昭和28年　合宿風景





昭和30年 ►
三商大対神戸大・勝利の後

後列　中田、中路、浅井、佐竹、嶋田、日方
前列　橋本、福江、志摩、馬場、中岡





◄ 昭和30年
4年部員
後列　中岡、志摩、馬場、桃井
前列　松丸、福江、橋本

レギュラーが抜けたこと、他校もようやく実力をつけつつあったことから、技術面もさることながら、精神面と体力面とチームワークでなんとかリーグ戦を乗りきることを目標に、新キャプテン神代を中心に春夏２回の合宿や連日の猛練習を行ってリーグ戦に臨んだ。

緒戦の横浜市大戦では、後半になってポイントゲッター橋本の鋭いシュートが実を結び、待望の先取点をあげた。その後、一進一退のあとペナルティエリヤ附近で相手に与えたＦＫから、ゴール右隅にシュートを決められ、次第に疲労の出てきたバックスの弱点を突かれてキーパー田中の果敢なセービングにも拘らず、残念ながら緒戦を飾れなかった。

第２戦の千葉大戦では、橋本、日方のコンビで２点を先取、気勢を上げたが、その後相手のキック・アンド・ラッシュ攻勢に、前半は２－２と追いつかれてしまった。就職の為やむなく欠席した高末に代って初出場の石原も、センターリングやコーナーキックに技の冴えを見せたが得点に到らず、しばらく一進一退を続けたが、ハーフに下っていた宮田が絶妙なミドル・シュートを決めたことから、試合の流れが変り、キャプテン神代や中岡なども、次々と加点し、６－２で快勝した。

対法政、農大、青学戦は相手方の技術レベルが上廻っていた。我が方は気力と体力で応戦したが、力及ばず、特に対東工大戦はいい所まで押え込んだものの、結局１勝を上げるに止った。

しかしながら、千葉大を３部に蹴落し、２部キープの責任だけはなんとか果して、後輩にバトン・タッチしてようやく肩の荷をおろした。

マネジャーの森は試合でボールを蹴らなかったものの、終始、物心両面でグランドに声援を送っていた。山下は３年生までは練習や試合に出てきてくれたが、４年生の時はアルバイトの都合でやむなくリーグ戦には出場できなかった。

昭和29年

主将　高田勝巳（４）

マネジャー　石井徹（４）

サブマネジャー　馬場猛（３）

試合メンバー

F.W. 高田（４）・日方（２）・橋本（３）・中岡（３）・浅井（２）

B.K. 桃井（３）・松丸（３）・馬場（３）・福江（３）・志摩（３）

G.K. 嶋田（２）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対東工大（５－４勝）、対法政（１－２敗）、対横浜市大（２－４敗）、対農大（０－４敗）

対学芸大（４－３勝）、対青学（３－４敗）

２勝４敗　５位。

○三商大戦　於大阪市大

対大阪市大（０－２敗）、対神戸大（０－１敗）

記　事

春季シーズン最後の三商大戦において、不運も重なったが大阪市大にも敗れたため、秋のリーグ戦はポジションを大巾に変更し、春の不振挽回を期した。

初戦の東工大戦は当方が先行するも東工大の反撃を許し、終了間際に志摩の右からのシュートでようやく勝つことができた。

続く法大戦は立上り先行したが、直後ＧＫのパントが法政ＦＷの体に当り同点とされ、その後ゴール前でＧＫが捕球する際法政ＣＦに顔面を蹴られ退場し、高田がＧＫに代り10名で戦い、後半なかば過ぎ決勝の１点を許し涙を呑んだ。

リーグ最終戦の対青学大は２点先行するもバックスラインを次々と簡単に破られて４点を取られ必死の反撃も及ばず、３対４で破れた。

リーグ戦全般についていえることは、攻撃力に比べ守備が弱く、完敗を喫した農大戦以外は点を取ってもすぐ取り返えされるパターンの連続であった。限られたメンバーで戦うため、攻撃力を強くすれば守備が弱くならざるを得ず、特に志摩を攻撃に使うか守備に使うかその選択が難かしかった。

昭和30年

主将　志摩憲一（４）

マネジャー　馬場猛（４）

グランドマネジャー　橋本昭一（４）

最高学年生　中岡敬雄、福江睦郎、松丸鉱市、桃井昭二

試合メンバー

F.W. 中田（２）・桧山（２）・日方（３）・橋本（４）・中岡（４）・浅井（３）

B.K. 中路（３）・福江（４）・馬場（４）・志摩（４）・佐竹（３）

G.K. 嶋田（３）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対農大（０－１敗）、対日大（１－２敗）、対法政（０－１敗）、対青学（１－１分）

対横市大（１－２敗）、対学芸（３－１勝）

１勝４敗１分　６位。

○国公立大会　決勝

対教育大（０－１敗／延長）

○三商大戦　於小平

対大阪市大（４－０勝）、対神戸大（２－０勝）

復活後、初優勝。

記　事

昭和30年は、三商大戦で大阪市大を一蹴し、関西１部の神戸大にも予想をくつがえして、押されながらもよく守り、数少ないチャンスを生かして快勝し、チームの意気は大いにあがった。

また、国公立戦も順調に勝ち進み、決勝戦で１部の強豪教育大（現筑波大）と対戦、一歩も譲らず延長戦にもつれ込んだが惜しくも１点を許し敗退した。

率先垂範の志摩主将を先頭にレギュラーの半数を４年で固め、春の好成績から待望の１部復帰の希望を胸に練習にも一段と熱が入った。

松浦コーチの好指導と、コーチ不在時はグランドマネの厳しい笛でチーム力は着実に向上しているかのように思われた。

そしてリーグ戦開幕。

いつもの武蔵野サッカー場ではなく、世田谷の農大グランドでの対農大戦が第１戦。雨上りの軟弱なグランド。開幕試合の堅さからか両チーム一進一退で容易に得点できず前半は０対０。後半立ち上り、コーナーキックから押し込まれて１点。（手を使ったとの抗議容れられず。）その後奮起した一橋が押し気味の展開となったが、焦りからか、ボールが早めに中に集まり、相手の厚い守りに阻まれていた。が、決定的チャンスに相手フアウルがありＰＫを得た。入れれば同点。キッカーは橋本。ゴール右隅に低いライナー性のキック。通常ならば当然ゴールインのボールを農大ゴールキーパーはセービング一番、手先に当ててはじき出してしまった。そして数分後無情にもタイムアップの笛が♪

緒戦の明暗がその後の成績に大きく響き、農大は全勝優勝で１部に昇格。これに引きかえ、我が一橋は勝利を忘れたかのように１点差の敗戦を続け、最終戦の対学芸大が唯一の白星、青学大に引分けと予期に反した無残な成績で、諸先輩の御期待に副い得なかった。誠に悔いの残る一年であった。

昭 和 31 年

主将　日方大三郎（４）

主務マネジャー　嶋田英司（４）

グランドマネジャー　林祐三（３）

最高学年生　浅井浩夫、佐竹明和、中路信

試合メンバー

F.W. 清水（３）・日方（４）・桧山（３）・中田（３）・浅井（４）

B.K. 大石（２）・佐竹（４）・岩坂（３）・酒井（２）・中路（４）・鈴木（２）

G.K. 嶋田（４）・森下（３）

○関東大学リーグ戦（２部）

対武蔵（10月14日／３－１勝）、対法政（10月21日／１－５敗）

対日大（11月３日／０－２敗）、対日体大（11月11日／２－２分）

対学芸（11月18日／２－３敗）、 対青学（11月23日／０－２敗）

対横浜市大（11月25日／２－２分）

○国公立大会

対東外語（12月16日／４－０勝）、 対東工大（12月22日／５－０勝）

対東大（12月23日／５－３勝）

１勝４敗２分　第５位

記　事

この年から関東大学リーグが、１部８校、２部８校となった。前年度１部昇格を目指して奮戦した７名の先輩を送り出した為、チーム力がかなり低下したことは否めなかった。この為４年生は、この春に大量24名の新入部員を獲得し、当年度のリーグ戦に勝ち抜くことと共に、将来の一橋サッカーを担う新人を養成することを、二大目標にした。

リーグ戦は、緒戦は飾ったものの、苦戦の連続で結果的には１勝２分４敗で、学芸大の最終戦次第では６位で入替戦も覚悟せねばならぬ事態であったが、学芸大が敗れ、５位に踏み留まることができた。この為12月上旬に予定していた恒例の三商大戦遠征も取り止めざるを得なかった。

しかし、この憂うつな気分を吹き飛ばしてくれたのが、国公立戦であった。これはリーグ後のことであり各校共４年生抜きで試合が行われたが、一夏鍛えた１年生部員諸君の活躍も素晴らしく、東大を５－３で破り優勝の栄冠を得た。小金井の学芸大の霜柱でぬかるむグランドで、試合に出たレギュラーも、応援するサブも、一心同体となって東大を圧倒する様子を見て、これで俺達も卒業していけるな、との感慨を持ったことを、今でも懐しく思い出す。

昭 和 32 年

主将　中田鉄弥（４）　　マネジャー　林祐三（４）

副主将　岩坂朔郎（４）

最高学年生　清水裕、桧山博隆

試合メンバー

F.W. 清水（４）・酒井（３）・小野（２）・桧山（４）・中田（４）・韓（１）・古河（２）
三田（２）

B.K. 小杉（２）・田中（２）・斉藤（２）・岩坂（４）・田中（２）・大石（３）・鈴木（３）

G.K. 村上（１）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対日大（10月20日／１－２敗／於日吉）、 対東大（10月27日／１－３敗／於日吉）

対青学（11月３日／０－４敗／於武蔵野）、 対武蔵（11月９日／３－２勝／於東大農）

対日体（11月16日／２－２分／於東大農）、 対学芸（11月24日／１－０勝／於武蔵野）

対上智（11月30日／１－１分／於東大農）　　２勝３敗２分　第５位。

昭和31年

後列　佐竹、島田、中路
前列　浅井、中沢、日方





昭和32年11月

後列　三田、鈴木、今村、大国、有田、石原、斉藤、睦、鎗田、村上、菊島、小林、小野、古河、小杉、稲川、小沢
中列　韓、駒井、田中、酒井
前列　○林、○中田、○桧山、清水（○最上級生）

昭和33年

酒井、鈴木、駒井、大石



記　事

5月初旬、主将中田が練習中に膝を捻挫して戦列を離れ、主将代行の岩坂もリーグ戦中途で、足の骨を折るという不運なシーズンであった。2部リーグは前年の入替戦の結果、法政大が1部に昇格し、東大が1部から転落してきた。

リーグ戦まえの1部との練習試合では、

対農大（9月14日／0―11敗）、対慶応（10月9日／1―10敗）

対早稲田（10月15日／0―9敗）

と大敗し、先き行きが心配されたが、第1戦の日大戦では、新人ＬＩ韓が得意のドリブルで、バックとＧＫをかわして得点、1対2で敗れたが、優勝候補の日大と互角に戦った。第2戦以降も、2年、3年の活躍で善戦し、第3戦の青学戦以外は接戦であった。ＧＫに起用された村上は新人ながらリーグ戦全試合に出場した。この年、防衛大がリーグ加盟して3部で優勝、2部学芸大との入替戦に勝って2部に昇格した。

昭和33年

主将　鈴木久也（4）

マネジャー　駒井康（4）

最高学年生　大石仁、酒井敏行

試合メンバー

F.W. 高柳（2）・鈴木（4）・古河（3）・酒井（4）・小野（3）・三田（3）

B.K. 小杉（3）・斉藤（3）・田中（3）・鎗田（3）・大石（4）・韓（2）

G.K. 村上（2）

戦　績

○関東大学リーグ戦（2部）

対日大（10月19日／2―2分／於御殿下）、対上智（10月26日／2―0勝／於農学部）

対防衛大（11月3日／0―3敗／於御殿下）、対青学（11月9日／0―2敗／於御殿下）

対武蔵（11月16日／1―0勝／於御殿下）、対東大（11月22日／0―1敗／於小石川）

対日体大（11月30日／2―0勝／於御殿下）

3勝3敗1分　第4位。

○国公立大会

対東京医科歯科大（6月14日／10―0勝／於小平）、対東大（6月28日／2―0勝／於学芸大）

対商船大（6月29日／3―0勝／於小平）

優勝。

○三商大戦

於神戸、戦績不詳。

記　事

春の国公立大会は、３試合を15対０と無失点で優勝し、秋のリーグ戦に大きな期待がかけられたシーズンであった

リーグ戦まえの１部との練習試合も２勝２敗、得点６失点７でほぼ互角の試合内容であった。

第１戦は前年優勝の日大と大接戦の末２対２で引分けた。第２戦の対上智大戦は雨の中で２対０で快勝したが、ポイントゲッターのＬＩ酒井が鎖骨脱臼で退場した。その影響もあってか、第３戦、第４戦は、防大、青学になすところなく破れた。第６戦の東大戦は、この年アジア・オリンピック大会の為に新設された小石川蹴球場で、初めての有料試合であった。前後半とも優勢で、前半ＲＨ鎗田、ＣＨ大石のロングシュート、後半も鈴木のシュート等がいずれもゴールを割ることができず、前半右コーナーキックからの失点で、０対１で惜敗した

この年は、日本のサッカーにとって特筆すべきことが２件あった。

一つは、６月にアジア・オリンピックが東京で開催され、わが国で初めてサッカー専用のグランドがつくられたことである。

いま一つは、工藤監督のもとで早大が、日本で初めて４・３・３システムを採用したことである。昭和39年以降のサッカー・ブームの素地は、この年につくられたように思われる。

昭 和 34 年

主将　古河洋（４）

副主将　鎗田良昭（４）

マネジャー　石原良三（４）

グランド・マネジャー　三田達也（４）

最高学年生　小杉泰夫、小野輝夫、田中高峯、斉藤哲雄

試合メンバー

F.W. 高柳（３）・今村（３）・小林（３）・岡田（１）・小野（４）・古河（４）

B.K. 小杉（４）・斉藤（４）・鎗田（４）・田中（４）・韓（３）・今村（３）

G.K. 村上（３）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対日体大（10月18日／３－０勝／於農学部）、対上智（10月25日／１－０勝／於御殿下）

対武蔵（11月１日／１－１分／於農学部）、対成城（11月８日／１－１分／於御殿下）

対日大（11月15日／１－４敗／於御殿下）、対東大（11月23日／０－８敗／於御殿下）

対防衛大（11月29日／１－６敗／於御殿下）

２勝３敗２分　第４位。

○国公立大会

対東京医科歯科大（６月21日／２－１勝／於御殿下）

対都立大（６月27日／４－２勝／於御殿下）、対東大（６月28日／１－３敗）

第２位。

○三商大戦　於小平

対大阪市大（６月30日／５－０勝）、対神戸大（７月１日／２－４敗）

記　事

主将古河以下、最上級生の殆んどは２年生からリーグ戦の出場経験者で、加えて大型新人岡田が入部し、前年度に優るとも劣らない好チームであった。

春のシーズンは、国公立大会は決勝で東大に１対３で敗れ、三商大戦は神戸大に延長で２対４で敗れ、ともに２位に終った。

リーグ戦は、第１戦日体大を３対０、第２戦上智大を１対０と連破し、順調なすべり出しであった。第３戦武蔵大戦、第４戦成城大戦とも１対１で引分けてから、チームのムードが一変し、後半の上位３校日大・東大・防大と３戦は３対18と大敗した。33年、34年と２ケ月にわたるリーグ戦７戦を勝ち抜くことの難しさをいやというほど味あわされた。

昭 和 35 年

主将　今村秋夫（４）

マネジャー　小沢純一（４）

グランド・マネジャー　日巻久匂男（３）

最高学年生　土井鼎、村上信勝、飯沼八州彦、小林成古、高柳雄一、笹田泰正、韓英沢

試合メンバー

F.W. 大野（３）・瀬戸（３）・久保田（３）・伊藤（２）・韓（４）・岡田（２）・野上（２）

B.K. 高柳（４）・梅田（３）・小林（４）・土井（４）・今村（４）・

G.K. 村上（４）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対日大（10月15日／２－２分／於御殿下）、対日体大（10月22日／０－５敗／於東伏見）

対成城（10月29日／０－２敗／於東伏見）、対武蔵（11月６日／０－０分／於東伏見）

対上智（11月13日／２－１勝／於御殿下）、対東大（11月19日／１－４敗／於御殿下）

対防衛大（11月26日／０－３敗／於御殿下）

１勝４敗２分　第６位。

○国公立大会

対農工大（６月25日／勝）、対電通大（７月２日／勝）

対教育大（７月３日／敗）

○三商大戦　於大阪

対神戸大（６月18日／０－４敗）、対大阪市大（６月19日／２－３敗）

昭和34年 ►

後列　村上、小林、日巻、土井、小沢
前列　笹田、今村、高柳、飯沼





◄ 昭和35年１月

後列　久保田、小沢、柿沢、日巻、村上(康)、清水(拡)、船木、岡田、野上、今村、飯沼
中列　土井、韓、大野、笹田、高柳、梅田、村上(信)、細野、滝浦
前列　深野、○小杉、○小野、○田中、○古河、○鎗田、石井、吉田、清水(邦)　(○最上級生)

昭和36年 ►

後列　久保田、柿沢、瀬戸、大野
前列　清水、梅田、秋山



記　事

ＲＢ小杉、ＬＢ斉藤、ＣＨ田中、ＬＨ鎗田、ＲＩ小野、ＬＷ古河と６人のレギュラーが卒業したあとのチーム編成は、ＢＫの強化を中心に考えざるをえなかった。ＧＫ村上は１年生から、リーグ戦には全試合に出場し、２部リーグではトップクラスのＧＫに成長していた。ＲＷ高柳、ＲＩ小林をＢＫに下げ、ＦＷはＣＦ韓、ＬＩ岡田を中心に２、３年生の成長に期待した体制となった。

ＯＢも高田勝先輩を中心に、チームの弱体化を心配され、橋本昭一先輩が監督に就任された。春の合宿のときから「３部にだけは落すなよ」とＯＢに言われ続けたが、今村主将以下チームの目標は２部優勝だった。春の合宿は負傷者が続出したが、夏の小平合宿後から、リーグ戦直前頃は、チーム力はかなり強化された。２年生の成長が、３年・４年をかなり刺激した結果である。

リーグ戦第１戦は優勝候補の日大と対戦し、２対２で惜しい試合と引分けた。第２戦、早大東伏見での日体大戦は０対５と惨敗した。この試合は前半０対０であったが後半10分頃、日体大ＬＷのＰエリアの一番遠い隅からの強烈なシュートで均衡が破れた。東伏見での３連戦は無得点に終った。悪夢のような３連戦だった。

第５戦の御殿下での上智大戦は、主将今村のハンドからＰＫで１点を献上したが、これが逆にイレブンを奮起させ、２対１で逆転勝した。この年の上智大は好チームであったが、最後まで勝運に恵まれず最下位となった。

第６戦の東大戦は１対４で敗れたが、ＦＷもＢＫもよく動いた好ゲームだった。とくに岡田（２年）が再三好シュートをうち、一矢を報いてくれた。

リーグ戦７戦の得失点は５対17、無得点試合４と得点力のなさが、結果的に大量失点を許すことになった。この年は成城大が優勝したが、各校の実力差があまりなかった年だっただけに、悔まれるシーズンであった。

昭 和 36 年

主将　梅田清（４）

マネジャー　久保田秀一（４）

グランド・マネジャー　秋山和夫（４）

最高学年生　大野章雄、柿沢光郎、瀬戸泰、清水邦男、川村英夫

試合メンバー

F.W. 大野（４）・瀬戸（４）・池田（２）・岡田（３）・野上（３）

B.K. 久保田（４）・梅田（４）・清水（３）・吉田（３）・石綿（２）

G.K. 柿沢（４）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対日大（10月15日／０－３敗／於東大農）、 対東大（10月21日／１－２敗／於東大農）

対成城（10月29日／１－２敗／於東大農）、 対防衛大（11月４日／１－１分／於東大農）

対武蔵（11月12日／０－０分／於東大御殿下）、 対上智（11月18日／０－４敗／東大御殿下）

対日体大（11月25日／２－２敗／東大御殿下）

この結果、日体大と共に同率７位となり、順位決定戦が行われた。決定戦はまれにみる接戦となったが、池田（２）の決勝シュートにより貴重な１勝を得た。

○大学選手権

１回戦　対松山商大（５－０勝／於東大御殿下）

２回戦　対慶応（０－３敗／於小石川）

○三商大戦

１位　神戸大　２位　一橋大　３位　大阪市立大

昭 和 37 年

主将　岡田紀雄（４）

マネジャー　菊地英輔（４）

グランド・マネジャー　石井鴨生（４）

最高学年生　伊藤光生（現、山内光生）、清水拡、細野宣昭、吉田弘司、野上桂一、韓英沢（現、川村英夫）

試合メンバー

F.W. 伊藤（４）・池田（３）・韓（４）・岡田（４）・大橋（３）・野上（４）

B.K. 清水拡（４）・永山（３）・古川（２）・石井（３）・清水征（１）・岡田（４）・吉田（４）
細野（４）

G.K. 森岡（３）・山田（２）

○関東大学リーグ戦（２部）

対東大（10月13日／０－２敗／於東大御殿下）、対農大（10月20日／３－１勝／於東大御殿下）

対成城（10月27日／１－４敗／於東大御殿下）、対上智（11月３日／０－６敗／於東大御殿下）

対防衛大（11月11日／３－１勝／於東大御殿下）、対武蔵（11月18日／２－０勝／於東大御殿下）

対自由大（11月25日／０－４敗／於東大御殿下）

３勝４敗で東大、成城大に続き、上智大・防衛大と同率３位。

○国公立大会

準決勝戦　対東大（３－２勝／於東工大）

決 勝 戦　対教育大（２－１勝／於東工大）

優勝。

○三商大戦

対大阪市大（４－１勝／於西宮市営グランド）

対神戸大（１－１分／於西宮市営グランド）

１勝１分にて神戸大と同率優勝。

記　事

春の国公立戦では、外語大などを破った一橋は準決勝戦で好天の中、東大と対戦。右ＣＫより岡田のヘディングシュート及び相手ＢＫ安達の自滅点などもあり前後半を通じ２対２となったが、一橋は伊藤のアシストにより、清水征が決勝ゴールを決めた。

決勝戦は教育大との対戦。敵は後半10分以降、ＯＲ佐藤ほか一軍を投入するも、結局２対１で１部リーグチームを破り念願の国公立大会優勝をかざることができた。

この直後西下して行われた三商大戦では、大阪市大を破り、神戸大とは引分けたが、遠来の一橋の優勝と決まりカップは一橋が持ち帰った。

例年のことながら、１年間の総決算は秋の関東大学リーグ戦（当時は１部８校、２部８校、３部32校）であり、２部リーグのメッカ御殿下グランドには数々の想い出があるが、我々は日体大との最下位決定戦を行った翌年でもあり今年こそはの意気に燃えていた。春のシーズンの連続優勝に自信を深め、開始前にはレギュラー合宿も行った。

開幕戦の東大戦は相手ＢＫのマークも厳しく、雨上りのグランドでボールが止るなどシュートチャンスをのがした一方、後藤、南等に右及び中央を突破され敗戦。やはりショックであった。

第２戦は前年１部から陥落してきた農大。強力ではあったが、当方必勝を期し３対１で快勝。部員一同この１勝にわいた。

第３戦の成城大は、開始直後２点先取され苦しい立ち上りとなった。後半１点を返し２対１としたが相手ＦＷ名取ら長身選手にかきまわされ敗れてしまった。

第４戦上智大戦はオープン攻撃でまさる同チームに大敗。前試合にて負傷のＧＫ森岡に代わり出場した山田の不なれもあったが、何より相手のスピード気力がまさっていた。

第５戦防衛大戦は当方気力が充実し、前半快調なすべり出しで３対０にて終了。後半体格的にまさる敵にゴール前の混戦で２点返されたがタイムアップ。

第６戦武蔵大戦は、押し気味ながら得点できず、主審の時間見誤りの為10分程短く前半終了。後半も相手ＢＫの健闘で引分けかと思われたが、ゲーム終了数分前にようやく２得点し勝利。ＦＷのねばり勝ちであった。

最終戦は３部から上ってきた自由大との対戦。同チームの戦績から勝てる相手とみたが、小兵ながら身のこなしのよいＦＷ２人に球をまわされ敗戦。当方リーグ戦勝越しの悲願とは裏はらな試合ぶりはシーズン最後を飾るにはふさわしくなかった。

総評としては、当年度は周囲の期待も大きかったが、チームの中からみると、キャプテン岡田が選手として優れており自らリーダーシップを発揮したこと、３年生（含む２年古川）が充分チームを支える力に成長してくれたこと、１年生ながら清水征の活躍、それに韓さんのカムバックなど、チーム力が充実していたのは事実であった。

昭和38年

主将　池田致（４）

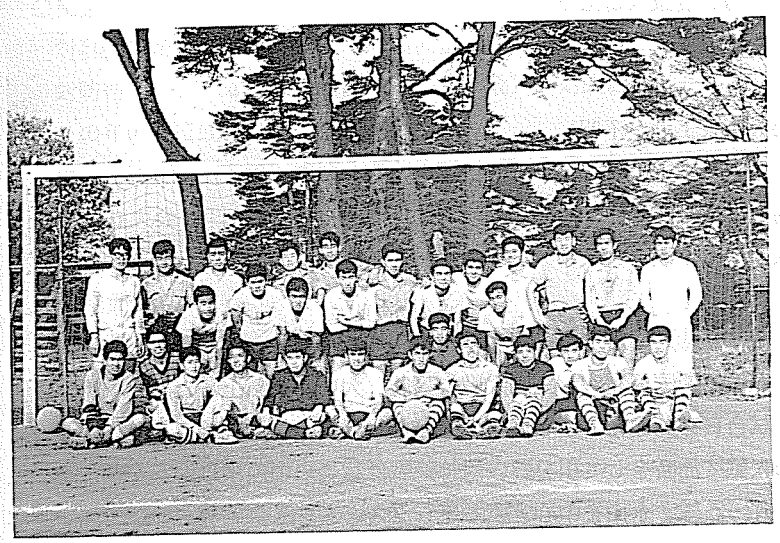
マネジャー　中村肇（４）

グランド・マネジャー　斉藤国雄（４）

昭和37年

菊地、吉田、清水、細野、
岡田、韓、伊藤、野上、石
井





昭和38年　春
新入生を迎えて

後列　中村、原賀、寺西、
堀江、永山、村林、
斉藤、槇田、黒田、
三枝、白石、？
中列　瓜田、田中、古川、
？　相良、三浦、
前列　森岡、菊池、？　石
井、朝来野、池田、
松島、大橋、山田、
？　栗田、伊藤

昭和39年

後列　寺西、白石、古川
前列　山田、村林、朝来野



最高学年生　石井光雄、石綿浩之、大橋祥勝、永山在紀、原賀英明、松島源吉、森岡義久

試合メンバー

F.W. 池田（4）・大橋（4）・村林（3）・清水征（2）・田中（2）・相良（2）

B.K. 石井（4）・石綿（4）・永山（4）・原賀（4）・松島（4）・古川（3）・朝来野（3）
斉藤（3）

G.K. 森岡（4）・山田（3）

戦　績

○関東大学リーグ戦（2部）

対上智（10月6日／2－4敗／於東大御殿下）、対防衛大（10月20日／2－0勝／於小平）
対成城（10月26日／5－5分／於東大御殿下）、対東大（11月2日／1－2敗／於東大御殿下）
対日体大（11月9日／1－2敗／於東大御殿下）
対自由大（11月17日／不明　多分敗／於東大御殿下）
対農大（11月23日／2－1勝／於東大御殿下）
2勝4敗1分　第6位。

○国公立大会

優勝（優勝決定戦は学芸大か東工大か不明）

○三商大戦　於小平

対神戸大（1－0勝）、対大阪市大（引分け）
一橋／1勝1分　神戸大／1勝1敗　大阪市大／1敗1分

記　事

春合宿の猛練習と好運もあって、国公立戦・三商大戦で優勝、大いに意気上った。

国公立戦では、教育大が試合日を間違えて途中で不戦敗となった為、優勝を拾うこととなった。

三商大戦では、対大阪市大戦で油断をして引分け、対神戸戦は猛暑の中前半に池田が1点を先取し、後半神戸の猛攻　を石井・石綿・永山を中心とするバックスと、ＧＫ森岡がしのいで優勝を掌中にした。

北軽井沢で走ることに重点をおいた一次合宿、小平で組織プレイを主体とした二次合宿を行い、リーグ戦に備えた。北軽井沢では浅間の峰を仰ぎみながら斉藤の冷酷とも思える笛で徹底してダッシュの練習に汗を流したことが今となってはよい想い出である。

秋のリーグ戦の初戦の対上智大戦では、前半のリードを後半守りきれず惜敗。対防衛大戦はホームグランドで快勝。雨中の対成城大戦は前半大きくリードされ、これまでと思われたが、後半大橋と清水の大活躍により辛くも引分け。対東大戦以降1点差に泣く惜敗が続き、チームの雰囲気も暗くなったが、最終の農大戦で大橋が貴重な決勝点をあげて辛勝し、入替戦といった不名誉な大事にも至らず、4年一同安堵と無念の思いで小平のサッカー生活に終止符を打った。

昭 和 39 年

主将　古川和正（4）
マネジャー　白石治紀（4）
グランド・マネジャー　寺西重郎（4）
最高学年生　朝来野紀生、村林昌二、山田充夫

試合メンバー

F.W. 村林（4）・相良（3）・田中（3）・市川（2）・三浦（2）・高峯（1）
B.K. 古川（4）・朝来野（4）・清水（3）・斉藤（3）・堀江（3）・槇田（2）
G.K. 山田（4）・栗又（2）

戦　績

○関東大学リーグ戦（2部）於東大御殿下

対自由学園大（3－1勝）、対順天堂大（2－1勝）、対東大（0－1敗）
対防衛大（2－4敗）、対法政（1－2敗）、対成城（1－3敗）、対上智（2－4敗）
この年の最終成績は、
法政、順天堂、上智、成城、東大、防衛大、一橋、自由学園大

○国公立大会

対東大（0－5敗／於東大御殿下）

○三商大戦

対神戸大（0－1敗／於神戸大）、対大阪市大（0－3敗／於神戸大）

記　事

前年のレギュラーが5～6人卒業で抜けた為、春のシーズンはフォーメーション作りが間に合わず、苦しいシーズン開始であった。三商大戦では万年ドンジリだった大阪市大が強く、優勝した。新4年生にとって秋のリーグ戦への不安もあり、非常につらい思いをした時期であった。攻め、守りをそれぞれ強化する為、実力のある朝鮮大学と定期戦を含め3試合行った。0対6、3対6、1対3と3連敗したものの少しずつ差を縮めることができた。

合宿は小平で行った。

関東大学リーグ戦は東京オリンピック開催の為開始が遅れ、10月31日開始となった。開始後4連敗し、やっと第5戦、第6戦と2連勝し2部の地位を維持した。最終ゲームが終ったのは12月中旬のはだ寒い日であったと記憶する。

昭 和 40 年

主将　清水征四郎（4）
副主将　田中好輔（4）

マネジャー　堀江正郎（４）
最高学年生　斉藤泰敏、相良保彦

試合メンバー

F.W. 清水（４）・相良（４）・三浦（３）・伊藤（３）・丸山（３）・高峯（２）・高場（旧姓可部、２）・清水幸（１）

B.K. 斉藤（４）・田中（４）・堀江（４）・有田（３）・市川（３）・槇田（３）・松崎（３）

G.K. 栗又（３）・中沢（１）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対順天堂大（10月９日／０－３敗／於駒沢第二）、対法政（10月16日／０－６敗／於駒沢第二）
対成城（10月23日／４－２勝／於東大御殿下）、対上智（10月31日／０－３敗／於東大御殿下）
対東大（11月７日／１－１分／於東大御殿下）、対防衛大（11月15日／１－２敗／於東大御殿下）
対東京農大（11月20日／３－１勝／於駒沢第二）
第６位。

○国公立大会

東大を敗り決勝に駒を進めたが、東京教育大（現、筑波大）に敗れ、準優勝。

○三商大戦

於小平。大阪市大に楽勝するも、神戸大に惜敗し、準優勝。

記　事

昭和40年度のわが部は、４年生が５名と数少く、試合の中心メンバーでもあったことから、グランド・マネジャーを設ける余力がなく、主将が練習の笛を吹き、副主将以下の４年生がこれを補佐、代理するという体制をとった。

その意味で、主将の責務はこれまで以上に重いものであった。上記の通り、当年度の戦績は決して誇れるものではなく、むしろ平凡以下というべきであるが、主将の任に就いた清水征四郎君の文字通り獅子奮迅の活躍によって支えられたものであることは特記されるべきであろう。結果としてあまりよい成績が残せなかったのは、副主将以下４年生の力不足に起因するというべきである。

春季シーズンの滑り出しは好調であった。層の厚い３年生が逞しく成長し、戦力は増進していた。慶大（関東１部）、朝鮮大との練習試合では、ほぼ互角の戦をし、また国公立大会でも準優勝とはいえ、関東１部上位の教育大に善戦し、秋のリーグ戦への展望には明るいものがあった。

三商大戦で神戸大に敗れたのは、この戦績にやや浮かれていたチームの空気に起因していたように思われる。

小平での夏季強化合宿では、春季の反省から、士気の引締めと得点力の強化に重点を置き、またリーグ戦開幕の直前にも小平でレギュラー合宿を張り、コンディションの調整とチームの結束を図った。

しかし、蓋を開けて見ると惨々のスタートとなった。緒戦は前年に勝をおさめた順天堂大（２年前に２部に昇格）、第２戦は法政大、と２試合連続してバックスの脆さ、得点力の弱さが露呈し、

大敗を喫して了った。

第３戦の対成城大戦の勝利でようやく一息ついた恰好になったが、その後も春に勝っている東大とは引分け、また白星の勘定に入れていた対防衛大に逆転敗を喫する等苦戦が続いた。

リーグ戦第６戦が終った時点での戦績は１勝１分４敗。最終の対農大戦に勝てなければ最下位の可能性濃厚という状況にあった。農大は左サイドからの攻撃力が強く、前年はその為に苦汁を飲まされた強豪である。

〝勝つしかない〟、〝得点しなければ勝ちはない〟。これがせっぱつまった我々の戦略であった。これまでＩＲを務めた清水がＣＦにまわり、右サイドをＩＲ：三浦、ＯＲ：高峯で固め、左サイドはＯＬの相良をＩＬに、またＯＬには清水（１年）を起用し、ともかく点を取ることに主眼を置いたギャンブルに出たのである。そしてこの作戦は成功し、タイトロープにも似た切ない緊張からの解放感と、勝利の美酒を同時に味わうことができたのである。

昭 和 41 年

主将兼グランド・マネジャー　三浦侯宣（４）

副主将　有田誠（４）

マネジャー　小林純一（３）

最高学年生　丸山克彦、槇田元生、栗又俊二、市川彰夫

試合メンバー

F.W. 三浦（４）・丸山（４）・高峯（３）・可部（３）・土井（１）

B.K. 有田誠（４）・槇田（４）・市川（４）・松崎（３）・馬場（３）・天野（２）
有田稔（２）

G.K. 栗又（４）・中沢（２）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対東大（９月18日／０－３敗）、対農大（９月29日／３－２勝）

対日体大（10月２日／０－３敗）、対上智（10月８日／３－３分）

対順天堂大（10月15日／１－４敗）、対青学（10月23日／０－２敗）

対成城（10月29日／０－３敗）

以上の通り、第４戦対上智大戦で、勝てる試合を引分け、第５戦順天堂大戦で敗退したあたりからチームの調子が落ち、結局リーグ戦を終了して、１勝６敗１分け。８チーム中最下位で３部との入替戦へ。

○入替戦

対国士館大（０－４敗）

３部優勝の国士館大と対戦したが、レギュラー２名が負傷欠場。またそれ以上に下から上がるものの勢いの前に飲まれ完敗。まことに残念ながら３部に落ちるはめとなった。

○国公立大会

5月に学芸大グランド（小金井）で行われ、準決勝で敗退。3位に終った。

○三商大戦

7月に神戸に遠征。神戸大グランドにて。

第1戦は雨天の中田んぼのようなグランドで、2対0で大阪市大に勝ち、第2戦は0対2で神戸大に敗れ、2位。

昭 和 42 年

主将　高峯文世（4）

マネジャー　佐藤盛夫（4）

グランド・マネジャー　小林純一（4）

最高学年生　馬場達夫、松崎和夫、高場恭幸

試合メンバー

F.W. 高峯（4）・高場（旧姓可部、4）・清水（3）・土井（2）・内村（2）・小島（1）
柴田（1）

B.K. 馬場（4）・松崎（4）・有田（3）・天野（3）・種田（2）・出原（2）・吉川（2）
渡辺（2）・竿代（1）

G.K. 中沢（3）・高橋（2）

戦　績

○関東大学リーグ戦（3部）

対関東学院大（10月15日／1－0勝／於学芸大）、対防衛大（10月22日／3－3分／於小平）

対学習院大（11月2日／0－0分／於小平）、対自由学園大（11月5日／1－0勝／於学芸大）

対学芸大（11月12日／0－2敗／於学芸大）、対千葉大（11月19日／2－1勝／於学芸大）

対成蹊大（11月23日／2－3敗／於成蹊大）

リーグ戦績：3勝2敗2分　第3位。

○国公立大会

対東工大（6月11日／1－2敗／於小平）

○三商大戦

対神戸大（6月27日／1－1分／於小平）、対大阪市大（6月28日／2－1勝／於小平）

一橋大優勝。

記　事

前年度に無念にも関東大学リーグ2部から3部へ転落した1年目であり、悔しさと2部復帰にかける全部員の激しい闘志の中で春先から急ピッチな練習となった。シーズンが進むにつれて、従来から悩み続けていた基本的体力、技術力、精神力と高度な戦略との現実のアンバランスに結論を出さないままに、さらに、中心選手の故障があいつぐ中でリーグ戦に突入せざるを得なかった。リー

グ戦に先がけた春の国公立戦はＦＷ、ＢＫの連携がチグハグで不覚にも第１戦で敗退したが、三商大戦には優勝し、夏の合宿へと入った。

本年はなんとしてでも３部優勝を果たして、２部復帰を実現することが転落第１年目の絶対的な使命であるということで、緊張に身振いして第１戦を迎え、強敵関東学院大を撃破して、まがりなりにも足がかりをつかんだ。しかも第２戦防衛大に３対０とリードした時はかなりいけると思ったが、リードしながら拙守により後半15分間に３対３と追いつかれた時から大きく方向が変ってしまった。第３戦学習院大にも引分け、第４戦自由学園大も苦しい試合展開の中、なんとか１点をねじ込み撃退、学芸大戦へ一応敗け無し同志でぶつかることとなった。対学芸大戦は前日来の雨でぬかるグランド、小雨の中、両校とも優勝を意識して立ち上がり固い動きでパスミスが目立った。前半半ば、学芸大ハーフからのロビングを飛び込まれて１点ゲットされ、その後一進一退、徐々に重馬場に強い相手重量バックスのキック力、中盤から一挙にゴール前へロビングを上げる攻勢に押され気味となる。わが方はラストパスがＦＷ高峯・土井の走り込んだ後に出、グランドに足をとられターンがきかず得点機を再三逸し、後半また、ＣＫから１点を失って、遂に、タイムアップ。優勝本命の学芸大に致命的な敗戦を喫し、優勝への望みを断たれてしまった。ここに緊張の糸が切れ、第６戦は勝ったものの、最終戦は押しまくりながら、粘りを欠き逆襲で失点し、敗戦。最終結果３勝２敗２分で第３位に終り、念願の入替戦出場権を獲得することができず、有田を中心とする後輩に、涙の申し送りをすることとなった。

昭 和 43 年

主将　有田捻（４）
副主将兼グランド・マネジャー　清水幸男（４）
マネジャー　佐藤哲太郎（４）
最高学年生　中沢泰二、天野四郎、鈴木秀美

試合メンバー

F.W. 清水（４）・内村（３）・岡（３）・土井（３）・小島（２）・川合（２）
B.K. 天野（４）・鈴木（４）・出原（３）・種田（３）・丸山（２）・竿代（２）・有田（４）
吉川（３）・渡辺（３）
G.K. 中沢（４）

戦　績

○東京都リーグ戦（１部）

対自由学園大（10月６日／１－３敗／於小平）、 対都立大（10月10日／５－１勝／於小平）
対学習院大（10月13日／１－０勝／於小平）、 対亜細亜大（10月20日／０－１敗／於小平）
対専修大（10月27日／２－２分／於小平）、 対成蹊大（11月３日／２－０勝／於小平）
対武蔵大（11月10日／４－１勝／於武蔵）、 対東工大（11月17日／３－１勝／於小平）
対商船大（11月23日／２－１勝／於小平）
リーグ戦成績：６勝２敗１分。勝点13で第２位。

第１位の自由学園（６勝３分、勝点15）とともに関東大学リーグ２部入替戦トーナメントに出場。

○関東大学リーグ２部入替戦トーナメント

第１回戦　　対順天堂大（千葉県リーグ代表12月１日／２－３敗／於藤沢）

○国公立大会

対商船大（６月16日／３－１勝）、 対都立大（６月23日／２－０勝）

準決勝戦　　対教育大（６月29日／０－５敗）

三位決定戦　　対学芸大（６月30日／０－１敗）

○三商大戦

対大阪市大（７月６日／１－０勝）、 対神戸大（７月７日／０－１敗）

○対朝鮮大学定期戦

対朝鮮大（９月23日／０－９敗）

記　事

昭和43年は関東リーグの編成替えが実施された年であった。関東リーグ１・２部は従来どうりであったが、３部以下は各県単位に東京都リーグ、千葉県リーグ、神奈川県リーグ、埼玉県リーグと地域ごとにリーグが結成された。県リーグの１・２位計８チームがトーナメント戦で争い上位２チームが関東リーグ２部７・８位と入替戦を戦うこととなった。

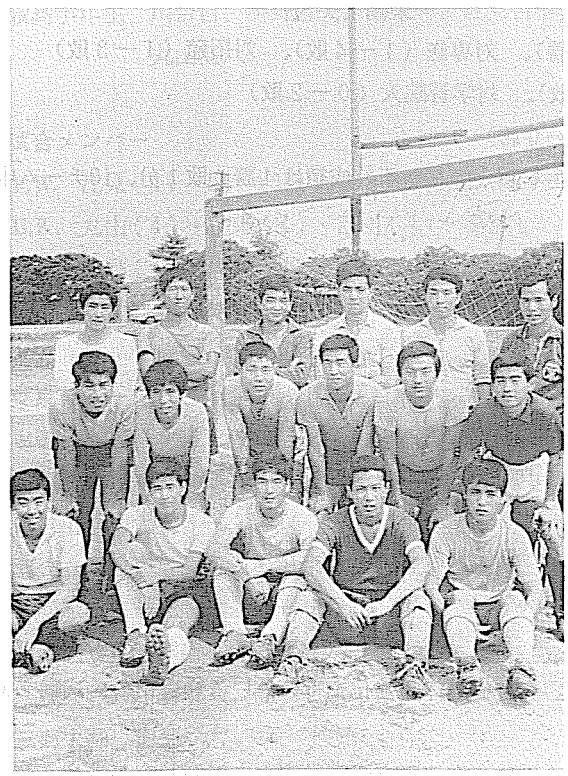
組織替えがあったとはいえ、我々の目標は昨年に引続き関東リーグ２部復帰であった。想い起こせば２年前、駒沢サブグランドにて入替戦で国士館大に大敗し、３部転落となった屈辱の試合のシーンは、当時２年生であった我々の心に深く焼きついていた。負けることがこんなに惨めなことか、この悔しさを知っている我々が在学中に２部復帰を果たそうと意気込んで春の合宿を迎えた。しかしながら国公立大会、三商大戦と不本意な成績に終り、さらに夏合宿後の朝鮮大定期戦では０対９と完膚無きまでに打ちのめされ、不安の内にリーグ戦を迎えた。しかも初戦は強敵自由学園大。試合は調子の出ないまま前半３点を先取され後半盛り返したものの１対３で敗れた。この試合ＦＷの内村（３年）がヘッディングで競った際、頭部に重傷を負ってしまった。先行き暗雲が立ち込めたが、第２戦の都立大戦で３年生が奮気し土井の２点をはじめ、吉川、岡、種田のゲットにより５対１で快勝した。この試合を契機とし、また当時のチームがゲームをやりながら上達したこともあり、最終的に東京都リーグ第２位となり関東リーグ２部入替戦トーナメントに出場した。

トーナメント初戦は、千葉県リーグ代表で昨年まで２部だった順天堂大であった。前半押され気味であったが40分、ＰＫを得た。チーム内随一のテクニックを誇る３年の土井にＰＫを指示したが惜しくもはずれ、前半は両チーム無得点。後半立ち上り１点を先取されたが、31分、39分と執念の反撃により遂に逆転。勝利も間近と思われた。しかし勝利の女神は残り５分間に順天堂大に微笑み再逆転されてしまった。今でもこの試合を思い出すたびに悔しさと反省で胸がしめつけられる。ＰＫを何故最高責任者の主将がキッカーとならなかったか、最後の５分間を守りに徹する指示をしなかったか。主将として最後の試合で悔いを残すことになってしまった。



▲ 昭和42年
4年生・夏合宿

後列　高場、小林、高峯、
　　馬場
前列　松崎、佐藤



◀
昭和43年

後列　内村、天野、清水、中沢、岡、種田
中列　丸山、土井、本田、有田、吉川、佐藤
前列　渡辺、小島、竿代、丸杉、川合

昭 和 44 年

主将　土井徳秋（4）
副主将　吉川実（4）
マネジャー　望月公雄（4）
サブ・マネジャー　矢尾板健二（1）
最高学年生　内村透、種田勝正、渡辺恵、出原和正、岡猛夫

試合メンバー

試合により、若干メンバーの変更はあったが、最も重要なリーグ戦は、ほぼ以下のポジションで戦った。

F.W. 内村（4）・土井（4）・小島（3）・川合（3）・柴田（3）
B.K. 竿代（3）・種田（4）・渡辺（4）・出原（4）・丸山（3）・丸杉（3）・有吉（1）
吉川（4）・岡（4）
G.K. 吉川（3）・本田（3）

戦　績

○東京都リーグ戦（1部）

対明治（1－1分）、対亜細亜大（1－0勝）、対専修（1－4敗）、対拓殖（1－3敗）
対東工大（5－1勝）、対成蹊大（0－2敗）、対学習院大（0－2敗）
対都立大（5－2勝）、対自由学園大（1－0勝）
試合グランドは、明治学院大・一橋大・自由学園大の3ケ所。成績は4勝4敗1分、10チーム中5位。

○国公立大会　於小平

1回戦　対電通大（4－1勝）
2回戦　対東工大（3－0勝）
準決勝戦　対教育大（0－1敗）

○三商大戦　於小平

対大阪市大（4－0勝）、対神戸大（0－2敗）

○対朝鮮大学定期戦

2対3敗

記　事

関東大学リーグ2部復帰を目標に練習開始。春合宿で体力強化を行い、いよいよ初の公式戦である国公立戦に突入した。

1回戦の電通大、2回戦の東工大を文句なく破り、準決勝で強豪教育大と対戦したが惜しくも0対1で涙をのんだ。しかし、関東リーグ1部校を相手にかなり善戦したことで、大きな自信を持った。その後、当時日本の大学相手に連勝記録を更新中の朝鮮大学と対戦。小平の朝鮮大グランドで、

朝鮮大生のほとんどが見守る中でゲームを行ったが、２対２の大接戦。引分けでタイムアップという感じであったが、朝鮮大レフェリーのホイッスルは、いっこうに鳴らず、かなりタイムオーバーしたところでついに力尽き１点を許したところでホイッスル。武蔵野の陽が落ちる直前であった。

秋のリーグ戦は、なんとしてでも全勝という意気でのぞんだが、第１戦の明治学院大戦で押しまくりながら、結局勝ち越し点が奪えず１対１の痛恨の引分け。

亜細亜大戦では、川合のヘッディングによる１点のリードをバックスがよく守りきり、１対０の勝利。

しかし、この後の専修大、拓殖大というサッカー新興勢力の大学に敗れたのが痛く、自由大、東工大、都立大などのチームは軽く蹴ちらしたものの、ついに５位に終わり関東リーグ復帰の目標を果たせなかった。しかし、このリーグ戦で小島・川合・丸山などの３年生以下が、大きく成長。２部復帰の夢を彼らに託して、４年生部員８人はそれぞれ新しい社会へ出て行った。

昭 和 45 年

主将　小島収（４）

マネジャー　吉川敏一（４）

グランド・マネジャー　柴田暁（４）

最高学年生　川合哲、宇野哲夫、関栄一、江見吉信、竿代興志、本田和夫、丸杉孝三郎
丸山清八

試合メンバー

F.W. 江見（４）・関（４）・川合（４）・矢野（２）・山崎（１）・松沼（１）

B.K. 丸山（４）・宇野（４）・吉川（４）・湯浦（３）・宮内（３）・宮（１）・小山（１）・大江（１）

M.F. 小島（４）・新福（２）・高垣（１）

G.K. 竿代（４）・本田（４）

戦　績

○東京都リーグ戦（１部） 於小平・自由学園大

対専修（１－０勝）、 対拓殖（０－１敗）、 対学芸（１－１分）、 対学習院大（０－０分）

対成蹊大（１－３敗）、 対亜細亜大（４－１勝）、 対明学（１－１分）、 対駒沢（０－２敗）

対自由学園大（３－２勝）

○国公立大会　於農工大・東京医科歯科大

１回戦　　対商船大（５－０勝）

２回戦　　対学芸（１－０勝）

準決勝戦　　対東大（０－２敗）

○三商大戦　於神戸大

対大阪市大（４－１勝）、 対神戸大（１－２敗）

昭和44年 ►

後列　内村、渡辺、出原、岡
前列　種田、土井、吉川、望月





◄ 昭和45年

後列　福田、竿代、江見、川合、吉川、本田、丸山、宮、高垣
中列　柴田、有吉、新福、矢野、大江
前列　小島、湯浦、丸杉、田中、関、山崎、宮内、小山

昭和45年　春 ►
於　小平

後列　矢野、山田、新福、柴田、本田、宮内、江見、竿代、川合、丸杉
中列　小島、宇野
前列　福田、秋山、有吉、湯浦、丸山、



記　事

国公立大会では、内容的には押されっぱなしで勝星を拾った感のある学芸大戦の余勢をかって東大戦に臨むも、力及ばずという結果ではあったがチームの気運は盛り上っていた。

三商大戦の対神戸大戦では、審判の微妙なミスジャッジもあって惜敗し第2位となった。翌日京都教育大と練習試合を行い1対5位で敗れた。ちょうどこの年は大阪万国博が開催されていた。

長野県戸狩及び東大検見川グランドでの2回に及ぶ夏合宿の後、東京都学生リーグ第1部の試合が9月下旬から11月中旬までの間に行われた。結果としては、3勝3敗3引分けで10チーム中5位に終り、関東リーグ2部との入替戦のための関東大会に出場できる4位までに残れず不本意な成績であった。

前半は強豪相手に健闘したが、成蹊大に大敗を喫したのが痛く調子に乗りきれず、ズルズルと上位4チームから脱落してしまったというのが全体としての感想である。

戦術的には4・3・3、4・4・2、さらにはスイーパーを置く1・4・3・2といった守備に重点を置いたシステムが流行し始め、全員攻撃、全員守備が要請されるとともに、FWのキープ力、MFの個人技及び判断力がものをいう時代が訪れ始めてきた中で、技術的レベルの立ち遅れが痛感されたが、逆にその割には何とか現状維持で踏みこたえたと心ひそかに思っている次第である。

昭和46年

主将　湯浦俊一（4）

マネジャー　矢尾板健二（3）

グランド・マネジャー　宮内正敬（4）

試合メンバー

F.W. 杉山（2）・山崎（2）・矢野（3）

F.B. 大江（2）・宮内（4）・宮（2）・湯浦（4）

H.B. 高垣（2）・新福（3）・小山（2）

G.K. 笠間（1）

戦　績

○東京都リーグ戦（1部）

対駒沢（0－0分／於小平）、対明学（2－1勝／於青学大）、対青学（勝／於小平）

対亜細亜大（0－0分／於小平）、対自由大（敗／於明学）、対成蹊（敗／於駒沢大）

対学習院大（4－1勝／於自由大）

成績：3勝2分2敗・勝点8で第4位。

○関東大会　対独協大（0－2敗／於駒沢大）

○国公立大会

同率3位。

2試合目、対学芸大（敗／於農工大）

相手に一日の長があり昨年の雪辱を果たされ、2年連続の決勝進出はならなかった。

○三商大戦　7月上旬・於小平　　雨あがりグランドコンディションは最悪だった。チームワークよく、
対大阪市大（勝）　対神戸大（勝）　ここ数年勝てなかった神戸大に快勝、文句なしの優勝だった。

記　事

昨年のレギュラーから7名が抜けたため、チーム力の低下は如何ともし難い状態であったが、諸先輩のご努力で古河電工より内野氏をコーチに迎え、またメンバーもどうにか揃ったので主眼を秋のリーグ戦に備えてのチーム力のアップにおいた。

この年より東京都リーグ（1部）はチーム数が10より8と減ったため何としても4位以内に入る必要があった。

リーグ戦の青写真は上位の青学、駒沢、亜細亜、明学に対しては無理をせず引分けを狙い、下位の成蹊、自由、学習院からは確実に勝点をあげるというものであった。

システムは穴のできぬようゾーンを採用、中盤を厚くするため4・3・3として攻撃は山崎の突破力が頼みだった。

リーグ戦前に当時日本リーグ上位の日立の胸を借り、ハーフを2失点に押さえ何とか自信らしきものを得たが、得点王松永の胸の厚さに上半身強化の必要性を痛切に感じた。

第1戦の駒沢戦がリーグ戦の成績を決定すると考え、これに焦点を合わせ調整した。

土砂降りの水中戦が味方し強豪に引分けることができグッドスタートだった。

前半戦は新福・山崎のコンビよく、明学大に逆転勝するなど昨年の上位チーム全部から勝点を挙げ一時はトップに立ったが、これに安心したのかお客さんと思った自由大、成蹊大に連敗、最終戦に勝ってやっと目標を達成した。関東大会では当然勝てる相手にあっさりと敗れ、シーズンを終る。

この年の陣容ではリーグ戦前半まで緊張感を維持することが精一杯のようだった。

昭和47年

主将　新福正（4）
副主将　矢野進一（4）
マネジャー　矢尾板健二（4）
グランド・マネジャー　押本俊明（4）

試合メンバー
F.W. 高橋（1）・山崎（3）・杉山（3）
B.K. 宮（3）・高垣（3）・小山（3）・笠間（2）
H.B. 押本（4）・新福（4）・遠藤（3）
G.K. 大江（3）

○東京都リーグ戦（1部）於小平
対自由学園大（9月3日／3－4敗）、対学習院大（9月10日／2－1勝）
対亜細亜大（9月17日／2－1勝）、対明学（9月24日／0－1敗）

対成蹊大（10月１日／１－２敗）、 対駒沢大（10月７日／１－２敗）
対青学大（10月15日／０－２敗）
２勝５敗・勝点４。８チーム中第７位のため、東京都リーグ２部第２位の東洋大と入替戦を行った。

○入替戦
対東洋大（11月５日／４－１勝／於小平）
東京都リーグ１部残留。

○三商大戦　於大阪・服部緑地
対大阪市大（７月１日／５－０勝）、 対神戸大（７月３日／２－３敗）
３大学とも１勝１敗なるも、得失点差で一橋大の優勝。幹事チームは大阪市立大。

記　事

選手としての４年生が実質的に２人しかいなかったことから、レギュラーメンバーの構成としては３年生主体にならざるを得なかった年であった。しかし、この３年生の大部分は、すでに２年生（一部は１年生のときから）レギュラーとして活躍していたこと、チーム全員が中学時代からのサッカー経験者であったことなどから、技術水準、試合経験といった点では、むしろ数年来の最強チームではないかと期待のもたれた年でもあった。

主将の新福とグラマネの押本はこうした期待に応えるため、緻密な計画に基く猛練習を組んだ。練習の主眼は、選手一人ひとりのプレーの欠点や改善目標をいかに具体的に提示してやるかという点にまず置かれた。もし具体的に提示できないのであれば、やれ麻雀だ、やれガールフレンドだといった周囲の状況の中で、何のために苦しい練習をしているのかという心からの納得感が得られず、「やる気」は口先だけのものとなり、したがってチーム力は上がらないと思い詰めた。言葉を換えれば「俺はこの練習が終った時、今まで不充分だったこの技術が、この筋力が、この耐久力がこういう具合に改善され、それは試合のこういう場面で必ず役立つ」と一人残らず信じこめるような練習を組むことが最上級生の責任であると思ったわけである。

３年生を主体とするチーム全員はよくその趣旨を理解してくれ、チーム力は確実に上がっていった。上級リーグである関東大学リーグ所属の諸大学との練習試合の内容などからもそれは裏付けられた。

しかし、肝心のリーグ戦の結果は全く予想外であった。チーム力が上がったとはいえ、正直いって、優勝できるほどの力がついたとは当初から考えてはいなかった。具体的には青学・明学・駒沢の３大学は３強と目されており、これらを全部食えるとは思っていなかったのだが、しかし、最低でも４位は確保できると自他ともに認めていた。それを結果的に７位という地位に終らせ、あまつさえ下との入替戦出場という不名誉な記録を残してしまったことについては、伝統に汚点を残すものとして大いに恥ずべきではあるが、この年の練習方針の基調を受けついだ新４年生が、さらにチーム力を向上させ、翌年見事に関東大学リーグ復帰を果たしたことを併せ考えれば、必ずしも「不作の年」と断じられるべきでもないと総括できるのではないか。



昭和47年



昭和50年 8 月
那須ハイランドに於ける夏合宿のスナップ

昭 和 48 年

主将　山崎彰人（4）

マネジャー　大島正（4）

グランド・マネジャー　宮辰也（4）

最高学年生　遠藤環、大江健、緒方徹、小山修、杉山正敏、古市正興、松沼英昭、吉岡基夫、高垣健治

試合メンバー

F.W. 山崎（4）・遠藤（4）・杉山（4）・池田（2）・高橋（2）

B.K. 宮（4）・小山（4）・笠間（3）・大久保（3）・河内（2）・池田（2）・加藤（1）

H.B. 松沼（4）・高垣（4）・内田（3）・福本（1）

G.K. 大江（4）・木内（2）

戦　績

○東京都リーグ戦（1部）

対自由大（2－0勝）、対立教大（2－1勝）、対青学大（0－1敗）、対明学大（0－0分）

対駒沢大（1－4敗）、対成蹊大（1－3敗）、対専修大（4－1勝）

この結果、3勝3敗1分でリーグ第4位となり関東大会へ進出。

○関東大会

1回戦　対群馬大（1－1分）　PK戦（4－1勝）

準決勝戦　対明学大（1－1分）　PK戦（4－2勝）

決勝戦　対青学大（0－1敗）

この結果、関東リーグ2部7位の上智大との入替戦に進出。

○入替戦

対上智大（2－0勝）

記　事

リーグ戦は、緒戦で前年の4年生の怨みを晴らすかのように自由大に完勝、余勢をかって立教大にも勝利、青学（リーグ優勝、学芸大を破り関東2部復帰）には惜敗したものの強豪明学大と引分けと、まずは順調な滑り出しをみせた。しかし中盤戦に入り、駒沢大に完敗。続いてどういう訳か相性の悪い成蹊大にも敗れ、関東大会への進出は最終の対専修大戦の結果次第となった。先取点を許したものの主砲山崎にやっと当たりが戻り、オーバーヘッドシュートを含むハットトリックで一蹴、4位を確保すると共にムードも一転して上向いた。

続く関東大会は我々にとっては初めての経験。そのせいか固さがとれず緒戦は群馬大に善戦を許しPK合戦にもつれ込むも、日頃PKの練習を欠かさなかった我々の敵ではなく完勝。翌週の明学戦もPK合戦となったが、1年加藤のつきを買って彼を先鋒にした蹴順が当たり、またGK大江の判断も冴え文句なしの勝利を収め、翌週の青学戦には敗れたものの、念願の入替戦の切符を手にし

たのである。

待望の入替戦は浦和の競技場で開催された。我々は前日から当地に乗り込んだが、有終の美を飾る内容にしようという気持ちだけで臨んだので、ＴＶの「うわさのチャンネル」などを見てリラックスしていた。

試合当日は穏やかに晴れわたり、枯れた芝生を晩秋のやわらかい陽ざしが包んでいた。開始直後から激しいチェックを試みる我が軍の気魄が勝り、徐々に主導権を握り始めたが、前半半ば、右に位置した内田からのセンタリングを胸で落とした山崎のドライブのかかったボレーシュートが敵のゴールネットにつきささるに及び敵は完全に浮足立った。我々はさらに攻撃の手を緩めず、遠藤のゴール右寄りからのドリブルシュートで追加点を奪った。こうなると、あとはどこまで緊張を持続させられるか、そのスタミナが問題となるが、控え選手も一丸となったチームワークで見事この２点を守り抜き、待望の関東２部復帰を成し遂げた。その夜は、かけつけたＯＢの方々のご好意に甘えて我々の謳う「武蔵野深き」が一晩中盛り場の空にとどろきわたったという。

昭 和 49 年

主将　大久保寧（４）

マネジャー　宇田均（４）

グランド・マネジャー　内田守（４）

最高学年生　笠間昭彦、岡田孝一、遠藤環、宮辰也

試合メンバー

F.W. 高橋（３）・池田（３）・安部（２）・道正（２）・小林（１）

B.K. 笠間（４）・大久保（４）・宮（４）・河内（３）・池田（３）・加藤（２）

H.B. 内田（４）・遠藤（４）・内田（２）・福本（２）・山根（２）

G.K. 岡田（４）・木内（３）

戦　績

○関東大学リーグ戦（２部）

対順天堂大（１―２敗／於教育大）、 対日大（０―２敗／於東大御殿下）

対国士館大（０－４敗／於教育大）、 対成城大（１―０勝／於教育大）

対東大（１―２勝／於浦和駒場）、 対拓大（２―１勝／於法政大）

対青学大（１―０勝／於駒沢競技場）

３勝４敗　７位。

○入替戦

対駒沢大（１―０勝／於駒沢競技場）

２部残留。

○関東大学春季対抗戦（オープンリーグ）

対法政大（０―６敗／於法政大）、 対順天堂大（２―１勝／於法政大）

対慶応大（２―２分／於法政大）

1勝1敗1分。

○国公立大会　於電通大

対農工大（4－0勝）、対東大（2－0勝）、対教育大（0－3敗）

準優勝。

記　事

前年、念願の関東2部リーグ入りを果たし、期待と不安で迎えた昭和49年度において、まず我々が目標としたものは、2部残留というものであったが、春季対抗リーグ戦において、関東1部校（法政・慶応）及び前年度2部上位校（順天）を相手に1勝1敗1分と予想外の好成績をおさめ、また、国公立大会においても、準決勝戦で宿敵東大を2対0と降し、久しぶりに決勝戦に進み、教育大の前に惜しくも涙をのんだものの、我々は、自身の力が着実についていることを感じた。

夏合宿は、コーチである片山洋氏（三菱重工）指導のもと、長野県菅平高原で行ない、その後、恒例の関西遠征にてヤンマー、ヤマハ発動機等強豪チームと練習試合を持ち、本番である、秋季リーグ戦へと向っていった。

秋期リーグ戦においては、緒戦、順天堂大に、一旦は1対1と追いついたものの、結局後半に決勝点を入れられ1対2と敗れ、緒戦必勝を期していた我々だけに、かなりのショックであった。しかし、その後、チーム全員の頑張りにより後半盛り返し、結局悔いは残るものの、勝敗面ではまずまずの戦績である、3勝4敗を記録したが、不運にも得失点差により7位に甘んじ、入替戦出場となってしまった。

入替戦においては、正直いって、実力では我々よりも上であると思われる駒沢大に対し、苦しい試合展開ではあったものの、1対0と破り関東2部リーグ残留を決定し、我々4年生にとって最後のシーズンの幕を劇的に閉じたのである。

最後になってしまったが、我々が長い間あこがれ、また目標としていた関東2部リーグに昇格しそして、残留できたことは、我々部員全員の努力・団結力によるところは勿論であるが、コーチをして下さった片山洋氏の指導を見逃すことはできない。厚く感謝の意を表したい。

昭 和 50 年

主将　木内秀行（4）

マネジャー　倉田徹（4）

グランド・マネジャー　河内純一郎（4）・高橋良多（4）

最高学年生　阿部匡順、池田篤、池田克彦、佐藤健太郎、瀬川雄二、谷口伸一、寺尾進

試合メンバー

F.W. 池田（4）・高橋（4）・安部（3）

H.B. 内田（3）・福本（3）・山根（3）

F.B. 河内（4）・寺尾（4）・加藤（3）・木村（3）

G.K. 木内（4）

戦　績

○関東大学リーグ戦（2部）

対順天大（前年2位／1－2敗／於東大御殿下）、対明大（前年1部／1－3敗／於東大御殿下）

対拓殖大（前年4位／0－1敗／於東大御殿下）、対東大（前年6位／1－1分／於大宮）

対国士館大（前年3位／0－0分／於東大御殿下）、

対青学大（前年5位／1－2敗／於東大御殿下）、

対立大（前年東都1部／0－5敗／於東大御殿下）

勝点2、第8位

○関東2部入替戦

対専修大（東都1部／6－2勝）

関東2部残留

○関東大学1・2部対抗戦（オープンリーグ）

対早大（0－5敗）、対慶大（0－5敗）、対明大（0－4敗）

記　事

関東リーグに復帰した昨年は、3勝で7位という不運に見舞われたものの、辛くも入替戦に勝ち、今期も関東大学リーグでプレーできることとなった。

我々は昨年の苦しみを今年の糧とすべく、3月初めに練習を開始し、以降、春季対抗戦、国公立、天皇杯、関西遠征（含3商大戦）そして那須での夏合宿を通じて、ファイティング・スピリットあふれる激しいサッカーを身につけ、秋のリーグ戦に臨んだ。

ところが緒戦の前年2位の順天大戦をはじめ、僅差での敗戦が続き、不本意ながら8位、入替戦出場という結果に終ってしまった。

しかし我々は、三菱重工、早大といった日本の強豪チームとの調整試合とこの1年間の部員全員で培って来た気力更には4年生全員のリーダーシップにより、見事、専修大を6－2で破り、関東大学リーグのレベルを示して、シーズンを終えることができた。

昭和51年

主将　木村武志（4）

グランド・マネージャー　加藤富朗（4）・養田直樹（4）

最高学年生　安部裕二、内田泰彰、蒲生芳樹、斉藤節雄、篠崎信弘、永田耕一、福本浩、古荘健一、山根言一

試合メンバー

F.W. 安部（4）・道正（3）・鈴木（2）・篠崎（4）・小池（2）

H.B. 内田（4）・加藤（4）・小林（3）

F.B. 永田（4）・木村（4）・山根（4）・福本（4）・山原（2）・渋谷（3）

G.K. 蒲生（4）

戦　績

○関東大学リーグ戦（2部）

対順天大（9月18日／1－2敗／於西ケ丘）

対国士館大（9月26日／0－3敗／於東大御殿下）

対青学（10月2日／2－3敗／於東大御殿下）

対明治大（10月10日／1－4敗／於明治）

対拓殖大（10月16日／0－0分／於東大御殿下）

対東大（10月23日／0－3敗／於東大御殿下）

対立教大（10月30日／3－0勝／於東大御殿下）

1勝1分5敗・勝点3　第7位。

○東京都リーグとの入替戦

対専修大（11月21日／2－4敗／於駒沢競技場）

○関東大学1・2部対抗戦（オープンリーグ）

対日体大（4月18日／0－7敗／於慶応日吉）、対慶応大（4月25日／0－2敗／於慶応日吉）

対青学大（4月29日／0－5敗／於慶応日吉）、

0勝3敗・勝点0　第4位。

○天皇杯関東大会（東京予選免除）

対原子力研究所（8月22日／0－1敗）

○国公立大会　於小平

対電通大（6月6日／3－3／PK戦5－4勝）

対教育大（6月12日／1－1／PK戦4－2勝）

対学芸大（6月13日／3－1勝）

国公立戦13年ぶり優勝。

○三商大戦　於万博グランド

対神戸大（6月28日／2－1勝）、対大阪市立大（6月29日／6－4勝）

昨年に続き優勝

記　事

上記の通り、国公立戦では13年ぶりの優勝、三商大戦優勝と好成績を挙げた。また4年生を中心にチームワークの非常によい部であり、メンバーの技術も極めて高水準であった。それにもかかわらず、関東大学リーグ2部では7位、東京都リーグとの入替戦に敗退し、転落してしまったことは非常に残念であり、かつ不名誉であった。

昭和52年

主将　佐藤嘉明（4）

グランド・マネージャー　小林治（4）・栗原仁（4）・渋谷耕一（4）

最高学年生　深谷徹、浅井幸一、池田泰秀、道正栄、田中耕太郎

試合メンバー

F.W. 道正（４）・小池（３）・石川（３）・清水（２）・日置（１）

H.B. 小林（４）・佐藤（４）・五座（３）・橋詰（１）

B.K. 浅井（４）・池田（４）・渋谷（４）・栗原（４）・山原（３）・入江（２）

G.K. 深谷（４）・吉田（２）

戦　績

○東京都リーグ戦（１部）

対成蹊大（９月10日／１－２敗／於駒大）、対立正大（９月17日／１－０勝／於駒大）

対亜細亜大（９月24日／１－３敗／於駒大）、対国学院大（10月２日／４－０勝／於駒大）

対明学大（10月９日／０－２敗／於明学大）、対駒沢大（10月16日／０－４敗／於駒大）

対学芸大（10月23日／０－１敗／於駒大）

２勝５敗にて７位となる。

○入替戦

対上智大（10月30日／０－２敗）

○国公立大会

対都立大（６月12日／１－０勝／於東大御殿下）

対水産大（６月18日／３－２勝／於東大御殿下）

対東大（６月19日／１－３敗／於東大御殿下）

準優勝

○三商大戦

対神戸大（７月１日／１－３敗／於大阪市大）

対大阪市大（７月２日／４－２勝／於大阪市大）

記　事

前年度からのレギュラーが僅か２、３人という状況で新チームを結成しなければならなかったので、まずなるべく多くの試合の消化に努めた。試合に臨みチームとしての目標、個人としての目標を明確にして、無益な試合をなくそうとした。それにもかかわらず１対１が弱い、キック力がない等個人の基礎力が思うようにつかず、チーム作りはままならなかった。こうした中で国公立大会に準優勝できたことは我々に多少のゆとりを与えてくれた。

秋のリーグ戦に臨んでは、夏の合宿（新潟県津南）、関西遠征、リーグ戦直前の調整合宿（東大検見川グランド）によりチームの充実を図った。敵の情報収集にも努め万全を期したが、神経を使う試合数の差がそのままリーグ戦の結果として出たような気がする。

そのリーグ戦であるが、この年は東京都リーグ１部が舞台であった。究極の目標はもちろん東関リーグ２部復帰であるが、リーグ戦では入替戦出場の権利を得るべく４位以内に入ることがチームの目標であった。

開幕戦の成蹊大戦は台風一過、快晴の駒大グランドで行なわれた。前日の豪雨によりグランドは半分近く水たまりという最悪のコンディション。双方キックアンドラッシュによる肉弾戦となり、一橋は幸先よく先取点をあげたものの、最後はゴール前への浮き球を拾われ手痛い逆転負けを喫し

てしまった。第２戦の相手立正大は２部から上ってきたばかりであるが、リーグ戦では負け知らずという強豪で、我がチームの気合も十分。一橋が押し気味に進み、後半キーパーと１対１になるという最大のピンチがあったが、相手のシュートミスにより虎の子の１点を守りきった。第３戦は亜細亜大。またも先取点を取り前半１対０で終了。しかし後半コーナーキックが直接ゴールインとなり同点となってからはすっかり相手ペースとなり、守備網を崩されて結果は１対３の逆転負け。第４戦は３戦全敗の国学院大。負越しているが我がチームもこの試合は気力充実、ＦＷの活躍もあってまずは完勝、２勝２敗としてリーグ後半戦に望みをつないだ。第５戦明暗をかけた明学大戦は終始圧倒的に攻めまくったが、すきをつかれ２点を先行された焦りと、シュートがバーをたたくという不運もあり敗戦、いよいよ苦境に立たされることになった。第６戦の駒沢大には完全な力負け、下との入替戦出場の不名誉を返上すべく学芸大との最終戦に臨んだ。内容はほぼ互角であったが、一橋の同点ゴールになったと思ったのもつかの間、キーパーチャージの反則を取られてノーゴールになるなど、最後はツキにも見放され敗戦、結局７位に終った。

そして入替戦。リーグ戦終了から間隔もなく翌週に上智大と行われたが、リーグ戦の結果を象徴するかのように気力も空回りし、いい所なく敗れ、東京都リーグ２部へ陥落という予想だにしなかった最悪の結果を招いてしまった。

勝つためのメンバーを選ぶのがＧＭの最大の仕事であるのはいつの時代でも変わりはないが、実力が同じなら下級生を優先させた。これは我々が最も痛感した真剣勝負の経験の少なさを少しでもカバーし、来年以降の試合に生かしてもらいたかったからである。背に腹は代えられないが、４年生主体のチームであると、どうしても次代との間にギャップができてしまう欠陥を防ぎたかったからであった。４年生はもちろん下級生も必死になってリーグ戦を戦ったが、遂に２勝しかできず結果は前記の通りであった。特に２部で戦わなければならなくなった下級生には申し訳けなかったが、彼らの努力が実り翌年１部に昇格したことには感服している。

昭 和 53 年

主将　小池直之（４）

グランド・マネージャー　五座哲也（４）・山原義彦（４）

最高学年生　石川哲、野村隆、高槌宏敦、鈴木茂夫、高野啓太、加藤幸夫、大西康夫、寺西純之、五味正秀

試合メンバー

F.W.　小池（４）・石川（４）・鈴木（４）・日置（２）・太田（２）

M.F.　五座（４）・清水（３）・橋詰（２）・坂田（２）・桜井（２）

D.F.　高槌（４）・加藤（４）・入江（３）・船倉（２）・田口（２）

G.K.　吉田（３）・大倉（２）

戦　績

○東京都リーグ戦（２部）

対成城大（９月10日／２－１勝）、対東工大（９月17日／３－２勝）



▲ 昭和53年　国公立大会優勝記念

後列　袴田、外岡監督、松山、佐藤、松村、倉崎、吉中、種岡、加藤、五味、切畑、太田、
　　坂田、高木、大倉、吉田、日置、？　船倉、清水、武田

中列　青木、高野、桜井、大西、山原、寺西、橋詰、石田

前列　田中、徳田、五座、高槌、小池、野村、鈴木、田口、石川、伊知地

昭和54年 ►

三菱養和グランドにて、ＯＢ戦に際して写す

後列　石田、重松(女子マネ)、清水、袴田

前列　入江、青木、種岡、吉田





◄

昭和55年

後列　坂田、大倉、日置、橋詰、田口、船倉

前列　桜井、太田、武田

対大東大（９月24日／２－１勝）、 対学習院大（９月30日／２－１勝）
対帝京大（10月８日／１－１分）、 対東経大（10月５日／６－０勝）
対国学院（10月22日／２－１勝）
６勝１分で優勝。

○東京都リーグ１・２部対抗戦（オープンリーグ）

対成蹊大（５月14日／１－２敗）、 対東大（５月21日／３－１勝）
対成城大（５月28日／２－１勝）、 対国学院大（６月７日／０－１敗）

○天皇杯東京地区予選

対商船大（４月14日／４－１勝）、 対東大（４月16日／０－０／ＰＫ戦敗）

○国公立大会

対電通大（６月17日／７－０勝）、 対東大（６月24日／３－１勝）
対学芸大（６月25日／２－０勝）
優勝。

○三商大戦

対大阪市大（６月30日／１－４敗）、 対神戸大（７月２日／０－２敗）

記　事

我々の年は、東京都リーグ２部という恐らくわが部史上最低の地位にあった年であった。昭和52年秋、入替戦敗退後、当時の４年からチームを引き継いだ時、我々は全員一致でリーグ戦全勝優勝を誓い合った。２年連続で下位リーグに転落し、低迷状態にあったチームを再建することこそ、我我に課せられた使命だった訳だが、そういった重圧感と同時に、落ちるところまで落ちたという妙な居直りの同居した気分での船出だった。

春先は好調な滑り出しだったと思う。戦績こそ今ひとつながら、試合内容は悪くなかったと記憶する。そして６月に入り、国公立大会で宿敵東大を久々に破り、余勢をかって学芸大を葬り去って優勝したあたりが、思えばひとつの頂点だったようだ。その直後の三商大戦では、思いもよらぬ２連敗、ここで一挙に谷底に落とされてしまった。だが立ち直りも早く、夏の第１次合宿（霧ケ峰）後の関西遠征では、関西学生リーグの中堅どころを相手に３勝１敗と勝ち越して帰京。ところがリーグ戦直前の練習試合中心の第２次合宿（小平）での戦績は惨たんたるもの。不安のうちにリーグ戦突入と相なった。案の定苦戦の連続である。奇跡に近い逆転でかろうじて開幕２連勝。これが効いた。その後２試合も苦戦の末モノにして、天王山の帝京大戦を迎えた。（その時帝京大は、３勝１分で２位につけていたと思う）この試合、結局は引分けで、我々の全勝優勝の野望は消えたのだが、首位を保ったことで気分的にずい分楽になった。続く東経大戦で大勝、最後の国学院戦も後半押しまくられながら勝ち、優勝を決めたのである。

よき同僚、後輩の力の結集で得た有終の美であったと思っている。

昭 和 54 年

主将　入江憲二（４）

グランド・マネジャー　清水靖雄（４）

最高学年生　石田暁夫、種岡瑞穂、青木健太郎、袴田剛、五味正秀

試合メンバー

F.W. 種岡（４）・日置（３）・太田（３）・田中（２）

H.B. 清水（４）・橋詰（３）・坂田（３）・桜井（３）

F.B. 入江（４）・青木（４）・船倉（３）・田口（３）・吉中（２）

G.K. 吉田（４）

戦　績

○東京都リーグ戦（１部）

対学芸大（９月８日／１－１分／於小平）

対青学大（９月15日／０－２敗／於東大御殿下）

対自由大（９月23日／４－１勝／於小平）

対東大（10月７日／１－１分／於東大御殿下）

対成蹊大（10月13日／０－３敗／於東大御殿下）

対帝京大（10月21日／４－１勝／於東大御殿下）

対立教大（10月27日／１－３敗／東大御殿下）

２勝３敗２分　リーグ６位。

○天皇杯及び総理大臣杯予選

対国際基督教大（４月15日／１－０勝／於小平）

対東京外語大（４月22日／２－２／ＰＫ戦３－４敗／於学芸大）

○東京都リーグ１・２部対抗戦（オープンリーグ）

対成城大（５月13日／４－２勝／於小平）、対国学院大（５月20日／１－２敗／於小平）

対成蹊大（５月27日／０－２敗／於小平）

○国公立大会

対東工大（６月16日／３－１勝／於東大御殿下）、対東大（６月17日／５－６敗／於農工大）

対東京外語大（６月23日／１－０勝／於農工大）

第３位。

○三商大戦

対大阪市大（６月30日／１－２敗／於神戸大）、対神戸大（７月１日／１－２敗／於神戸大）

記　事

前年度６勝１分けという素晴らしい成績で、東京都２部リーグ優勝を飾り、１部リーグ復帰を果した我々は、先輩たちのご苦労に謝し、チーム一同その喜びに浸りながらも、さらに上のリーグへとの周囲の期待に応えるべく、本格的サッカーシーズンを間近に控えた３月中旬、リーグ戦目指し、新チームとしての活動を始めた。

４～７月上旬にかけての公式戦においては既に我が部の伝統にまでなりかけている出足の悪さを見事に引き継ぎ、全く不満足な結果に終ってしまった。春季１・２部対抗戦１次リーグ予選敗退、

国公立戦３位、三商大戦全敗と、成績は悲惨の一言、多くの不安材料を残した。

秋季リーグ戦を控え、７月下旬に再スタートを切った我々は、黒姫高原での夏合宿、関西遠征等を通じチームの一層の強化を図っていったが、試合を重ねるうちに怪我人も続出し、調整合宿（８月下旬～９月上旬）に入った段階では、チームの状態はガタガタであった。しかしリーグ戦開幕までには、怪我人も多く復帰し、緒戦の対学芸大戦においては、内容はともかく、結果的には引き分けと、それまでの試合と比較すれば、いいムードでスタートすることができ、その後勝ったり負けたりの試合を重ね、最終戦を終ってみると、２勝３敗２分、勝点６で、１部リーグ第６位、残留となったわけであるが、我々の、また先輩方の念願であった関東リーグ復帰への切符を手中におさめることはできなかった。

昭 和 55 年

主将　日置慶太（４）

副主将　桜井真二（４）・橋詰邦弘（４）

グランド・マネージャー　武田治基（４）

最高学年生　太田勝之、船倉洋一、大倉治彦、坂田智弘、田口聡

試合メンバー

F.W.　日置（４）・桜井（４）・太田（４）・田中（３）・松尾（２）

H.B.　橋詰（４）・船倉（４）・畑（２）・岩田（２）・山木（１）・若林（１）

F.B.　坂田（４）・田口（４）吉中（３）・松村（３）・都竹（２）・樋口（１）

G.K.　大倉（４）・杉山（２）

戦　績

○東京都リーグ戦（１部）

対成蹊大（９月７日／１－１分／於東大御殿下）

対立教大（９月13日／１－１分／於小平）

対明学大（９月21日／０－０分／於東大御殿下）

対学芸大（９月28日／１－３敗／於小平）

対自由大（10月５日／２－２分／於東大御殿下）

対学習院大（10月12日／１－１分／於東大御殿下）

対東大（10月19日／２－２分／於東大御殿下）

０勝１敗６引分け、勝点６にてリーグ５位となり、東京都１部リーグ残留。

○東京都リーグ１・２部対抗戦（オープンリーグ）

対帝京大（５月５日／１－５敗／於小平）、　対亜細亜大（５月18日／１－１分／於小平）

対成蹊大（５月25日／０－０分／於小平）

○天皇杯及び総理大臣杯予選

対東京外語大（４月13日／２－０勝／於小平）、　対大東文化大（４月20日／３－１勝／於小平）

対立教大（４月27日／２－１勝／於小平）

ブロック優勝。

対青学大（５月11日／０－５敗／於慶大日吉）

総理大臣杯敗退。

対F.C.青山（６月８日／１－２敗／於小平）

○国公立大会

対電通大（６月14日／４－０勝／於東京医歯大）

対学芸大（６月15日／３－１勝／於東京医歯大）

対農工大（６月21日／４－１勝／於東大御殿下）

国公立大会優勝

○三商大戦

対神戸大（７月５日／９－１勝／於大阪市大）

対大阪市大（７月６日／２－１勝／於大阪市大）

三商大戦優勝

○夏季関西遠征

対静岡大（８月16日／２－４敗／於静岡大）、対関学大（８月17日／３－３分／関学大）

対大商大（８月18日／２－５敗／於大商大）、対大体大（８月19日／２－６敗／於大体大）

対大経大（８月20日／２－６敗／於大経大）

記　事

４年生９名中８名が経験豊富なレギュラーということで関東リーグへの期待も例年になく大きなチームであった。アポロエクソサイザー（筋力強化器具）や、１、２軍制の導入、練習試合を通してのチーム強化の意図など漸新な練習方針の下、チームの意気は上った。

春シーズンは、国公立大会、三商大戦に優勝し、天皇杯でもブロック優勝し、都本予選に駒を進めた。オープンリーグは不調であったが、練習試合では強豪明学大を降し、関東２部の拓大、専大等とも戦い１勝１分け、また日本リーグの日産に善戦し、日立や法大の胸を借りてより高いレヴェルのサッカーに挑み、都リーグでの一橋の下馬評は高まった。夏の関西遠征では、関西３強を相手に点差以上の善戦でチームは、益々自信を深めた。

夏の後半から、少しく息切れもあったが、チームは大きな自信を胸にリーグ戦に突入した。しかし結果は惨憺たるものであった。ほとんどのゲームに優位に立ちながら、ことごとく勝利の女神は微笑まず、不本意であった。今となっては負け惜しみにしか聞こえまいが、それは〝神がかり的〟なそして屈辱的な〝５位〟であった。

付：酉　松　会　会　則
昭和56年度酉松会役員
酉　松　会　会　員　名　簿

酉松会会則

第１条（名　称）　本会は酉松会と称する。

第２条（目　的）　本会は一橋大学体育会ア式蹴球部の育成、発展と会員相互の親睦向上を図ることを目的とする。

第３条（所在地）　本会は事務所を一橋大学体育会ア式蹴球部に置く。

第４条（事　業）　本会は第２条の目的達成のため次の事業を行う。

①　現役部員に対する指導、育成、援助。

②　親睦会、ＯＢ・現役対抗戦。

③　会員名簿の作成、発行

④　会報の発行。

⑤　総会及びその他の会の開催。

⑥　その他目的達成上必要なる事業

第５条（会　員）　本会は一橋大学体育会ア式蹴球部に在籍した者及びこれに準ずる者で総会に於て認められた者をもって組織する。

第６条（役　員）　本会は次の役員を置く。

①　会　長　　１名

②　副会長　　２名

③　幹　事　　６名

２　会長は本会を代表し、会務を総理し、総会、役員会を召集する。

３　副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時は、これを代行する。

４　幹事より代表幹事を１名選出する。代表幹事は会長がこれを指名する。

５　代表幹事は会務を掌握し、幹事は会務を処理する。

６　役員の任期は年次総会より１ケ年とする。ただし任期満了の後も次期役員が選任されるまでの間はその任にあたる。役員は再任を妨げない。

７　必要のあるときは総会の決議により名誉会長及び顧問を置くことができる。

第７条（総会及び役員会）　総会は毎年３月に開催し、会長がこれを召集する。会長が必要と認めた時は臨時総会を開催する。

２　総会は次のことを決定する。

①　本会の規約の制定及び変更。

②　予算と決算の承認及び会務の報告。

③　役員の選任。

④　その他重要な事項。

３　役員会は会長、副会長及び幹事により構成する。

４　役員会は役員の発意により会長がこれを召集する。

第８条（会　計）　本会の経費は会費、寄附金、その他の収入をもってこれにあてる。

2　会費及びその徴収方法、時期については、役員会が別途これを定める。

3　本会会計年度は毎年年次総会の翌日から翌年の年次総会の日までとする。

第９条（附　則）　本会則に規定しない細目は役員会で決定する。ただし重要事項については総会の承認を得るものとする。

昭和56年度酉松会役員

会長	松本正雄（大15）	幹事	古川和正（昭40）
副会長	二階堂謹二（昭10）	〃	高峯文世（昭43）
〃	瀬藤俊雄（昭18）	〃	小山修（昭49）
幹事	高田勝巳（昭30）	〃	山原義彦（昭54）
〃	今村秋夫（昭36）		

酉松会会員名簿

年は卒業年度
†印は物故者、
年月日は没年月日

大正12　高商卒

†兵藤世平治 3．5．30

在学中物故会員

†神戸力

†拝司隆一

†萩屋英夫

†島吉郎

†林（台湾の人）

大正13

†（専）北尾義人 53．11．21

大正14　進藤静太郎

（専）三宅定夫

大正15　松本正雄

猪瀬弁一郎

†川村通

†（専）藤井泰 32．6．17

昭和2　明石毅

†高橋朝太郎 51．8．5

†桧垣延樹

昭和3　三宅弘方

（専）澤田安二

（専）山下保

†王熙宗 50．4．24

昭和4　瀬社字力

†（専）小川謙一郎 38．8．20

昭和5　森緑

†渡辺弘

†渡辺甚吉（村吉改） 47．5．25

†城島直也（鎮雄改） 45．3．11

†伊藤健吉

昭和5　†近藤豊太郎

昭和6　津田弘精

豊田達治

†恵藤勤一 7．4．24

†平松宣夫

昭和7　西川善一郎

星野弘一

†高橋啓次郎 45．2

†栗山健三 11．7．27

†安野元章（半沢貞治改）

†高橋重弥 20．11．23

†酒井孝吉 9．1．8

昭和8　西田嘉兵衛

小林昌一

勝田一郎

昭和8　†橋本林三　52. 12. 8

昭和9　吉村豊三

†長瀬東作　12. 10. 21

昭和10　二階堂謹二

†後藤博基　54. 8. 12

昭和11　水島茂

†神野光司（清一郎改）　20. 6（戦死）

昭和12　角田昇

森田昭之

（養）枝村藤三郎

†浅枝彦太郎　20. 8. 6

†荒井文雄　13. 11. 3（戦死）

†田島輝重　46. 5. 7

昭和13　浅田英三

鈴木彰

林田毅

村井恒典

†大掛隆之　39. 2. 29

†重見敏之　49. 1. 14

昭和14　岩崎寛貞

後藤虎雄

†小西正夫　20.（戦死）

昭和15　菅瀬十朗

二階堂晴三

†池尾隆二　19. 8. 2

†狩森正雄　20. 6. 2（戦死）

†米山大三　17. 2. 17（戦死）

昭和16　石割知之

金井雄吾

清水睦美

早野広太郎

堀尾貞一

吉沢貞雄

吉田富彦

†高橋道太郎

†荒川守之助

昭和16 12月　折下章

片山光夫

鈴木英二

†茂木利孝　19. 2. 17（戦死）

†松岡義彦　49. 11. 23

昭和17 9月　居川達一

藤塚亮策

宮沢力

村木杉太郎

山本孝次

†水島行　19. 9. 16（戦死）

†山田久寧　20. 12. 26（戦病死）

昭和18 9月　瀬藤俊雄

土屋五郎

昭和19 9月　青木育郎

安田興三郎

鷲埜和夫

太田賢三

西内碩男

昭和21 9月　奥村一郎

加藤春樹

高橋三善

川端良三

昭和21 9月　†荒川正三郎　19.（戦病死）

†金原実　20.（戦死）

†西浦正吾　21.

昭和22　†松浦巌　55. 11. 28

昭和23　加藤省

小島寿

佐藤裕之

鈴木哲夫

外岡諒三郎

高柳晋

永倉真平

布谷由之

（専）丸山節生

昭和24　蛯子義文

森重利直

昭和25　森一美

昭和26　石川正和

松本由之

渡辺俊夫

昭和27　井田登也

小林達夫

篠宮清

鵜飼質

木滑勇

吉沢弘泰

昭和28　高橋敬蔵

針谷操

†堤光義　47. 4. 6

新石井弘志

新斉藤隆

新高田菊夫

昭和28 新田原洋二
昭和29 神代祥男
高末隆
田中豊二
宮田幸三
森康全
山下誠一
昭和30 石井徹
高田勝己
昭和31 志摩憲一
中岡敬雄
橋本昭一
馬場猛
松丸鉱一
福江睦郎
桃井晴光
（昭二改）
石原慎太郎
昭和32 浅井浩夫
佐竹明和
嶋田英司
中路信
日方大三郎
昭和33 岩坂朔郎
清水裕
中田鉄弥
林裕二
桧山博隆
昭和34 大石仁
駒井康
酒井敏行
鈴木久也
昭和35 古河洋
小杉泰夫

昭和35 小野輝夫
鎗田良昭
田中高峯
石原良三
三田達也
斉藤哲雄
昭和36 土井鼎
村上信勝
小沢純一
今村秋夫
飯沼八州彦
小林成古
高柳雄一
笹田泰正
昭和37 日巻久匂男
梅田清
久保田秀一
大野章雄
秋山和夫
清水邦男
柿沢光郎
瀬戸泰
昭和38 韓英夫
（川村英夫）
岡田紀雄
石井暢生
山内光生
（旧姓伊藤）
細野宣昭
野上桂一
吉田弘司
清水拡
昭和39 菊池英輔
原賀英明

昭和39 石綿浩之
石井光雄
中村肇
斉藤国雄
大橋祥勝
松島源吉
森岡義久
池田致
昭和40 永山在紀
寺西重郎
山田充夫
古川和正
朝来野紀生
村林昌二
白石治紀
昭和41 清水征四郎
田中好輔
斉藤泰敏
堀江正郎
相良保彦
昭和42 丸山克彦
有田誠
槇田之生
栗又俊二
三浦候宣
市川彰夫
昭和43 松崎和夫
佐藤盛夫
小林純一
高峯文世
高場恭幸
（旧姓可部）
馬場達夫
昭和44 佐藤哲太郎

昭和44	清水幸男
	天野四郎
	有田稔
	中沢泰二
昭和45	鈴木秀美
	土井徳秋
	吉川実
	望月公雄
	内村透
	種田勝正
	渡辺恵
	出原和正
	岡猛夫
昭和46	川合哲
	宇野哲夫
	関栄一
	江見吉信
	竿代興志
	本田和夫
	柴田暁
	吉川敏一
	小島収
	丸杉孝三郎
	丸山清八
昭和47	宮内正敬
	湯浦俊一
昭和48	新福正
	矢尾板健二
	矢野進一
	押本俊明
昭和49	大江健
	大島正
	緒方徹
昭和49	小山修
	杉山正敏
	高垣健治
	古市正興
	松沼英昭
	山崎彰人
	吉岡基夫
昭和50	宇田均
	内田守
	遠藤環
	大久保寧
	岡田孝一
	笠間昭彦
	宮辰也
昭和51	阿部匡順
	池田篤
	池田克彦
	木内秀行
	倉田徹
	河内純一郎
	佐藤健太郎
	瀬川雄二
	高橋良多
	谷口伸一
	寺尾進
昭和52	安部裕二
	内田泰彰
	加藤富朗
	蒲生芳樹
	木村武志
	斉藤節雄
	篠崎信弘
	永田耕一
昭和52	福本浩
	古荘健一
	山根言一
	養田直樹
昭和53	浅井幸一
	池田泰秀
	道正栄
	渋谷耕一
	佐藤嘉明
	深谷徹
	小林治
	田中耕太郎
	栗原仁
昭和54	石川哲
	野村隆
	小池直之
	高槌宏敦
	鈴木茂夫
	高野啓太
	山原義彦
	加藤幸雄
	大西康夫
	五座哲也
	寺西純之
昭和55	青木健太郎
	入江憲二
	清水靖雄
	吉田慎二
	石田暁夫
	袴田剛
	種岡瑞穂
	五味正秀
昭和56	太田勝之

昭和56	日置慶太	昭和56	桜井真二
	坂田智弘		武田治基
	大倉治彦		田口聡

昭和56	船倉洋一
	橋詰邦弘

あとがき

昭和56年３月の酉松会総会で「60年史」発刊が決議され、年内完成を一つの目途に頑張ったが、編集委員は総てズブの素人の集まりで、あまつさえその殆んどが社業を持つ身とあって、心ならずも遅れを来したこと誠に申訳ない。然しご多忙な会員諸兄のご協力を得て、「回想」も、また難問の「年史」もどうにか整い、ここに完成の運びとなったことは誠に喜びに堪えない。

特に戦前期、共にグランドで勝敗を賭けて競い合った慶、帝、早ＯＢの三兄から、敵側から見た当時の思い出、瀬社家、田部の両大先輩の半世紀も前に遡る思い出話や人生訓、また柴山、二階堂両夫人から、サッカー部創成期の恩人たる故兵藤兄、故長瀬兄についての心暖まる文章も頂いた。これらの「特別寄稿」が「60年史」にとって錦上に花を添えることとなり、心から感謝申し上げる次第である。

この部史編集に当って、誠に幸いだったことは、昭和９年から昭和16年まで、毎年切れ目なく発行された部誌「蹴球」が残っていたことである。これによって戦前期の試合経過、戦績等が、むしろ戦後期のうち、或る時期より資料豊富といった奇現象を呈した。「古い部誌より抜すい」は、部の創成期や、黄金時代ともいうべき戦前期の学生気質や、部生活の生きざまを伝えるために選んで掲せたものである。

60年史の編集に当って、当然のことながら、その発刊の主旨からも、最も期待したのは酉松会々員からの「回想」であった。編集委員会の議を経て、戦前期のサッカー部経験者は可能なかぎり全員、戦後期は、「60年史」の紙数の点から、各年度代表者（または寄せ書き）としたことについて、会員各位のご了承を得たい。

激しい練習で培える体力や精神力。「サブ」に徹してもやる部生活のなかで生れる友情や滅私の精神。それらを総合した人生観、世界観等々は、脈々として流れるサッカー部精神の発露であって、会員諸兄の回想記は、汲めども尽きせぬ追憶の泉として、共感を呼び起さずにはおられない。これこそ「60年史」を真に意義あらしめるものといえるのではなかろうか。

部史編集に当っては、単に戦績や試合経過の記述、反省、誇示とか、往時の回想、懐古録だけに止まらず、戦没者追悼等を通じての戦時中の極限時の状況や戦後の混乱期に薯を食べアルバイトをしながらの練習等を経て、高度成長時代に入る外的環境の変遷。また学

制改革、リーグ戦等公式試合制度の変化等を通じての学生気質等の移り変り。武蔵野周辺の開発急進展、風俗習慣生活内容の激変、価値観の変化等。これらにまで極力及ぶように配意し、回想記では表現し切れないところを「座談会」で補うよう心掛けた。

この60年史を先輩、学生、関係の深い方々に送るに当って、心の底に残ることは、現在、学生サッカーのセミプロ化傾向の為か、往年の覇者校が、いずれもその実力が相対的に低下し、戦績沈滞し勝ちで、一方学生気質等変化のなかで、どう対処するかが共通の悩みだということである。この60年史が母校サッカー部の永遠の繁栄、強化のための一つの糧ともなることを祈ってやまない。

一橋大学ア式蹴球部
60 年史編集委員長

村井　恒典（昭13年卒）

編集委員
瀬藤　俊雄（昭18年卒）　久保田秀一（昭37年卒）
奥村　一郎（昭21年卒）　古川　和正（昭40年卒）
加藤　　省（昭23年卒）　高峯　恭幸（昭43年卒）
高田　勝巳（昭30年卒）　小山　　修（昭49年卒）
日巻久匂男（昭37年卒）　山原　義彦（昭54年卒）

〔付　記〕

サッカー部には古くから、各部員持ち廻りで練習日誌を記録する慣習があり、これは現在に至るも連綿と続けられている。戦前の日誌は不幸にして、戦災のため焼失したことは真に己むを得ないとしても、戦後の日誌が散逸してしまい、今般60年史編集に当って、探したが現時点で未だ見付かっていないことは極めて残念である。練習日誌こそ、部員個々人の日々の努力や苦心の様が、ありのまま表現されている、かけ替えのない貴重な記録である。この記録の行方についてご存知の方あらば、酉松会幹事宛ご一報願い度い。

—— 一橋大学ア式蹴球部60年史 ——

昭和57年２月24日　発行

〔非売品〕

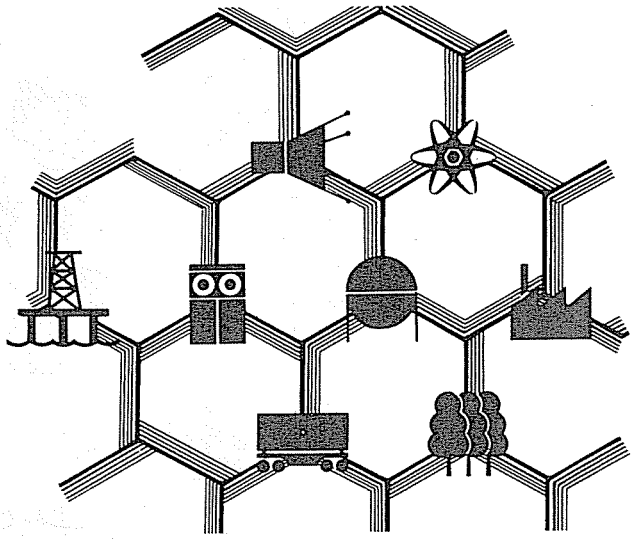
発行者　酉松会
会長　松本正雄

編集人　一橋大学ア式蹴球部60年史編集委員会
委員長　村井恒典
〒187　東京都小平市学園西町１丁目29番の１
一橋大学体育会ア式蹴球部

印刷者　今井精一郎
〒332　川口市本町３丁目１番の７

エネルギー資源を求めて…

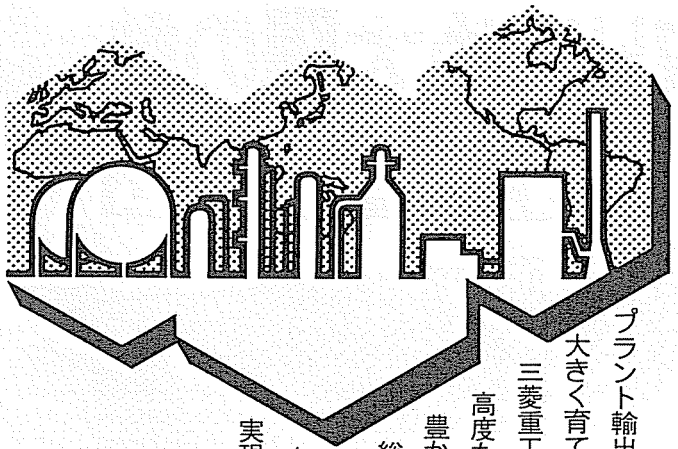
わが国のエネルギーは石油・天然ガスから76%、水力から6%、石炭・その他から18%が生み出されています。とりわけ、日本は石油資源の99.6%を海外からの輸入に頼っています。
わたしたちは、このエネルギー資源を求めて、世界各地で地道な開発を続けています。



エネルギー資源の長期にわたる安定供給をめざし、積極的に取り組んでいます。

三菱商事

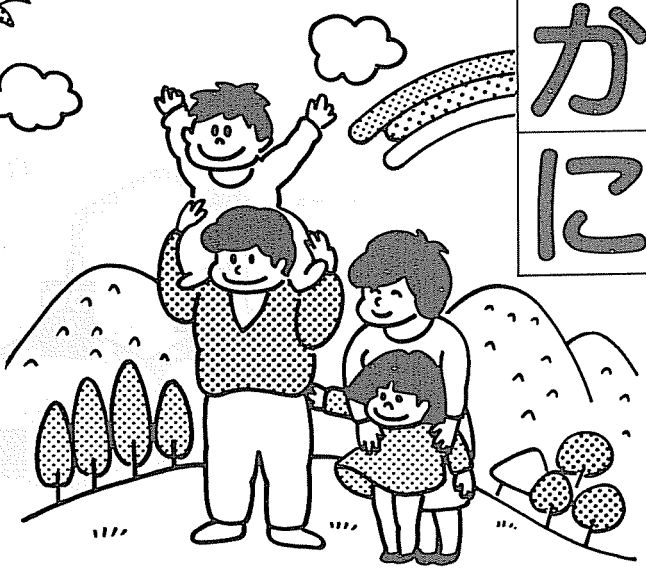
世界へ！エンジニアリングパワー



プラント輸出——。
大きく育てたい産業ですね。
三菱重工は
高度な技術力と
豊かなノウハウをバックに
総合エンジニアリングを
世界に展開、すでに
多くのプロジェクトを
実現させています。

三菱重工業株式會社

あした豊かに



未来はどんな社会だろう。
より豊かで幸せな生活は
私たちの願いです。
三菱重工は
長い経験で培った幅広い技術を
明日の国づくりに
役立てています。

三菱重工業株式會社

取り込め太陽の熱

古河ソーラーシステム



古河電工

本社　東京都千代田区丸の内2―6―1

☎(03) 286―3483

鉄をつくり、鉄をいかす

H.I.C.O

身近に広く使われている鋼材。その断面には色いろなアルファベットが見えます。T.I.H.C.Lなどの形鋼。U.Zなどの鋼矢板。Oは鋼管。暮らしを土台で支えている、大切なアルファベットたちです。日本鋼管では、これら鋼材をはじめとする鉄づくりから、各種鉄構プラントまで、社会の発展に幅広く貢献しています。

NKK 日本鋼管
東京都千代田区丸の内 TEL(212)7111 〒100

鉄は暮らしをアルファベットでつづる。



大きくふくらませませんか。
あなたの夢。

手近な夢から将来の夢まで、いろいろな夢をお持ちのことでしょう。私ども長銀は、安全・有利な金融債リッチョーワイド・リッチョー・ワリチョーを発行して、ご家庭の財産づくりのお手伝いをし、みなさまの夢の実現にお役に立ちたいと願っています。また、みなさまからお預かりした大切なお金は、国の基幹産業から、中堅企業まで幅広くご融資し、豊かな社会をつくるために役立たせていただいています。

㊟が活きる5年貯蓄　高利回りの1年貯蓄
リッチョーワイド　ワリチョー

日本長期信用銀行

本店　東京都千代田区大手町1-2-4　〒100
☎(03)211-5111

支店：東京・新宿・渋谷・池袋・上野・大宮・横浜・札幌・仙台
金沢・名古屋・大阪・難波・梅田・神戸・広島・高松・福岡

素敵な気分だ、ブルーバード。



PHOTO:4DOOR HARDTOP TURBO SSS-X-G type(アルミロードホイール、ターボステッカーは注文装備)

無理のない走行で貴重なエネルギーを大切に。
世界に愛される
先進技術の日産
――安全は人とクルマでつくるもの――



1982年、名車ブルーバード、全車新型。

4ドア・ハードトップ新登場。ディーゼル・ターボも加わった。
このスーパーシリーズを超えるものはあるか。

ブルーバードお前の時代だ。

NEW ザ・スーパースター NISSAN ブルーバード



PHOTO:SEDAN TURBO-D(アルミロードホイールは注文装備、ボディカラーは特別塗装色)

キリンビール株式会社





うまさが冴える

品質本位

キリンビール

どう登るか、エレクトロニクス山脈。

可能性にみちた大いなる山々、エレクトロニクス。その頂点をめざし、チャレンジするJAE。超信頼性誘導制御機器から各種コネクタ、スイッチの分野で、時代に先行する技術で明日を追求しています。

主な営業品目

◎コネクタ
◉各種丸型・角型多芯コネクタ◉プリント基板用コネクタ ◉光コネクタ

◎航空・宇宙用電子機器・同応用製品
◉慣性航法装置◉自動操縦装置◉各種ジャイロおよび加速度計◉電波高度計 ◉振動測定装置◉LNGレベル計測装置および液面警報装置 ◉汎用運動測定装置

◎リレー、スイッチ・同関連製品
◉ディジタルサミールスイッチ◉キーロックスイッチ◉DIPスイッチ◉照光式押ボタンスイッチ◉パネルスイッチ◉リレー◉サーキットブレーカ

◎その他の製品
◉環境試験装置◉半導体および電子管用放熱器

世界に生きる技術をめざす
航空電子
日本航空電子工業株式会社
本　社＝東京都渋谷区道玄坂1-21-6
☎03(463)3111(大代)

無理のない運転で燃費節約を

ブラックテールが加速する。新型シグマ。



速く、美しく。'82年へ向けて鍛えぬかれ、研ぎすまされて、新型シグマ登場。黒いスモークガラスで覆われた精悍なブラックテールの後ろ姿が、高いスポーツ性能を物語っています。いま、走りをつきつめて、'82へ。

燃費とパワーの三菱ターボ
ガソリンとディーゼル

走りの新型
GALANT Σ

燃費は技術
三菱自動車

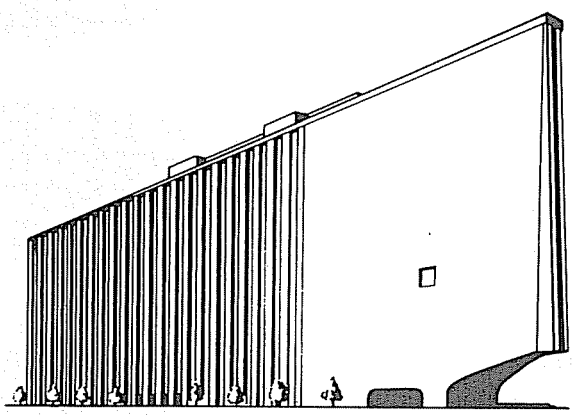
和洋大魂

広告界の、日米トップ同志の合弁会社――。電通ヤング&ルビカム㈱は、日本的経営の精神と、欧米の進んだ広告技術をミックスし、広告界に新風を起こすことをモットーに一九八一年十一月一日、設立されました。今後のご愛顧のほど、どうぞよろしくお願い申しあげます。

DENTSU·YOUNG&RUBICAM K.K.

電通ヤング&ルビカム株式会社　東京都中央区八重洲2-7-12　京橋K-Iビル　〒104　03(278)4811(番号案内)

豊かな明日を考える興銀



最新の情報をもとにして、産業の発展、資源開発、公害のない都市づくりなど、より豊かな明日への実現に努力してゆきたいと考えています。

リッキー　ワリコー

日本興業銀行

〔本店〕東京都千代田区丸の内1-3-3☎(03)214-1111

〔支店〕札幌・仙台・福島・東京・新宿・渋谷・池袋・横浜・静岡・名古屋・新潟・富山・京都・大阪・梅田・神戸・広島・高松・福岡

紳士 婦人のおしゃれ衣料品、
内外国製毛糸、手芸用品小売

K.K.西田糸店

東京都台東区上野四丁目(仲通り)
電話(834) 7251
取締役社長 西田 嘉兵衛
(昭8大卒)

すみよい未来をひらく

資源をよりよく生かして、環境をまもり、社会のニーズに応えた製品を…
三井東圧化学の考え方は変わりません。これからも心の豊かさを大切に、
すみよい未来を築くため技術の開発を一層すすめてまいります。



工業薬品・精密化学品・樹脂・染料・農医薬・肥料・建材

三井東圧化学

本社 東京都千代田区霞が関3丁目2-5(霞が関ビル) 電話 東京(03)581-6111代表

健康ってすばらしい——。



自然のめぐみ 小麦胚芽油

ハイガッツEは、小麦の胚芽からとれる天然の小麦胚芽油です。歴史と技術を誇る日本製粉が研究を重ねて開発しました。
新鮮で良質な小麦胚芽から、ビタミンE、リノール酸など栄養成分をそこなわないように抽出した小麦胚芽油——、ハイガッツEはいわば自然のめぐみそのもの。現代人の食生活に不足しがしな栄養分を補給して、健康づくりのお手伝いをいたします。

ビタミンE、リノール酸が、バランスよく含まれています。

栄養補給食品



日本製粉の小麦はいが油

ハイガッツE

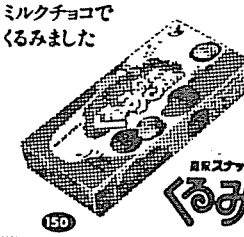
日本製粉の小麦胚芽油ハイガッツEは、
全国有名デパート、スーパー、薬局・薬店でお求めください。

日本製粉

POWER UP パワーアップ モリナガ

森永製菓

小麦胚芽入りのクッキーを
ミルクチョコで
くるみました



森永スナックチョコ
くるみの森
150

高級半生チョコレートを
お手頃な価格で!



森永チョコレート
エスプリ・ドパリ
300

サクッサクッのまるかじり!!
2つになっておいしさ2倍!!



森永チョコスナック
ドナッチョ2
100

5人目のクララ チョコとクッキーの
シンフォニー



森永
シンフォニー
チョコレートクッキー
280

あなたのお住いを快適に美しくしませんか

施主意向尊重・良心的施工、・御報参上

インテリア施行・システムキッチン各種

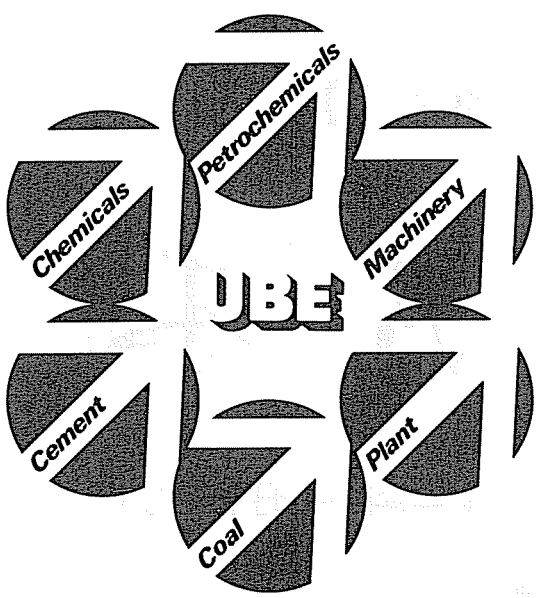
万和株式会社

インテリア部

奥村伊知朗　（昭21酉松会員）

〒136　江東区新木場1－6－10　（521）4361

化学のUBE
石油化学のUBE
セメントのUBE
機械のUBE
プラントのUBE
石炭のUBE



6つの力を総合する、
トータル・インダストリーUBE。

ポリエチレン	化成品
ポリプロピレン	セメント
ポリブタジエン	金属マグネシウム
カプロラクタム	産業機械
ナイロン樹脂	プラント
化学肥料	石炭

UBE 宇部興産
UBE INDUSTRIES, LTD.
東京都千代田区霞が関3-7-2 TEL 03-581-3311
宇部・大阪・名古屋・広島・福岡・高松・仙台・札幌

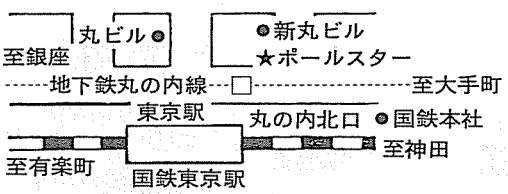
丸の内ポールスター

新丸ビル地下一階

会員の皆様のお食事やご会合に、交通至便の丸の内ポールスターをご利用下さい。

落着いた雰囲気の中で、味・サービス・価格すべてご満足いただけるよう努力いたします。

ご照会・ご用命はマネージャー若林または北村まで(電話03—271—0741)



国鉄東京駅より徒歩約3分

地下鉄丸の内線東京駅より徒歩約1分　〒100千代田区丸の内1—5—1TEL03—271—0741

株式会社 丸の内ポールスター
取締役社長 高田　実 (昭27学)
取締役 山形　延雄 (昭16学)
監査役 田中甲次郎 (昭16門)
(関連会社) 関東食品サービス
取締役 鴨井　匡次 (昭16学)

とんかつ

藤乃本

二階お座敷大小宴会に御利用下さい

小平一ツ橋学園駅前通り

電0423(42)4158

中華そば専門店

大勝軒

小平一ツ橋学園駅前通り　電0423(43)0531